

---

# 起きてしまったので

oki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

起きてしまったので

### 【Nコード】

N8900K

### 【作者名】

oki

### 【あらすじ】

ゼロ魔の世界のとある田舎町に転生したオリ主の話。

後々、何らかの能力を手に入れるかもですが、しばらくは平民ライフ。

はじまり(前書き)

お手柔らかに

## はじまり

目が覚めると、覚えのない天井が見えた。

板を継ぎ合わせた簡単な作りで、格子なんて影も形もない。

とりあえず、ここは何処なのか知ろうとして

「あー」

ん？

今、「よっ」って声が出たつもりだったんだけど。

そして、全く起き上がれない、っていうか上手く力が入らないんだけど。

風邪：かなあ、と喉を触りながら

「あーああー」

おはよう、と言ってみても意味のある言葉にならず、しかし喉が痛い感じも無い。

何だろう。

起きたばかりのまだ残る眠たさから欠伸びが出た。

目を擦ろうとして驚いた、目の前の小さい手に。

小さいし、肌も綺麗、試しに手をニギニギしてみると、ぎこちないながら小さい手が動く。

まさか…ねえ。

赤ん坊になってしまったんじゃないかなあ、と思わなくもなかったが、認めるのも難しい。

鏡は無いかなと周りを見ようとしても、枕に頭が沈み込むようになっていて上手く動かせない。

仕方無く眼球を精一杯寄せて右を、左は壁だった、見た。

まず横に細い棒状の木材があって、そこから吊り下がるようにして

何本かの棒が等間隔ぐらいで並んでいた。

吊り下がる棒は、僕の寝ている部分に突き刺さっている。

僕の隙間からは、足下の方から、両手を広げても端から端まで届かなそうなサイズの少し開かれた窓、その向こうに青空、キングサイズよりもっと広そうなベッド、一つの棚に入ってしまったえそうなタンズ、人が横になれそうな化粧台。全てが大きい。

多分何処かの室内なんだろうな、そしてやっぱり僕は赤ん坊なんだろうな。

生憎ベビーベッドというものを中から見たことはなかったけど、変な感じだなと思った。

夢ってというのは、その人の潜在意識を映すっていうから、僕って赤ちゃん願望があるのかと思うとなんかすげえ嫌だ。

寝てしまおう。

そして次の夢に行こう。

細く風が入り込んで来て気持ち良い、このまますぐ眠れそうだ。目を閉じて息を吸い込むと、上の方で木に固いものが当たる音がした。

驚いて、今度は目を上に寄せる。

ベビーベッドの右側の上の角に縦に伸ばされた玉葱みたいな飾りがあった、そこにペンダントのような物がかけてあった。

ヘッドはコインのように見えた。

それが、風にでも揺らされたみたいだった。

あれは、なんだろうな？

と、思っていると、部屋の外から扉の開く音、足音、閉じる音がした。

床板を靴の踵で蹴る音が近付いてくる。

僕は、恐怖が半分、諦めが四半分、痛いのは嫌だという希望が四半分だった。

やがて、音はこの部屋の前に止まる。

痛くしないで、が過半数を超えた。

「ごめんごめんラカス、お腹減っただろ」

声は女のもので、見ても女だった。

赤みがかったくせのある赤銅色の髪は肩より少し下、目尻が反るように上がり、口角の上がった笑い顔は愛嬌があったが、どこか猫科の猛獣を連想させた。

女は僕を抱き上げた。

「あー」

つい出てしまった声を、さっきのお腹減っただろの回答だとらえたようで「そうだろ、遅くなって悪かったな」と片手で僕を支え、着ていた服のボタンに手をかけた。

着ている服も、スウェーデンかそこら辺の民族衣装のようなもので、所々擦り切れていた。

ここは、ヨーロッパかな。

…などと冷静に考えてみたりしているのは、胸を差し出されたから、どうしろっーんだ。

胸は大きいと言える程じゃないけど、見える結構細い腰周りは腹筋がうっすら割れているのが証明するように鍛えているようで、垂れることなく張り出していた。

流石に無理だと躊躇っていると、押しつけられた。

一度含まされると、さっさと終わらせたくて何も考えないようにして吸った。

「よしよし」と上から聞こえるのが恥ずかしい。

満腹になり、口を離すと、ゲップをさせられ、寝かされた。

「じゃあ、大人しく寝てな」

女はそう言い残して出て行った。

僕は、また一人になった。

とりあえず、今起こったことは、起きたら全て忘れてると強く念じた。

それだけすると、後は出来ることは無いし、お腹一杯で眠くなってきたので、そのまま寝ることにした。

目を覚ましたら、板を継いだだけの天井が見えた。

## はじまり（後書き）

一度に投稿出来る量はこれぐらいなので、なるべく間をあけないようにします。

読んで頂いたことに感謝



両親（前書き）

これは15Rになるんでしょうか？

## 両親

夢だと思っていたんだけど、意外と普通に日々が過ぎていくので普通に生活してる。

そもそも首が座るまで何も出来そうにないし、多少動けても意味が無いと判断してアレコレ考えるのを止めた。

なので、僕の毎日は、寝ること、ぼーっとすること、朝と昼頃与えられる飯からの立ち直りに彩られている。

夜は寝てしまえば良い。

女は、その日の気分で「我が愛しの息子」だの「飯だよ」だの言っているんで、女は母親、授乳ではなく飯なんだとした。

後半は是非そうしたいと思う。

父親らしき人も見た。

無精髭のようなものは生えていたが、顔は整っていて優男といった感じだった。

服も母親の着ている物の男版だったので、ここはやっぱりヨーロッパなのかしらん。

豪快な母親と比べ気弱そうな父親は、案の定尻に敷かれていたが、慣れている感じと言うか、それはそれで幸せそうだった。

きちんと夫婦の営みもしていたし。

でも、父親が上だったのに主導権は母親が握っていた。

本人達に不満も無さそうなので、問題無いと思う。

しかし、今まさに食事中なんだけど、その父親に見られながらっていうのは、どうなんだろう。

食べはするけどね、お腹減ってるし。

なんか変に気を使ってさっさと終わらそうとすると

「よっぽどお腹減ってたんだね」

母親に言われた。

父親も

「しつかり、お食べ」

余計優しい目で見られた。

くそう。

もう日も暮れて、外は真つ暗、今日ももう終わり。

蝋燭の明かりにぼんやり浮かぶ両親は寝る格好になっている。

手で持てるように作られている蝋燭台を持ったままベビーベッドの柵に肘をつけて、覗き込んできた。

「元気な子に育ちそうだ」

僕の手の上に指を乗せてきたので、握ったら父親は嬉しそうだった。

「当たり前さ、あたしの子だもの」

「そうだね」

2人とも時々指で僕をつつついてくる。

こんな時、どうすれば良いのか解らなくて、困った。

何かを期待する視線が居心地を悪くする。

つい、プイツと首を背けてしまう。

「嫌われちゃったね」

父親は苦笑いして

「ごめんね、じつと見ちゃって、怖かったんだよね」僕の頭を撫でた。

こんな風にされると、単に照れ臭かっただけなんだよ、と言ってあげたい。

本当に申し訳ないなあと思う。

もっと、こう赤ん坊らしい行動が解れば良いのに、と思う。

ただ、こう思うのは父親に関してのみ。

母親に関しては逆。

「自分の母親の顔が嫌だつて言うのかい」

ああん、と体を乗り出して僕の顔の前に顔を持ってこようとすると、ひどい時なんて力づくで顔を向けさせようとする。

いや、普通なら泣くでしょ。

こんな時は僕の中身がこんなんで良かったと思う。だって、赤ん坊だったら流石に泣くだろうと思ひ、試しに泣いてみたら、余計に怒りだすんだもん。

「文句あんのか」って。  
あるわ。

どう考えてもあるわ。

逆効果と分かり、もうしない。

でも、意地になって見てやらない。

顔を両手で押さえられようと、目だけは向けない。

ぐわっと視界一杯が母親になり、見る物がないとつられて母親を見  
てしまう。

ので、端に映る父親を見るようにした。

でも、そうすると

「なんで、あんたばかり」

父親が母親に問い詰められ、首を締め上げられ、二つの意味で青く  
なってしまうので止めた。

結局、最後には負けて母親を見てしまう。

まっすぐ母親を見ると

「よし」

勝った、といわんばかりの笑みが浮かび、キスされる。

満足したらしい母親は微笑ましく笑う父親を連れて自らのベッドへ  
向かう。

蝋燭の火が消されると、深く息を吸い、吐きながら全身から力を抜  
く。

疲れたなあ。

そんな生活を送ってる。

## 両親（後書き）

アウトだと思っ方は言っして下さい。

力関係が分かりやすいかなど思っしたので、こうしました。

読んで頂いたことに感謝

## 祖母（前書き）

相変わらずの短々です。

## 祖母

首が座ると、祖母のメアリーの傍に置かれることが多くなった。

白髪の混じる黒髪を編み頭の後ろで纏め上げ、おっとりとした目尻といつも楽しそうに微笑んでいる口元は、とても優しい品の良いお婆ちゃんに見えた。

祖母と一緒にいて、この家は宿屋を営んでいることを知った。

父親は、朝に鍬を担いで出掛ける姿を窓から見たので、畑仕事に行っているのだろう。

母親も同じように出かける、馬のいななきと走る音がするから、これもどっかに行ってるんだと思う。

祖母と祖父の2人で宿を切り盛りしているみたいだった。

ただ、祖父もこの建物の裏で馬を育てる仕事をしているみたいで、力仕事とか手が回らない時、高い所での必要がなければ、こっちは来なかった。

だから、お客さんの対応、料理、掃除は主に祖母1人で行っていた。僕は毛布に包まれ、その上からこの世界に来た時にベッドに掛けられていたペンダントを巻かれていた。

大人でも少し長いくらいだったので苦しくはない。

その状態で、いつも祖母の手の届く場所にいた。

もちろん、お客さんの対応中とか火を扱ったりする場合は、その限りじゃないけど、その少しの放つて置かれる間を大人しく待っていると

「ラカスは良い子だね」

毎回、頭から頬にかけて撫でてくれた。

祖母はたまに話しかけてくれる。

話の中で、母親はアン、父親はジェームズ、祖父はアンドイという名だと知った。

それと、この家はずっと昔貴族だったと聞いた。



没落して平民になり、この地で宿屋を開いたのが、この家の由来なんだよ、と。

僕を巻いているコインは代々受け継がれてきたものだ教えてくれた。

平民になってからというもの、男の子が生まれにくく、生まれても病弱で早逝してしまうようで、僕が元気に生まれたことをとても喜んでいた。

「どうか、この子、ラカスが健やかに育ちますように」

僕を抱いている時、折りを見てはコインを握り、そう願っていた。

このペンダントは御守りの意味があるらしい。

しかし今のところ、体を揺すりペンダントを鳴らすと

「あらあら」

祖母にオシメを変えてもらう。

そんな使い方しかしていない。

「さて、これでお終い」

今日も庭に出した安楽椅子に僕を乗せて、祖母は洗濯物を干している。

晴れ渡る空は見事に青く、稀に雲に太陽が隠されても涼しさがちょうど良くらいだった。

祖母が、椅子の近くに置かれた籠から洗濯物を取り出す度に、小さく揺らしてくれる。

上下にゆっくりスライドしていく光景の中にある町並みは、村というより町に近い感じだった。

庭の隣りに建つ建物とその向こうの建物の間から、まだ屋根が見えている。

「良い天気ね」

干し終わった祖母が、僕を持ち上げ、代わりに椅子に座った自身の膝に乗せた。

僕は手で押さえられているので、今までより大きく揺れ出す。ペンダントのコインが揺れる方向が変わる度に金具と当たる音がする。

抱かれていると安堵に似た安心感があった。

そして一定のリズムで軽く胸の当たりを叩かれた。すると途端に眠くなってきた。

それに気付いたのか祖母は、子守歌を歌い出した。とても優しい声だった。

しばらくうつらうつらしながら聞いていたけど、襲ってくる睡魔に負けた。

体だけじゃなく、心まで赤ん坊に戻ってしまった。そんな気分だった。

## 祖母（後書き）

完全に平民の血だと、ゼロ魔のキャラと絡めないと思うので、微妙に逃げをうちます。

軍師キャラは、作者の頭的に無理です。

シエスタの立ち位置は2人も要らないでしょうし。

読んで頂いたことに感謝

祖父と馬（前書き）

相変わらずな感じですよ。

## 祖父と馬

祖父のアンドイは宿屋の裏で馬の育成と貸し馬業をしていた。どうやら僕の生まれた家はこの町の南端の並びにあるようだ。林が切り開かれていて馬が走り回る分の広さは十分にあった。

「ほら、あの馬だ」  
ぐるりと囲む柵の中で、走り回ったり座って草を食べている馬のうちの一頭を抱き抱えている僕に示した。

「あいつは良く走る、お前のお母さんの乗ってるやつのお母だぞ」  
あの、気も腕も強そうな母親が乗り回す馬も元々は祖父が育てた馬だそう。

あまり馬のことは知らないけど母親の馬の妹と言われれば、確かに良い馬なんじゃないだろうか。

当の馬は暇そうに歩き回りながら草を食べていた。母親が、と聞くと、つい気性の荒い馬を想像してしまっけど、そういうものではないのかもしれない。

「あいつが子供を産んだら、おじいちゃんが育てて立派な馬にしてやるからな」

僕を見てきた祖父の目には喜びが湧いていた。

生活に張りが出てきたというなら、僕にとっても喜ばしいことだと思っ。

改めて、将来僕の馬を産む馬を見ると、蠅がいるのか尻尾で体を払っていた。

なんか、本当にあいつ良い馬なのかなという気分になってきた。もっとこう、颯爽って感じがさあ。

それでも、まあ専門の祖父が言うんだからと思っていると、上から「あいつも良いんだよなあ、そう言えばあいつも…」

結局、自分の育てた馬ならどれも良い馬なんじゃない？

しばらくあの馬この馬言っていたけど、出た結論は、ともかく一番

良い馬をくれるらしい。

若干辟易していた僕だが、喜びを表すべく「あー」と声をあげた。

「よし、おじいちゃんに任せとけ」

請負った、と胸を張る姿は流石に職人の風格があつて格好良かったが、ここまでだった。

「あなた、何してるんですか？」

祖父の後ろの方から鋭い声。

「ひい」と祖父は情けない声を出した。

祖父が振り返ってくれたので、声の主が祖母と分かる。

見るまで誰の声が分らなかつた。

短い時間ながら、今までこんな鋭い祖母の声を聞いた覚えが無い。

祖父はすぐ分つたみたいだった。「何つて、ラカスに馬を見せてるだけじゃないか」

言っているのは事実なんだけど、怯えを含んでいて尻つぼみなので、なんとなく言い訳染みて聞こえる。

「そういうことを言ってるんじゃないの、なんでラカスをそんな薄着で外に出したのか聞いてるの」

言われて祖父も気付いたようだったけど

「今日は暖かいし、熱いかなと思って」

僕と毛布を持つてくる祖母を交互に祖父は見た。

確かにあんまり寒いとは感じていない。

「あなたはそう思っている、万が一ラカスが風邪をひいたらどうするつもりですか」

祖母は毛布を広げて、僕を受け取り、包み、祖父がポケットに入れておいてくれたペンダントを取り出すとくるりと巻いた。

まったく、と呟く祖母に、ごめん、と祖父は謝った。

祖父も父親と同様に婿養子なんだけど、こうして見ていると祖父母の力関係は両親に似ていた。

そういえば、もう随分頭も薄くなり皺も増えている祖父だが、良く見ると顔は整っていて若い頃は優しそうな好青年だった面影が見え

た。

祖母と母親の好みって似てるのかもしれない。

そして、注意をする祖母とうなだれる祖父は、母親に問い詰められた時の父親に重なって見えた。

この家って女性が強いんだなあ、と思った。

そして、

「ラカスにな、大きくなったら馬をやるうって話をしてたんだ、お前はどの馬の子供が良いと思う？」

話を逸らすために、祖父は祖母に聞いた。

「あなたが育てた馬ですもの、どの馬も良く走りますよ」

祖母は僕を軽く揺すりながら、自然な感じだった。

「そ、そうか？」

逆に祖父の方が戸惑っていた。

「そうですよ」

当たり前じゃないですか、と。

「そうか、そうだよな」

祖父は照れ臭そうに笑い、僕を覗き込んで

「約束だからな」

祖母は

「楽しみね、ラカス」

笑っていた。

この家は、夫婦仲がとても良い。

それを見ていると、とても微笑ましい気持ちになった。

祖父と馬（後書き）

どうでしょうか。

ゼロ魔なのに、ドキドキワクワクがありません。（笑）

読んで頂いたことに感謝



## この世界（前書き）

昨日は、打ちながら寝てしまったので、昼になりました。

## この世界

なにがなんだか解らないながらも、幸せに暮らしているんじゃないかと我ながら思う。

僕はキッチン内に作られた簡単な台簡単な柵の中に座って、料理を作っている祖母を見ていた。

ガス、水道なんて無く、昔の暮らしが見れる博物館とかで見学したのと、そう違いが無い方法で調理が進んでいく。

生憎と、ヨーロッパの知識なんて教科書や物語に書かれている程度しかないのです、ここがどの程度昔なのか見当もつかない。

分っても何が変わるわけじゃないんだけど、全く自分が置かれた位置が分らないのも不安だった。

母親は数日町を出ていた。

僕は、祖母に抱かれてそれを見送った。

町の入口で大きな幌付きのリアカーみたいなのを馬に繋いで、収穫物やら町で作った工芸品、職人が作った実用品、芸術品を乗せていった。

その周囲には、この町の人と雰囲気が違う人達が何人かいて、一回り小さいリアカーに乗っている収穫物を大きいリアカーに移している。

多分、その人達は近くの町の人なんだと思われた。

全部乗せ終わると、大きなリアカーの周りを棍棒を持った体格の良い男性達が馬に乗って囲む。

町長と呼ばれた人と母親、他の村の人達は会話を交わす。

話の中で、領主様、年貢とか出て来たので、そういうことか、と納得した。

それにしても、と思う。

こんなに物々しいなんて、普通に盗賊とか山賊とかいるんだろっな。改めて、時代背景を考えさせられた。

「直ぐに帰ってくるからね、良い子にして待ってるんだよ」

母親は僕にキスすると、リアカーの周りにいる男性達に

「行くよ」

勇ましく一声。

リアカーは町を出て行った。

数日して、リアカーを空にして帰って来た。

皆、ご苦労さんと口々に言い、労を労った。

無事に会えたことを妻や恋人、家族と喜び合っている。

母親は、領主様のところへお金を渡しに行っているそうではないなかつた。

「ラカスが良い子にしてたら、直ぐに帰ってくるからね」

祖母が僕に言った。

「あー」

祖母は僕が了解したとして

「偉い偉い」

頭を撫でてくれた。

次の日の夜。

馬の走る音がした。

僕は祖母に抱かれ、家族揃って玄関前で母親を迎えることにした。

僕はもう眠くて、船をこいでいた。

頑張っではいるけど、母親の顔を見たら素直に負ける予感。

外に出ると、風が冷たくて

「大丈夫かい」

祖母に聞かれ、父親にもう一枚毛布を持って来てもらった。

月明りだけが頼りの中、馬に乗った影が見えた。

並ぶ家々から人影が出て、母親に声を掛け、母親は手を上げて応えている。

「遅くなつてすまなかつたね」

母親は僕らの前に馬を止めると、祖母から僕を受け取った。

「わざわざ起きて待つてくれたのかい」

可愛い奴めっ、と強く抱き締められた。

胸元から仄かに汗の匂いがする。

ご苦労さん、無事で良かった、さあ早く馬を仕舞っておいで、と家族は母親を労った。

僕はまた祖母に

「ああ」

突然上げた声に家族全員が僕の見ている方を見た。

月が二つあった。

「虫でもいたのかい」

母親が僕にそう言い、辺りを見回す。

家族もそうしている。

誰も月が二つあることを疑問に思っていない風。

ということは、この世界では、月が二つあるのが普通ということだ。

ここ何処よ？

立ち位置が分かり始めても、逆に不安になりそうな気がした。

## この世界（後書き）

主人公の原作知識どうしようかなと思いましたが、いっそ全く知らない方が面白いかなど。

読んで頂いたことに感謝

## 母親の友人（前書き）

微R12くらい…？

ただ、書いてて楽しかったです。

## 母親の友人

冬の足音が聞こえ始めたある日の昼過ぎ、帰って来た母親から飯を食わせられ満腹になった僕は、祖母のいるキッチンでうつらうつらしていた。

そろそろ離乳食を、と話は出ていたけどお湯に小麦を溶かしたただけのスープはどうしても口に合わなかった。

試しにと、調味料を入れられても今度は体が刺激物と判断して受け付けなかった。

殆ど泣かない僕だったがこれに関しては困られた。

最初は重湯のように見えただけで食べてみると水っぽいの粉っぽい、どうやっても無理だった。

「なんとかしないと困るね」

言い残しながら出て行く母親を見送った。

そんな時。

宿屋の受付に置かれているベルが鳴らされた。

はいはい、と祖母が出て行き、戻って来たのは祖母と2人の女性。

祖母との会話から察するに、2人は母親の友人らしい。

褐色の肌に長いまっすぐな黒髪なのがジャンヌ、透き通るような白い肌にうねうねとしたこちらも長い金髪がゼノビアだそう。

ジャンヌは顔つきが母親に似ていたが、茶色い目の奥に落ち着きがあつて、母親が虎ならジャンヌは猟犬を思わせた。

こっちは母親の友人と聞いて納得出来るものがあるけど、ゼノビアはふんわりと笑う細い目と笑う口元を押えている優雅さで、母親の友人と聞いてもピンと来なかった。

手紙で僕が生まれたので、2人で休みを合わせて見に来たのだと言った。その後、お金のやり取りをしようとする2人を止めた。

「娘の友人が娘のために来てくれたんだ、お金なんてとれないよ」  
払います、と2人は渋ったが祖母が押し切った。

2人はお礼を述べると、僕に近寄ってくる。

「なんか、アンの息子って感じたな」とジャンヌ。頬と顎の間くらいに小さな傷が見えた。

「そうですね、顔のつくりがそっくりです」とゼノビア。こっちは肌に傷一つ無い。

ますます本当に母親の友人なんだろうか。

でも、どっちも母親の友人らしいので「あーあ」と、こんにちは、のつもりで首をこっくりと上下させた。

「お前、アンと違って礼儀を解ってるな」

感心するジャンヌ。

「可愛いです」

頬を押さえるゼノビア。

母親が帰ってくると、互いに名前を呼び合い再会の喜びを分かち合っていた。

どうやら本当にゼノビアは母親の友人らしい。

夕食は宴になった。

そして、今。

一緒に飲んでいた父親と祖父は部屋の隅に屍のように捨てられていた。

祖母、母親、ジャンヌ、ゼノビアはまだ酒を飲みながら盛り上がっている。

周囲には空き瓶が転がり、鯨飲とかしこたまとかの形容詞が似合いそうだった。

あまり飲まなそうな祖母とゼノビアも、なかなかどうして母親とジャンヌに負けないくらいに酒に強かった。

「全く、こんな普通に母親やってる姿なんて想像も出来なかったよ」



ジャンヌは母親を指差して、アンはな、と僕に言う。

「酒場でこの赤銅色の髪を見たら、さああと道が開けたくらいなんだぞ」

「やめとくれな、その先にいたのがアンタらで、男どもに酒を注がせていただろう」

あたしだけじゃない、と笑いながら手を振った。

「そんな人聞きの悪い、ちゃんと注ぎ返して差し上げましたよ」

ゼノビアは訂正するけど、相手はビビりながらだったんじゃないかなるか。

祖母は娘達の会話を楽しそうに聞いていた。

飲むペースはさつきから全く変わって無いけど。

「あーあ、どつかに良い男はいないもんかね」

ジャンヌが嘆きの声をあげ、それを聞いた既に結婚しているらしいゼノビアと母親は笑っている。

「この前、良い男がいたって言うてたじゃないか」

「最近別れた」

「どうしてですか？随分仲良さそうでしたよ」

「いつもの展開だろ、入れ込みすぎて男が調子に乗ったんだ」

母親の指摘に、ジャンヌはつまらなそうに酒を呷った。

「そのとおり、酒場の喧嘩で私の名前を出して、後日私が上官に大目玉」

軍人も楽しじゃないよ、と溜め息をついた。

「どーせまた若い奴だったんだろ」

楽しげな母親に対し、渋い顔のジャンヌ。

「八つ下」

「分別の無いガキを好むからさ」

解ってるよ、とジャンヌが呟くと、ゼノビアが割って入った。

「そうですね、やっぱり男性はお金も地位もある年上ですよ」

やっぱり飲んだ分だけ酔っているのかゼノビアは少し赤くなっている、妖艶さが出ていた。

「嫌だよおっさんなんて、あんなのとヤツたつて気持ち悪いだけさ」  
本当に気持ち悪いと思うのか身震いまでしていた。

「なかなか良いですよ、上手いしねちっこいし」  
話が嫌な流れになったので、会話に耳を塞いだ。

あんまりこーゆー話を聞きたくない。

テーブルの上にも首にかけているコインを乗せ、立たせる遊びを始めた。

指先に上手く力が入らず難しい。

あー楽しいな、と強引に思っていると、ジャンヌに捕まった。

「ラカス、大きくなったらお姉さんと付き合おう、アンの男版なら気が合うだろう」

いや、何才差だよ。

年下好きにも程があんだろ。

「そしたらジャンヌがあたしの娘かい、嫌だよ、アンタみたいな娘なんて欲しくないよ」

3人が笑い合うのを、祖母は相変わらず微笑んで見ている。

話の内容より、関係を嬉しく思っているようだった。

その後、何故か母親の胸の張りの話になり、急遽飯を与えられることになった。

「お前は酒飲まないんだから飲め」

意味分かんないし。

「もう出ないですけど」

ゼノビアのも吸わされた。

普通に後頭部を母親に押された。

「やってみたい」

ジャンヌにされ

「もうお婆ちゃんなんだけどね」

なんだかんだで祖母も相当酔っていたようだった。

途中からもう、抵抗をどっかにぶん投げた。

分かったのは、全員胸がそんな大きくないこと。

母親とゼノビアさんの共通点見つけたなあ、なんて失礼なことを考えた。

そんな言われるがまま従った僕にジャンヌが

「胸なら母親じゃなくても良いのか、お前将来女好きになりそうだな」

やらしといて酷くねえ？

## 母親の友人（後書き）

例のごとく、表現がアウトと思う方は一報下さい。

それと、感想で短いと言われたんですが、多分思っている方は多いんじゃないかと、書くために割ける時間が今ぐらいで精一杯なので

す。  
その分間を空けないようにしますので、ご了承ください。

読んで頂いたことに感謝

## 母親の仕事（前書き）

さらに胸の話です。

苦手な方は、すみません。

## 母親の仕事

ジャンヌとゼノビアは翌日帰って行った。

あんなだけ飲んだ女性陣なのに誰一人として二日酔いになった様子が微塵も無い。

男性陣は死にそうな顔をしていた。

なんかもう、流石としか言えない。

そんな日から数日後。

朝起きて母親に飯を食わせられると

「よし、行くぞ」  
連れさらわれた。

そして、僕は母親と共に馬上にいる。

母親の使っている鞍は見たことが無いもので、鞍の馬の頭の方が上に向けて反っていて、母親はほとんど立つように乗っている。

そして、その反った鞍の下からもう一回反るようにして鞍が出ていく。

僕は二つの反りの間の毛布が敷いてある上に母親と同じく立つように置かれ、皮のベルトをされた。

僕用の鎧もあった。

「大人しくしてろよ」

待つて、未だ心の準備が。

僕の思いを無視して、祖父が馬を放している柵の中をゆっくり歩き出す。

馬の歩みに合わせて上下に動くけど、敷かれた毛布のお陰で思ったより痛くない。

柵の向こうでは、母親の行動を止めようとした父親が殴られたお腹を抑えて蹲っている。

ドンマイ。

父親の心配はもつともで、やっとはいはいで動けるようになった赤ん坊を

「一緒に行けば飯の手間が省ける」

と馬に乗せようとする母親を止めるのは僕だっと思う。最近気付いたんだけど、祖母と母親は考えることが似ている。馬に乗せることを祖母は止めなかった。

一応、年齢的というか経験的なものから

「無理そうだったら、すぐ止めるんだよ」

そう言ったけど、乗せてみることに反対している様子は無かった。我が家において、祖母と母親の決定は最終決定に等しい。

子供の父親として口を出したんだろうけど、今ようやく立ち上がった父親よ、貴方の抵抗は無に等しかった。

父親の心配を余所に、乗ると結構楽しかった。

馬の上下に合わせて体を前の鞍に押しつけるのがコツっぽい。

僕の様子を後ろから見ている母親は、大丈夫と判断したようで、馬の速度を上げた。

速くなると、風で首を持っていかれそうになったけど、最初から分かっていたら大丈夫だと思う。

「あー」

そうになると、怖さより面白いが先に立った。

しばらく走り回った後母親は僕を見て

「やっぱりあたしの子だね」

誇らしげに笑った。

というわけで、僕は母親と一緒に出掛けることとなった。

というわけで、やっぱり止めた父親はお腹を抑えて丸まっていた。

というわけで、祖母は父親が目に入らないかの如く笑顔で僕らを手

を振って見送っている。  
というわけで、祖父は父親を気にしようとする度に祖母に肘でつつかれ、色々と言口では無く顔に出しながら引きつった笑みで手を振って見送ってくれた。

「さて」

往来の人に気を付けて早足くらいで町を出ると、掛け声をかけて速度を上げた。

半日くらい母親の仕事を見ていた。

母親の仕事は運送屋と郵便配達を兼ねたようなもので、あっちこっちの村に行商人からの品を届けたり、手紙を正規の郵便がある所まで運んだり、職人の仕入れた品のツケの代金を代わりに持つて行ったり。

回った感じ、僕の生まれた所が一番大きくて、他は村と呼べそうな所ばかりだった。

大人しく一ヶ所で働いている母親をイメージ出来なかったから、なるほどな、と思う。

明るくて豪快な母親は各村々の奥様方に人気があるようで、用事が無い奥様方も出て来て話をしていた。

例えば、余所の村に嫁いだ娘は元気にしてたかとか、今年の作物の出来は各村々でどうだったとか。

今回は僕がいるので、代わる代わる話しかけられ、撫でられた。

「アンちゃんにそっくりだ、黒髪はジョージさん譲りだね」

因みに、祖母と父親、僕が黒髪で、母親が赤銅、祖父が薄くて白髪で判りにくいけど多分金髪。

そして、奥様方の前で飯を食わされた。

寒いだろう、って家に入れてもらえるのは嬉しいけど、皆して入って来るな。

「あらあら良く吸ってるわ」

「可愛いわね」



「あんたもあんな時期があつたのよ」

マジで止めて欲しい。

排泄物の処理を見られた時なんて、死にたいと思つた。  
むしろ願つた。

可愛らしいつてなんだ、おい。

「もっと良く拭かないと駄目よ」

見知らぬ奥様に拭かれた時なんて、この世界が今すぐ滅びないかなと念じた。

あまりのショックにぐったりしていると

「どうしたのかしら？」

僕を拭いてオシメを変えた奥様に抱き抱えられた。

肝っ玉母さんといった感じで、胸もお尻もでっぷりとした体だった。どうしたの、と囲んでいた奥様方が覗き込んでくる。

この人達全員に見られたと思うと、もう目が合わせられなくて、顔を埋めた。

「あら、またおっぱい飲みたいの？」

ああ、と母親。

「そいつ、誰のでも気にしないんだよ」

この前、ジャン又達が来た時のことを思い出したように言われた。出なくても気にしないと申つてくれやがった。

目の前にさらけ出された。

自棄になつて吸つた。

「まるでうちの子みたいね」

頭を撫でられた。

私も良いかしら、と何人か名乗り出た。

未だ出ない人も、将来の練習と吸わされた。

武器をくれれば、僕がやってやると思つた。

帰りの馬上で母親に

「良かったなあ」

と言われ、何がさ、の意味で

「あー」

と返した。

それを母親は賛同と捕らえたらしく

「お前、本当に女好きになりそうだな」  
呆れた、と。

僕は初めて、こんなにも強く、これが夢であることを願った。

## 母親の仕事（後書き）

表現規制、大丈夫ですよね？

原作で、おっぱいおっぱい言ってるんで、巨乳が苦手なキャラにしようかなと。

そうするかもヒロイン次第ですし、未だ誰がヒロインかも決めて無いですけどね。

読んで頂いたことに感謝

## 諦めと幼馴染み(前書き)

本文には、不快に思えるかもしれない描写があります。

## 諦めと幼馴染み

初めて馬に乗せられて以来、晴れると思われた日は母親に連れて行かれる。

そうすると様々なことやものを目にした。

僕の生まれた町の周囲を囲む広い畑。

刈り取ったばかりで何も生えていない見渡す限りの一面の茶色は、服や食事以上に違う場所に來たのだと感じさせた。

町から北側の少し離れたところに森と川があり、集めた汚物はその川に捨てられている。

ボロボロの服を着た数人の男性がリアカーに乗せた壺や樽を次々に川に向けて逆さまにしていた。

調理用、農業用の水は町の所々にある井戸から汲み上げて使っている。

森を突っ切り山の方に行くと、鉱山なのか穴を掘っている村がある。母親がその鉱山の責任者の人とお金のやり取りをしていると、専門家ではない僕が見ても安全基準を満たしていない穴から人々が出て來た。

見るからに不健康そうで、大人から子供まで女も数人。

大人の中には、鼻が無いもの、耳が無いもの、指が何本か無いものが混じっていて、数人のうちの一人の女も耳が無かった。

母親が気付き、馬を彼らが見えない位置に動かした。

林業が主産業だと思われる村では、高い木の上で命綱無しで上り、枝を落としている人。

雇用人みたいな人が下から指示を出し、恐る恐る指示どおりに動くうとしていく足は、正面から見ると平仮名のくの字のように歪んでいた。

農村では、また僕は誰かの胸を吸わされることもあるんだけど、その中には死産してしまった奥様や、生まれてすぐ死んでしまった奥

様がいた。

僕が吸うと、泣き出す人もいた。

母親に返すのを躊躇う人もいた。

僕に出来たのは、赤ん坊が死んでしまった奥様から授乳を受けるくら이었다。

でも、結局のところ、見ていただけに等しい。

母親は赤ん坊を失った人以外に、同情の言葉を口にしなかった。それ以外のことは普通のことなんだろう。

今日は朝に雨が降っていたのでお留守番。

飯は近くに住む人から貰う手筈になっているからと祖母と母親が話しているのが聞こえた。

昼頃に知らない奥様が来て食事。

どうやらこの人は祖母の友人のセシルの娘だそうで、セシルには会ったことがある。

祖母が洗濯物を干している時に、たまたま通り掛かってその時挨拶をされた。

少し話をして、ヘレンというらしい女性は帰って行く。

仕事の合間に来たそうなの。

「あーあー」

ありがとう、と言ってみると

「どう致しまして」

意味を読み取ったかは知らないが、笑いながら応えられた。

昼過ぎに雨は止み、曇り空になったので祖母はお客さん用の夕食を

いつもより早めに作ると、小さい鍋に分けて、セシルのところにお礼に行くことにした。

僕も連れて行かれる。

店番を頼まれた祖父は僕を抱えて更に鍋を持つ祖母に、僕を置いて行った方が良いんじゃないかと言ったが

「ラカスはお婆ちゃんと一緒に良いわよね」

僕は祖母に頷いた。

ごめんなさい、僕は強い方について行きたいです。

うなだれる祖父に心の中で言っておいた。

代々の歴史を考えて、もしかしたら、と思っていた男子が元気に育っているのが嬉しく、祖母はなるべく傍から離したくないように見える。

仕事の関係で仕方無いと思う母親も家にいる時だと父親に似たような態度をとるから、母親の中にも、もしかしたらはあるのかもしれない。

まあ、どっちにせよ、我が家の男性は弱い。

「いらつしゃい、久し振りね」

「ヘレンちゃんのお礼に来たの」

ヘレンの母、セシルは元々は栗色だっただろう髪を布を巻いて纏めた、小柄で可愛らしいお婆ちゃんだった。

祖母と並ぶと、セシルさんの方が少し年上に見えるけど、僕に同じ年で幼馴染みだと言った。

「うちの孫と私達みたいになつてくれたら嬉しいわね」

母親とヘレンだとヘレンの方が少し年上らしい。

紹介されたのは、ミランダという女の子だった。

といつても、同じ年だから赤ん坊なだけども。

微笑ましく祖母達は見てくるけど、明らかに、なんだこれ？という目をしているミランダをどうすれば良いもんなのか。

コミュニケーションのとり方が解らない。

「あー」

とりあえず、やあ、と話しかけた。

「あー」

返された。

返されて気付いたんだけど何言われても、言われた内容が解らない。さて、どうしたものかと思っていると、乗られた。

突然はいはいで寄られ、そのまま。

あら、とセシルにミランダを退けてもらい逃げ出した。

手を離れたミランダは、また追ってきて今度は俯せの上に乗られた。

「随分とラカスちゃんを気に入ったのね」

「そうみたいね」

2人は笑っている。

「そういえば、シャロンちゃんは？」

僕は苦しいと思いつながらもどうやって退けたものか分からなくて、楽しげに笑うミランダにされるがままになっていた。

泣かれるのは困る。

「今はまだダルムさんの所で、機織りの手伝いしてるわ」

「シャロンちゃんって、もう何才になったかしら？」

「もう五才よ、あつという間でしょ」

「もうそんな年なの」

僕は、乗られたまま祖母達の話聞いていた。

なんか後頭部に笑い声と共に冷たい物が降ってくる。

その後、何度離れさせられてもミランダは僕に乗り、笑い声をあげていた。

僕は、もう好きにしてと諦めた。

異世界から来た僕には、仕方無いと割り切らざるをえないことが多い。すぎる。



そして、短い間ながらも生まれた場所の幸運がしみじみと思えた。

## 諦めと幼馴染み（後書き）

実際にこんなことがあったと、以前読んだ本の中に取りました。書くべきか迷ったのですが、平民生活を表現しようとするなら、避けておくべきでないと思い書きました。

人種によっては、もっと酷いこともあったと思いますし、実際なら貴族の保護もあったようですが、ゼロ魔の世界では貴族の保護も無さそうなので、実際あったことの更に下なこともあるでしょうが、それについては触れないようにします。グロテスクなことがメインではないので。

読んで頂いたことに感謝

## 祭日（前書き）

知識が曖昧なところがあります。  
すみません。

## 祭日

冬の中頃に

「そついや、そろそろ祭りの時期だね」

「そつだね」

母親と父親が話しているのを聞き、祖父母の口からも発せられるようになったにも関わらず、てっきり町の規模からして村祭り程度にしる、そついった催し事を楽しみにしていたが、全く町中に慌ただしさが見えないのを訝しく思っていた。

出店を多少期待しないでもなかったが、

「明日だね」

母親がそう言った日になっても、見掛けたのは鍬を持った男性が10人程で祭りが行われるという町の東、出入り口の広場の地面を慣らしているくらいだった。

祖母は祭り用にと普段より多く料理を作っていたけど、それぐらい。本当に祭りなんてやるのかしらん。

目の前では幾つか置かれたテーブルの上に並べられた料理とワインを食べている人達がいた。

大人の男性が手を伸ばしても届かない長さの木材を立て、その周りを手を繋ぎながら外側を向いて踊る人達。

食事をしている人達は踊っている人達に何か言っていた。  
良く聞くと

「ミゲールの眉が一番だ」

「いや、サリカの方が面白い」

何故かは知らないけど誰の眉毛が面白い形なのかを決めていた。

立てられている材木の上には細い木の枝を丸め何かの葉で飾り立てた王冠のようなものがかかっている。

一番面白い眉の人が貰えるんだろう。

光栄なことだとはあまり思えない、もしかしたら福男福女みたいなものかもしれない。

向こうでは、木剣を持った男女が、剣の舞なのかな、踊っている。立ち位置ぐらいは決まっているようだけど、好き勝手に振り回している感じ。

その近くではボウリングが行われている。

木製のボールにピン、ピンの並べ方も変だ。

少し離れたところでは少女と呼べる年齢の人達が集められて、料理が並ぶテーブルの上に掛け金が置かれ、徒競走が始まった。

昼頃、料理を持って行った祖父母に代わり両親と店番をしていて、帰ってきたのに入れ替わりに来た僕が見た祭りの全貌は、その様なものだった。

両親は町長や知り合いに挨拶をしつつ、テーブルに着き座っていた人々と会話を始めた。

母親の膝の上に座る僕は来る前に飯を与えて貰ったので、暇潰しにボウリングを見ることにする。

一番変化があつて飽きなさそうだったからに過ぎない。

日頃見たことは無かったから、こういった時のみに行われるんだろう。

それでも練習はしているのか、上手い下手はあった。

「やりたいのかい？」

母親は僕がボウリングに興味が湧いたと見て

「ちよつとやつてくるよ」

僕を抱きあげた。

行くと、アンさん、アンさん、と皆に言われ

「調子はどうだい？」

母親が聞くと皆が返事を返してくる。

そういえば、さっきの両親で挨拶に回った時も母親に対しての反応の方が多かった気がする。

余所の村だけでなく、この町でも母親は人気者らしい。

「ラカス、アンさんとそっくりですね」

「そりゃ将来が心配だ」

若いお兄さんに母親と見比べられ、爺さまに笑われた。

「他人ん家の子供を心配する前に、自分の体の心配をしな」

母親の返しに爺さまは、確かにそうだ、と大笑い。

僕に大人用のボールなんて持てるはずなく、ピンの直ぐ近くから母親に手伝われ、ほとんど直接当てるようにして当てた。

母親の力に依りボールの勢いは相当なものだったので、全て倒れた。周囲が沸いた。

「無事に悪魔を祓えたな」

爺さまの言葉からするとボウリングはそういう意味があるらしい。へー。

祭りのメインイベントは踊りが始まった。これがメインイベントのようだ。

僕はまだ危ないからと芝生の上に置かれ、近くに似たように置かれた子供がいる。

母親達は輪になり、踊りながら詩のようなリズムで身振り手振りに合わせて文句のようなことを言い出した。

内容は、永く健やかに暮らすという誓いみたいなもの。

終わると解散になり、三三五五。

また飲み出すもの、ゲームに戻るもの、数人で輪になり今見たのは違う踊りを踊るもの。

両親はひとまず僕を連れて家に戻ることにしたようだ。

置いたら、また来るみたいだけど。

「直ぐ戻って来いよ、今日はトコトン飲むからな」

体格の良い男性が集まる席から声を掛けられて

「あつたりまえだろ、樽で用意しときな」

母親は、多分連れてこられるんだろう青い顔で覚悟を決めている父親を無視して、勇ましく答えた。  
頑張れ、父親。

僕は母親に抱き抱えられながら、遠くなる祭りの風景を見ていた。大人が酒盛りしている光景は確かに祭りの終わりの光景と言えなくも無いかも。

「ラカスは将来どんな子になるのかな」

父親がふと話し出した。

「あたしみたいに、勇敢で腕っ節が強くて、男前になるね」

母親はキツパリ言い切った。

「僕とは全然違うね」

父親は苦笑い。

「それと、ジエームズに似て、真面目で優しい男になるよ」  
歩くのが止まった。

背中に軽く何か当たる感覚があつて、母親も心持ち前のめりになつた。

後ろから漏れるような吐息が聞こえ、察した。

とりあえずしばらく身動きもせず息を殺して、気配を消すことに必死だった。

人々の遠い笑い声が聞こえた。

## 祭日（後書き）

他の方の小説読んだんですけど、携帯小説用の文体が難しいです。文体が以降ちよこちよこ変わるかもしれない。

今日は帰ってきたのが遅かったため、素の文に近いので、読みにくいかもしれません。  
すいません。

読んで頂いたことに感謝



## 呼び名(前書き)

テレビでヤッターマンをやっていたのですが、結構面白かったです。

## 呼び名

春になった。

僕がこの世界に来てから、そしてラカスという存在が生まれてから、一年。

慣れた、という気はしない。

僕自身が赤ん坊になったことを除けば、違う国に来たんだなあと思うだけ。

僕には僕の文化があり、この国にはこの国の文化がある。

押しつけることは歴史を求めることに外ならない。

歴史の積み重ねが文化の変化を生み出したのだから。

まあ、いち平民に何が出来るわけじゃない。

積極的に受け入れるわけじゃなくて、消極的に受け入れる、そんなスタンスで生きていこうと思う。

いつまでも引つ掛かる気持ちじゃ均されずに置かれるわけないし、一々気にしたらやっていけなさそうに思える。

実際、僕の家でも春の種蒔だからと出稼ぎみたいな人達を使っていた。

朝、母親と共に家を出る時、家の近くに集まっていて、父親に連れられていった。

多分、こっちは使わないと、むこうも使われないと生活出来ないんだろう。

詮無い話だと思い、考えるのを止めた。

そう割り切って今日も穏やかな風の中、母親と馬上の人。

乗ってる間、暇だからと少しずつ練習してたんだけど

「まー」

はつきりと、あー、以外が言えるようになってきた。

舌と喉を動かす筋力が未熟なせいなのか、言い難い音もある。あ行とえ行は割りと楽。

なので上を見上げた。

「どした？」

母親が首を伸ばしてきた。

僕は内心自慢気に

「まーま」

言ってみた。

瞬間、天地が90°回転して馬の嘶きが聞こえた。ずるつと体が抜ける感じがして、浮遊感。

「あぶっ」

服の首周りが喉に食い込み、一瞬目の前が白くなった。気がつくのと、母親の顔の前にぶら下がっていた。

母親の右手が原因みたい。

天地は元の位置に戻っている。

また浮遊感、今度はしっかりと両腕で抱えられた。

母親がじつと睨んでくるので、何？とビビる。

「ラカス、もう一回言ってみな」

何のことよ？

「今、ママって言っただろ」

ああ、と思い当たり

「まーま」

満面の笑みになり

「こいつう」

抱き締められた。

ラカスもう一回、と、こいつう、が2回程繰り返された後に、やっと元の位置に座らされ走り出した。

馬の足は普段より早い気がするし、後ろから鼻歌。

さつき天地が回転したのは、母親が驚いたんだろつ。

僅かながら話せるようになったのが嬉しかったとはいえ、軽率だつ

たと反省。

その日の仕事はいつもより早く終わった。  
僕に

「あたしは誰？」

と問い

「まーま」

のやり取りを奥様方に見せる、母親は本当に嬉しそうだった。

いつもなら、もうちよつといいじゃないか、と呼び止める奥様も

「さつさと帰って聞かせてやんなよ」

母親が早く村を出れるようにと手伝ってくれた。

その光景を見て、赤ん坊が母親が呼ぶのがそんなにもスゴいことなんだと少しびっくり。

「ばーば」

家に帰って母親がママと呼んでくれたのを自慢すると、家族全員が僕に向かって、私は、僕は、と迫ってきたので一番前にいた祖母から呼んだ。

「ババですよ」

母親から渡され祖母に抱き締められた。

祖母の腕と体の隙間から父親と祖父が体を曲げ首を傾けて自らを指差している。

「じーじ」

祖父は拳を握り締め天を仰いで喜んでいた。

ひとしきり喜んだ後、僕を抱き締めようと寄って来て手を差し出して、祖母が全く渡す素振りを見せないの、諦め近くに寄るに止まっていた。

父親だけが境界線の向こう側にいるみたいに残され、既に呼ばれた3人はニヤニヤ笑いながら父親を見ていた。

なんだ、このシチュエーション？

父親はニヤニヤ笑いに耐えながら必死にアピールしてくる。僕も期待には応えてあげたいんだけど、半濁音って難しい。

結局

「とーと」

ママと系列が違う気がするけど、仕方無くそうした。

本人が

「ラカス、トトだよ」

喜んでくれてるみたいなので、良しとしよう。

以降、僕が関係する時の家族内の父親の呼び名はトトになった。

数日後。

「ラカス、ママ以外でお願い」

母親に頼まれた。

なんでも、普通一般的に父親の呼び名はパパなので、家の外でトトと呼ぶと目立つそうなの。

それが母親には気に食わないらしい。

知らんがな。

そう頼まれても、ママ以外に適当なのが浮かばない。

力があるけど、個人的に音が嫌いなので言わない。

首を傾げ、何を言ってるか分かりませんという態度を貫くと母親も諦めた様子。

すると、今度は父親を憎々しく見ている。

多分しばらくの間、父親は辛い目にあうだろうけど、僕の責任じゃない。

負けるな、トト。

## 呼び名（後書き）

9話で1年分、早いのか遅いのか分かりませんが。

今日で10話めです。

途中一回だけ一日に2回投稿がありました、10日連続達成です。

次の目標は20日連続。

義務にならない感じでやっていきたいものです。

読んで頂いたことに感謝

## 風邪（前書き）

昨日は、飲みに行って一晩中飲んだので、書きませんでした。

## 風邪

なんとなく空気の軽さが変わってきたことに皆が

「春だねえ」

口々に言う。

確かに僕もそう感じる。

けれど、徐々に気温が上がってもやっぱりまだ寒い。

そんなある日、目を覚ますと頭がぼーっとして力が入らない。

時々、咳。

今回はこそは風邪だな、と思い当たった。

原因だと思われることはある。

昨日、朝は晴れていたので母親と共に出掛けたところ、昼頃に急に曇り雨が降り出した。

小雨程度、母親は直ぐに雨具を僕に掛け紐でしっかりと結くと、自らも被る。

母親の仕事の回り順は、町を出て一番遠くの村へ、そこから町に近付くようにして。

村々が直線上に近い形に並ぶなんてことはほとんど無い。

多分もつと早く降り出していたら一度僕を町に置きに戻っただろう。今回そうしなかったのは、降り出したのが終わりの方だったために行く村は少なく、ほとんど町への帰り道に並んでいたことだった。母親は悩み、仕事を続けることにした。

「ラカス、少しだけ我慢してくれな」

僕は頷く。

母親は本当にすまなそうな顔だったこともあるし、今していることが仕事だと僕も認識しているためでもあった。

寒いな、とは確かに思ったが何度も経験した距離からして多少寄り



道したところで大して変わらないと思う。

実際速やかに母親は残りの村を回り、村の方でも僕を気遣ってくれ家の中火の近くでと言ってくれた。

家に帰り、布で体を拭かれた時も体が冷たい感じはあったけど、熱っぽさはあまり感じなかったんだけどな。

「ラカス？」

視界に入ってきた動く物は声から判断して母親だと思う。

朝いつも最初に、僕を覗き込むのは母親だったし。

風邪のせいかな、視界がはっきりしない。

目は意識しても開いてる気がしないし、水の中からみてるみたいにぼやけている。

「ジエームズ、ラカス、ラカスが」

半狂乱のような声で、まだベッドの中にいたんだらう父親を起こす音が聞こえる。

父親も起きたようで、母親と話し声、ドアの開ける音がして、その辺で意識を手放した。

次に起きた時、おでこの辺りが冷たくて気持ち良いなと感じた。

外では鶏の鳴く声が聞こえるから、さっきから大して時間は経って無いと思う。

意識が少しずつはつきりしてくると

「ごめんね、ラカス、ごめんね」

耳元で母親の声、僕の片手をしっかりと両手で握り締めながら泣いていた。

動く物は四つあるから家族全員集まっていると思う。

母親はずっと謝っている。

「アン」

祖母。

「気持ち解るけど、お前がそうしていてもラカスが良くなるわけ

じゃないんだよ、それに仕事に行かないと」

優しい慰める声だった。

「嫌よ」

母親は、はっきりと拒絶した。

「ラカスが治るまで離れない、ラカスがこうなったのはあたしのせいだもの」

母親は一語一語しっかりと宣言するように、また自分に言い聞かせるように言った。

回転の鈍くなつた頭でも、母親はそんなに思い込まなくても良いのになあと思つた。

天気なんて誰にも操作出来ないし、これまでも途中で雨が降ることとはあつた。

その時は一旦僕を家に置きに戻つたけど、距離からしたら昨日よりもつとあつたと思う。

昨日の判断だつて、僕が母親の立場だつたらそうしたかもしれない。風邪をひいた時のやり場の無い怒りはあるけど、こんなに責任を感じている母親に向ける気は毛頭湧かない。

僕が強く握られている手を引つ張り出そうとすると、母親の力が抜けて簡単に引つ張り出せた。

「ラカス？」

戸惑つてる様子の母親の僕の手が抜けたままになっている両手を、軽く数回叩いた。

「あー」

喉が痛くて、それが限界。

気にすんな、とか、大丈夫、とか、そんなに自分を責めんな、とかそんな気持ち。

「ラカス？」

母親には通じなかつたみたいだった。

「あんたを慰めてくれてるのさ」

読み取つてくれたのは祖母だった。

祖母が、話す前にしゃくりあげた気がした。

「良い男じゃないか、ねえアン、こんな時でも自分の母親気遣ってさ、そんな男が簡単にくたばるもんか」

「そつだろ？」と、僕に問い掛けるようにしてきたので

「あー」

片手を上げて応えた。

それが、僕の限界だった。

もう力が入らず、喉が痛くて声を出したくない。

上げた手が重力に従う。

咳をすると、喉の他に全身が鈍く痛い。

「さあ皆、仕事にさっさと行きな、私がラカスを見てるから、宿はアンドイがやっつくれ、食事だけは作りに行くから」

祖母が母親を立てさせて父親に連れて行かせようとする。

「ラカス、頑張るんだよ」

母親は僕の頬を撫で、キスをして離れていった。

部屋を出ていき、ドアが閉まる。

「メアリー、ラカスの状態を正直なところどう思ってる？」

今まで黙っていた祖父が祖母に尋ねたが、良い返事を期待している声には聞こえなかった。

「分からないさ、でも、アンはああ見えて責任感はあるからね、きっと自分の息子が死ぬところなんて耐えられない。

いざとなったら、私が責任を被るよ」

「メアリー」

「こちとら、一度見た身さ、何回増えたって同じことだよ。あんたも行きな、仕事は待つちゃくれないよ」

ああ分かった、と祖父は部屋を出ていった。

部屋には、僕と祖母のみ。

祖母は、僕のおでこに乗っている布を変えた。

「ラカス、あんたみたいな孫を持って私は幸せだよ」

頭の上で金属のぶつかる音がして、何かが手首に巻かれた。

触って直ぐにいつも持たされているペンダントだと解る。

コインを握らされ、その上から祖母の手に包まれた。

「神様、ご先祖様、もしこの子が助かるっていうなら、こんな婆さんの命なんて幾らでもくれてやるから、ラカスを助けてやっておくれ」

聞こえた瞬間、急激に眠くなった。

落ちるようにして意識が遠くなっていく。

死ぬのかなあ。

この村って医者っているのかなあ。

そもそも、この時代って医療レベルどうなんだろう？

結構この時代ってどうか、この家族と暮らすのが楽しくなってきたのに。

嫌だなあ。

## 風邪（後書き）

なんか、長くなり過ぎました。

後々、自分の首絞めそうなので、もうちょっと短くを意識します。  
今日も飲んで来て、時間無いので近い内に二回出します。

読んで頂いたことに感謝

## 魔法（前書き）

タイトルを入れ忘れて半分消えた。  
心が折れた。

## 魔法

目が覚めると、また鶏の声がした。  
あれ？

随分と眠った気がしてるのに大して時間経って無い？  
周囲の様子を窺うと、両親のベッドに両親が寝ているのが見えた。  
つてことは、僕は丸一日以上寝ていたってこと？  
そういえば、さっきから体に熱っぽさを感じない。  
ダルさは多少あるけど。

「あー」  
試しに声を出してみても喉は痛くない。

風邪は治ったみたい。  
なんか色々腑に落ちないけど、治ったのなら良しとしよう。

「ラカス？」  
さっき発した声で母親を起こしてしまったようだ。

「ラカス」  
母親は飛び起きると駆け寄って来て、僕を覗き込んだ。

「まーま？」  
そのあまりの勢いに驚きの声を出してしまう。

「良かった、ずっと寝てるから、もう」  
安堵の言葉を吐き出すと、母親は膝から崩れ落ちた。

僕としては、温度差を感じつつ見てるしかない。  
「全く二日も寝続けて、心配したんだからな」

その言葉には驚く。  
僕は丸々二日寝てたらしい、そりゃ心配するだろうな。

僕のおでこに手を当てて熱が下がったのを確認すると  
「心配かけさせやがって」

投げ上げられた。  
「あー」

初速が半端じゃなく、天井の木目がはつきりと確認出来た。

「あー」

僕の、止めてー、は母親の笑い声にかき消された。

「どろっ」

父親の声がして、何か大きい物が落ちる音。

呻く父親。

「アン、何してるんだ、危ないだろ」

脇腹を強打したようで、痛みを堪えながらも母親を止めようとした。

「何言ってるんだい、こんな目出度い時に」

ほれ、と改めて父親に見せつけるように、掛け声をかけて僕を投げ

上げた。

強い。

とっさに思った。

案の定、今までより早く天井が近付いてくる。

目をつぶって覚悟を決めると、頭の先から痛みが入ってきた。

絶対鈍い音がした、絶対。

「ラカス」

両親に抱き抱えられながら、僕は頭に手を当てて転げ回る。

部屋の外で人の走る音が聞こえ、祖母が入ってきた。

「どうしたの？すごい音がしたわよ」

祖母の後ろから祖父も同じようなことを言っている。

「ラカスが目覚めたって、ジエームズが驚き過ぎてベッドから落ち

たんだよ」

えー？

多分、僕と父親は同じ顔をしたはず。

「ラカスが起きたのかい」

僕は祖母に渡された。

母親はさりげなく僕の手を頭から退し、その代わりのつもりなのか

自らの手で頭を撫でられた。

「ジエームズ、そんなに慌てなくても良いのに」



父親は既に肘打ちをくらい、蹲っていた。  
母親、怖っ。

「良かったね、ラカス、心配したんだからね」  
祖母は僕を全身で抱き締めて泣き崩れた。  
抱き締める強さが、本当に心配かけさせたんだと分かり、父親には  
悪いけどしばらくこのままでもいいと思った。

一応用心のため、しばらく馬に乗るのを止めよう、ということにな  
った。

というか、祖母が押し切った。  
なので、祖母と一緒に御店番をしている。  
まだちゃんと話せないけど、それが逆に可愛いということ、挨拶  
を言うようにと言われた。

「あかりなさー」は母親に大絶賛された。

祖母の膝の上であやされると、2人組のお客さんが入ってきた  
ので

「いやしゃしゃせー」

「可愛い」

入ってきたお客さんは、見たこと無い格好をした少女達。

明らかに金の掛かった服にマント、杖を持っていた。

綺麗な顔立ちをしていて、良い生活してるのが見て取れる。

「いらっしやいませ、貴族様」

祖母は深々と頭を下げた。

「今日、泊りたいんだけど」

「はい、かしこまりました」

祖母とお金のやり取りを始めた。

僕は聞こえた、貴族、という単語を思い浮かべ、これが貴族かと、お金のやり取りをしていないもう一人を眺めていた。

「どうかしたかしら？」

視線に気付いたようで、机の上に座る僕の前に立った。

「すみません、まだ赤ん坊なもので」

祖母は謝った。

察するに、お客さんだから以上に気を使ってるみたいだった。

「髪の毛、きれーね」

リップサービスのつもりだった。

変にいちやもんつけられても堪らないし。

「あら」

お気に召したようで、満更でもないと笑う。

「可愛い子ね」

杖が振られた。

すると、僕は宙に浮いた。

「あー」

驚きの声を出しても無視。

「えい」

次の掛け声で、僕は寝かされ軽く揺らされた。

最初は何も支えが無く不安と恐怖だったけど、なんだかちよつとしたジェットコースターみたいな感じになってきて

「あー、あー」

両手を上げて、落下する時みたいな感じ。

楽しいかも。

「じゃあ、ここから北に向かえば良いのね」

「はい」

祖母とのやり取りが終わると、僕は下ろされた。

「行くわよ」

やり取りをしていた方が歩き出し

「じゃあね」

僕を浮かせた方も着いて行った。

2人が出て行くと

「さあ、急がないと」

祖母は僕を抱き上げ、僕と買い出し用の籠を持つと、裏の祖父に店番を頼みに行く。

その瞬間は、驚きしかなかったから考えなかったけど、思い返すと

あれって魔法じゃねえ？

えっ、ここってファンタジーの世界なん？

## 魔法（後書き）

そいえば、魔法のある世界だったことを書くのを忘れてたので。

眠さで、誤字チェック甘い気がするので、また明日以降にします。

読んで頂いたことに感謝

## 腕白（前書き）

あんまり進展は無いです。

## 腕白

貴族の方々はうちに一晚泊まった。

僕は何か粗相したら駄目だからと言われ、あまり近寄らないようにと強く言われた。

彼女達貴族つてのは、どうも魔法を使えるみたい。

つてことは、気に入らないことすると切り捨て御免な感じで、炎とかが出されてバーツと焼き殺されたりしたんだらうか？

そう思っても、まさか聞く訳にもいかないしなあ。

日々は過ぎてても、まだ祖母の許可が下りないので、お留守番の毎日。相変わらず、祖母は僕を離してくれない。

例えば、お客さんが来なくて祖母も暇な時間に祖父が来て

「馬を見せてあげる」と誘われた。

僕も退屈だったので興味を示すと祖父は喜び、僕を抱き上げようと、祖母に奪われた。

「私も行きます」

渡さない、とばかりに。

祖父は誘った手前、複雑な顔をしながら祖母に抱かれたままの僕を連れて、馬を放し飼いにしている柵の回りに向かう。

「あれが、お前の生まれた年に生まれた馬だ」

説明も祖母に抱かれたまま聞いた。

一度、あんまりにも祖父が可哀相で

「じーじ」

と祖父を呼んでから袖を引っ張ると、祖父は一瞬嬉しそうな顔をし

だが、直ぐに何かを見て怯え僕から離れた。

祖父の視線を追って上を見ると

「どうしたの」

笑顔の祖母がいた。

祖父が何を見たのか考えたくない。

概ねこんな感じだった。

やり過ぎじゃないかなと思わなくもなかったけど、僕のためなら命も要らないと言ってくれたのを覚えてるし、祖母が手を離せない時、例えば調理中なら祖父は何処かに連れて行くのは駄目だったけど、話しかけたり抱き上げるのは黙認されていた。

その時間は、僕もなるべく祖父に構われるようにしていた。やり過ぎると

「アンドイ、ラカスが疲れちゃうでしょ」

怒られていたけど。

祖父も祖父で、一層過保護になった祖母に対して、仕方無いか、という様子を見せていた。

「お前も馬に乗りたいだろうなあ、楽しそうだったもんなあ、悪いけど、もうちょっとだけエミリーに付き合っただけであげてくれな、あいつはああ見えて怖がりなんだ」

祖父に頭を撫でられた。

そういえば、祖母の友人がたまに遊びに来るんだけど、セシルとミランダの他に初めて見る人が来た。

ドーラさんという、恰幅の良い良く笑う人だった。

短い金髪で、ハキハキした物言いが祖母よりずっと若く見せた。

「相変わらず、若いわね」

「何言ってるのよ、大して変わらない癖に」

なんて話してたから、大して変わらないらしいんだけど。

問題なのは、目の前にいるラッセルというドーラの孫。同い年らしいんだけど、既に僕より一回りくらい大きい。

「誰に似たんだか、やんちゃでね」

「男の子だもの、それぐらいでちょうど良いのよ」

しかも乱暴者という前情報を渡され、僕にどうしろってんだ。

ラッセルは僕と足と足がぶつかりそうな距離で、僕をまっすぐ見てくる。

「こんしゃーしゃ」

とりあえず、ミランダの時のノリで挨拶から入った。

あの時より会話スキルは確実に上がってる。

ばっちり通じてるはず。

と思っていると、ラッセルの右手がゆっくり上がり、振り下ろされ頭を叩かれた。

普通に痛い。

「こら、ラッセル」

近くのテーブルで話していたドーラの叱責が聞こえた。

つか、そんなことよりもこっちが下手に出てやってんのにいきなりとかあり得なくね。

お返しと、下から振り上げるようにして顔の側面を叩き返した。

そしたら、ラッセルは驚いた後、泣き出した。

ドーラは僕がやり返したことに驚きながら、泣き出したラッセルをあやそうと手を出したけど、ラッセルはそれを振り払い、僕を振り回す両手で叩いてくる。

最初は祖母達が止めるだろうと思ってたんだけど、2人とも振り回すラッセルの両手を気にして

「止めなさい、ラッセル」

そう言うだけ。

頭を抱え込んで堪えていたんだけど、たまたま一発がすり抜けて、頬に当たった。

カチンと来て、両手を頭を抱えた状態からそのまま伸ばして、タブ



ルパンチ。

綺麗に顔に入り、ラッセルは仰向けに倒れて一層泣き出した。

僕は右手を天に突き上げて

「ダー」

勝利の雄叫びをあげた。

どうだ、アンドレ、もう立てまい。

「本当にごめんなさい」

祖母は僕の代わりに謝っていた。

「いえいえ、気にしないで、いつもはうちの孫が泣かせる方なんだから」

そのやり取りを見て、大人気なかったと反省。

うん、反省したと思ったんだけど、こんなにも直ぐに向かって来られるとね。

ラッセルはあやされて泣きやみ、また置かれると再挑戦してきた。

一応、今さっき反省したばかりだから耐えることにした。

でも、耐えているうちに一つ疑問が湧いた。

僕とラッセルは肉体的には同年、しかも向こうの方が体も大きい。

あれ？

そしたら、やり返しても問題無くない？

こっちの痛みと向こうの痛みって、こっちの方が上だよな？

あとはもう容赦しなかった。

結局、僕らは2人ともそれぞれの膝の上に座ることになった。

「まさか、ラッセルがこんなにも泣かされるなんて、今日はラカス

ちゃんを泣かせたら、どうお詫びしようかと」

「この子も男の子だったってことですよ」

僕は2人は話を聞きながらぼーっとしていた。

時々、こっちを見ているラッセルに気付き、目が合うと、逸らされた。

格付けは済んだらしい。

夜、祖母が母親にその話をすると母親は笑いながら僕の頭を撫でた。

「男の子だもんな、あたしの子だもんな、当然だよな」

暴力には縁遠そうな父親と祖父も、ちよっと誇らしげにだった。

腕白（後書き）

幼馴染みを作りたかった。

男の子2人と女の子1人っていう関係は結構好きです。

それと、祖母がやり過ぎてならないと良いなあと。

読んで頂いたことに感謝

妹（前書き）

新キャラ出ます。

## 妹

暑くなり始めた頃、ようやく祖母から馬に乗ることの許しが出た。

「これ、作っておいたから」

これから夕立も多くなるので、雨対策として新しい雨具をもらった。驚かせようと、僕が近くにいない時、母親という時を狙って作っていたらしい。

「もう風邪なんてひかないように、お婆ちゃんをお願いしながら作ったからね」

と渡された。

「ありがとう」

お礼を言っていると、ギュッと抱き締められた。

そうして母親と一緒に馬に乗り始めた。

僕が行く行かないは、以前と同様に朝の空模様で決められた。

今日は、朝に空が曇っていたので行かなかった。

昼を過ぎても変わらず、今日は一日曇りのようだ。

祖母と一緒に受付にいと、女の人が入ってきた。

僕が、いらっしやあせー、を言う前に

「ただいま」

と言われた。

あれ？

「あら、おかえりカテリーナ」

祖母も普通に迎えた。

「おお、ラカスがこんなに大きくなってんじゃん」  
驚かれた。

そして、この人は僕のことを知っていた。

カテリーナという名前自体は、母親や祖母の口から聞いていた。たまにジャンヌさんやゼノビアさん、その他昔の友人から手紙が着たりした時に、誰々は元気にやっってるみたいだね、とかそんな会話の中で聞いた覚えがある。

てつきり、母親の親しい友人かと思っていた。

だけど、ただいま？

「初めましてラカス、私はカテリーナ、ラカスのお母さんの妹だよ」自己紹介された。

驚き過ぎて、後ろ向きに倒れそうになり、祖母が慌てて支えてくれた。

僕はここに来て一年半くらい経つけど、一回もこの人を見たこと無い。

つてことは、どっか行ってたんだろうけど、母親と祖母、もうちょっと心配しようよ。

「カテリーナ、あんた帰るのはもう少し遅くなるって言ってただよ」

「ごめんごめん、帰る前に寄るはずだった所が中止になっちゃって」

「まあ良いわ、何か食べるかい？」

「食べる食べる」

祖母との会話中、ずっとカテリーナを見ていた。

カテリーナは見た目が高校生くらいで、祖母と同じ黒髪が肩より上で切り揃えられていた。

顔はパツと見、母親と似てないなと思ったんだけど、良く見るとパツパツは似ている

「よろしくね、ラカス」

向けられた笑みが猫みたいで、やっぱり母親の妹なんだなと思った。

「じゃあ、急いでご飯の準備するから、ラカスを連れてきておくれ」

祖母は、何が残ってたかしたらと早足で奥の住居スペースに向かった。

「りょーかい」

カテリーナは返事をする、僕と目の高さを合わせて覗き込んだ。

しばらくじつと見てきて

「うーん、お姉ちゃん似だね」と評価した。

そして、僕を持ち上げ受付の台の上から床に下ろした。

まだ僕は1人では立てないんだけど、カテリーナは知らないの、僕が立てると思ったんだろう。

掴まり立ちは結構前に出来ているので、ちょこちょこ立つ練習を祖母とやっていたんだけど、支えが無いと膝がぐにゃんって曲がってしまう。

カテリーナは僕の足が着くようにして

「放すよー」

まあ良いや、練習だと思ってやってみよう。

すると、立てた。

「おー」

つい、驚きが出た。

子供の成長って早いなあと実感。

「行くよー」

手を引かれると、2歩目でぐにゃんと膝が曲がってしまった。

「まだ歩くのは早いかー」

カテリーナは微笑ましいと笑い、僕を抱き上げて奥へ向かう。

カテリーナが帰って来たのは実に一年半ぶりなそうで、夕食の場は賑やかになった。

僕はそれを見ながら、最近飲めるようになった薄いスープを、自分でやると零すので母親からもらっていた。

カテリーナは、ジャン又さんの薦めで軍の学校に入っていて夏休みなので帰ってきたみたいだった。

今まで帰って来なかったのは、去年の夏休みは友人と旅行に行つて

いて、春休みは特別授業があつて帰れなかつたらしい。

「ほら、私くらいになると、将来を見据えてつてやつよ」

自慢気に話していたけど、母親に

「嘘だろ」

と言われると、明らかに動揺していた。

問い詰められると、宿舎で友人数人とお酒を飲んで騒いだために補習をくらった、と自白。

「でも、今回は顔を見られる前に逃げたから、こつやつて帰つてくれたんじゃない」

そんな、腕が上がつたでしょ、みたいな顔されても。

友人は捕まつてしまい、今頃補習中、だから帰る前に寄るはずだったその友人の家が急に中止になつたと。

「まあ、元気にやつてんなら良いよ」

祖母の言葉に祖父も頷いた。

「でも、久し振りに帰つてくると、やつぱ時の流れを感じるよねー」カテリーナは母親に言った。

「そうかい？」

ずっといる身としちゃあんまり感じないけどね、と母親は部屋をぐるりと見回した。

「だって、私が学校行く前にお姉ちゃんのお腹の中にいたラカスが、もう立てるようになってるんだもん」

「ちよつと待ちな、今、なんて言った？」

母親の声が鋭くなり、敏感に反応した父親がびくりと震えた。

「ん？ラカスが立つて、もうちよつとで歩けそうじゃない？」

カテリーナは僕に、明日からお姉ちゃんと練習しようね、と笑いかけてきた。

と、急に浮遊感を感じ、どすんと重力を感じた時、視界内に在ったものが変わっていた。

真ん前にあつたスーパの皿が視界の端っこにあり、さっきまで正面が祖父だったのに祖母になつていた。



「痛いー」

声のした方を見ると、床に転がっているカテリーナとまっすぐ伸ばされた母親の足。

「ちよつと何で蹴るかなー」

「ラカスが立つところを一番に見るのが最近のあたしの楽しみだったんだ」

「蹴らなくても良いじゃん」

「両手が塞がっている」

確かに母親は今、立っているから、両手で僕を抱えてる。

「そうじゃなくて、口で言えば良いじゃん」

「パンが入ってた」

確かにさっき、母親はパンをかじってた。

僕をカテリーナの座っていた椅子に置くと

「さて、久々の姉妹の再開を祝おうか。ここじゃお客さんに迷惑がかかるから外に出ようか」

パキパキと首と手の関節を鳴らし、カテリーナの足を掴み引きずって部屋を出て行くこうとする。

「アン」

祖母が呼んだ。

「お母さーん」

カテリーナは希望に満ちた目をしていた。

「明日から一週間いるそうだから、一週間後に1人で歩ける程度にしな」

「お母さん、お姉ちゃん、ごめんなさい、謝るから許してー」

カテリーナは連れて行かれた。

祖父と父親は、髪の毛一本分すらも関わらないようにと、目の前の食事に集中している。

僕は、祖母の膝の上で食事を再開した。

「美味しいかい」

祖母の声は先と打って変わってとても優しくかった。

祖母も僕が立つのを一番に見るのを楽しみにしてたのか、食べながら、そう思った。

## 妹（後書き）

母親の妹、カテリーナでした。

最初は、母親と逆で大人しい性格を考えてたんですが、祖父父親が十分大人しいので、こんな感じに。

読んで頂いたことに感謝

練習(前書き)

もつちよつとカテリーナ

## 練習

カテリーナは流石、というかやっぱり母親と同じ血をひいてるだけあつて、顔や体のあちこちに包帯が巻いてあるけど普通に朝食の場にいた。

ただ、何故か僕の方をちらちら見ている。  
なんだろう？

父親と祖父が仕事に向かい、母親がカテリーナに素っ気なく振る舞い、僕にキスをして仕事に行った。

何故か僕は、晴れているのに連れていってもらえなかった。

祖母と僕とカテリーナが残り、さらに、留守番ならいつも僕を傍に置く祖母が

「じゃあ、頼んだよ」

と洗い物を始めた。

なんかいつもと違う。

「はい」

カテリーナは直立不動で返事をした。

僕が今日の変わり様を疑問に思っていると、祖母が裏口から出て行くのを見送ったカテリーナは、しゃがんで僕と目の高さを合わせて眉を悲しげな形にした。

「お姉ちゃんね、また出掛けるまでに、ラカスが十歩歩いてくれないと、大変なことに、もう泣いちゃうくらい痛い痛いことされちゃうの、ね、だから歩く練習しよ」

そう言われて、朝食の時の視線と祖母の行動の理由が分かった。

昨日、僕が寝る頃になっても母親は戻って来なかったけど、まだ許されていないのか、と少し不憫。

まあ、どっちにせよ、歩けるようになることは僕にも利得になることだから協力することにしよう。

床の上だと転んだ時痛いし、せつかく晴れているんだからと庭で練習していた。

日差しは暑いけど、日陰に居ると風が通り抜けて行って気持ち良い。うん、環境は問題ないんだけどさ

「ほら、もうちょっと頑張る」

協力しようとは思ったけど、半日ずつとは無理だつて。

ずっとやり続けたおかげなのか、三步四歩はいけるようになったけど、もう無理。

疲れた。

ペタンと座る僕を無理矢理カテリーナは立たせようとするので、手を払って嫌がっていることをアピールする。

「ラカス、さっさと立つの」

カテリーナは焦れて、僕を叱る。

そうされると、僕も意地になってきて、絶対やってやるもんか、となる。

「ラカス」

「やー」

が、何回も繰り返し返された。

「もしラカスを泣かせたら、明日の太陽は拝めないと思いな」

声のした方を見ると、洗濯籠から洗濯物を取り出す祖母の後ろ姿があった。

「ラカス」

急にカテリーナは笑顔を作った。

「少し休憩しよう、うん、休憩は必要だからね」  
そう言っただけの隣りに座り込んだ。

「足、疲れたよね、お姉ちゃん揉んであげるね、あ、喉渴いた？お水、取ってきてあげようか？」

かいがいしく、僕の機嫌をとりだしたカテリーナを見てみると、母親と祖母ってどんだけ怖いんだろうと疑問。

もし、僕がこのまま歩かなかったり嘘泣きしたら、どんなことになるのか興味が沸いた。

「私のこと嫌って、わざと泣き出したりしないよね」

僕の足を揉みながら、顔を覗き込ませてきた。

あまりのタイミングに、つい、目を逸らしてしまった。

「しないよね、しないって言って、ラカス。お姉ちゃん、もう大きな声出したりしないから、ねっ」

なんか今にも泣き出しそうだったので、誤魔化すつもりで立ち上がった。

「練習してくれるんだね、ありがとうラカス、この恩は一生忘れなからね」

僕の手を取って、感謝の言葉を述べるカテリーナ。

この人、僕が目標に達せられなかったり泣き出したら、本当何さねんだろう？

それ以降、僕が疲れた様子を見せると、直ぐに休憩をとってくれるようになった。

結局、十歩を達成したのは、六日目の午前中だった。

歩くっていうか、前につんのめる感じが近いけど。

そいえば、二日目、急に一日中練習しだしたからか知らないけど、足が痙攣を起こしてしまった。

その際のカテリーナの必死さといったら。

多分、カテリーナの中で僕は絶滅危惧種の最後の一匹より貴重だったに違いない。

でも、今考えると、もし僕が普通の赤ん坊だったら泣いてたなと思う。

命拾いしたね。

十歩歩いた、その日の夕方。

「まーま、おかーりなさー」

帰ってきた母親を歩いて出迎えた。

「おお、ラカス」

母親は満面の笑み。

僕は馬から下りた母親に抱き上げられた。

良かったね、とカテリーナを見ると

「私、生きてる」

大地を抱き締めていた。

「何してんのさ、家に入る時はちゃんと砂を払うんだよ」

母親に冷たく言われていた。

残された日をカテリーナはのんびり過ごすことにしたらしい。

苦楽を共にした、とカテリーナは言う、僕を連れて、時々僕を手を繋いで歩かせたりしながら、久し振りの町を見て回っていた。

仲の良かった人も多いらしくて、同い年で既に結婚した友人と当時の好きだった人の話とかしてた。

その中で知ったのは、カテリーナが17才で母親が23才ということ。

へー。



カテリーナが帰る日の朝。

「じゃあ、行くね」

来た時と同じ格好で玄関前に立つカテリーナを家族全員で見送る。

「元気にやんな、それが一番だ」

祖母の言葉に、うん分かつてる、と頷いた。

母親が僕に、何か言ってるやんな、と促した。

「いつてらっしゃー、カテリーナ叔母しゃん」

言った瞬間、時間が止まった。

家族は笑いだし、カテリーナはショックを受けていた。

「確かに関係からいうとそうだね、あんたそんな言葉、どこでおぼ

えてきたんだい」

「やだ、そんなの、私はまだ10代なの」

異義を唱えられた。

どこの世界でも、そーいうのって気にするらしい。

考えた結果

「ねーね」

と言ってみた。

「それなら、よし」

カテリーナは親指を立てて、許可を出すと

「じゃあ、いつてきます」

大きな声で言い笑顔をみせると、くるりと回り歩き出した。

## 練習（後書き）

なんか、今回すごいスムーズでした。  
それが逆に怖いんですけどね。

カテリーナが受け入れられると良いなあと。

読んで頂いたことに感謝

三角関係(前書き)

展開は相変わらず

### 三角関係

秋の半ば過ぎ、収穫の時期を迎えた。

去年と同様に、母親が幾人かの男性を引き連れて町を出て行くのを見送る。

馬車が町の門を出て姿が小さくなってゆくと、人々は、終わったなあ、という顔をしてまったりとした空気に包まれた。

母親をはじめとする、収穫物等を運ぶ人達に申し訳ないと思いつつも、今年も無事に仕事を終えたという満足気な顔だった。

もう少しすると、今度は冬の準備に来年のための準備と、なんだかんだと始まるので、ゆっくり出来るのはここ何日かだけなのかもしれないと思う。

僕の父親もそうだった。

いつもならもう仕事に向かっている時間に起きてきて、ゆっくりと朝食を食べている。

僕は母親がいないので、祖母達と一緒に寝た。

祖父母は変わらず仕事があるので、僕もいつも通りの時間に起きて既に食事をとっていた。

しかし、父親もゆっくり出来るといっても、時代が時代、働かざる者食うべからずなので、午前中は裏で薪割りをしていた。

祖母に連れられ、割られた薪を取りに行くと、父親は手斧でぱっかんぱっかんと。

母親と並ぶとひ弱に見えるけど、やっぱり父親なんだなあ実感。

僕が、祖母が手頃な薪を集めている間、振り下ろされる手斧を見ると、気付いた父親は笑い、一塊に置かれている割られる前の薪の中から一番大きいのを選び、台に置いた。

「ラカス、見てろよ」

勢い良く手斧は振り下ろされた。

「あれ？」

手斧は途中で止まっていて、割りきれなかった。

2、3回そのまま叩き付けてようやく割れた。

「ラカスに良い所見せるつもりだったんだけどなあ」

父親は照れ笑い。

僕も祖母を手伝い薪を運ぶ。

手伝うといつても、一本ずつ、それも大きい物だと転んでしまうので、父親が小さい物を手渡してくれ、それを運ぶ。

「頑張れ頑張れ」

祖母と父親、両方から言われた。

気付くと、いつの間にか祖父も来ていて笑いながら見られていた。

午後は、祖母、セシル、ドーラ、その孫達の6人で近くの林に向かう。

祖父から馬を借り、小さなリアカーに柵代わりの板を張り付けたようなものに乗った。

母親の時と同じ鞍を使っている祖母と僕はまだしも、リアカーに乗っている4人はサスペンションも無く痛いだろうな。

乗る前にそう思ったが、馬は歩く程度だし

「ラカスちゃん、もう乗れるのね」

「流石エミリーの孫ね」

「いつも乗ってるんだもの、これくらい出来るわよ」

祖母達3人は楽しそうに世間話をしているので、慣れているみたいだった。

林に着くと、冬の間の蓄えとしてキノコやドングリを拾う。

父親が祖母の代わりに店番をして祖母が来てるのは、男性がこういう所に来て拾い回るのはあんまりみっとも良いものじゃないからだそうさ。

樵とか猟師なら違っただろうけど、こういうのは女性の仕事のようにだった。

まあ仕事といつても、祖母達は笑いながらやってるし、僕らに

「さあ、誰が一番集められるかな」とか言ってるし。

秋の林ということ、ドングリはそこら中に落ちている。それを各家庭から持って来た麻袋に入れていくというわけ。祖母達はエプロンを袋のように使い、一度に大量のドングリを麻袋に入れる。

一個ずつ持って来る僕らとは比べ物にならない。元々僕らは戦力として見られて無いわけで、ちよつとした遠足気分だとしても、これが後々の食事の量に関わってくるとなれば、一個でも多い方が良いんだろうな、と地道に拾っては入れ拾っては入れをしていると、何故かラッセルが張り合ってきた。僕が入れると、ラッセルも小走りになつて入れる。横を見ると

「んあー」

威嚇のようなものをしてきやがった。

このやろう、と僕もムキになる。

入れたら入れられ、入れられたら入れ返す。

「ほら、どっちも負けるな」

ドーラが気付き、笑いながら応援された。

他の2人も、微笑ましいわね、と。

そうしていると、ミランダが何を思ったか持ってきたドングリを僕の家の麻袋に入れ始めた。

「あらあら」

セシルは苦笑い。

「だーめ」

競争相手のラッセルは何故か僕に文句を言ってきた。

随分とお怒りみたいだけど、僕に言われてもなあ。

その間もミランダは僕に笑いかけながらドングリを入れていく。

「だめえ」

とうとうミランダに対しても言い始めたラッセルだったが、ミラン

ダは無視。

最終的には、ラッセルはミランダを叩き泣かせ、自らも泣き出した。2人は自分の祖母に抱き上げられあやされている。

「ごめんなさいね、嫉妬しちゃったみたい」

「いえいえ、微笑ましいものですよ」

その祖母達のやり取りを聞いて理解した。

何がきっかけなのか知らないけど、ミランダは僕に好意を持っていて僕を手伝いたかったらしいし、ラッセルはそれが気に入らなかつたらしい。

多分、如何にままごとに付き合っただけの差だと思う。

唯一泣いてない僕に祖母が

「女泣かせだねえ」

いや、泣かしたの僕じゃないし。

後日、帰ってきた母親に祖母がその話をした。

「ガキのくせに、もう色恋の真似事してんのかい」

驚いた風を見せ、ミランダが僕に好意を持っていることを知り

「この色男、あんな可愛い子をどうしようってんだい？」

明らかに面白がっている目で見てきた。

知らないつつーの。

僕は、プイツと横を向いた。

「いっちょ前に照れてやんの」

母親に笑われた。

### 三角関係（後書き）

一日空いてしまいました。

実は昨日も一話書いたのですが、投稿しませんでした。

内容は、祖母、母親から見た主人公、つて話です。

今まで、ずっと主人公の一人称だったんですが、たまには、と。

ただ、書いてみると、祖母、母親の気持ちは分かりやすくなりますが、主人公が風邪ひいた時の言葉が弱くなってしまう気がしたので止めました。

これからも、他の人から見た主人公は書かないと思います。

言いはするでしょうけどね。

最近、アクセス解析を見ると、20000くらいいつてるんですよね。ランキング上位の人って凄いなと感じています。

小説家になるうを見る人が10万人くらいとして、0.02%くらいですが、全員が展開遅っ！っと思っっているかと思っつと羨えそうです。（笑…えないですよ）

読んで頂いたことに感謝



孫（外伝）（前書き）

祖母から見た話です。  
矛盾が無いと良いなあ。

## 孫（外伝）

目覚めて、隣りで眠るアンドイを起こさないようにベッドから出ると、カーテンを開いて外を見た。

まだ薄暗くて、空模様は見えない。

もうすっかり秋だ。

朝食の準備にキッチンに向かう。

昨日のうちに捏ねておいた生地を切り分け、丸め、オーブンに入れ、ふつつつと沸き始めた野菜スープの火を弱めると、後は待つだけ。ぽっかりと空いた時間をゆっくりとお茶を飲みながら過ごすのが、私の密やかな楽しみ。

窓から差していた日差しが太くなり始めたので、見ると、秋の夏空を水で薄めたような空が刷毛で伸ばされたみたいに広がっていて、小魚が連なっているような雲が浮かんでいる。

「今日は晴れそうね」

なんとなく口に出た。

後ろから笑い声が聞こえ、アンドイがいた。

「何よ」

含みを持たされている笑い声に聞こえた。

「晴れたのに随分と残念そうだな、と思ってな」

まだ浮かぶ笑みと共に言われた言葉は暗に揶揄されている気がした。

「気のせいよ」

そう言ったものの、自分でも凶星だと思った。

我が家は、かつて貴族だった。

この町に来た当初ならまだしも、今ではほとんど忘れられているだろう。

「そっいえば、そうだったわね」

年をとつた者が、不図思い出す程度。ささやかな抵抗なのか、代々幼少期に乗馬の習慣をつけさせることが続けられている。ラカスも、なるべく早く乗れるようにしないといけないので、晴れた方が良いに決まっている。なのに、最近晴れるとなんとなくがっかりする自分がいる。

元々男の子を期待していなかった。

アンの生まれる前、私達は子宝に恵まれない時期があった。母親と父親の勧めで、余所に嫁いでいた妹のところで生まれた男の子を貰ってきた。

こんなことは、代々の歴史の中でもたまにあつたことで、そして代々の歴史に漏れず、貰ってきた子は、家に来てしばらく後に風邪をこじらせるようにして、次第に弱り、亡くなった。

諦め、より、喪失感や苛立ち、悲しみを二度と味わいたくない方が強かった。

やっと、アンが生まれた時も、まず女の子であることを喜んだ。女の子なのだから、この子は大丈夫。

両親、夫に悪いと思いつつも、そう思ってしまった。

アンはすすくと育ち

「アンが男の子だったらなあ」

口に出さずとも聞こえる声に、ひっそりと我が子の無事を喜ぶ日々。カテリーナもそうだった。

期待せずにいられないとばかりの両親に夫。

母だけは理解してくれると思つたが、母は私と妹を早々に生み、私達姉妹は、何の問題も無く成長した。

理解してくれる者はいなかった。

「大丈夫よ」

それはとても残酷な言葉。

カテリーナも無事生まれ、私はまたしても安堵した。  
2人は健やかに成長し、両親は亡くなり、娘達が町から出て行ったり、旦那を連れて帰って来たり、色々あったけど、残された仕事は無いと思っていた。

アンが妊娠した時、私は対応に困ることになる。

当然のように、娘夫婦は男の子を望み、アンドイも口に出さなくても期待をしているのが分かった。

アンドイに関しては、男と女の子に対する気持ちの違いに八つ当たりをした覚えがある。

「あの時は、ごめんなさい」と、最近になって謝れた。

ラカスが生まれたことで、悲しみが癒されたわけじゃなくとも、隙間が埋められた。

許した訳じゃなく男女差を一步引いた目線で見られるようになった。

「僕も無神経だったな、すまない」

アンドイはそう謝ってくれた。

「父親つてのは無責任だよなあ」

頭を掻いたアンドイ。

当時は、その無責任が許せなかった。

アンもまた、男の子を望んでいたの、私は何も言えず、水を差しそうになるのを必死に堪えていた。

ラカスが生まれた時の気持ちは、今でもはつきりと言い表せない。

この子は死んでしまうんだろうな、という悲しみ、アンへの同情、

無責任に喜ぶ男供への怒り、喜んだ思い出はあまり無い。

以降も、私は善きお婆ちゃんとして、接しようと決めた。

それでも、やっぱり愛着というか、アンに似た顔立ちは自分の孫を

感じざるを得なかった。

半年が経ち、アンから

「馬に乗せてみようかと思うんだけど」

と言われた時も、危険かもしれない、と止めようとした。

止めなかったのは、止めようとする気持ちは愛着の湧いてしまったエミリーとしての気持ちだと思ったから。

我が家の慣習からすると、乗れるなら乗せた方が良い。

私の気持ちで止めるよりも慣習に依る方が、ラカスが死んでしまった時に仕方無いと思える気がした。

だから、止めなかった。

初日は我が家の血統の代表として見送れた。

翌日からは見送れなかった。

いや、見送らなかった。

馬に乗る姿を見て無事に成長するんじゃないかと、期待をしてみまう自分を恐れた。

最近、セシルやドーラに、孫自慢が過ぎると笑われた。

そういえば、まだあの時はラカスという存在を、直ぐに忘れられるようにしていたからかもしれない。

私の想像を裏切り、ラカスは何の問題も無く帰って来て翌日元気に  
出掛けて行った。

もしかしたらやっと、と思わなくも無かった。

「ばーば」

ラカスがきよとんとした可愛らしい顔で呼んでくれた時なんて、それが頂点に来ていた時だと思う。

直ぐに谷は来た。

「ラカスが風邪をひいたみたいです」

ジエームズから、それを聞いた時、私は崖から落ちたような気すらした。

「やっぱり、そうなのね。」

私の中で、誰かの声。

それは、常に私の中にいた私の声。

ラカスの手を握り締め、泣きながら謝るアンを見て、私はラカスよりアンを優先した。

ラカスからしたら母親にいてもらった方が安心しただろう。

でも、アンは？

もし、ラカスが死んでしまったら、残されたアンは私と同じ悲しみを持つのだと思うと、孫より娘を優遇するのが当然だと思えた。

どうせ、またしばらく男の子は生まれない。

自分の娘の幸せを守ってやれるなら、幾ら罵られようと構わない覚悟で。

「アン、仕事に行くんだ」

私の言葉は、冷たく聞こえたかもしれないが、アンを思っていたことだった。

「嫌よ」

アンは拒み、その場から動く気配を見せず、最悪、殴りつけてでも仕事に行かせようと思った。

「あー」

ラカスが微かに声を出し、アンの手を叩いた。

アンを慰める。

そう感じ取れたのは、私もラカスもアンのことを思っているという

同じ思いの元にいたからだと思う。

その光景を見た瞬間、涙が噴出した。

「ありがとう、ラカス」

嗚咽に混じり、はつきりとした言葉にならなかった。

初めて理解した。

ラカスが私の孫だということ。

今まで、この一族の男の子は、ラカスは私達とは別の存在だと知らず知らずのうちに思っていた。

違うんだ。

私がアンを思うように、ラカスも母親を思ってる。

これを家族と言わずしてなんと言うのか。

そう思うと、急にラカスが身近に感じられ、愛しくなった。

ラカスもまた、私が愛すべき存在だったのだ。

「良い男じゃないか、ねえ、アン」

アン達が出ていった後、アンドイにラカスについて聞かれた。

「分からないよ」

正直に言った。

私の中は、ラカスに対する申し訳なさで一杯だった。

なんで、もっと早く気付けなかったんだろうか？

死んでいく者に情が残らないようにすることと、愛さないことは違うことなんだと。

明日、死ぬかもしれない。

だから、今日愛するのだと。

「助かるっていつならこんな婆さんの命なんて幾らでもくれてやるから」

初めて、ラカスを愛した。  
ラカスをもっと愛したいと思った。

秋は日が暮れるのが急に早くなる。

もう窓の外は暗くなり始めた。

馬の音がさつきしたから、もうすぐアンとラカスが帰って来るだろう。

「ソワソワし始めたな」

アンドイに笑われた。

「五月蠅いよ、孫を可愛がって何が悪いんだい」

笑われながら待っている

「ただいま」

「たーいまー」

と入ってきた。

「おかえり」

ラカスをギュッと抱き締める。

「たーいまー」

ラカスは、私にされるがままになりながらも、ちゃんと一人で立っている。

こんな立派になっても、もしかしたら、という気持ちが消えることは未だに無い。



それでも、今日、愛していることを溢れる程に伝えたい。

孫（外伝）（後書き）

感想でリクエストがあったので、書き直して投稿してみました。本当は、祖母と母親で一話だったんですけど分けてみました。

前話の後書きでも書いた、祖母の言葉が弱くならないように気を付けたんですが、どうでしょう？

モノローグって難しいですね。

重度の勘違い系になってないと良いなあと。

読んで頂いたことに感謝

祭日（前書き）

随分、空いてしまいました。すいません。

## 祭日

僕が風邪をひいたりとか、カテリーナという存在を知ったりとか、色々あったけど無事に一年が過ぎた。

ということは、あの何を祝っているか分からない祭りの時期になったということ。

去年を振り返って考えてみると、どうも僕の知ってる祭りとは根本から違うみたいで、多分だけど、最後にやった踊りみたいなのが重要なんじゃなかるうか？

祭りというより確認の儀式？

聞いて良い年齢か分からないから、結局聞かないで曖昧なまんまなんだけどね。

今年の祭りは、祖父母と一緒に午前中に料理を持って行く係りになった。

「今日ぐらい、夫婦で楽しみなさい」

祖母は両親にそう言い、祖父も、たまには、と言った。

最近晴れが続いてたから、と祖母を疑わなくもなかったけど、たまには両親にそういう機会を、という考えには賛成。

「悪いね」

嬉しそうな顔を、ほんの少しだけ、隠しながらの母親と、こちらも嬉しそうな父親に見送られて家を出た。

祖母が料理の乗った大皿を持ち、祖父が細々とした物が入った籠、僕は布製の鍋敷きみたいなやつを抱き締めるようにして持っている。身長のせいで、そうしないと引き摺ってしまう。

一番重いのは祖母だと思うんだけど、この世界だと男性に料理を持たせないみたい。

本当なら祖父の持っている籠も祖母が持つべきらしいんだけど

「万が一転んだりしたら危ないだろう、ラカスだって嫌だろう、お祖母ちゃんが怪我したら」

僕も首を縦に振って、祖父が強引に籠を持った。

仲が良いよなあ。

たった2年だけこの世界を見てきて、主な産業が農業とか力仕事が多いっていうのもあるんだろうけど、男性の方が女性よりずっと上に位置付けられているように見える。

うちは、女性の方も稼いでいるけど、この世界のルールに従い、男性陣は家の中では情けなくとも対外的にはちゃんと立てられている。僕はフェミニストではないし、男性なので、女性より下は嫌だなあという思いはある。

でも、そういうことではなく、両親みたいに力関係は気にしないままお互いを好きとか、祖父母みたいに力関係抜きにして大切にしたいとか、そういうのが時々垣間見えるのが良いなあと思う。

こんな風に生まれ変わるっていうか、この世界に生まれるなら、もしかしたら、ちゃんとした貴族に生まれることが出来たかもしれないと思うことがある。

例えば、豪勢な食事、大きなベッド、風呂、もしかしたらハーレムでも、その分制約やこんな風に甘えたり、身近に暮らしたり出来なかつたらかもしれない。

上を考えればキリが無い。

でも、十分恵まれてる。

そう思えるから、まあ良いや。

僕の歩くのが遅いせいで、やっと広場に近くなってきた。

祖父母は僕の後ろを速さを合わせてながら、並んで歩いている。

「ほら、もうちょっとだ、頑張れ」

「ゆっくりで良いからね」

時々励まされながら、時々心配されながらすり落ちそうな鍋敷きを何度も抱え直しながら、なんとか着いた。

「あら、メアリーとアンドイ」

セシルが広場に置かれたテーブルに持って来たんだろう料理を並べていた。

「ラカスちゃんも頑張ったのね」

こんにちは、と挨拶されたので、鍋敷きを渡し

「こんにちは」

と、ぺこり。

「偉いじゃない、うちのラッセルにも見習わしたいもんだわ」

ドローラが来た。

どこかに行っていたみたい。

「アンドイさんもお疲れ様でした」

ドローラは祖父から籠を受け取り、挨拶を交わすと

「うちの旦那は、あっちでもう始めてますから」

祖父を促した。

「じゃあ、ちよっと思って行く」

「行ってらっしゃい、あまり飲み過ぎないようにね、もう年なんですから」

「分かってるさ」

祖父は祖母に見送られ、示されたテーブルに向かう。

「相変わらず、仲が良いことで」

「もう、止めてくださいよ」

「アンドイも優しいものね」

祖母達は話し始め、僕はぼつんと。

少しして、セシルが僕に気付き

「ごめんなさいね、ミランダとラッセルちゃんがあそこで遊んでるから」

指で示された方を見ると、少し離れた芝生のところに2人は向かい合って座っている。

その光景から判断して。  
ままごと……だろっなあ。

正直、このままここにいても構わないかもと思う。

「ほら、ラカスちゃんも仲間に入れてあげて」

セシルに手を引かれ、連れて行かれた。

連れて来られた僕を見たミランダの目が輝いた気がする。

「良い子にしてるんですよー」

ミランダが横になっている僕の頭をぽんぽんと軽く叩く。

「あー」

僕は、それに応えなければならなかった。

ラッセルの可哀相なものを見る目が痛い。

何故か、僕とミランダ、ラッセルでままごとをすると、ミランダがお母さん、ラッセルがお父さん、僕が赤ん坊になる。

そりゃ僕とラッセルだったら、ラッセルの方が一回り大きいから仕方無いとして、とりあえず屋外でのままごとは止めてもらえないだろうか。

さつきから聞こえる

「あら、可愛い」

「あの子、アンさんのところの子でしょ」

耳に入れないよう必死。

僕も抵抗した。

するさ、当たり前でしょ。

これは一歩間違えば人権問題じゃね？

ただ、結果、ミランダの零れそうな涙目によって僕は負けた。

僕へのイジメとしかとれない行為は、祖母が、帰りましようか、と言うまで続いた。

その夜、僕は両親のベッドで独り寝ていた。

両親は祭り後の宴会で帰って来ていなかったなので、寝るまで祖母に添い寝された。

そんな夜中、突然起こされた。

何が起きた？

眠い目を擦りながら起き上がると、顔が赤く明らかに酔っ払っている母親がいた。

右手には、首根っこを持たれた父親。

「おう、ラカス、まだ赤ん坊でいたいそうじゃないか」

鈍い音がして、父親の頭が視界から消えた。

「よし、存分に飲め」

母親は胸をさらけ出し、目の前に差し出された。

僕は全てを理解し、恥ずかしさのあまり逃げようとした、が、捕まった。

「遠慮すんな」

久々に飯を食わされた。

しばらくの間そうし続けると、母親は満足したようで、僕にキスをし、父親を持ち上げ、ベッドに投げた。

父親は頭を抱えて呻き声を上げ、悶えている。

母親は倒れ込むようにして、僕を抱き締め

「ほーら、ママだぞ」

眠り出した。

すっかり目が覚めてしまった僕は、がちり抱え込まれた母親の腕の中で、羞恥に悶えていた。



## 祭日（後書き）

祭りの話になったら、1年経ったとお考え下さい。

とりあえず、サブタイトルで年代が分かるようにしてみました。

本当に前投稿から間が開いてしまいました。

理由は一応、活動報告に書いてあるので、気になる方は、そつちを御覧下さい。

読んで頂いたことに感謝

## 進路と評価（前書き）

なんか、狙った感が出てしまったのが微妙。

## 進路と評価

風が春を纏い出し道端に小さな花が揺れ出した、ある日。  
僕と母親が仕事から帰ると

「よっ」

ジャンヌがいた。

「なんだい？急に」

母親の問いに

「ちよつと用事でな」

ジャンヌは軽く返すと、母親の横にいた僕の前に来てしゃがみ、しげしげと僕の顔を見てきた。

「随分立派になったな、それと益々アンに似てきた」

言うと、にっこりと笑う。

僕はどう答えたら良いものか分からず、曖昧に笑って誤魔化した。

ジャンヌの用事というのは、カテリーナについてだった。

話はジャンヌを交えた夕食の場で切り出された。

「ちよつと話があるんだが」

ジャンヌが神妙な面持ちで話出した。

「何？」

母親が促すと

「カテリーナが卒業した後、私のところで預かろうと思うんだが」

「別に構わないよ。ねえ母さん？」

「ああ、好きに扱っておくれ」

母親と祖母の即答にジャンヌは拍子抜けしたみたいだった。

多分、説得の流れを幾つか考えてきたんだろうけれど、こんな簡単にいくとは思って無かったみたい。

なんていいながらの僕も答えの早さに驚いている。

もうちょっとさあ、考えてあげようよ。

それは祖父と父親も同様らしくて、まじまじと答えた2人を見ていた。

祖母は僕らの視線に気付き、全く、とため息をついて

「変なところに行くよか、アンの友人の方が安心だろうね」

さも当然のことでしょう、とばかりに。

ジャンヌは慌てて

「信頼して頂いて、ありがとうございます」

祖母に頭を下げた。

母親はその姿を見つつパンを嚙る。

「それにしても、あんたが直々に来るなんて、カテリーナのやつは

そんなに優秀なのかい？」

その質問は、僕も同感だった。

1度しか会っていないカテリーナだけど、なんていうか、優秀って印象を受けなかった。

「彼女は、なんだかんだ泣き言を言うが、やれと言ったことはやるからな」

ああ。

ジャンヌの言葉に、僕を含む家族全員に思い当たる節があるみたいだった。

何はともあれ、カテリーナの就職先が決まったみたい。

ただ

「じゃあ彼女には、そう伝えとくから」

その一言が気になった。

多分、っていうか、ほぼ確実に、カテリーナに全くこの話をしてないんだろっな。

なんか、軍学校もこんな流れで決まった気がしなくてもない。

祖母と母親が何も言わないので当然の如く、僕も、同じように気付いたらしい祖父と父親もそこに触れなかった。

「今日は、私と一緒に寝ないか？」

ジャンヌは明日の朝早くに出ないといけならしいので、多少飲んだが、いつも通りの時間にベッドに向かうことにした。

祖母が祖父を連れて行き、母親が父親を担ぎあげていると、母親を待つ僕にジャンヌが話しかけてきた。

僕はとりあえず母親に伺いをたてる。

「あんた、年下ならそんな小さい子でも良いのかい？」

呆れ顔の母親に、ジャンヌは慌てて異義を唱えた。

「いや、そうじゃない、そうじゃなくてだな」

ジャンヌは目を泳がせ言い辛そうに

「以前、ラカスに胸を吸わせて以来、子供って良いなあという思いがだなあ、こう、ふつふつと」

分かるだろ、と母親に理解を求めた。

「なら、さつさと作れば良いじゃないか」

母親は取り付く島も無い。

「私だつて出来るならそうしてる。でも、今は子供を産む時間的余裕が無いんだ」

必死にアピールするジャンヌ。

「どっかから貰って来るとか」

母親の言葉に、ジャンヌはチラリと僕を見て

「ラカスが良いんだ」

ぶつちやけ、軽く引いた。

「ラカスみたいな女顔で、幸せに育ってますって雰囲気な子供って中々いないんだよ」

ああ、そういうことね。

引いた身を若干戻す。

母親は、全く、と溜め息を一つ。

「あんたといい、ゼノビアといい」

意外な名前が出てきた。

「ゼノビアも何か言ってたのか？」

ジャンヌも出てきた名前に興味を持ったみたいだった。

「手紙が来て、将来うちに欲しいってさ。気の早い話だよ」  
全く、ともう一度。

どうやら僕はジャンヌだけじゃなく、何故かゼノビアにも気に入れられていた様子。

僕の方が、全く、という気分。

何が琴線に触れたんだか、皆目見当もつかない。

僕が疑問に思っていると、ジャンヌはフンと鼻を鳴らした。

「そういうアンだつて、手紙を見る限り、ラカスを相当溺愛してるみたいじゃないの」

その言葉に、母親は明らかな動揺を見せた。

「五月蠅いよ。初めての子供なんだから当たり前だろ。次が産まれりゃ、そつちばっかりになるさ」

母親は、顔を背けて言う。

「本当にそれだけか？」

ジャンヌは追い討ちをかけた。

「五月蠅いってんだよ。連れてくなら、さつさと連れてきな」

母親の言質をとつたと、ジャンヌは嬉々として僕と手を繋いだ。

僕の意味は関係ないらしい。

まあ、最初から僕に決定権があるとは思って無かつたけど。

母親は肩を貸していた父親を荷物のように担ぎあげ

「さあ、ジェームズ、今夜は気合い入れて2人目作るからね」

勇ましく寝室に向かって行った。

今まで、そういうのをしてるところを見てるけどさ、あからさまに言うのは止めてほしいなあと思う。

というわけで、僕はジャンヌのベッド、ジャンヌの腕の中にいる。

普段僕は、両親の大きめのベッドの横に置かれた、小さいベッドで

寝ている。

一緒に寝て、万が一寝返り等で上に乗られてしまつと危険なので、母親が気紛れを起こさない限り、こうして抱き抱えられながら寝ることは無い。

目の前には、見慣れない褐色の肌。

軍人らしく締まっているが、それが逆に時々見える女性特有の丸みを強調する。

しかも、寝着なので薄いしゆったりした作りのせいで、押しつけられると胸が見えそう。

っーか、見える。

ジャンヌは肌の色を差し引いても分かるくらい、顔を赤くして

「マ、ママって呼んでも良いからな」

なんなんだろう、このプレー。

僕としては、じゃあ呼ばない方向で、と言いたいが、ジャンヌの目は、呼べ、と言っている。

「ママ」

呼ぶと、ジャンヌは身悶えて喜んでいた。

結局、それからジャンヌがしたかったことを色々させられた。

翌日、ジャンヌは満足した顔で帰って行った。

僕はぐったりしながら見送った。

一月後。

カテリーナから手紙が届いた。

そこには、ジャンヌの部隊に行くことになったので、長期休暇が潰れたことが書いてあった。

ジャンヌのとこって結構精鋭部隊らしい。

後は、ズラズラと怨みの言葉が続いていた。

その中で、ジャンヌに進路を告げられて直ぐさま脱走を試みたこと、

逃げた先に、母親ジャンヌゼノビアの昔馴染の包囲網が広がっていたことが、まるで悪者の城から逃げる美女のように書かれ、最後は『妹が可愛くないのかー、お姉ちゃんの馬鹿、悪魔ー』と閉められていた。

手紙の内容自体も恐ろしいと思うが、手紙を読み終えた後に母親が「やっぱり頼んどいて正解だったね」

それを聞いた祖母が「だから、言っただでしょ」と応じた。

この光景も相当恐かった。

頑張れ、カテリーナ。



## 進路と評価（後書き）

ジャンヌを年下好きにした時から、こんな流れは考えてたんですが、なんかテンプレっていうか、女性に好かれる主人公みたいな感じになったのが、微妙に気になります。

読んで頂いたことに感謝

## 兄（前書き）

タイトル通りです。

## 兄

いつも通りかかる森の青葉が風に揺らされ、しゃらしゃらと鳴いていた。

いつもなら、上を見上げて葉の隙間から零れる日差しを見るんだけど、今は無理。

「気持ち良いなあ」

後ろから母親の呑気な声が聞こえる。

手綱は今、僕の手が握っている。

さっきの村を出てすぐ

「持ってみな」

と、軽く渡された。

手綱は母親が使っている長さのままなので、僕が根本の方を持ち、余った、だらんとぶら下がっている部分に母親の右手の指がかかっているだけ。

母親は

「次の村まで道なりだから、大丈夫だつて」

そう言うけど、僕はこの世界に来る前も来た後も馬の操り方なんて習ったことは無い。

出来るわけないじゃん、と思いつつも、流石母親の馬、ほとんど持っているだけなのに、気にしないで走る、走る。

だからといって、こんな初めてだし、緊張が無くなるわけじゃない。

とりあえず、手綱をしっかり握り、前だけを見つめることに必死。つてか逆に、前を見てないと、何かが起こりそうで、恐くて仕方無い。

景色の飛んで行く早さが、いつもより早い気がするけど、母親が何も言わないってことは、いつもと変わらないということ。

知ってる村と村の距離は大したことないはずなのに、全然着かねえ。

やっこの思いで着くと

「おお、イケるじゃん。ラカス」

手綱を渡した母親に褒められたけど、応える気力が無かった。掌はじつとりと汗をかいていて手綱の痕がくつきり残っている。

背中也服の触れる部分が濡れていて冷たい。

しかも、まだ汗が流れてるのが感じられる。

「これからもたまに頼むよ」

出来ることなら、本気で逃げ出したい。

何故僕がこんなことに挑戦しているかというと、母親が妊娠したのがきっかけだった。

ジャンヌが来た日、寝室に向かう母親の家族計画的発言が本当に実現するとは夢にも思わなかった。

「やっぱり気合いは大事だね」とは、母親の弁。単にタイミングの問題だろうけど、母親が言うところ、もしかして思ってしまうのが恐ろしいところ。

母親は、僕の時同様、ギリギリまで乗るつもりらしいのだけど、朝食の時

「ラカスが手綱を持てれば、あたしも楽出来るんだよね」

なんてことを、まるで今日は良い天気ね、みたいな軽さで言い出した。

祖母も流石に悩む素振りを見せたが

「ラカスなら大丈夫かもねえ、でも無理そうだったら、すぐに止めるんだよ」

結局、許可が下りてしまった。

僕なら、って期待し過ぎだと思っ。

だらんと余った部分に指をかけておくように、とだけ祖母は言った。まあ僕も強く断れば良かったんだけど、朝出掛ける時に、試しにと手綱を持つと、それを見た祖母が感きわまったように目頭を押さえ

出した。

そんな祖母を見てしまうと、なんかこう、良いところを見せてあげたいなあ、なんて思ってしまった。

祖父は

「泣きながら見送るやつがあるか」と苦笑い。

父親は、いつかの光景のように、お腹を抱えて蹲っていた。

この時期というのは妊娠が分かる時期らしくて、あちらこちらで妊娠したという話が聞けた。

ずっと以前に僕が授乳をもらった、早くに赤ん坊を亡くした奥様も妊娠したらしく、とても嬉しそうだったのが印象的だった。

「ラカスちゃんに、あげていたのが懐かしいわ」

笑いながら言う姿を見て、今度の赤ん坊は無事に産まれれば良いなあと思う。

母親のお腹はまだ膨らみ出してもないし、この世界では生まれるまで性別が分からない。

我が家では色々な思いが錯綜していた。

家系の流れから女の子が良い、とか、僕が元気にやってるからひよつとしたら、とか。

僕が生まれたことで、どうしても男の子が欲しいという思いは、そんなに無いみたいだった。

とりあえず無事に生まれれば良い。

そんな感じだった。

「ラカスはどつちが良い？」

母親に聞かれた。

「どつちでもいーよ、げーきなら」

正直な気持ちを言うと

「そうだな」

笑いながら顔同士を擦りつけるように抱き締められた。

「ラカスもお兄ちゃんになるんだからな」

最近、よく

「お兄ちゃんになるんだからね」

と言われる。

なんだろう、あんまり実感が湧かない。

僕は男だし、こういう、弟ができる、妹ができるという経験を、ちゃんと認識出来る年齢で直面したことが無いので、どうしたら良いのか分からない。

でも、ひとまず

「お兄ちゃん、ちょっと手伝って欲しいんだけど」

僕の呼び名は、決まったらしい。

なんか、すごいむず痒い。

## 兄（後書き）

帰ってきたのが遅かったので、投稿も遅くなりました。  
性別、どうしよう？

読んで頂いたことに感謝

馬（前書き）

まんま馬の話です



## 馬

母親のお腹は未だ膨らまない。

聞いたら、膨らみ出すのはもうちょっとしてから、と言われた。そんなもんなのか、と少し驚く。

相変わらず、道なりで良いところだと手綱を持たされる。

正直本当に恐くて仕方ないんだけど、祖母が泣きながら喜んでくれた映像が頭を掠めて、母親から渡される手綱を断ることが出来ない。多分、嫌だと祖母に頼めば、祖母が母親に言ってくれると思うんだけど、それだと、祖母の期待を裏切ってしまうそうで、言えなかった。

なんか、一度乗れてしまった以上、今更文句を言っただけで祖母をがっかりさせたくない。

見栄を張りたいっていうか、男の子の駄目なところだと思う。

そんな感じでビビりながらも、なんとかやっている、祖父から馬を貰った。

祖父は朝食の場で

「ラカスにプレゼントがある」

突然言われた。

誕生日でもないのに、なんだろう、と思いつつ、食べ終わり、祖父と母親に連れられて馬小屋に向かうと

「お前の馬だ」

まだ小さい子供の馬を見せられた。

「前に言っただろう、アンが乗ってる馬の妹の子だ、こいつが一番見込みがある」

誇らしげに祖父。

母親も嬉しそうに

「良かったじゃないか、ラカス」

僕の頭を撫でた。

僕は、僕だけのものという物を持っていない。

辛うじて、いつもしているペンダントがそうなのかもしれないけど。

「あんまり見せびらかさないようにね」

祖母に言われて、いつも服の下にあるので、はっきり自分の物だと他人にアピール出来る物は初めてだった。

そう思うと、じわじわと喜びが込み上げてきて

「ありあとー、じーちゃ」

拙いながらもお礼を言った。

「約束したからな」

祖父は照れくさそうに鼻を擦った。

「ほーら、お前の馬だ」

母親に抱え上げられ、馬の鼻先にぶら下げられた。

僕の物となった馬は、いきなり目の前に出された僕を興味深気に見てきて、匂いを嗅いだ後

「あー」

噛んできた。

祖父は笑いながら

「甘噛みってやつさ、ラカスに興味を持ってる証拠だな」

そう簡単に言うけど、洒落にならないくらい痛い。

とにかくじつとしていて、馬が噛むのを止めた時には、僕は完全に涙目になっていた。

母親は笑いながら

「泣くな泣くな、お兄ちゃんだろ」

僕を抱き締めあやすように軽く揺さぶった。

絶対、痛さとお兄ちゃんは、全く関係無いと思う。

以降、僕は朝に母親と出掛ける前と帰ってきてから、馬の前にぶら下げられた。

何度、甘噛みされたことか。

その度に、お兄ちゃんだからって、マジ意味分かんねえし。

馬のことは僕以外全員知っていたらしい。

祖母も

「良かったわねえ」

と目を細めた。

意外と父親も

「良かったな」

と言っていた。

反対するのかと思っていたら、別にすぐ乗る訳じゃないから気にしないみたい。

まあ父親が反対したところで何も変わんないと思うけどね。

というわけで、近頃僕に手綱を持たされる頻度が増えた。

「早くあいつに乗れるようにならないとね」

今までは、一日一回長い道なりのところくらいだったのが、道なりのところになると、長かるうが短かるうが、なるべく僕に持たせるようになった。

これが、もし馬を貰う前だったら、本気で祖母に泣き付いていたかもしれない。

でも、僕の為の馬を見てしまった以上、いつかアレに乗るんだという思いが湧いてきて、嫌だとはあまり思わなくなってきた。

そう考えると、僕をその気にさせる作戦だったんじゃないかと思えなくもない。

なんだけど、日が過ぎて行くうちに、僕が一人で馬小屋の中に入っ  
て行っても、僕の馬が僕が来たことを喜ぶ素振りを見せるようになってきたのを見ると、なんかもう、愛着が湧いてしまって、多少の

甘噛みは許してやろうという気分になるから困る。

「随分と気に入ってくれたみたいだな」

僕が、母親が出発前に準備している間、ずっと見ていると祖父が話しかけてきた。

「うん」

短い返事でも喜びは伝わったみたいで

「やっと祖父ちゃんも孫の為に何かしてやれたな」

嬉しそうに言うけど

「いまーでも、たくさんしてもらったよ」

本当にそうだと思う。

大体祖母や母親といることが多かったけど、2人だけに可愛がってもらったわけじゃない。

それに、祖母や母親を祖父や父親が支えていた面もあるだろうし。

「そうか、ありがとな」

ぼつりと、祖父が零した。

「ラカス、行くよ」

母親に呼ばれたので

「じゃあ、いってきます」

そう言うつと

「ああ、行ってらっしゃい、気をつけてな」

頭を撫でて、祖父も仕事を始めた。

馬（後書き）

祖父の話。

これ読んだ時点で、連載当初の祖父とのやりとりを覚えてる人って  
いなさそうだなあと思いつつ。（笑）

読んで頂いたことに感謝

文字（前書き）

れんとー

## 文字

最近、祖母や母親に子育てについて聞いてくる人が増えた。

聞いてくる人は以前からポツポツいたみただけど、妊娠中の人が多い時期なだけあって、コツがあるなら知りたい、という感じ。

聞かれる原因は、僕だった。

僕があまりにも泣かず、素直で大人しく振る舞うので是非に、と色んなところで聞かれるみたい。

でも、聞かれた祖母も母親も

「特にこれといって無いわよ」

育てた本人も分からないわ、と返していた。

「ドローラまで聞いてきたよ」

夕食時に祖母は疲れたように言った。

なんでも、ラツセルの家でも母親が妊娠したそうで

「おめでたいねえ」

と言いつつも、アドバイスを求められて

「困ったわ」

と溜め息をついた。

そりゃそうだろうな、と思う。

単に僕が赤ん坊としての態度を最初の時点で上手くとれず、そのままズルズルときてしまっただけなんだもん。

仕草とかは筋力の関係で割りと自然に出来てると思うけど、感情に関しては、他の赤ん坊のように、泣くという行為をしている自分を客観的に想像すると、あまりにも恥ずかしくて無理だった。

思い返すと、泣いたことが無かったんじゃないかと思うくらい記憶に無い。

かといって、それに気付いても今更泣けない。

「やっぱりメアリーの孫だものね」

「やっぱりアンさんの息子だしね」

大体最後はそれで納得された。

その納得の理由はおかしいし、納得させてしまうのもおかしいと思う。

何すりゃそんな評価を受けるんだか、逆に興味がある。

元々余所の子と比べて手が掛からないなあとは感じてたみたいだけど、こんな風にはつきり言われると、僕に一目置き出したらしい。

それが母親の、僕に手綱持たせても大丈夫、に繋がったようだ。

そして祖母が、僕なら大丈夫、とか言い出したらしい。

正直、そんな一目なら欲しくない。

ただ、面白いというかなんというか、同じ家に住んでいたが、僕にべったりでは無かった祖父と父親は、薄々僕が優秀なんじゃないかと思っていたみたいだった。

そろそろ僕に馬を、と言い出したのは祖父だったと聞いた。

「ラカス、僕からのプレゼントだ」

僕が母親と仕事を終えて僕の馬とじゃれた後、家に入ると、後ろ手に何か隠し、笑みを浮かべた父親がいた。

なんだろう、と思っていると

「ほら」

そう手渡されたのは絵本だった。

絵本は何冊かあって、渡された僕は抱えるように持った。

「ああ、今日届いたのかい？」

母親は父親に尋ねた。

知っていたらしい。

手渡された絵本は、角が潰れたり日焼けしていたが、装丁はしっかりとしたもので、とてもうちののような田舎ではお目にかかれそうに無かった。

僕の驚きを、喜びのあまりととっただらしい父親は自慢気。



「アンを通じてゼノビアさんに頼んだんだ、お下がりで悪いけどな  
そういえば、ゼノビアって既に子供がいるとは言っていた。

母親は僕の抱えてる絵本を見て

「そんなに送ってくれたのかい？一冊で良いって言ったのに」  
驚いていた。

「そうなんだよ。もう古くなったやつだからって」

「そうは言っても、あれっばちのお金で」

2人の話を聞きながら、やっぱりこの世界の本って高いんだと知  
た。

「多い分は送り返すよ」

母親は僕の腕の中から絵本を抜き取ると、そう言った。

そのまま、どこかに絵本を持って行こうとする。

それを父親が止めた。

「頼むよ、足りない分のお金は僕が出すから」

「そう言ったって、一冊分ですら、ゼノビアの好意でほとんど捨て  
値で譲ってくれたんだよ、それをこんな、まだ新しいのまで、あ  
んの小遣い何年分だと思ってるのさ」

母親はきっぱりと言った。

「分かってる、それは分かっているけど、ラカスにちゃんと知識をつ  
けたいんだ。僕と違って、ラカスは頭が良いから、ちゃんと勉強す  
れば、絶対将来の為になるから」

こんな風に母親に対抗するように話す父親は初めてだった。

「将来？ジェームズの見立てじゃ、当てにならないね」

「信じて欲しい。ラカスは絶対に」

父親はそこでちらりと僕を見て

「僕と違って、将来偉くなれる」

言い終わると、母親と父親は無言で見つめ合う。

僕は、ハラハラしながらそれを見ていた。

初めて、喧嘩じゃないけど、互いに言い合っている両親を見た。

「良いさ」

母親が先に折れた。

「ジエームズがそこまで言うんだ、信じるよ」

「ほ、本当か？」

母親は軽く微笑んで父親の質問に肯定し、絵本を僕に渡した。

「ありがとう、ア」

感謝の言葉を言いながら母親に近寄って行った父親は、お腹を殴られ、呻き声と共に崩れ落ちた。

「ただ、口答えしたのはムカつくから殴らせな」  
完全に殴った後だった。

その夜から、僕は家に帰ってから夕食までとか、寝る前に月明りで父親に絵本を読んでもらうことになった。

本の代金については、母親が手紙を送ったところ、すぐに返事が来た。

今現在いる子供はもう読まない本ばかりなので、次の子供が生まれたら返してくれば良いとのこと。

つまり、数年貸すということだった。

貰ったお金はレンタル料扱いにしてくれるみたいだった。

これには、払うと言っていた父親は胸を撫で下ろしていた。

追伸として、何年かしたら、僕が手紙を僕の手で書いて送って欲しいとあった。

何故だろうと思うけど、それが、幾らか分からないけど、お金の代わりになるなら安いもんだと思う。

父親は若い頃、商会などで働きたくて中央に出たことがあるそうで、読み書きの知識は我が家で一番だった。

この世界の文字は、一音一語ではなく、英語のような形らしい。他の言語のように、男女や人称で形が変わらないのが救いだ。

それに絵本の内容自体は簡単だから、1度聞けば話をなんとなく覚えられた。

初めて知る知識が面白くて、しばらくの間、父親にまわりついていた。

そうになると、明らかに不機嫌になるのが2人。

祖母に関しては、父親に聞かされた絵本を持って行き、膝に座って絵本を読み、たまに朗読するという行為で凌いだ。

まだちゃんと喋れないけど、多分、内容はどうでも良いんだと思う。僕がお祖母ちゃんの為に読んでというのが良いみたい。

母親に関しては、まあ一応納得したはずなんだけど、たまに父親に八つ当たりしたり

「あたしの息子なら出来る」

そう言っつて、手綱を完全に僕だけに持たせたりした。

とりあえず、もうしばらく、母親の八つ当たりは続きそうだ。

## 文字（後書き）

今度は父親の話です。

男性陣とカテリーナの立ち位置が似ている、と感想を頂きました。実際、そのつもりで書いてますけど、父親とカテリーナの違いを出したくて。

何日か空けたことがあったので、連投。

さすがにチェック甘いし、荒い気がするので、明日以降に。

それと、ゼロ魔で日常生活で使われている文字について知っていることがあれば、教えて下さい。

お願いします。

読んで頂いたことに感謝

## 道案内

暑くなり始めた頃、カテリーナから手紙が来た。

今年の夏は、今度は本当の、特別講習があるので帰って来れないぞうだ。

なんでも、ジャンヌが直々に教えに行くそうなので、

『もう二度と会えないかもしれないのです、娘の、妹の一生のお願いです、お母さん、お姉ちゃん、ジャンヌさんを止めて下さい。一生のお願いです。』

母親は声に出して読むと

「だつてさ、母さん」

母親の対面に座っている祖母は

「死にやしないだろうよ」

お茶を啜りながら言った。

母親も同意見だったみたいで、手紙を封筒に入れ直して置くと、横に座っていた僕に

「そろそろ大丈夫だろ、フーフーしながら飲みなね」

目の前に置かれたお茶を飲む許可を下した。

正直、色々聞きたいことはあったが、この家に慣れた僕は何も聞かず、お茶に息を吹き掛け始めた。

ベテランの祖父と父親は、何も聞こえなかったようにお茶を味わっている。

多分、大変な目に会ってるんだろうカテリーナには申し訳ないが、僕は平和な日々を送っている。

朝起きて、朝食、僕の馬に挨拶をして母親と仕事に、帰ってきて、また僕の馬に挨拶、父親に絵本を読んでもらい、夕食、また父親に

読んでもらうか、父親が母親に八つ当たりされてる場合は祖母と絵本朗読、そして就寝。

雨の日は、祖母と店番してたり、セシルやドーラが来たりして、連れてこられたミランダやラッセルと遊ぶ。

本当に平和な夏を過ごしてたなと我ながら思う。

夏が終わり、秋。

収穫の時期になると、例年通り収穫物を中央に売りに行く。

僕は、てつきり、今年は母親は行かないもんだと思っていた。

なにせ妊娠してるし。

しかし僕の予想に反して、普通に母親は馬車周りを囲む馬の内の一頭に乗っている。

流石に止めた。

だって、妊娠してるんだよ。

「だーめー」

僕は産婦人科の専門知識など持ち合わせてはいないが、これは明らかに止めるべきことだと判断した。

母親も、僕と一緒に見送りに来てる祖母も、困った顔をしながら説明してくれた。

どうやら、年貢を納める契約で誰が持つてると決まっているらしい。

一応、いつもは母親1人で領主のそこに行くのだけど、今年は用心して数人連れて行くそうだ。

なら、安心、はしないけど、納得というか、なんというか。

まあしょうがないのかな。

「心配するな、あたしは無事に帰ってくるから」

抱き上げられ、頬にキスされた。

そして、

「じゃあ、行って来るから」

母親は例年と変わらず先頭きって走り出した。

馬車が出て行くと、終わった、と和やかな空気になる。

帰り道、ふと、中央ってなんていう名前か気になったので、祖母に聞いた。

「中央っていうのは、トリスタニアって言って、私達が住んでるここはトリステイン王国。トリスタニアはその中で一番大きい街」

ラカスにはまだ難しいわね、と言われたが、本気でサツパ知らねえ。何、トリステインとかトリスタニアとか。

風の谷ぐらいしか知らないよ。

不思議がる僕を

「ラカスにはまだ難しいみたいだね」

祖母は笑いながら見ていた。

翌日、外は晴れているけど、母親は出かけているので、僕は遊びに来たミランダに絵本を読んであげていた。

ラッセルは、駄目だ。

あいつ、すぐに破こうとしゃがったから。

一つの椅子にミランダと並んで座り、僕が読みながらページをめくっていく。

ミランダは文字が読めないので、大人しくそれを聞いている。

「仲がいいわね」

「本当にね」

祖母とセシルが、そんなことを言いながらお茶してた。

そこに

「ちよつとメアリーさん」

近くの奥様が走り込んで来た。

「どうしたの、そんな慌てて」

祖母が聞くと、どこかの奥さんが倒れたそうので、旦那がちよつと遠くの村に数日泊まりで仕事らしい。

呼んで来てもらえないだろうか、と頼まれた。

祖母は、すぐに了承し、祖父に僕と店番を頼むと馬に乗った。それを、僕と祖母、セシルとミランダ、頼みに来た奥様が見送ろうとする。

が、さて、というところで、祖母の動きが止まった。

どうしたんだろう？

不審に思っている

「しまった、道が自信無いわ。あんた、分かるかい？」

頼むに来た奥様は首を振った。

「アンドイは？」

「大体の方角は分かるが…」

「そうかい」

祖母の視線が、祖父から下りて、僕に来た。

が、質問はされなかった。

まさかな、と思ってるんだろう。

「ぼく、わかるよ」

そう言くと、祖母を含む皆が驚いているのが分かった。

祖母は笑い

「流石、私の孫だ」

僕は馬に乗せられた。

祖母の乗っていた馬の鞍は僕が知ってる形で、祖母の足の間に僕は置かれた。

祖母は道を知らないわけではなく、単に長い間行っていなかったせいなので、最初の二つ二つの曲がり角を僕が指差すと、

「あー、そうそう」

後ろから、思い出した、と声。

それでも、何故か曲がり角や三叉路になると僕に聞いてきた。



祖母は正解を分かっているようなので、僕を試しているんだと思う。聞かれた以上、答えるけどさ。

一度も間違えずに答え、村に着き、旦那さんに知らせると、旦那さんは慌てて仕事を止め、祖母の後ろに乗り、町に戻った。

町の入口に着くと、頼んだ奥様が待っていて、旦那さんを連れて行った。

家に帰ると、セシル達はもう帰っているし、夕食を作る時間まで少しあるということなので、放牧地の柵内で祖母から馬の操り方を教わった。

「歩かせる時はこうやってね」

祖母にスッポリと抱き抱えられるようにして手綱を持つ。

普段の母親が使う鞍だと、こういう教わり方が出来ないのですごく面白い。

ただ、力が無いせいで馬がちゃんと反応してくれないんだけど。

祖母は僕の様子を見て

「筋がいいよ」

言いつつも笑ってた。

数日して、母親は無事に帰ってきた。

数日間の仕事を終えた母親は

「まだもうちよつと大丈夫そうだね」

そう言いながらお腹を擦る。

でも、僕が活躍したことを祖母が嬉しそうに報告すると

「あたし、もうしんどいから、座ってるだけにしようかな」

目に悪戯色をちらつかせて、からかうように言ってきた。

それは、幾らなんでも無理でしょ。

## 道案内（後書き）

夏は、特に何も無いので、さっさと秋でした。

ただでさえ展開遅いので。

個人的には、本当に話の展開に絡まない、なんでもない日常も書きたいんですが、流石にそこまでやってられないなあと。

それと、主人公が平民のゼロ魔二次があつたら教えて下さい。

パクリは絶対しませんが、貴族との距離感の縮め方の参考にしたいです。

読んで頂いたことに感謝

嫌なやつ(前書き)

間が空いてしまい、すみません

## 嫌なやつ

秋の収穫物を運んでから、少しして、母親は仕事を休むようになった。

その少しの間、母親は祖母から聞いた話を確かめるように、僕に「次の村への道順を指示してみな」

そう言い、実際に母親は一切口を挟まず、僕が

「つぎ、こつち」

「あそこ、あつち」

と、指で示して、示した通りに母親が馬を走らせた。

僕が間違えることは無かった。

ほぼ2年間、毎日のように母親と一緒に回っていたのだし、幾ら看板などの目印が無いとはいえ、村の近くの道は多少太くなっていたり踏み慣らされていたりする。

母親は僕の結果に満足したようで、休むことに決めた。

どうやら元々、そろそろとは考えていたみたいだった。

近いうちに祖母と交代をするつもりだったらしいのだけど、母親の代から行くようになった村もあるので、引き継ぐために、祖母の代わりの店番としての父親が割合暇になるこの時期を待っていたらしい。

そこで、僕の先日した道案内。

「出来るなら、早く言えばいいものを」

母親に軽く怒られた。

だって、その話知らなかったもの。

理不尽だと思う。

結局、僕が道案内して祖母と週に三日程仕事に回るようになった。

本来の仕事を休みになった母親は、宿屋の仕事を手伝うことになったのだけど、あの性格で大人しく店番をしてるわけもなく

「じつとしてるんだよ」

ちよつど良いとばかりに、僕の馬の調教を開始した。

まず、僕はほとんど荷物として座らされる。

一応いざという時のために僕の横に母親が歩き、祖父が手綱を持ってゆつくりと馬を歩くのを促す。

歩きながら馬は、初めて感じる重さに激しく耳を動かしキョロキョロと周囲を窺っていた。

しかも、最近つけたはみも気になるようで、常に口元がもぞもぞ。

本当なら、馬の調教も始めるには少し早いらしいし、人を乗せるのも早いらしい。

始めは荷物を乗せて慣らしていくそうなんだけど、僕が軽い上に、僕を乗せるということを馬に早く覚えさせるためだそうだ。

もし貸し馬や他から預かっている場合なら、こうして1人に慣れさせ過ぎるのは駄目なのらしい。

「いいの？」

僕は気になって聞くと

「こいつはラカスの馬だからな」

前を歩く祖父が言った。

「お前の相棒になるんだからな、大切にしろよ」

横の母親も。

ふと、もし僕がこいつに乗れなくなる状態になったらどうするんだろつと疑問が湧いた。

でもすぐに、だからかと、思い当たった。

そうならないように願掛けの意味もあるんだろうな。

そう思うと、僕が跨がっているこの馬の存在がとても愛しく感じられる。

僕がいなくなれば、お前もどうしようもなくなるんだな。

頼むぜ、相棒。

ポンポンと軽く叩くと、途端馬は嘶いた。前に行く祖父も僕の横を歩く母親も突然の嘶きに驚いていた。でも、僕にはなんとなく「お前こそしつかりしろよ、相棒」そう言われた気がした。錯覚かも知れないけどね。

しばらくやっていると、不安そうだった馬の方も慣れてきたみたいで、耳の動きや周囲を窺うのが穏やかになった。そして、慣れるにつれ

「ラカス、落ちるんじゃないよ、堪えな」  
たまに急に暴れやがる。

「今、落ちたら馬にナメられるからね」  
僕は試されているらしい。

隣りに控える母親に助けられることも何度かあったけど、落ちることもある。

馬自体の体高は子馬なので無い方なんだけど、僕の体格からするとやっぱり高い。

落ちれば痛い、すげえ痛い。

一応、地面が掘り返されたような場所でやってるから、普通の地面よかマシなんだと思うけど、鈍い痛みがスローモーションみたいに体を通っていく。

「ラカス、大丈夫か」  
「大丈夫かい、ラカス」

落ちる度に、祖父や母親は心配してくれる。だけど2人の向こうに見える馬が、僕を小馬鹿にしているような、呆れているような目で見てきやがる。

まるで、がっかりさせんなよ、と言ってるみたいで、こっつ、負けず

嫌いの血が騒ぐ。

この野郎。

「もう終わりにしようか」

止める母親の手を押し退け、再び鞍に乗ろうとする。

何度も落とされ、体中に痣を作ったせいで、流石の祖母も

「無茶させて無いだろうね」

珍しく母親を問い詰めていた。

僕が馬の練習をしていると、ミランダとラッセルが祖母に連れられて遊びに来たことがあった。

ラッセルは僕が馬に乗っているのを見て、やりたいと言い出した。

祖父が他の馬を連れてきて祖父とラッセル2人で乗ろうとすると、

ラッセルは嫌がった。

僕のように、1人で乗りたいようだった。

「まあラカスと同年だけど、体格は良いから」

母親は多少悩みながらも、ラッセルを僕と同じ条件で乗せてみる。

すると、馬は初めて乗せた重さに驚いたのか、暴れに暴れた。

ラッセルは落とされ、泣き出した。

馬は落としたラッセルを見た後、首を回して周囲を見回し始めた。

首は僕に向けられると、ピタリと止まる。

そして嘶いた。

お前以外は嫌だ、と言っているようでもあるし、さっさと乗りこな

してみせろ、と言っているようにも思える。

全く嫌なやつだ。

でも、けして嫌いじゃないんだよなあ。

2人が遊びに来たし、ラッセルが泣き出してしまったので、その日の練習はお終いとなった。



馬は、祖父に連れられて馬小屋に戻されることになった。  
去り際、ちらりと僕を見て、鼻で笑って行った。

やっぱり、お前本当に嫌なやつだ。

嫌なやつ（後書き）

最近、書き始めるのが遅くて、その日のうちに完成しなくて、投稿が滞っていてすいません。

しかも、無理に纏めようとして荒くなっている気も…。

違和感とかあったら言ってお下さい。

読んで頂いたことに感謝

意地と誇りよ（前書お）

この小説らしいと言えたらいい…かも

## 意地と誇りと

僕の練習、というか、最初は馬の調教だったはずなんだけど、もはやそんなのどうでもいい。

僕とあいつの意地の張り合いは続いている。

あいつは本当に嫌なやつだ。

この前なんか、途中まで軽く暴れて僕に堪えられると油断させた上で、大暴れしやがった。

あん時の、引っ掛かってやんの、っていう馬鹿にした顔したら無い。今、思い出しても腹が立つ。

立つんだけど、馬肉にしてやろうか、とは思えないんだよなあ。

僕の感覚だけど、あいつは意地悪してるんじゃないかと、

「俺に認められてみる」

そう言っているような気がしてならない。

実際、どんなに僕を落としても、あいつは僕が跨がる権利を奪わない。

馬にナメられると、乗せることすら嫌がるのだと祖父が言っていた。

「不思議なもんだ」

祖父の言葉を受けて

「そういう意味じゃ、あんたを認めてるのかもね」

母親はそう、僕に言う。

だとしても、

「今日は、これぐらいにしとこうな」

毎回宿めるように練習の終了を告げる祖父の向こうで、毎回鼻で笑うあいつを見ると、もう言葉にならないぐらいの腹立たしさが沸く。あいつにもだけど、自分にも。

もう本当に無力なのが腹立たしくて腹立たしくて。

「泣くぐらいなら、次どうやったら上手くいくか考えな」

度々母親に言われた。

「もう止めてちょうだい」

とうとう祖母から申し立てが入った。

無理も無いと思う。

僕の体は服を捲ればどの部分にでも痣がある状態だった。

多分これが、将来の為とか形の無いものの為だったら、ここまでやらなかったかもしれない。

人間は当てが無いままでは歩き続けられない。

遠い目標に対して、いつまでも同じ気持ちを持ち続けられない。

僕は、自分が恵まれていると思う。

母親と一緒に馬に乗っていて、母親みたいになりたいと自然に思えたこと。

そして、常にその理想が身近にいること。

あいつが、認めたくないけど、僕を気にかけてくれているのが解ること。

あいつが、頭にくるけど、僕にどんな形であれ、やる気を出させていること。

なにより、目標が目の前にいるってこと。

すんなり乗れていたなら、こんな風になるまで乗らなかったと思う。

そんな幸運のお陰で、投げ出さずにやってこれただけけど、祖母から見ると、僕が痛々しくて仕方が無いみたいだった。

夕食の場では僕は意地を張ると判断したようで、祖母と2人で仕事に回る間に、止めて欲しいと頼み込まれた。

「アンになら、私から言うから」

今にも涙が落ちんばかりの表情で言われては、僕に意地を張ることは出来なかった。

どんなに早く乗れるようになっても、祖母のこの表情を無くすことは出来ないのだと思うと、あいつへの意地より、祖母への心の痛み

が勝った。

「うん、そうする」

僕の言葉に、祖母は安堵の笑みを見せ零れた涙を拭った。

仕事が終わって家に帰ると直ぐ、夕食の前に、僕は自分の口で母親にしばらく練習を止めたい旨を伝えた。

「ふーん」

母親は、ちらりと料理を作っている祖母の後ろ姿を見たが、何も聞かず

「構わないよ」

多分、大体の流れは分かっていると思われた。

「ごめんなさい」

なんとなく謝ってしまった。

「謝ることじゃないだろ」

そう言われた。

それと、もう1人。

僕の馬。

仕事の翌日は休みなので、いつもなら馬との勝負はずなんだけど、今日は違う。

母親にお願いして、謝る為に来た。

あいつは、来たか、とばかりに鼻息荒く嘶いていたが、僕達がいつものように、乗る準備を始めないので、段々嘶きが小さくなった。

僕が、どう言ったら良いものか考えながら、言い淀んでいると、

「すまないな、しばらくお前に乗らないんだ」

母親が代わりに言った。

馬は、何言ってるんだと首を下げて、僕の鼻先に頭を持って来た。

真っ黒な目が、僕の心の底まで読み取るうとしているのではないか

と思っってしまうくらい、じっと見てきた。

「ごめんなさい」

僕は頭を下げた謝った。

このままの状態が続けば、何でこんなことを言い出したのかまで知られてしまいそうな気がした。

それは、僕と馬の勝負の中に、意地とか誇りとかとは違う価値観が入ってしまうことのような気がする。

次、僕が勝負を挑む時、正面から挑めなくなっている。

そんなのは嫌だった。

僕が頭を下げたまま、馬が離れるのを待つと、強く頭を叩かれた。

突然の痛みで頭を上げると、柔らかくて又メ又メしたものが、顔を撫でていった。

目の前で仕舞われるのを見て、舌だったと知る。

そして、一度天を仰ぐようにして嘶いた。

僕が呆気にとられているのをよそに、一瞥してクルリとこっちに尻を向けて座り込み、首を丸めて眠るような態勢になった。

尻尾だけがパタパタ振られる。

行け、と言っているみたいだった。

「行こうか」

母親に促され、馬小屋を出て行こうとする。

「分かってくれたさ」

母親は言い、僕もそう感じた。

馬小屋を出ると、中から堅いもの同士がぶつかったような大きな音が響いた。

結構大きな小屋自体が震えた気すらしたほどだった。

「まあ、お前のこと気に入ってたみたいだからな」

母親は、しばらく僕が乗れないことに対して不満があるんだろうと思ったみたいだったが、僕は違う。

「ここで待ってるからな」

そうアピールされたような気がした。

ありがとう。

僕も言葉にはせず、腕にある痣を撫でながら思った。



## 意地と誇りと（後書き）

普通だったら、馬に認められる展開じゃないだろうか、と思いつつも。

話の流れにあってるでしょうか？

間が空いた分、感じが変わってるかも、です。

そういえば、総合評価が1000を超えてました。

感想も嬉しいです。

改めて、読んで頂いたこと、ポイントを入れて頂いたこと、感想を頂いたことに感謝

妹（前書き）

タイトルから察せられる通りです。

## 妹

窓の外に見える木々には枯れ葉が辛うじて、2枚3枚。完全に冬になったなあ、と感じる。

馬に乗るのが祖母との仕事の時ぐらいになったので、寒さにごこえることが無くなったのは、良いことなのかは分からないけど。

やる事が無くなったので、今の時期割合暇な父親と絵本三昧の日々。

文字を読むことは、ほとんど問題無くなったので、父親と2人して裏庭で地面に枝で絵本の文字を書いたりして過ごしてる。

ただ、ずっとそんなことしてても飽きるので

「ほら、お馬さんだぞ」

父親と落書きを始めた。

「いぬ」

小石混じりの地面に柔らかい枝では、ぐにゃぐにゃした絵にしかないが

「上手い上手い」

と褒められた。

絵心が無いのは自分でも知ってるので、父親も本気で言っていないのは分かってるけど、なんか気恥ずかしいような、照れ臭いような。

「ぼくのいえ」

「お父さんは、猫さんだぞ」

なんてやってると

「何してるんだい？随分と楽しそうだね」

母親が来た。

父親は僕の描いた絵を示し

「これ、ラカスが描いたんだよ」

自慢気に。

僕も、紹介してくれた父親にお返しのもりで

「これ、おとーさんがかいたの」

そう言うと、母親はフンと鼻を鳴らし

「あたしにも描かせな」

母親も僕らの横にしゃがみこみ、がりがりど。

「どうだい、お馬さんだよ」胸を張り、さも上手いだろ、みたいに言ってるけど

「ま、まあ、アンらしい絵だな」

「そ、そーだね」

特に、感想は言わない。

なんていうか、自由奔放をテーマに描いた感じがする。

「だろ」

母親は満足そうに笑う。

僕らの感想を良い方に取ったらしかった。

「ほら、ラカス描いて欲しいものがあつたら、言ってみな」

「じゃあ、いぬ」

「任せろ」

がりがり。

「ねこ」

「簡単だな」

がりがり。

「ふふん」

自慢気に描いた絵を見比べる母親。

僕の目では、二つは同じ絵にしか見えない。

どっちが犬なんだろう。

父親も、同様に困惑してるのが見てとれた。

「ラカスは、どっちが好きだい？」

正直、聞かれて困った。

だって、そもそもどっちがどっち？

「こっち」

適当に指差した。

「ラカスは、犬が好きなんだね」  
僕が指した方が犬だったらしい。

なんてことやってると

「アン、何やってるのさ」

祖母が祖父を連れて、来た。

「ご飯だから呼んできてって言ったのに、何あんたまで一緒になつて」

言われて、母親はハツとして

「ごめん、つい」

祖母に謝った。

「何してるんだい？」

祖母が僕らの手元を覗き込む。

何をしてるか分かった祖母は

「あらあら、上手ね」

僕の横にしゃがみ

「これはお家かな」

「そう」

祖父も上から

「実物より立派だな」

と笑う。

そんなことをしていて、その日の昼食はいつもより遅くなった。

まあそんな感じで仲が良い家族なんだけど、数日前に家族が増えた。前々から、あまり出歩かないように、と言われていた母親だったが、朝食の後片付けをしている最中に産気づいた。

この時代に産婦人科なんて無く、産婆もいない。

ただ、単に赤ん坊を数多く取り上げたというお婆さんと近くに住む奥様方数人、それと祖母が一部屋にこもり、出産の準備を始めた。

こんな時、僕を含め男性というものは、一体どうして良いものやら皆目見当もつかず、呻き声をあげる母親の周りをウロチヨロして「邪魔だよ、どっか行ってな」と追い出された。

妻の出産は祖父は勿論、父親も経験したことあるはずなのに、なんだろうね、この場の全員感じている気がする、このもどかしい感じ。何か手伝いたいのに、待つてるしかないっていう状況が続く。

祖父も父親も仕事があるんだけど、行かず、ひたすら玄関前をウロウロ。

時々、家から出て来る奥様に中の様子を聞いたりして落ち着かない。そういう僕もじっとしてられず、したいわけでもないのに、道端の落ち葉を寄せてみたり、それをまた散らかしてみたり。

昼を過ぎた頃、祖母がお客さんの為に料理を作りついでに僕らの分も作ってくれたがとても食欲が湧かなかった、焦れている僕らの耳に泣き声が届いた。

僕は父親の小脇に抱えられるようにして、部屋に向かう。

「生まれたか」

僕らが部屋に入ると、ベッドに横たわる母親の隣りに、布で包まれた小さいもの。

「元気な女の子だよ」

取り上げたお婆さんは父親に

「ほら、奥さんになんか言っちゃんなさい」

と服を引っ張り、母親の近くへと促した。

父親は深く呼吸し

「良く頑張ったな」

父親の後ろ姿は微かに震えていて、泣いているのだと分かる。

「当たり前だろ、あたしを誰だと思ってるのさ」

内容はいつもの母親だったが、弱々しい言い方だと感じた。

「こいつにも言っちゃって。こいつも頑張ったんだから」

母親は隣りで包まれていた赤ん坊を母親の手ずから受け取ると

「良く生まれてきてくれた。ありがとうな」  
軽く抱き締めた。

「ラカス、おいで」

僕も母親に呼ばれ、祖母に支えられながら抱かせてもらった。  
まだ小さい僕より、遥かに小さい。

これまでは、お兄ちゃんと言われても、あだ名くらいにしか思えなかった。

それが実際に抱き抱えると、背中に震えがくるくらい、嬉しい。

これが、血の繋がりと云うんだらうか。

むにやむにや動く顔が愛しい、呼吸に合わせて動く胸元が愛しい、  
見える小さな指が開いたり閉じたりするのが愛しい。

生きてる証し全てが愛しい。

「よかつたねえ」

言っただけの思いは一杯あるのに、言葉に出来たのは、それだけ  
だった。

祖父に渡した後も、腕に残る重さの感覚がくすぐったい。

「ラカス」

そんな僕を母親が呼んだ。

見ると、僕の行動を見ていたようで、にまにま。

「あいつを一番長く守ってやれるのは、お前だからな」

僕は見られたことに恥ずかしさを覚えながらも

「うん」

はつきり言った。

「頼むよ、お兄ちゃん」

母親は、満足そうに笑った。

## 妹（後書き）

感想で、妹が良いと言って頂いたので、妹に。

馬の話が長くなってしまったなあと今更ながらに反省しています。

そういえば、なろうの交流サイトというものを昨日見つけたんですが、その中の評価をしてくれるというコーナー？で、

段落頭の一段落としやら、…や の使い方が出来て無いものは読むに値しない

とか言ってたんですが、正直読み辛いですか？

設定の仕方がわからないので、一段落としはやってないんですけど。

や…は、あんまり使って無いですし、擬音もあんまり使わないようにしていますし。

使い方が良く分かんないので。

その辺の感じ方と言って頂ければ、あんまりにも読み辛いようでしたら改善したいなあと思いますので。

読んで頂いたことに感謝



夜泣き（前書き）

タイトル通りです。

## 夜泣き

妹はナージエジダと名付けられた。

なので、家族はナージエと呼ぶ。

女の子だったので、僅かにがっかりした様子を見せたが、無事に生まれ、まれたことを皆で祝ったし、町の人もお祝いを言いに来てくれた。中には

「ラカスももうお兄ちゃんなのね」

と、僕に声を掛けて行く人もいる。

その僕は、初めて抱いた感触が忘れられず、ちょっとした機会をみても母親のいる部屋に忍び込んでいた。

母親も心得たもので

「お兄ちゃんだぞー」

ベッドの隣りに置かれたベビーベッドからナージエを抱き上げ、僕に見せてくれる。

それによってウトウトしていたらしいナージエの目が薄く開いた。

僕と目が合う。

途端、驚いたのか、ナージエは泣き出した。

母親が、よしよしとあやし始め、僕は部屋から逃げ出す。

毎回そうだった。

そして、毎回、良かったと思う。

何故僕がこの世界に来てしまったか分からないけど、来てしまった以上仕方無いと知っている。

赤ん坊として、子供として振る舞ってきたけど、ちゃんと出来ていたかという、出来ていなかった気がするのが本音。

親に手を掛けさせないのも良いことだけど、掛けさせるのも親にとっての喜びなんじゃないかな。

また僕みたいなのが生まれたらどうしようと思ってたけど、泣くのを見る限り普通の赤ん坊のようだから、僕に出来なかったことを両

親にさせてあげて欲しいと思う。  
ただ、娘というのは父親にとって、息子とは違う存在のようで、既にデレデレになっていたけど。  
僕も可愛いなと思って見ている。

などと考えていたんだけど、すぐに後悔した。  
夜泣きつて、本当に夜鳴きつて感じたかった。

両親、僕、ナージエで寝ているんだけど、夜中に何度起こされたことか。

しかも僕らだけならまだしも、部屋の位置関係の問題で、お客さんにも聞こえたらしい。

その場で謝り、翌日改めて謝り、すぐに両親の寝室を一番奥の部屋に移動。

僕も気を使われ、祖父母と寝ることになった。  
環境が変わって寝れないとかないかしら、と祖母は気にしていたが、僕は別に気にしない。

口ではそう言いながらも、祖父母は僕と寝れることを喜んでいように見えた。

ナージエは母親と離れることを嫌い、母親の姿が見えないと直ぐにぐずる。

多分それが普通のことなのだろうが、最初に生まれたのが僕だったせいで、母親は勝手の違いに戸惑っていた。

母親とカテリーナの2人を育てた祖母は割りと早い段階で順応しているようだった。

「あんだだつて、こんな感じだったわ」  
当手を思い出しながら、夜泣きの為に寝不足気味の母親を助けていた。

生んだら、即仕事復帰を考えていた母親は、もうしばらく無理、と判断した。

その方が良いと僕も思う。

母親の目の下には常に隈がある状態だというのに、馬に乗るなんて危険極まりない。

昼間、母親が寝不足を補う為に昼寝をしている間、僕と祖母がナージエをみてることになった。

母親と同様に起こされる父親も多少の仮眠をしつつ、そろそろ春の準備を始めなければならぬので午前中には家を出て行く。

ナージエの相手を出来るのは、僕と祖母だけなんだけどね、さすがに子供を生んだ経験のある祖母は突然泣き出すナージエを上手いこと泣きやませるのに対し、一方の僕は、祖母の手の離せない時とかにナージエと2人つきりにされると、もうどうしたら良いのか分からなくて完全に持て余している。

いないいないばあ、とかやってみるんだけど、一度泣き出されてしまうと困り果てるほかない。

急いで祖母を呼びに行く一手しかなかった。

たとえ、一日の大半眠っていても合間の少ない起きている時間を泣かせないようにと構い続けるのは結構大変な労働で、それだけでヘトヘトになった。

加えて、また馬の練習をしても良いと祖母の許しが出た。

一応、せつかく馬に僕を覚えてもらったのだからと、朝夕に変わらず馬小屋に顔は出しているものの、乗りたいと口にしたことは無かった。

「お祖母ちゃんだって、そりゃ気付くさ」

祖母は、僕が馬の話題を出さないようにしていたことに気付いていた。

話でも馬の話題にならないようにしていたし、父親と度々落書きした時も、父親から話が行かないように馬の絵は描かないようにした。

祖母に気を使わせるのも嫌だったし、僕自身乗りたいという気持ちが無くなったわけじゃない。

なんとなく、触れたくない話題だった。

「幾ら小さくたって、お前だって男なんだものね」  
困ったもんだね、と苦笑い。

そんなこともあり、再びの挑戦を始める。

今度は母親がいない、が代わりというか交換条件なのか、祖母が僕の時と同じように毛布に包んだナージエを連れて見学をすることになった。

相変わらず簡単に乗らしてくれる程素直な性格をしていない僕の馬は、あの手この手で僕を落とそうとしてきやがる。

だけど、こつちもすんなり落ちてやる程優しい性格をしてるつもりはない。

この乗れない間、どれだけ今までのフエイントの掛け方を思い出し、対処法を考えたことか。

堪える度に祖父母から、良いぞ、だの、頑張れ、だの聞こえる。

ナージエは我が家の血をひいてるだけあり、馬を気に入ったみたいで、見学に来てる間はじつと馬を見ていて泣き出すことがないのがあるがたかった。

でも、何故か僕が落とされるとナージエは楽しげな笑い声をあげる。僕が何かお前にしたか、と思ってしまう程、毎回僕が落ちる度に。

それが癢に触るお陰か、笑われまいと大分堪えられるようになった気がしないでもない。

ナージエの面倒に馬の練習、たまに祖母との仕事で毎日ぐったりとなりベッドに入れば、あつという間に睡魔に襲われ簡単に負ける。お陰様で、気が付けば朝で夜泣きをここしばらく聞いた覚えが無いや。

それぐらいぐっすりと眠っているみたい。

翻って、いつも寝不足気味な母親は大変そうだ。

だけど、これも僕が体験させてあげられなかったことの一つなんじゃないだろうか。

僕に分までナージエには母親と、後々にあの時は、みたいな良い思い出を一杯作って欲しい。

## 夜泣き（後書き）

馬の話は、ちょっとキャッチーでコメディーな展開を目指したんですが、無理でした。

反省。

これからは、普通にやっています。

読んで頂いたことに感謝

祭日（前書き）

恋バナ



## 祭日

会話に祭りという単語が忍び込み始めた。

祭りが終われば、本格的に春に向けて動き出す。

それなのに、母親とナージエは相変わらず。

いや、ナージエの起きてる時間が少しずつ長くなっている分、母親はさらにキツくなっているかもしれない。

傍から見ていても、ストレスが溜まっていくのが分かった。

僕のせい、かもしれない。

母親は、最初明らかに僕を基準にナージエを見ていた。

その後、僕とナージエは違う、と母親が気付いた時には、既に色々なものが転がっていつてしまっ、どっちに向かって歩き出せば良いのか分からない。

そんな風に見えた。

僕は出来る限り、とは正直言えないや、僕だって慣れない状況に戸惑い怖じ気付いた。

祖母も協力していたけど、なるべく母親に経験をさせようとしているように見えた。

祭りの日。

去年と同様に午前中、祖父母と共に料理を広場まで運んだ。

広場には、ドーラとセシルがいて、ラッセルとミランダがいる。

「お疲れ様」

と会話を交わすのもそこそこに、祖父を残し僕らはその場を引き揚げた。

僕ら子供は、セシルに連れられセシルの家に、祖母とドーラは一度家に帰り、それぞれ生まれたばかりの孫を抱き抱えセシルの家に。

それぞれの息子娘夫婦を祭りに行かせる為だった。

ドーラは既に旦那が亡くなっているの、ドーラ1人で孫2人の面倒をみきれない、我が家は宿屋で万が一にも騒げない、結局セシルの好意に甘えることにしたそう。

いつそ行かなければ良いのに、と思い祖母に聞くと、そういう訳にはいかないらしい。

祖母曰く、町の人全員が何らかの役目を持っていて、それぞれが役目を果たさなければならぬそう。

祖母が料理を作るのもそうだし、祖父も今頃は準備を手伝っているらしい。

そして、祭りに参加し踊るのは母親達の役目。

どこの世界でも、祭りというものは、単なる娯楽で済まないのだと知った。

それはそれで母親が楽しむ時間があれば良いと思う。

ミランダは初めて接する自分より小さい子供に興味津津で、ナージエとジェーン、ジェーンはラツセルの妹、をためつすがめつしつつ頭を撫でたり抱いてみようとしていたりしている。

多分、ミランダは単に可愛いという思いからの行動なんだろうけど、2人の赤ん坊は母親がいないこと、代わりに見知らぬ他人がいることに心細さを感じたようで、ぐずり出した。

片方が泣き出せば、もう片方も泣き出す。

ミランダも必死に宥めようとするが、当たり前前に無理。

すると、どうしたらいいか分からずパニックになりミランダまで泣き出した。

次に慌てるのは僕とラツセルだった。

僕らはそれぞれの妹が泣き出すことには見慣れていたので、祖母が来るだろうとほっといたが、ミランダが泣き出してしまつと話が別

僕らはとりあえずミランダを宥めようとした。

泣き声を聞いて駆け付けて来た祖母達にナージェとジェーンを任せ、ミランダを泣きやませる為に僕が頭を撫でると、ラッセルも真似してきて2人でナデナデ。

「あらあら」

ミランダの泣き声にあやしに来たセシルは、笑っている。

「仲良しだね」

ジェーンを抱えるドーラは

「ジェーンもナージェちゃんと仲良くなるんだよ」

ジェーンの顔がこつちを向くようにし、祖母も

「ナージェもね」

と同様に。

見せられている僕ら、特に頭を撫でられていたミランダは状況を把握すると、照れたのか僕らの手を払いそくさと逃げ出した。

僕は照れたのだと思っているので仕方無いなと思い、その場にいたが、ラッセルは何を思ったか、ミランダを追い、頭を撫でようとした。

照れてるミランダは当然嫌がり、ラッセルも意地なのか諦めない、案の定、ミランダは振り払うようにしてラッセルを叩き、叩かれたラッセルはムツとしてミランダに仕返し。

再びミランダは泣き出した。

僕がそれを見ると

「行ってあげないの？」

何かを期待するように笑うセシル。

促されて、渋々2人のところに向かう。

「めっ」

ラッセルに一喝して、ミランダの頭をナデナデ。

ラッセルは、シュンとした後、

「ごめんなさい」

ミランダの頭をナデナデ。

ここに至って、ラッセルってミランダのこと好きなのかも、と気付く。

ミランダのことを構いたいだけなんじゃないかな。

ミランダが泣きやみ出したので、僕が止めると、学習したのか今回はラッセルも止めた。

そんな僕らがナージエ達の目にどう映ったのかは分からないが、以降ナージエとジェーンはなんとなく互いを意識しているように見えた。

ナージエは家に帰ってからも、どこかご機嫌なようだった。母親が様子を見に戻って来たが

「なんかあったのかい？」

ナージエを見て祖母に聞いていた。

大丈夫だろう、と母親は酒を飲みに行くことにしたらしい。年に1度だし、と祖母も反対しなかった。

夜、僕が眠りかけるぐらいに母親達は帰って来た。

去年より大分早いのはナージエがいるからだろう。

父親も今年は自分の足で歩いていた。

既にナージエは寝ていたので、両親が静かに入って来るのを邪魔する必要も無いと、僕は寝たフリをすることにする。

ベッドに倒れ込む音がした。

さっさと寝よう、そう思っていると、すぐ近くに人の気配。うつすら目を開けると、母親がいて、頭を撫でられた。

「お前、あたしに随分楽させてくれたんだな、ありがとな」

そう言われた。

その後母親は、

「さて、明日からも頑張るか」

深く息を吐きながら言つと、ベッドに入つていった。

祭日（後書き）

書き方が未だに良く分かってません。  
ちよこちよこ色々挑戦していききたいです。

読んで頂いたことに感謝

父親（前書き）

珍しい父親メイン（笑）

## 父親

何がきつかけになるものか、世の中分らないものだ。

祭りの日から徐々にだけど、ナージエのぐずる回数が減り始めた。たまにドーラがラッセルとジェーンを連れて遊びに来ると、ナージエはジェーンに対して興味を持ってるように振る舞うので、祭りの日のやり取りが関係しているのは間違いないと思う。

だけど、本当に何がきつかけになったのか全く思い付けない。

まあ、過程はともかく、結果としては良い方に転がった。

常に疲れきった顔をしていた母親にとっても喜ばしいことだと思う。

季節がはつきりと春になる頃、試しにと母親は仕事に行ってみた。昼に1度戻り、また出掛ける時にナージエはぐずったが祖母でも対応出来る範囲だったので、そろそろ仕事復帰をしようという話になった。

母親の仕事は立派な収入源なので、いつまでも週3の僕と祖母のままでいるわけにいかなかった。

一応、僕は残されることになる。

今までは父親に頼ることが出来たが、もう父親も仕事が始まってしまったので、祖母がナージエに構えない時、面倒をみるための人間として、僕。

僕も大分慣れてきて、ほつといても大丈夫な時、構ってあげないと駄目な時が分かるようになった。

ただ、泣かれてしまうと、どうにもならないのは変わらない。

その場合は祖母を呼びに行く。

もつとも、そこまで泣くことは少なくなった。

一番ぐずり易い母親の出かけ際には祖母がいるし。



最近、ちょっと僕の顔を覚えてくれたみたいで、僕の顔を見て笑ってくれるとちょっと嬉しい。

ミランダと一緒にナージエを覗き込んだ時とか、僕の方に興味を示してくれるとミランダには悪いけど、ちょっと自慢気。

やっぱり家族なので、長く一緒にいると慣れてくれるらしい。

ラッセルに対するジェーンもそうだった。

それと、不思議なことに、ジェーンは僕に、ナージエはラッセルにも興味を持ってるみたい。

赤ん坊同士で情報交換とかしてんのかな。

でも、これをあからさまにアピールすると、今度はミランダが泣き出すのであんまりやらない。

仲間外れは嫌なんだって。

可愛らしいな、とこっそり思う。

こうやって上手く回りだしたことに不満は無い。

無いんだけど、なんていうか、赤ちゃん返りをする子供の気持ちが良い分かる。

僕があんまり手が掛からないっていうのもあるんだけど、家族全員がナージエを中心に動いている気がして、手の平を返されたとまで言わないけど、一抹の寂しさを感じる。

これまで自分がいた場所が突然奪われたみたいな。

これは、普通の子供だったら泣くよ。

仕方無いからと、祖母や母親は口で言い、目で言ってくるけど、理解と納得は別。

ナージエに付きっきりになる祖母と母親を見ると、嫌な気持ちが生じてくるので自然、祖父や父親といえることが多くなった。

そんなある日、父親に畑に来ないか、と誘われた。

祖母に聞くと

「今日はお客さんも少ないし」と許可が下りた。

「大丈夫か」

父親が鍬を肩に背負い、昼食のパンを僕が持ち、えっちらおっちら畔道を歩いて父親の仕事場を目指す。

「どうだラカス、広いだらう」

まだ春ということもあり、青い部分がポツポツとあるけど、茶色い地面が広がっていた。

「僕が継いだ時はもうちよっと狭かったんだけどな、少しずつ広くしたんだ」

最初はここまでだった、と示し自慢気に話す父親は初めて見る逞しい顔をしていた。

その日、少し仕事を手伝った。

僕に出来る仕事なんて種を入れた小袋を運んだり、それぐらいなんだけど、運ぶ目的地で父親は鍬を杖のようにしながら、笑って僕の仕事ぶりを見ていた。

畑仕事を半日すると、僕らは畑近くの日陰に座り込み、後の時間、ほとんど会話をしていた。

家にいると父親と話す機会は絵本を読んでくれる時ぐらいしか無いし、その間も祖母や母親が入ってくるから、2人つきりで、というシチュエーションは無かったと思う。

父親の若い頃の話聞いた。

ここよりずっと北の農村で生まれた父親は、偉くなりたいと勉強し、中央に行ったこと。

生まれた村では優秀でも、中央に行くともっと優秀な人がたくさんいたこと。

小さいところで仕事をしながら、国や大商会の採用試験に落ち続けたこと。

これ以上無理と思い、実家に帰ろうと思いつつ、やっぱり夢が諦めきれない、そんなとき酒場で母親に会ったこと。

「アンはな、お前のお母さんはな、格好良かったんだぞ。酒場にいる人が皆色目使ってたな」

と言つて、色目なんて分からないか、と

「みんな、お母さんを好きだったんだ」

言い直した。

「たまたま僕の近くに座つてな、僕を見て、どうした暗い顔して話ぐらい聞いてやるよつてな。それがきっかけだった」

その後、浴びるように飲まされ、何の縁があつたのか、母親と付き合うようになった。

「僕が農民の倅だと言つたら」

そこで、父親は照れくさそうにして

「ちようど良いや、あんた、あたしの旦那になりなつてな」

そして、父親は婿養子に入ったと。

「人生つて分からないよな。農民が嫌で飛び出したのに、今は好きで畑仕事をやってる」

僕の頭をポンポンとたたき

「お前も好きに生きろ、男の子だしな。大きくなつて、お前が欲しいつて言うなら、今よりもっと広い畑をお前にやるよ」

ラカスは将来何になりたい、と聞かれた。

僕は、将来の職業を考えたことが無かつた。

普通に宿屋なり配達なり畑仕事なりを継ぐものだと思っていた。

「わかんない」

正直に答えた。

父親は笑う。

「色々やってみろ。お前は僕と違って頭が良いし、アン譲りの勇氣もある。なんだつて出来るさ」

それにアンの息子だからな、と

「 継げ、なんて言つと意地でも嫌だつて言いそつだからな  
ぐりぐりと頭を撫でられた。」

## 父親（後書き）

地味と言えば地味な話ですね。

BGMはグリーングリーンでお願いします。

結構すんなりいったんで、やっぱり微妙に不安が。

読んで頂いたことに感謝

祖父（前書き）

今度は祖父メイン

## 祖父

父親と畑に行った数日後の夕食が終わった頃。

僕は父親と一緒に絵本を読もうとしていたところだった。

「ラカス、お前、もう手紙書けるかい？」

突然、母親に聞かれた。

なんだろう急に、と考えて、ゼノビアとの約束を思い出す。

「ナージエが生まれたことを一応だけど、知らせようと思うんだけど」

どうなんだい？と、僕の文字についての先生である父親に向けて聞いた。

「簡単な文章なら大丈夫だと思うよ」

なあ、と父親は僕に。

僕は自分自身を半信半疑。

一応、冬の間父親と裏庭で練習していたけど、やっていたのは、絵本の中の文章だけ。

一通り出来るようになったから、落書きなんてしてる余裕があったんだけど。

ちゃんとした手紙なんて書けるんだろうか。

僕の不安が分かったのか、父親は僕の背中をポンと叩き

「そんな固くなるな、短くてもお前の年齢で手紙を書ける方がすくいんだから」

励まされた。

「まあゼノビアだって、いきなりしゃちほこ張ったものなんて期待してないさ」

母親は、僕らのやり取りから、とりあえず意味のある文章は書けると判断したようで、僕を紙の前に促した。

「ゼノビアのスペルは、」

などと、父親から絵本に無かった単語を教わりながら、ちゃんとペ

ンが持てない上に、インクの出が悪いので、握るように持ちながらゆっくりと。

「へー、一応書けるようになってるんだね」

僕が一語書く度に、母親が感心の声を上げるので、なんだなんだとナージエを抱いた祖父母までやって来た。

「ラカス、もうこんなに書けるのかい」

「ほー、立派立派」

僕の手が進む度に、父親は自慢気で、祖父母は感嘆の声。

ナージエは、あーあー言っていた。

「なんで、あんたが自慢気な顔してんのさ」

母親は、父親にツツコミを入れている。

「少しぐらい良いだろ、僕が教えたんだから」

「あんたの教え方より、ラカスの教わり方が良かったんじゃないのかい」

きっぱり言われ、父親は腑に落ちなそうながら、シユン。

結局、僕が書いたのは、僕が元気であることと、絵本のお礼。

文字の大きさが揃わないのは愛嬌だと思って欲しい。

文字に関しては、そんな感じ。

なんとなく、上達した実感はある。

ただ、もう一方。

「ラカス、大丈夫か」

馬に関しては、全然実感が無い。

そりゃ落ちる回数は減った。

だけど、上手くなった、というより、慣れたという感じが強い。

覗き込む祖父の向こうで、馬は、まだまだだと笑ってさえいるように見える。



ナージエは明らかに笑ってるんだけど。

「今日はこのくらいにしようか」

祖父に言われ、渋々頷いた。

祖母が見学してる手前、無茶は言えない。

お陰で以前のように、立つのもやっとなという状態になることは無くなった。

その代わりに、後片付けを手伝うようになった。

以前はヘトヘト過ぎて後片付けは祖父に全て任せていたが、今は全て任せきりは申し訳ない気がして、手伝う。

出来ることは、餌や糞を何回も往復して運ぶぐらい。

せめて、自分の馬ぐらい、と。

「ご苦労」

そんな感じに鼻息を漏らされんのが、ムカつくけどね。

将来、絶対にこき使ってやるうと心に決めてやっている。

「大きくなったな」

ふと聞こえた。

こつちを見ている祖父。

「ラカスが赤ん坊だったのが、つい昨日のことのような気がするよ」  
年をとると月日があっという間だな、と自虐的に苦笑いを浮かべた。

「ナージエがいるからじゃない？」

と僕。

祖父は、そうだな、と受け

「でも、アンもカテリーナも小さい頃一緒に仕事をしたことがあったが、やっぱり違うな」

と、言い足した。

「そう？」

どろが、と聞くと

「うちで男の子が生まれにくいってのは、誰かから聞いたか？」

「うん」

はつきりとは思いい出せないが、祖母あたりから聞いた気がする。

「祖父ちゃんが婿に入った時は、女ばかりの家だった」

昔を思い出すように

「祖父ちゃんの生家、生まれた家だな、もう誰も生きていないが、そこでは男女が生まれていたからな、メアリーは口にしなかったが、色々大変だったんだろうなあ」

そう独り言のように続け、そこで聞いていた僕の存在に気付いた風。  
「すまんすまん」

と僕に頭を下げた。

「とにかくな、自分の血を継いだ男の子と仕事をするのが、祖父ちゃんの夢だったんだ」

おいで、と呼ばれたので近寄ると、頭に手を置かれ存在を確かめるように撫でられた。

「叶うことの無い、夢だと思っていた」

頭に手があるので上を向けないが、鼻を吸る音がした。

「こうしてラカスといられて、こんなに嬉しいことは無い」

もう、いつ死んでも良い、とまで言い出した。

「まだ、ぼくのうまがいるよ」

僕は馬に乗って練習はするが、日々の管理や訓練は祖父にやってもらっている。

祖父は、そうだったな、と苦笑混じり。

「ラカスの馬をこの国で一番にしてやらないとな」

「だめ、せかいいちがいい」

僕の答えに、世界中でかい、と祖父は驚いていた。

驚きを飲み込むようにして

「よし、祖父ちゃんに任せろ、世界で一番の馬にしてやる」

やってやると、頼もしく笑う。

「うん」

僕は、そうは言うものの、多分無理だろうなと思う。

たった数年の付き合いだけど、僕はこの家の人達が好きだ。

だから、死んでも良いとかを聞きたくない。

張りが出るなら、なんでも良かった。

とにかく大きくて終わりが見えない方が良い。

「馬を育てることなら、メアリーやアンにだって負けないんだからな」

祖父は自分の胸を軽く叩き、誇らしげに笑った。

祖父（後書き）

祖父と父親視点の話を書くつもりが無いので代用に。

いつもちよい役なので。（笑）

そういえば、30話ですね。

記念すべきなのに、地味ですね。

読んで頂いたことに感謝

手の平（前書き）

ある意味タイトル通り

## 手の平

ちらちらと青葉が見え始め、なんとなく春の終わりが見え始めた頃。祖母が昼食を作っている間、僕がナージエの相手をしていると、カテリーナが帰って来た。

「ただいまー」

無事に生きて帰ったよ、なんて言ってるカテリーナは、本当に嬉しそう。

久々に見るカテリーナは、少し痩せたというか、締まって見えた。

「はいはいおかえり、もうすぐ昼ご飯だから、大人しく待ってな」祖母にはカテリーナと再会の喜びを分かち合う暇が無いみたいだった。

カテリーナは全く気にする風も無く

「ラカス、元気にしてたか」

僕の頭をぐりぐりと撫でた。

うん、と言うと、そうかそうか、と上機嫌。

なんでそんなに機嫌が良いかは分からないけど、とりあえずカテリーナも元氣そうだった。

「この子がナージエジダ、ナージエってよんでる」

柵の中でウトウトしている妹を紹介した。

寝ていたんだけど、カテリーナの声で少し起きてしまったみたい。

カテリーナはナージエを見ようと一歩踏み出したところで、何故か止まる。

「ナージエって立ったりしないよね？」

「しないよ」

そうだよな、と一歩進み再度止まる。

「喋ったりしないよね」

「しないよ」

ならよし、と安心したのか胸をなで下ろしていたところに

「あー」

僕らのやり取りのせいで、ナージエは起きてしまったらしい。

僕がそんなことを思っていると、カテリーナが一足飛びに来て肩を掴まれた。

「今の第一声とかじゃないよね？」

「ずっといつてるよ」

前後に揺さぶられながらの僕の答えに

「本当に大丈夫なんだよね？」

更に聞いてきた。

正直面倒臭くなってきたので

「だいじょうぶだよ」

やりを投げた。

カテリーナは僕の口調に疑いは持った様子を見せたものの、ひとまず信じたようで、本当に恐る恐るナージエを覗き込む。

そこまでして見たいものかなあとは思っけど、まあ新しい家族の一員だしね。

カテリーナの引きつった笑みで覗き込まれたナージエは、多分驚いたんだろうね、しゃくり上げる声が出た。

「おばーちゃん、ナージエがなきそう」

一度泣き出すと僕の手では無理だと知ってるので、直ぐさま祖母に一報。

スープの味を確かめていた祖母が、あらあらと振り返ると

「ごめんなさい、本当に悪気は無かったの、命だけは許して下さい」

カテリーナと何故か僕が頭を下げたのは同時だった。

頭を押さえ付けられながら、なんで僕まで、と疑問。

「何謝ってるの、このぐらいじゃそんなことしないわよ」

そうナージエをあやす祖母に言われ

「なんで？」

カテリーナは僕に聞いてきたけど、僕が知ってる訳が無い。

夕飯は豪華になり、カテリーナは喜んでいた。軍学校を卒業したそうなので、そのお祝いなんだろう。

カテリーナの乾杯の音頭から夕食は始まった。

食卓の上はカテリーナの好きなものばかりなようで、見たこと無い料理や食材が並ぶ。

祖父が見て、今夜は奮発したな、と言っているから高価だったりするのかな？

祖父の言葉に祖母が

「カテリーナの卒業祝いと、所属決定祝いよ」

そう言うので、僕はジャンヌのところに行くんだろうなと思い、カテリーナに聞いた。

「それが違うんだな」

カテリーナは人指し指を立て、左右に振り得意気に笑う。

「私の所属は南の何にも無い片田舎なのだよ」

聞くと、軍学校を出てそのまま軍に入る者は、一度田舎のような広い場所で学校でやらないような実践的な訓練をしてからって流れなそうだ。

ジャンヌみたいな引き抜きをするためには、ジャンヌや軍学校長、他様々なサインが必要で、その中にはカテリーナ本人のサインも必要らしい。

「もう、逃げたね、逃げるよそりゃ。私みたいな普通の人があんなところ行ったら、命が幾つあっても足りないよ」

ジャンヌの部隊ってどんだけ危険なんだろう、と疑問を抱いたが、ともかくカテリーナの上機嫌な理由は分かった。

「私の方が一枚上手だったってやつだね」

カテリーナは自慢しているけど、僕はなんか腑に落ちない。だって、ねえ？

なんて思っていると、案の定とかやっぱりというか。



「安心しな、私がサインしといたから」

静かに食事をしていた祖母がするっと言った。

「なっ、だって、あれ本人じゃなきゃ駄目でしょ」

カテリーナの言葉は、問い掛けより、訴えに近かった。

本人も、冗談の言葉では無いと思ったみたい。

「もしかして、お姉ちゃん、」

カテリーナは誰かに無理矢理首を回されてるんじゃないかと思う程ゆっくりと母親の方を向いた。

「ジャンヌがなんとかするって言ってたから、数日中に届くんじゃない？」

母親は内容の暴力性を感じさせないくらい何気無く言い

「ちよつとジエームズ、お皿取って」

食事を続けている。

僕ら男性陣は食事に集中。

祖母達が僕らの耳に入れないということは、その決定は極当たり前ということ。

こんな時は関わらないようにするのが一番と祖父と父親から学んだ。だから、助けてよラカス、も聞こえない。

僕は食事に集中しているのだから、聞こえない。

「さっさと食べな、せっかくあんたの好きなものばかり作ったんだから」

祖母の言葉に、カテリーナは

「私の自由つてさ、このパンの欠片ぐらいしかないんだよね」

夕食前の上機嫌が嘘みたいに落ち込んでいた。

## 手の平（後書き）

とりあえず、カテリーナが出る話は楽というか、なんといいか。すんなりいくのですよ。

もっと活かせると思うんですが、作者の技量では、これが精一杯です。

読んで頂いたことに感謝

特別（前書き）

盛り込みすぎた感が。

## 特別

カテリーナが帰って来た翌日、窓からは薄く延ばされた水色の空が見え、雲が一つ二つ、正に快晴。

一方、家の中ではカテリーナが

「きつと大丈夫、うん、本人のサインじゃないんだもん、幾らジャン又さんだつて無理に決まってるよ」

自らを励ましつつ、テーブルに突っ伏していた。

昨夜、母親から事実を知らされて以来こんな感じ。

時々泣き声が漏れるから、自分でもそんなことを言っても気休めにもならないのだと分かっているんだろう。

「こんな天気の良い日に、辛気臭いねえ」

元凶の祖母と母親に言われていた。

なんか見てて、あまりにもあんまりなので、カテリーナの気晴らしになれば、という思いと僕の興味から、話しかけてみた。

「そんなにいやなの？」

僕は軍人の生活とか訓練の厳しさを知らない。

だけど、戦争中ならいざ知らず、訓練でジャン又のところと別のところ、そんなに違いがあるもんなのか、と疑問。

僕の質問に、カテリーナは勢い良く顔をあげ、椅子を倒して立ち上がり

「嫌よ、絶対嫌、あの人、お姉ちゃんの友達だけあつて頭おかしいんだもん」

具体例を話してくれた。

春休み中行われた特別訓練、最終テストにと、とある森の中に連れて行かれたカテリーナ。

そこで言われたのは、ジャン又の部隊から逃げ切ること。

そういうテストなら他の部隊でもあるらしいんだけど

「普通、そういう時つて空砲を使うの、万が一も有り得るからね」

先行して逃げるカテリーナ、しかしながらジャンヌの部隊はやっぱり精鋭みたいで、程無くして包囲された。なんとかして、逃げようと一步踏み出した瞬間、パン、と小気味のよい音。

「ピュンよ、ピュン。私のここをピュン」

カテリーナは指を鼻先を掠めるように動かし、僕に説明した。

「そしたら、あの人、なんて言ったと思う？わざとらしく、ああ弾を抜き忘れてしまったな始めてしまったのでこのまま続けるとするよ。絶対嘘でしょ、始めっから抜くつもりなんて無かったに決まってるわ」

大きな身振りで僕に訴えてきた。

「それで、どうなったの？」

話の先を促すと

「当然、逃げきったわよ。だって当たったら痛いじゃ済まないのよ。相手のを一丁奪って無理矢理逃げてやったわ」

もう、本当にあの人はおかしいのよ、とカテリーナは言ってるけど、この人も大概おかしいと思う。

ジャンヌのとこって結構精鋭部隊のはずなのに、そこから銃を奪って逃げるって、カテリーナって十分素質あるんじゃないかなあ。

その時のことを思い出して、これからを想像して、また椅子に座り直し更に暗くなったカテリーナを見兼ね

「今からつまのれんしゅうするつもりだけど、くる？」

誘うと、気分転換になるかも、とカテリーナは立ち上がった。

一応、祖母に許可をもらいに行く。

「良いけど、ラカスに怪我をさせたら同じ所を決るからね」

「じ、冗談だよ」

カテリーナが引きつりながら聞くと

「冗談よ」

口だけ笑ってた。

僕にはその保証が出来ないので、僕らは母親の時と同じように、前に僕が座る2人乗りで、主にカテリーナ、たまに僕が操らせてもらう形にした。

僕は練習をしたかったんだけど、午前中の日差しに穏やかな風は気持ち良いので、これはこれで良いやと思う。

「ラカス、上手い上手い」

さすが母親と同じ血を引いてるだけあって、カテリーナの腕前は相応なもの。

僕の手綱捌きの、ここがこう、とか割りと分かり易く教えてくれた。

「お母さんって、ラカスのこと大事にしてるよね」

カテリーナに、貸してと言われ、手綱を譲った。

「今は、ナージェのほうばかりだけどね」

実際に最近、僕はほっとかれてることが多い。

「仕方無いよ、相手は赤ちゃんだもん」

拗ねてるの、と後ろから笑い声。

「そういうんじゃないかってね、例えばラカスが首に掛けるペンダントとかね」

僕は、言われて改めて見たが、古いものとしか感じない。

「私もお姉ちゃんも、触らせてもくれなかったんだよ」

ふーん、と思いつながら見ても、やっぱり古いと思うだけ。

先祖代々、とは聞いてるけどさ。

「これって、かちがあるものなの？」

聞いてみた。

お、価値なんて難しい言葉を良く知ってるね、と言った後

「あんまり無いと思うよ。装飾も大したこと無いし、お母さんも詳しい由来知らないって言うてたし。ただ、古いだけじゃないかな」

なんだ、と思った。

別に高くても売るつもりは無いけどね。

「お母さん、ラカスが生まれたら真っ先にペンダント握らせてさ、私達とは扱いが違うんだなあってお姉ちゃんと話したもんよ」

その辺についての記憶は一切無いので、そうなの、と言うことしか出来ない。

気付いたら、すぐ近くにあっただけだし。

「それからだよ、ラカスがこの家にとって、特別なんだなあって思うようになったの」

愛されているなあという自覚はあるけど、特別っていう認識はしたことない。

最近はナージエもいるし。

「特別とか急に言われても分かんないよね。特別ってさ、他人が勝手に決めることだからね」

そこで、馬なりに走らせていたのを止め、ゆっくりと歩かせた。

「私の将来の夢って、友達とお店を持つことなんだよね。ナタリーっていう、私とは違って、補給とか書類関係とかそっち方面なんだけど、その友達と昼は喫茶店、夜は酒場をやるんだ」

面白そうでしょ、とカテリーナは僕を覗き込むようにして子供みたいに笑う。

「うん」

僕が言うと

「私達、平民だしお金もコネも無いし、そんな偉くもなれないだろうからね、お金溜まったらさっさと辞めてやるんだ」

また、馬の速度を馬なりにした。

「私かさ、酒場をやりたかったのは、多分お姉ちゃんの影響なんだよね。お姉ちゃんって、私みたく簡単に泣いたりしないしさ、どんなことがあっても笑ってられるくらい強いしさ。お姉ちゃんの周りで皆がお酒飲みながら笑ってるのを見て、私じゃそんな風にはなれないからね、そんな場を提供できる仕事がしたいなあってね」

カテリーナは馬を止めた。

もう太陽が一番高い所に着こうとしている。

「私にとつて、お姉ちゃんは特別なんだよね」

たまに理不尽だけどね。

そこだけこつそりと言った。

「だから、ラカスはそのまんまいれば良いんだよ」

分かった？と聞かれたが、僕は話の流れが飛び回ったせいで、カテリーナが何を言いたいのか、さっぱり分からなかった。

それが顔に出してしまったようで

「あれ？」

カテリーナも改めて自分が何を言いたいのか、分からなくなったみたいだった。

「まあ良いや、とにかく」

カテリーナは破顔一笑。

「ラカスはラカスがやりたいことやれば良いんだよ」

僕は随分と強引なまとめだなと思った。

まあ、将来の話をするカテリーナは楽しそうだったから良しとするべきなのかな。

「さあお昼にしようか」

朝とは違い、カテリーナは晴れ晴れと笑っていた。



特別（後書き）

カテリーナの出番が最後なので、盛り込み過ぎた気がしています。

まあ、良いかな、と。

読んで頂いたことに感謝

親子（前書き）

急展開では無い...はず

## 親子

カテリーナが落ち込んだ状態から立ち直ったのは束の間に過ぎなかった。

数日後にはきちんと手紙が届き、カテリーナの配属先が告げられた。翌日未明、カテリーナは家から逃げだしたようで、探さないで下さい、と置き手紙だけが残されていた。

更に数日後、今度はゼノビアから。

「カテリーナさんをジャンヌさんのところに届けておきました」

僕は、もう色々気にしないことにした。

とりあえず、見送れなかったことが残念だな、と前向きに考えることにする。

それよりも、ゼノビアから手紙と一緒に届いたものの方が、僕を、そして母親を戸惑わせた。

一冊の本。

以前送ってもらった絵本のようなものではなく、ちゃんとした、この世界の言語の教本だった。

父親が読み上げたタイトルからして基本について書かれているようだが、割りと分厚く多少汚れがあったものの高価なことは僕ですら分かるような本。

手紙が添えられていて

「ラカスちゃんが約束を守ってくれたのでご褒美です。知り合いの貴族の方からの譲って頂いたもので、少し古いのですが」

パラパラ捲ると、時々不揃いな字で注意書きが書き込んであり、確かに以前に誰かがこれを使い勉強したのだと分かる。

そろそろ絵本は空で読め、書けるようになるまでになっていたのですが、僕にとってはありがたかったが、やはり両親を始め家族にとっては考える部分が多々あるみたいだった。

何度か、母親とゼノビアの間を手紙が行き来した結果、ゼノビアが

異常に僕をかつていることを知る。

「将来、欲しいって言ったのはお世辞じゃなかったらしいね」  
手紙を見ながら、母親が呟いていた。

僕は以後毎月手紙を書くことにより、その手紙代によって教本を買うという形に落ち着いたみたい。

もつとも、それでも全然安いんだけど。

「将来を考えたら安いものです」

先行投資ってやつなのかしら。

そんなにゼノビアと会ったことも無いし、深く話したことも無い。

たまに母親が手紙を送ってるみたいだけど、僕はどんな風に見られてるんだろうか。

本が手に入ったことで一番喜んでいたのは僕では無く、父親だった。自分が教えた僕が認められたことに加えて、もらった本はとても有名な本だそうで、父親も若い頃欲しかったものだそうだ。

言語に関する本はピンからキリまであったそうだが、当時お金の無かった父親は安い粗悪品しか買えず、憧れの眼差しを向けていたうちの一冊に、年甲斐もなく浮かれていた。

さすが貴族だな、と思わなくもない。

僕よりも父親の方が率先して夕食前や後に勉強を始めた。

やり方は父親が内容を噛み砕きながら読み上げ、それを親子でああだこうだ言いながら、たまに外に出て月明りに頼って地面に書いてみたり、そんな感じ。

今はナージェがいるので、絵本をもらったばかりの時のように祖母や母親に気を使う必要はあまり無かった。

そりゃ多少使うけどね。

その勉強もそうだし、馬の練習もそう、祖父母の手伝いもするようになった。

割りとは忙しい。

でも、これは僕に限ったことじゃなく、ラッセルも時々父親のガルクと材料の買い付けに山の方にいたり、ミランダも町の内職場のようなところで手伝いを始めたりしている。皆、着々と将来についてのことは始まっていた。

そんな夏になつたある日。

ゼノビアとの約束に従つて毎月送る手紙が内容は日記に近いが微妙に手紙の体裁を持ち始め、馬に乗っても中々落ちなくなつてきて馬の方が不満げな顔をし出した頃の朝食後。

「ラカス、今日は一緒に行くよ」

突然、母親に呼ばれた。

ナージエも不条理には泣かなくなっていたので、そろそろかなと思つてはいたけど、言われたのが行く寸前だったのにはさすがに驚くましてや

「今日は近くの村ばかりだから、あんたが一人で操ってみな馬に乗つてからいきなり言われた。

「えっ」

つい驚きが口をつく。

「父さんから聞く限り、お前ならもう出来るはずだよ」

遠慮すんなど、笑われた。

「じゃあ、任せたよ」

母親はそう言つと、手綱を一切触ること無く、後ろに反るようにして座っているだけ。

本当に、一切を僕に任せるつもりらしかった。

僕に、楽しそうに笑っている母親に手綱を押しつける言葉が浮かばない以上、大人しく手綱を持つ道しか残されていない。

そうなることを予め聞かされていたのか、家族全員に見送られた。

「ラカス、気をつけるんだよ」

「焦らず、いつも通りやれば大丈夫だからな」

ナージエは食後なので舟を漕いでいて、父親は蹲り呻いている。全く学習しない人だ。

「いつてきます」

一言言つて軽く手綱で指示すると、馬は歩き出した。

「行つてらっしゃい、気をつけるんだよ」

全員手を振つて送り出してくれた。

ナージエは祖母によつて、父親も弱々しいながらも。

町を出たものの、半年以上離れていたの道はあやふや。

聞けば母親は口で教えてくれたが、実際に手綱をとつてはくれなかった。

母親の馬は相当上手く躡られていたので助かる、そうでなければ僕の未熟な捌きではまだまだ無理な話だと思う。

なんとかやつと一日を終え、家に着くと

「また近いうちに同じことするからな」

へトへトになり肩で息をする僕に、母親は言った。

「うん」

僕は、そう答えるのが精一杯だった。

## 親子（後書き）

確か、何かの写真で3歳の遊牧民の子供が馬に乗ってるのを見たことがあるので、無理ではない…はず。

読んで頂いたことに感謝

投げ出す(前書き)

二の舞いになりませんように



## 投げ出す

母親と一緒に乗りながらも1人でずっと手綱を操った夜。

母親から、これから数日おきに今日みたいなことをするから、と言われた。

その、行かない数日に練習するんだよ、とも言われ、僕は勿論そうするつもりだったので、うん、と頷く。

更に母親は

「自分の馬じゃなくて、あたしの妹に乗りな」

そう付け加えた。

これには、つい戸惑ってしまい

「聞こえなかったのかい？」

母親に聞かれて、慌てて頷いた。

僕にとって、馬の練習は自分の馬に乗ることと同じ意味になっていたので、なんで指定したんだろうと疑問。

単に、母親の馬と似た体格だから。

そんな認識でいた。

言われた通りの馬に実際乗ってみると、とんでもなく悪戦苦闘。

なんていうか、鈍い、反応が遅いうえに手綱に従ってくれないことがままあった。

それでも僕は、調教すら満足に終わっていない自分の馬だつてある程度従ってくれるようになっていたし、母親の馬だつて1人で手綱を持って村々回れたはずなのに。

一通り走らせてみて感じた違和感を柵の外で見ていた祖父は見抜いていたらしい。

「ラカス、自分の馬と同じように走らせたって、そりゃあ駄目だ」

僕が祖父の前に戻ると、開口一番に言われた。

「でも」

と、母親と一緒に乗った時は問題無かったことを告げる。

祖父は困ったような表情。

そして、言い辛そうに

「それはアンが乗っていたからだろうな」

そう言われたところで、実際に手綱を持っていたのはずっと僕だった。

「そういうことじゃないんだよ」

祖父は優しく諭すように

「背中に乗せる人間を信頼して馬は走ってるんだ。馬はアンを信頼していたから、ラカスの手綱でも走ってくれたんだよ」  
侮辱されたとさえ感じた、僕の努力総てを。

ムツとしたのが顔に出てしまったらしく

「別にラカスが悪いわけじゃないんだ」

祖父は僕をフォローしつつ、言うには、僕の馬は最初から僕に対してある程度の信頼を持っていたせいか、僕に馬との信頼を築かせる機会が無いままに来てしまった、と。

「まあ、そういう馬に出会えたことは悪いことじゃないんだが」  
そう締めくくられた。

僕は一応、祖父の言葉に納得し、頭の中で反芻しながら乗ってみる。  
信頼、信頼ねえ。

と、してみたところで見えるのは馬の後頭部。

まあ面と向かわれたところで、僕には馬と会話なんて出来ないけどさ。

一体どうしろっつーんだよ。

そのまましばらく走ってみても、一向に手応えは無く、結局匙を投げた。

だって全く分からないんだもの。

諦めようとする僕を、祖父は宥め、嫌々ながら渋々再び乗ってみる

と、馬にそれが伝わったのか

「ラカス」

祖父の悲鳴。

いきなり前足が宙に浮くぐらいに暴れられた。

僕は鐙のお陰で落ちる寸前になりながらも、なんとか無事っていう状態。

馬に嫌われたらしく、それからは僕を乗せてくれようともしなかった。

母親は、その僕の欠点に気付いていたらしく、数日経た、本来なら連れて行ってくれる日

「良い機会だ。お前は少しとんとん拍子に來過ぎていたからね。この機会に馬と向き合ってみな」

祖父から僕になんの進展もなかったことを聞かされた母親はそう言い、結果僕は残された。

とんとん拍子、というのは祖父もそう感じていたことのように、多分コツみたいなことがあるんだらうけど

「あくまで自分の感覚だからな」と濁された。

それからというもの、僕は祖父の仕事を手伝うことにした。

思い付ける信頼関係を結ぶ手段はそれくらいしか思い付けない。

母親も祖母も反対しなかった。

方法として間違いではないということなのか、どうか、それすら分からない。

それでも、一週間程続けてみた結果、母親のの妹との友好関係が少し改善された程度。

乗せてくれるようにはなったが、信頼云々はサッパリ。

手綱を締め付けないように緩めて持ってみたり、自由に走らせてみたりしたけど、走り易そうといえはそうなんだけど、信頼を掴むというのとは違う感じ。  
完全にお手上げだった。

更に一週間。

変わらず母親も祖父も何も教えてくれない。

変わらない状況に、本当に、馬に乗ること自体が嫌になりそうだった。

その日も、色々試みたのだけどやられた馬の機嫌が損なわれていき、なんの成果も上がらず、祖父に止められた。

なんか、もう限界だった。

「もう乗りたくない」

つい、口から零れた。

一度零れてしまうと、体の中にあつた思いが一瞬のうちに凝固し、目の背けられない事実に使われた。

何をやっても駄目だし、馬に乗ることが面白くなってきたし、なにより先が見えないのがキツくて仕方無かった。

「そんなこと言つな、明日また頑張れば、ひよつとして簡単に出来るようになるかもしれないじゃないか」

祖父はここんとこ毎日、ずっとそう言ってくれるけど、僕にはとてもそうは思えない。

「やだ」

祖父の僕の頭を撫でようと首を振って払うと、その場に座り込んだ。

祖父は肩を竦め

「今日は祖父ちゃんが片付けるからな。夕食前にはちゃんと家に戻るんだぞ」

馬を引いて行ってしまった。

祖父が馬小屋に入ってしまうと、今度は一人で蹲っているのが空し

くなつてきて、立ち上がり、当ても無くとも歩き出すことにする。

着いたのは放牧地だった。

柵の中では、はみだけをつけた馬達が自由に動き回っている。

僕の馬もいた。

少し前ならのどかな気持ちにでもなれたんだろうけど、今は欠片も

そんな気分にならない。

悔しさしか湧いてこなかった。

その夜、僕は初めて母親に頬をはたかれた。

「見損なつたね、お前がそんな根性無しだとは思わなかったよ」

それが、僕が、もう乗りたくない、と言ったことに対しての返事。

夕食も僕のせいで、いつもより暗い雰囲気な気がして、母親に構われ笑うナージエの声ばかり聞こえた。

僕は、母親と同じ部屋で寝るのが気まずくて、祖父母の部屋に潜り込むことにする。

祖父母は僕の気持ちを慮ってくれ、何も聞かず歓迎してくれた。

祖母が、ベッドの中で僕を抱き締めながら

「誰にだって、たまには休みたい時があるものね」

僕の頭を撫でた。

何故か涙が零れた。

投げ出す（後書き）

一応、書いておかないといけなかなあと思う回でした。

前の馬の話は、この辺の前フリだったので、どうなんだろう、と  
ビクビクしつつ。

読んで頂いたことに感謝

似た者同士（前書き）

推測半分なのはお許し下さい。

## 似た者同士

三日程、母親と険悪な関係だった。会話は挨拶くらいだったし、母親の言い方にも刺が見え隠れする。祖母を筆頭に祖父、父親、多分分かっていないだろうナージエが庇ったり慰めてくれたりしたけど、心がチクチクするのをどうにかしてくれる程の効力は無かった。

「ラカス、乗らなくて良いから、ちょっと来てくれないか」  
僕が祖母の手伝いしていると、祖父に呼ばれた。

「お前の馬がな、寂しがつているんだよ」  
だから、な、と言われ、渋々頷く。

僕は三日間、一切馬小屋、放牧地、馬がいる場所に近付かないようにしていた。

もう乗らないという外に対する意思表示であつたし、自分自身を諦めさせるつもりも行爲でもあつただけど、ふと、そういえばと思ひ出す。

あいつは僕の為の馬なのに、僕が乗らなくなつたらどうなるんだろう。

久し振りに思える放牧地に行くと、あいつは一番家に近い所の柵と柵の間の隙間から首を伸ばし、前足で宙をかきつつ、たまに柵を蹴っていた。

僕を見た途端嘶いた、まるで怒っているのを僕に分からせるように。迫力に、ついビクリ。

そんな僕に、馬はくいくいと首を前後に振っている。  
来いってことなんだろうか。



祖父を窺うと、苦笑いを浮かべていた。

恐る恐る近付くと、いきなり頭に硬いものが落ちてきた。覚えのある痛みの上にを見ると、鼻息が掛かるくらい至近距離に馬の顔。

目が合うと、今度はくいくいつと柵の中を示した。

僕は馬の言いたいことを察し

「のらないよ」

そう言った。

母親に言った以上、本当に意地でもそうするつもりだった。

また硬いものが落とされる。

僕は頭を抱えて蹲った。

蹲る僕の服を引っ張り、くいくいくいやり続け、僕が断る度に硬い部分を落とし続けるものだから、最後には折れ、僕はたてがみに掴まりながら鞍の無い裸の背中に乗った。

祖父に

「大丈夫か」と聞かれたけど、なんとなく、こいつは危険なことはない、という確信があったので

「だいじょうぶだよ」

そう言っておいた。

僕が跨がると、すつくと立ち上がり、走り出した。

大丈夫だよ、と自分で言ったことに半信半疑。

真直ぐ走り出した向こうに、草を食べてる馬の群れが見える。

このまま行ったら、ぶつかるとは必至。

焦って、掴まっているたてがみを引くが、巻き付けて握っていないわ握力無いわで、全く意味が無さそうだった。

ただでさえ、安定感が無いので、今更握り直しなんて出来ない。

どうしよう、と再び前を見ると、僕の馬は走りながらちらちらと左側から僕を見ている。

それで気付いた。

馬の体左半分を意識すると、僕の馬に直接触れている左足の内側を

微かに押し上げているような感じがあり、馬の重心が左に寄り始めているような気がした。

左に曲がる。

そう受け止め、僕も体重を左に寄せると、馬がスルリと左に曲がった。

今まで感じたことの無いぐらい滑らかに。

その感覚を繰り返し思い返していて、ハッとぶつかりそうになっていた馬の群れを思い出すと、かなり近くまで寄っていたみたいで、後の方で驚いている光景が見えた。

僕の馬は、足を止め、首を曲げ片目だけで僕を見て一嘶き。

まるで先生が生徒に、分かったか、とでも言うように。

それによって、僕はこいつの今回の意図を理解する。

僕に、コツを教えようとしてくれた。

馬には馬の意思がある。

それを分かるうとすることが、馬と信頼を結ぶための第一歩。

僕は今まで、自分の意思を馬に伝えることばかりを考えていた。

そうじゃないことを伝えようとしてこいつは。

ありがとな。

たてがみに顔を埋めながら、抱き締めるようにしながら言うと、馬はぶいっと顔を背けた。

照れてやんの。

その後、ハラハラしながら見ていたらしい祖父から聞いた。

母親から、自分の馬に乗るな、と言われて言う通りにし始めてからというもの、朝夕の僕が顔を見せる時間を除き、どことなくソワソワしていた、と。

愛い奴め、と笑う。

僕は、これ以降、祖父母に母親に内緒にしてもらい、毎日自分の馬

に乗った。

安全のために鞍と手綱はしたものの、感じた感覚は変わらない。

僕が曲がりたい方じゃなく、馬を曲がりたくさせた方。

さり気なく手綱を使って馬に注意を向けさせたり、それとなく話しかけたり、そうすれば自然に僕の意味が馬に伝わる。

自分の馬でその感覚を身に付けると、祖父に試しに、と言われ乗った母親の馬の妹も前回は嘘みたいにすんなりいった。

あんまり乗ってないせいか、読取り辛いが、注意して意識すれば、こっちに行きたいんだな、とか、もうちょっと速く走りたいんだな、とかが手綱や両足の内側から伝わってきた。

でも、やっぱり一番は自分の馬。

今では、僕のちよつとした体重移動だけで曲がってくれるし、僕もなんとなく馬が何に注目してるか分かる。

僕らの近くに母親の馬の妹、つまり、こいつのお母さんがいると、なんとなく存在を気にしているようなのに気付き、お母さんが恋しいか、なんて言うと馬が勝手に足早くその場を離れるのを笑うなんてこともあった。

僕は勘違いをしていた。

こいつが僕を落とそうとする時、それは僕に対する嫌がらせをする時では無く、僕が馬の意思を汲み取れなかった時だった。

そりゃ最初の頃は、本当に僕を試していたと思う。

でも、最近に関しては、そういうえば、というのが結構ある。

荒っぽいやり方だな、と思いつつも、気付けなかった僕に根気強く示してくれたことは、ありがとう、と感謝。

そんなことをしていたある日。

僕が柵の中をぐるぐると回っていて、ふと柵の外を見ると、祖父が見ていたはずだったのが母親になっていた。

まだ昼前で帰って来るのには早いはずなのに。

僕が気付いたことに気付いたようで、手を振って呼ばれた。

母親は、随分離れた距離で見ても分かるくらいの笑み。

けして、良い方じゃない方の。

僕が引きつった笑みを浮かべながら近付くと、母親は柵の中に入  
て来る。

「いやー、ここんとお前がね、コソコソしてる気がしてね」

はい、最近は逆に怒っている母親を見て、影で笑ってました。

「それで、早めに帰って来たら、随分と楽しそうだね」

はい、楽しいです。

「乗りたくないって言ったのは、どこのどいつだったっけなあ」  
はい、僕です。

「ぼくのうまにのらないなんて、いってないもん」

僕の返しに、母親は一瞬キョトンとした後、噴出し

「この嘘つきめ」

僕のおでこを突っ突いた。

そして、僕の馬の頭を撫で

「ありがとくな、父さんから聞いたよ。お前のお陰だつてな」

馬は、ぷいっと顔を背けた。

母親はそれを見てくすりと笑い、僕を見て

「お前は本当に良い相棒を持ったな」

目で僕の馬を示しながら言った。

僕は、正直に答えるのが照れくさかったので

「まあね」

誤魔化す。

母親はまた、小さく噴出した。

「お前ら、そつくりだな」

そう言った後、お腹を抱えて笑い出した。

恥ずかしいなあ、僕がそう思うのと同時に、馬が勝手に走り出す。

僕らは、とりあえず逃げ出したいということまで一致したみたい。

「おい、昼飯だぞ」

祖父の声が聞こえた。

「あいよ、ラカス、飯だつてさ」

母親の明るい声が放牧地一杯に響き渡った。

## 似た者同士（後書き）

一応、馬の話は終わりということ、馬の意識をどうこうは、武豊さんが言ってた気がするのですが、あやふや。

あまり突っ込まれても、作者に乗馬体験が無いので、なんとも。

馬に乗るキャラを作るなら、これくらいやんないと駄目かなあ。

そんなスタンスで、手を出してしまいました。

花の慶次の松風のシーンを微妙にイメージ。

好きなんですよ。

赤兎より松風派です。

誤字チェックは後日やります。

そういえば、感想のシステムがどこーもありましたが、スタンダードってどっちなんだろうと考え中です。

御意見あれば、是非。

読んで頂いたことに感謝

曾祖母（前書き）

急展開：かなあ

## 曾祖母

昼食の後。

僕が母親の馬の妹で放牧地を適当に走り回り、柵の前に戻ると、母親は頭痛を起こしたように頭を押さえていた。

何？と僕が見ていると、母親はそのままの体勢で、全く、と呟き

「お前って、なんなんだろうな」

馬上の僕を覗き上げた。

僕は馬の気持ちを読み取りながら走らせられるようになったわけだけど、母親は別にそこまで求めたわけじゃなかったらしい。

母親が言うには、僕には馬に挑むようにして主導権を握ろうとする姿勢で乗ってしまう癖があったらしかった。

原因は僕が自分の馬にばかり乗っているからだと母親は考え、荒療治として僕に自分の馬に乗ることへの禁止を告げるに至る。

実際に僕自身振り返ってみると、確かにそう考えて馬に乗っていた気がする。

母親は僕に対し、初心者にも毛が生えたようなのが馬に任せて走る、ぐらいの格好になれば良しとしようと思っていた。

ところが、僕が全く気付き素振りすら見せないものだから、随分歯痒かったそうなの。

僕が母親に対して意地悪をしているのかとすら思ったらしい。

僕も母親から聞いて、答えがそんな簡単だったことに驚いたし、なんで気付かなかったか当時の自分に疑問。

思い込みって本当に怖い。

もしあいつがいなかったら、僕は馬に乗ることを拒否し続けただろう。

あいつには本気で感謝だな。

まあとにかく、終わり良ければなんとやらで、僕は母親の期待の遥か上を行ったようだ。



「もうあたしと来なくて良いから、数乗りな。それで、その感覚を体で覚え込ませな」

母親は頭を掻きながら踵を返し、また仕事へ向かう。ふと、風に乗って母親の漏らした言葉が聞こえた。

「くっそ、あたしだってあの感覚掴むのに相当苦労したのに」  
なんか、ちよつと嬉しかった。

僕は母親に言われた通り、毎日乗り続ける。

もう落ちることは無くなったけど、だとしても祖母の心配は変わらない。

母親が祖母に僕の腕前を高く評価している旨を告げて、だったらと納得はしきれない雰囲気満々ながら引いてくれた。

馬に関しては母親の方が祖母より上みたい。

そういえば、祖母、母親、両方と乗る機会があったけど、母親の方が馬に意思が伝わっていた気がする。

祖母だって上手下手でいえば上手いんだけど、あの感覚を知ってしまつと、なんとなくそう思う。

秋口、母親から

「今日は最初に近くの村に行くから、自分の馬について来てみな」と言われた。

「いいの？」

その誘いには逆に聞き返してしまう。

いつも放牧地で、町の外を走ってみたいと思っていたところだった僕は二つ返事で了承。

母親について馬小屋から自分の馬を出すと、馬も初めてのことに嬉

しそつ。

家の前の見送りは恒例の光景だった。

何故、父親は学習しないんだらうか。

町を出て走り出すと、体格の差と慣れでスムーズに走る母親達と初めての経験に浮き足立つ僕らは、当然のように少し差が出来てしまった。

僕の馬がムキになって追いかけてよとすると、手綱を軽く引いて、気にするな、と注意を促す。

でも、と馬が手綱を引き返してくる。

じゃあ、と少し手綱を緩めると、馬は僕の気持ちを汲み取ってくれたようで、少しだけ速くなった。

前を走る母親達は、僕らの様子を窺い少しずつ速度を落してくれているので、程無く追いつけると思う。

しばらくして、目的地の村に着いた。

「良く慌てなかったね」

母親に褒められ、僕と馬は互いを見合い、笑い合う。

母親以外にも、母親を待っていた奥様方からも褒めてもらえ

「アンさんも将来は安泰だね」

「なんなら、うちの娘はどうだい？」

勝手に許婚まで作られそうだった。

僕は曖昧な笑みを浮かべてひたすら誤魔化しまくる。

そこへ

「ちよつとごめんなさい、道を開けて下さい」

声が聞こえた。

集まっていた奥様方が道を開けると出てきたのは乳母車に乗った、僕の祖母よりさらに年寄りのお婆さんとそれを押す奥様だった。

母親はそれを見て

「リリーさん、どうしたんだい？いつもの薬草ならちゃんと持って来てるよ」

驚いている。

リリーは、この村だけでなく僕の知ってる村の中で一番高齢で、もう満足に歩くことも出来ず、いつも母親に薬草を頼んでいた。

受けとるのはいつも、今乳母車を押している娘さんで、リリーがわざわざ来ることは無かったはず。

「お母さんがどうしてもって」

困ったように娘さんは言い、乳母車を何故か僕の前に押ししてきた。

リリーは僕を見ると、むにゃむにゃ口を動かして

「ぼくは、リディアさんの曾孫かい？」

そう聞かれたのだけど、そもそもリディアが誰なのか分からない。

助けを求めて母親を見ると

「お前のお祖母ちゃんのお母さんだよ」

要は曾祖母らしい。

「そうです」

とりあえず、合ってるようなので肯定する。

リリーは満足そうに頷き

「リディアさんにそっくりだね」

1人満足すると、またむにゃむにゃ

「本当にリディアさんが乗ると、まるで人が乗ってないように馬が

走った」

リリーは時折むにゃむにゃを交えながら如何に曾祖母が凄かったか

を語り続け

「ちよつとお母さん」

娘さんに止められた。

「ごめんなさい、ラカスちゃんを見たら急に会いたいって、言い出すものだから」

娘さんは母親と僕に謝るけど

「ぼくは、ラカスというのかい」

良い名前だねえ、とリリーは意に介さず話し続けてる。

結局、周囲の戸惑いを無視してしばらく話し続け、リリーはようやく満足したらしく笑顔で

「またおいで」

そう言い残して娘さんに押されて去って行った。

僕は圧倒されっぱなしで呆気にとられていた。

なんか視線を感じ、見ると、母親は何かを考えてるような変な顔で僕を見ていた。

「なに？」

と聞くと

「なんでもないよ」

ついつと顔を逸らされた。

## 曾祖母（後書き）

作者の計算間違いにより、ここから展開が早くなるかもしれませんが、途中、外伝入れるつもりですが、外伝無しで10話ちよいで纏めたいです。

無理な気もしていますが。

一度寝た後なんで、誤字チェックはしましたが、なんか不安です。

読んで頂いたことに感謝

秘密（前書き）

新展開じゃないです。

## 秘密

ある日の冬の夕食前。

僕は父親と本を呼んでいると

「ナージエが喋った」

母親が叫びが聞こえた。

それは一大事だと僕を含めてわらわらと家族全員が集まり、恒例となったのか、ナージエに名前を呼ばれようとする。

皆の前で、ナージエが喋った証拠として再び呼ばれた母親は自慢気。次は、当たり前前のように祖母だった。

まあ、この順番は仕方無い。

なにせ接してる時間が違う。

で、横一列に並ぶ男性陣の中から次に選ばれたのは

「にーに」

僕だった。

言われた瞬間、背中に羽が生えたんじゃないかってぐらい、フワッと浮いた感じ。

すっごいマジで嬉しい。

そして、前例に倣い母親達の並びに次いで、呼ばれていない2人を見ると、心の底から優越感が湧いてきて知らず知らず顔がニヤニヤしてしまう。

当時の僕は少し馬鹿にしていたところがあつたけど、呼ばれて分かった。

もんのすっごい優越感がこの場所にはある。

前回同様に残った最終戦、呼ばれたのは祖父だった。

最後まで残った父親は、やっぱりか、と肩を落としながらも、それでも呼んでくれればとりあえず良い、って気持ちだったんだろう。力無く笑いながら

「パパだよ」

ナージエに言ってみていた。

「はーは」

ナージエは言えなかった。

経験者談だけど、半濁音ってすごい難しい。

鼻から抜ける感じが上手く出来ないんだよね。

一生懸命ナージエと

「パ」

「は」

を言い続ける父親の姿は、なんかおかしくて皆で笑った。

まあ、そんな平和に日々を送っているんだけど、最近、ふと自分は子供らしく振る舞えているのかな、と思ってしまう。

きっかけはリリーに話しかけられた日のこと。

リリーに話しかけられた後、僕と母親は急いで村での仕事を終えろと、一旦町に戻る。

それは当初の予定どおりで、万が一僕が初めての町の外ということでも馬をスムーズに操れなかった場合を考え、時間は多くみていたんだけど、馬に乗る際の母親の慌て具合から、それでも若干次に遅れそうな感じだった。

実際そうらしくて僕を置くと、母親は直ぐさま馬を返して出て行ってしまふ。

「おかえり、随分と掛かったね」

心配してたんだろう祖母は、僕の無事を確認すると笑顔で迎えてくれた。

僕は椅子に座り、祖母が出してくれたお茶を飲みながらリリーのことを話す。

対面に座った祖母は、ああ、と頷き、リリーを知っているらしく



「リリーさんはお母さんを慕っていたからね  
思い出すように言った。

流れて、曾祖母のことについて色々聞いてみる。

「そうだねえ」

懐かしい、という言葉を変えつつ聞いた曾祖母像は、なんとなく母親に似ていた。

長い金髪で、顔立ちは母親似。

明るくて、豪快な人だった、と祖母は言った。

「ただ、私が言うのも変な話だけど、馬の技術に関してはお母さんの方がずっと上だったね」

それには驚いた。

母親ですら、僕からすればかなり上の方なのに、それよりずっとつて。

僕が驚いているのを見て

「詳しいことは、アンに聞けば良いよ、あの子はお母さんから教わったから良く知ってるはずだよ」

そう付け加えられた。

そこで、ふと疑問。

祖母は曾祖母に教わらなかったのだろうか。

「私は教わったのが遅かったし、あまり才能も無いみただからね」  
祖母に聞くと、そう答えたのだけど、なんか、変な感じを受けた。

「じゃあ、飲み終わったら仕事を手伝ってもらおうかな」

仕事の途中だったのか祖母が立ち上がってしまったので、違和感はどうやむやになっちゃってしまった。

その夜、僕は、一緒に本を読む習慣になっている父親に待ってもらい、母親に曾祖母について聞いた。

返ってきた答えは祖母に聞いたのとほとんど同じ。

馬の話は母親の方が説明が細かったけど、要は上手かったらしい。それと、なんでリリーの話の後、僕を見ていたのか気になっていた

ので聞いてみた。

「うーん、大したことじゃないんだよ」

母親は言い渋る様子。

良いから、と僕はせがむ。

こんな時強く出れるのは子供の特権だと思う。

「本当に大した話じゃないよ」

と、前置きをして

「お前の乗り方って、誰かに似てる気がしてたんだけど、今日リリ  
ーさんの話を聞いてね、やっと分かったんだよ。お前の乗り方、祖  
母さんにそっくりなんだよな」

それを聞いて、僕は胸を撫で下ろす。

もうなんか今更だけど、僕の中身について何か怪しいところでもあ  
ったのか、と恐れていた。

それじゃないなら、まあ良かった。

「まさか、お前の中に別の人格が入ったりする訳ないもんなあ」  
ドキッと音。

母親に聞こえたんじゃないかってぐらいでっかく。

恐る恐る顔を上げると、母親は腕を組んで

「そんな訳ないしなあ」

と考え込んでいた。

「さいのうがあるんじゃない？」

慌てて誤魔化そうとする。

「調子に乗るな」

笑いながら軽く頭を叩かれそうになる。

僕は逃げるようにして父親のところに行った。

それ以来、一応、子供っぽくいようかとも考えた。

だけど、今更変えると余計怪しまれるんじゃないかとも思う。

実際、どこまで怪しんでいるのかは分からない。

多分、僕の正体がバレてもいきなり放り出されたりはしない、と思う。

だけど、お互いそれまでと同じように接していけないのは想像に難くない。

それを想像すると、なんか、とても寂しい気持ちになる。

僕は、もう、この家族の一員になってしまった。

ずっとこのまま、この世界の暮らしでも、この家族とだったら後悔はしない。

出来るなら、このまま、秘密を隠したまま、死にたい。

## 秘密（後書き）

一応、サイトのところに着くかどうかは別にして、他人に正体ばらす、ばらさないの方向性だけ決めとこうかと。しなくて良いや、と。

この辺、リディアを出したかっただけなので。

新展開は次の話からするつもりです。

呼んで頂いたことに感謝

祭日（前書き）

すいません。  
間あきました。

## 祭日

祭りの日のこと。

僕は例年通り、午前中に祖父母に連れられて料理を運ぶ手伝いをすると、広場にきていたラッセル、ミランダ、そしてそれぞれの祖母らと共に僕の家に戻った。

ドーラは一度家に戻りジエーンを連れて来る。

去年はナージエとジエーンが泣くことを危惧してセシルの家にしたのだけど、2人はとても仲が良く、逆に一緒にいる方が泣くことが少ないので集まる場所を持ち回りにしたらしい。

僕もそうだけど、乱暴者と言われていたラッセルも自分の妹は可愛いようで、そしてその可愛い妹の友人もやっぱり可愛いと思えるみたい。

だから僕とラッセルは、小さい2人の面倒を見てるのは嫌では無い。ミランダにしても、彼女の家では一番下であるので、お姉さんぶるのが楽しげ。

それを微笑ましく見ながらお茶をしてる祖母達。

そこへ、ベルの音がした。

受付に置いてある、御用の際は、ってやつ。

「はいはい」

祖母が応対に出る。

僕らは気にせずそのまましていると、祖母の驚く声が聞こえた。

なんだろう、と思っていると、しばらくして祖母が戻って来る。

ドーラが、どうしたの、と聞いた。

聞かれた祖母は、声が聞こえていたことを恥ずかしがりながら

「私が娘時分に来たお客さんの娘さんが来てね。年甲斐も無く驚いちまったよ」

「すぐに分かったの？」とセシル。

「私も最初は気付かなかっただけだね、メアリーさんですよね、

なんて向こうから言ってきた。どこかでお会いにしましたか、って尋ねたら、お祖母様が一度来たことあるので、って言われてね」

「長いことやっていると、そんなこともあるんだね」

ドローは感心したように言った。

セシルも、へえ、と感心してる。

「面影はあったの？」

「流石血筋なのかね、言われて見れば瓜二つだったよ」

祖母はそう言っていると椅子に座り、また祖母達は話し始めた。

さつき来たお客さんの話は、商売柄気を使ったのか、あまり無かった。

そのお客さんはジュヌヴィエーヴ・サンなんかかんとかデュドネという名前らしい。

たまたま玄関で会った時に自己紹介された。

ただあまりにも名前が長く、長い名前に慣れていない僕は一度で全てを覚えられず、えっ？と首を傾げると

「ジュネで良いわよ」

優しく笑いながら言ってくれ

「なんなら、お姉ちゃんでも許しちゃう」

茶目つ気を金色の綺麗な瞳に浮かべた。

だから、僕はジュネと呼ぶことにする。

さすがにお姉ちゃんは恥ずかしすぎ。

ジュネは綺麗だった。

年は、体格からしてカテリーナと近い年くらいのようなだったが、背中を覆う金色の真っ直ぐな髪、丸い金色の瞳を持つ外見は、美しいものの完成形の一つとも思えた。

それでいて、立ち振る舞いは大人び気品溢れ、失礼ながらとても力

テリーナと年が近いとは思えない。

「地質を調べに来たの」

ジュネはこんな田舎町に来た理由をそう言った。

名前の長さからして、多分貴族なんだろうけど、そんな仕事をしていて儲かるのかと疑問。

「趣味半分よ、他にも樹木を調べたり、水質を見たりね。興味があれば何でもやるわ」

ジュネは、僕の表情を読み取り、苦笑いしながら教えてくれたが、生憎僕には何が楽しいのか分からない世界の話だ。

まあ、そんなことをしていても生活できるのだから、かなり良いとこのお嬢様なんだろうね。

特に宿泊期間を決めていない、と言うジュネは小さなトランク鞆を一つだけ持ち、朝に出掛けて夕方に帰ってくる。

祖母が

「はかどりましたか？」

聞くと、ジュネはにっこり笑い

「ええ、皆さんがとても親切にしてくださいるので」

そう答えるのも当たり前だと思う。

ジュネに面と向かって頼まれたら、男なら誰しも、つい頷いてしまいそうな気がした。

それがこんな田舎町なら尚更。

女性にしても、ジュネを憧れの目で見ていた。

嫉妬の言葉を一つも聞かないのは、やっぱり振る舞いに平民には到底身につかなそうな高貴さがあるからだろう。

それでいて、自ら子供に話しかける柔らかさが、外見の近寄り難さを良い具合に打ち消していた。

ミランダもちよくちよく来て毎日あったことを話しているし、ラッセルもジュネの姿を見掛けると気にしている素振りを見せる。

そうやって他人のことを言ってる僕も例外じゃない。



「もう、馬に乗れるの？すごいね」

ジュネが町から少し離れた、山の方に行くと言うので道案内として僕が手をあげた。

ジュネは流石貴族、当たり前のように馬に乗れたが、僕の年齢で馬を操れるのは貴族でも、軍人の子の中でも僅かな例を除いて、いないらしく驚いていた。

期待していたとはいえ、ジュネの真直ぐな褒め言葉に、つい

「たいしたことないよ」

そんな言葉が出てしまう。

僕が照れていることに気付いたんだらうジュネは、くすりと笑い

「じゃあ、道案内お願いね」

本当に鈴の音のような声で言われ

「うん」

顔を背けたまま、それだけ言うと、町の外に向かい馬を歩かせ始めた。

今回は万が一を考えて母親の馬の妹で行くことにしたが、正解だった。

今の僕の顔はきつと真っ赤だ。

あいつだったら、馬鹿にされるところだった。

いや、あいつもジュネにかかったら僕と同じ道を進んでしまうかもしれない。

それぐらい、ジュネという人は僕の住む町を魅了していた。

## 祭日（後書き）

すみません。

間あいてしまいました。

ざっくりとした話自体は先まであるんですが、書く時間がとれませ  
ん。

まあこんな時もあるさで前向きにやっていきたいと思います。

しかし、しばらく書いてないので、文章に違和感を感じます。

毎日少しずつでも書いてくようじます。

読んで頂いたことに感謝

夢（前書き）

急展開な感じで

## 夢

この世界には僕の住んでる町があるトリステインの他に、アルビオン、ガリア、ロマリア、ゲルマニアという国があるのだとジュネから聞いた。

ジュネは、アルビオンという、嘘か真か、常に空に浮いてる国に住んでるそうだ。

僕にはとても信じられる話ではないが、人が普通に住んでいて普通に他の国と交流があると言うのだから、伝説の類ではなく、本当の話なんだろう。

魔法なんてものが存在するくらいなんだから、それくらいアリなのかと、首を傾げつつも納得。

飛行石なんてものもあるのかしらん。

それと、ジュネは何故かことあることに僕を構ってくれている。

「ラカス君って、毎日何してるの？」

そう聞かれたので、家の手伝いと馬の練習、と答えたら

「じゃあ、練習がてら一緒においでよ」

誘われ、既に知っているだろう道程を道案内という名目で連れて行ってもらったりした。

ジュネの持っているトランク鞆の中には布で包まれた様々な色の液体の入った瓶や、大小の試験管が入っていて、僕は言われるままに土を入れたり木の皮を剥いたり川の水を入れたり。

こんなこと、逆に僕がいると余計に時間がかかるんじゃないかと思う。

そして家に帰ると

「うちの孫は御迷惑をおかけしなかったでしょうか？」

毎回、祖母が申し訳なさそうに言い

「いえいえ、逆にこちらこそお手伝いしてもらって感謝していま

す」

ジュネが笑顔で応じるといやりとりがあった。

祖母は内心、相手が貴族ということもあり、あまり僕を連れ回されたくないんだろう。

それでも僕が行くことを断りきれないのは

「私には、ラカス君ぐらいの弟がいたので、昔を思い出せて楽しかったですよ」

最初に連れて行ってもらった後にジュネが、祖母にそう言ったからだと思う。

「御迷惑をかけないようにするんだよ」

本当なら誘われても断るように言いたいのだろうけど、今までの僕の行いのお陰か、そう言うに止めた。

僕は母親似なので、綺麗な顔してるわね、と言われることはあるが、とてもじゃないがジュネと並んでも似ても似つかない。

多分、顔のパーツのどこかが微かに似ているとか、些細な振る舞いが、とか、その程度だと思う。

ただ、やっぱりお客さんはお客さんだし、一応僕なりだけど、その距離感は保とうとしているつもり。

そんな中で

「ラカス君、今から実験するけど見に来ない？」

夕食の後、ジュネが僕らの居住スペースに訪ねて来た。

母親と祖母に目でお伺いをたててみる。

当然のように良い顔をしていない。

ジュネが目の前にはいるのはつきりとは言わず

「孫を構っていただけのは大変嬉しいのですが、なにせこんな時間ですし、ウトウトでもして万が一何か壊してしまったりしたら大変ですから」

婉曲に断る。

僕も見てみたいとは思っけど、さすがに祖母達にこれ以上気を使わせるのは気が引けた。

「いえ、ラカス君は賢いから大丈夫ですよ。それに、どんな知識があっても役に立つことがあっても困ることはありませんわ」  
そうですよね、とジユネに見とれていた父親に振ると

「あ、ええ、勿論そうですよ」

父親が一も二も無く肯定してしまったので、祖母に、気をつけるんだよ、と強く言い含められてからジユネについて行った。

父親は母親に睨まれ首根っこを持たれて奥の部屋に連れて行かれていた。

ジユネの泊っている部屋には、もう大体の準備がしてあったのか、備え付けの机には何本かの試験管やビーカーが並んでいる。

その机の横に手を掛け覗き込むようにして、様々な薬品を混ぜ合わせる度に試験管の色が変わっていくのを見ていた。

ジユネは小さい声で呪文のようなものを唱えながら、次々に混ぜていく。

多分、試験管の中が青から緑に変わった時だと思う。

軽い破裂音がして、試験管の中から煙が上がって来た。

スルスルと試験管をつたい机上を滑り、僕の鼻先をくすぐる。

途端、急に眠くなった。

広い荒野のようなところに座っていた。

空は黒雲が一面を覆い真っ暗。

明かりは目の前のちよつと大きい焚火だけだった。

時々爆ぜる音がする。

ふと、目の端に黒い影が動いた。

見ると、少し離れたところに、テレビで見るような、明らかに貴族です、といった格好をしていた男がいた。

明かりが明かりだけにはつきりとは分からないけど、青年と言って

良いくらいだと思う。

僕の視線に気付いたのか、彼はこっちを見、目が合うと、笑いかけ  
て来た。

人好きのする笑み。

彼は立ち上がり、歩み寄って来た。

僕も立ち上がる。

違和感があった。

僕の目の高さ、彼の目の高さが同じくらいだったからだ。

なんで、と確認しようとする、その前に、軽く開いた右手を差し出  
された。

出した彼は、やっぱり笑っていて、握手を求めているのだと思い当  
たる。

僕が手を、何故か彼の手と同じ位の大きさになっている僕の手を、  
恐る恐る出すと、ギョツと握られた。

彼は満足したように笑い、僕もとりあえず笑みを浮かべた。  
すると、彼は握っていた僕の手を放してくれた。

ひとまず、何もされなかったことにホツとして、とりあえず現在の  
状況を確認しようとした。

その時だった。

僕の右腕が滑り落ちた。

正確に言うと、右手の肘から先に骨だけが残っている。

骨だけの右手が、咄嗟に落ちた右手を拾おうとする僕の意志に従い  
右手を掴んだが、熟れ過ぎた柿を掴んだように、粘着質な音を立て、  
骨の右手が埋まる。

そうなった時になってようやく、今の状況を理解し、急いで埋まり  
込んでいる右手から骨の右手を引っ張りだし、見ると、僕の右手は  
僅かに血と肉片が付いた骨だけになっていた。

喉の奥から引きつった音が引き摺られるようにして出ている。

そして、その間隔が広がった指と指の間に、彼が見えた。

彼は、僕を見ながら笑っていた。

次に見えたのは、天井だった。  
慌てて体を起こした。

「あら、おはよう」

髪を梳いているジュネが鏡越しに僕を見ていた。

「ラカス君たら、寝ちゃうんだもん」

そう言われて、僕はやっと自分がジュネの部屋のベッドの上にいることに気付いた。

「早くしないとご飯食べ損なっちゃうぞ」

ジュネに促されてベッドから出る。

床に足を下ろすと、膝が折れた。

「大丈夫？」

ジュネに心配された。

「だいじょうぶ」

そう言ったものの、蹲ると心臓がとても激しく動いていることに気が付き、しばらくそのままにしていることにした。

「大丈夫？」

心配そうな顔でジュネが覗き込んできた。

大分落ち着いてきたので

「だいじょうぶ」

立ち上がるうとして

「手貸そうか？」

ジュネが右手を出してきたので、一瞬ビクツとしつつ、一人で立てるから、と言い、立ち上がった。

ジュネは、僕が立つのを確認すると

「じゃあ、朝御飯に行こうか」

そう言うジュネの後について、なんか痒い首筋を搔きながら、部屋を出て行く。

全く、嫌な夢だった。



## 夢（後書き）

無理矢理押し込んだ感が仄かだと良いなあ、と。

ようやく、プロローグが終わりに向かい始めた感じですよ。

ちゃんと日本語になってるか不安です。

もう寝ないと明日起きれないので、誤字のチェック等はまた明日以降に。

読んで頂いたことに感謝

息子（外伝）（前書き）

ちゃんと日本語になってますように

## 息子（外伝）

馬を走らせる道の途中途中で、綻び始めた花が目飛び込んでくるようになった。

すっかり春だ。

そういえばもう4才になるのか、と不図ラカスのことを思い出した。誰にも言ったことが無いが、何故かあたしがラカスのことを考えるとき、いつも心に黒い物が纏わりついてくる。

最近になって、その理由が分かった。

ラカスが生まれて直ぐ、あたしは仕事を再開した。

「大丈夫なの？」

奥さん連中に聞かれ

「うちの子、大人しくてさ。あたしに似て聞き分けが良いんだよ」  
ラカスは殆ど泣きもせず、ずっと眠っているように見えた。

授乳の時も泣くこともなく小さい声を上げただけで胸に近づけると薄らと目を開けて吸いつく。

ずっと傍にいらなくても問題無さそうだったので、家族の勧めもあり短時間ながら仕事を再開した。

その時は新規の村を開拓し始めたばかりだったので、長く間をおくことをしたくないということもあった。

全く泣くことの無いラカスが心配ではあったが、ジエームズは、体調が悪そうでもないしまだ意識がはっきりしていないからだと言う。確かにラカスはきちんと食事はとるし排泄も問題無かった。

でも、あれが母親としての直感というものなのか、あたしは違うと思っただ。

母さんなら解るだろうと聞いてみたが

「大丈夫だよ」

と、あっさり。

その時は、あたしとカテリーナを生んだ母さんが言うなら、と一応納得したが、それでもやっぱり気になり、気休めにしかならないのは分かってはいたけど、帰る度会う度になるべく明るく話しかけようとした。

目を放した際に、どこか遠くに行ってしまう気すらしたからだ。恥ずかしいけど、ペンダントにまで縋って願ってしまった。

数日して、あたしの杞憂だったのか、ラカスは急に意識がはっきりし出した。

「ほら、やっぱり」

ジエームズは自分の言ったことが当たったと自慢気に言うが、あたしはなんとなく腑に落ちないままでいた。

その後もしばらく考えていたら、ポンと思いがたる言葉があった。弱っている。

そう思いつくと、まさにあの時のラカスはそれがぴつたりだった。だけど、思い浮かんだ時にラカスは元気だったし、思い過ぎだったかと考えることを止め、そのこと自体忘れていた。

そういえば、今振り返ると、あの頃の母さんはラカスに対してどこかよそよそしかった気がする。

いつの間にかそんな素振りは消えてしまったが、あれは何だったんだろうか。

それとなく聞いたことがある。

「そんな覚えは無いねえ」

あたしの勘違いだったんだろうか？

今日もラカスはデウドネさんと出かけるのだと朝言っていた。

デウドネさんは、迷惑なんて、と言ってくれているが、ラカスがいくら聞分けが良いといっても、まだ子供、どんな迷惑をかけるか分

かったもんじやない。

この前もなんだかんだでデュドネさんの部屋で眠ってしまった。たまたまデュドネさんの、あたしには全く分からない、難しい実験が成功したそうだから、まだ良かったものの、不注意で何か壊しちゃうものなら大事だ。

でもまあ、口ではそう言ってるものの、あたしもラカスがそういうことに触れる機会があることは良いことだと思う。

ジエームズの言葉はそのまま受け取れないが、ゼノビアがラカスがかっているなら、ラカスはきつと頭が良いんだろう。

飲み込みの早さはあたしが保証する。

将来、ラカスがどんな大人になるかは分からないけど、どうせなら大きいことが出来る人間になって欲しいし、ラカスならなれるんじゃないか。

これはあたしだけではなく、我が家全員が思っていることだろう。

あたしの不安の基はそこにあった。

気付いたきっかけは、ラカスが馬を乗りこなしてあたしと近くの村まで行った時、ラカスの乗り方が祖母さんに似ていることに気付いた時に、何故かラカスの生まれた直後のことを思い出したこと。

ラカスは成長が早い。

乗らせておいてなんなんだけど、あたしはラカスの年ではラカスより全然乗れなかった。

でも、ラカスなら出来るんじゃないか。

馬に限らず何か課題を出す時は毎回、そう思えた。

そして、与えた壁を簡単に乗り越える様を目の前で見せられる度に胸のなかに理由の解らない焦りが生まれた。

ラカスが馬に乗ることを拒否した時も、母さん達はゆっくりで良いじゃない、と言ってきたけど、あたしはそれじゃ遅い気がした。

馬もそうだし、字を書くこともそう、振る舞いだって良く見たら同世代に比べて大人びている。

何故、あの十日のことを思い出したのかは分からない。

それ以上の疑問なのは、何故かあたしの中で、その成長の早さとあの十日があっさり繋がってしまったことだ。

何も無いなら無いにこしたことは無いが、何かと引き換えにしている気がして仕方ない。

今回も杞憂であれば良い。

それが、最近知ったあたしの不安の原因だった。

多分、こんなこと他人、例えそれがジャンヌやゼノビアであっても、言っても信じてもらえないだろうけども。

息子（外伝）（後書き）

祖母の時もそう思いましたが、独白って苦手です。

転生ものを読んでいて、いつも思うんですが、転生先の本来生まれ  
るはずの子供の意識って何処に行くのか疑問だったので。  
神様に頼りたくは無いので、ゴチヨゴチヨと。

感想見ると、展開遅いよが続々と来てました。

原因は、作者が原作以上に主人公を気に入ってしまったからだと  
思います。

すいません。

感想の返事は、ちょっとしている余裕がないので、後で纏めてやり  
ますので。

申し訳ありません。

誤字チェック等はまた明日以降にします。

読んで頂いたことに感謝。

お祖母さん（外伝）（前書き）

すみません、としか言えないです。



## お祖母さん（外伝）

私にはチエンという、その年の離れていない妹がいる。

そのチエンが家の裏で、お母さんであるリディアとお母さんの妹マリナさんに左右から支えられながら怖々馬に乗っているのを、私は窓越しに眺めていた。

「メアリー」

呼ばれて振り返ると

「お前も行きたければ、行っても良いんだよ」

お祖母さんである、ユディトが、さっきまでしていた針仕事を止めて、微笑みながら私に言った。

「いい、私はお祖母さんという方が良いもの」  
言う

「そりゃ、嬉しいね」

元々浮かんでいた笑みがより強くなった。

それを見て、私も嬉しくなった。

お祖母さんは、三女のマリナさんが生まれて程無く、お祖父さんに先立たれてしまい、女手一つで3人の娘を育て上げた。

お母さんはバラノフお父さんと結婚して私とチエンを生み宿屋を継いだ、次女のカティアさんは嫁いで行き、マリナさんもそろそろ結婚しようかな、とそれぞれの道を進み始めていた。

お祖母さんは、私の仕事は終わったと穏やかに毎日繕い物や縫い物の仕事をしている。

私はそうしているお祖母さんの傍に椅子を持ってきて、針仕事を手伝うことを日課としていた。

お祖母さんは針仕事の合間に、若い頃の話をしてくれ、それを聞くのは楽しかった。

お祖母さんは年をとった今現在でも、なお綺麗。

勿論、目尻や口元に皺があり、金色の髪も白い部分が多い。

それでも、顔のパーツ全てがこうあるべきというバランスで位置と形で存在しているような。

年齢が逆に気品や落ち着きを運んできて、瞬間的では無い、継続的な美しさを漂わせていた。

お祖母さんが言うには、昔は、もっと綺麗で、瑞々しいという意味でだろう、好奇心に溢れていて、ありきたりな言い方をすると恋多き娘だったそうだ。

若さに依る勢いで、お祖母さんは様々な所に旅に行った。

お祖母さんのお母さんが躰に厳しい人だったので、その反発の意味もあったの、と笑いながら話してくれた。

まだ統治がしつかり為されていない土地も多く荒くれ者達との喧嘩の話、行った先での恋物語は、町の中で聞かされる伝説の類の昔話よりはるかに面白かった。

お祖母さんは頭も良く、とても些細なことまで覚えていて、何度も話してくれたお祖父さんとの出会い、お祖父さんと旅して回った話は、まるで私も一緒に旅した思い出のような気持ちにすらなった。そして

「ポロフィルネスとグラフを思い出すよ」

話終わると、私の髪を撫でてくれた。

家族の中で私だけが黒髪を持って生まれ、他は全員濃淡あれど金髪だった。

ポロフィルネスはお祖父さん、グラフはお母さんの双子のお兄さんで、まだ小さい頃亡くなってしまったらしい。

お祖母さんとお祖父さんは、その死をとて悲しんだそうだ。

お祖母さんはよく私の黒髪を指で梳き

「綺麗な髪だねえ」

と、言ってくれた。

家族でいる時など、私一人、髪の色が違うことに微かに感じる引目

に、その言葉は染み込むように嬉しかった。

性格の違いなのか、今より幼い頃同じように話を聞いた私とチエンだったが、私が想像の世界で若い頃のお祖母さんと旅をするのを楽しむのに対し、チエンは、自らも行ってみたいと言った。

ある程度の年齢になった日に、そろそろ馬に、とお母さんに言われた。

私は拒否した。

チエンのような、馬に乗ってどこかに行きたいという意味は、私には無かった。

それよりも、お祖母さんの話を聞きながら針仕事を教えてもらう方が面白かったし、私が傍を離れることはお祖母さんを悲しませるところだと思えた。

「まあ、まだ良いけどね」

お母さんは、私がお祖母さんから離れたくないことを見通していたと思う、その上で、まだ強制するべきではないと判断してみたかった。

その隙をつく形で

「わたしのりたい」

チエンが拳手し、自らを売り込んだ。

お母さんは少し悩んでいたが、その間もねだるチエンに、私のために考えていた時間を無駄にするのもと思ったのか

「良いよ、じゃあ、明日からで良いかい？」

許可を下ろした。

うん、と嬉しそうに返事をするチエンに隠れて、こっそりお祖母さんを見ると、目があった。

仕方無いねえ、とお祖母さんも私の意図を読み取ったのか困ったよ

うに笑っていた。

でも、僅かに嬉しがってる気もした。

私も嬉しくなってしまったが、顔に出すのは憚られて、ニヤけそうになる顔を抑えるのに必死だった。

チエンが本来ならまだ小さいということもあつてか、お母さんはマリナさんにも手伝わせることにした。

その代わりに、私は宿屋の受付に置いてあるベルが鳴れば、お母さんかマリナさん呼びに来るよう言われた。

3人が外で練習をしている。

馬に乗るチエンを支えるお母さんとマリナさん。

お母さんの服の胸元の辺りに僅かに鎖が見えている。

昔、お祖母さんが身に着けていたというペンダントは、今はお母さんが持つている。

代々受け継いでいる、とお祖母さんが言っていたから、いつかは私が持つようになるのだと思う。

「昔、よく困った時にあのペンダントを握ってお願いしてたのさ、そうするとどんな困難だって切り抜けられる気がしてきたね」

そうお祖母さんは言っていた。

早く欲しいなあと思う。

お祖母さんが大切にしているのが解るペンダントだから。

「行っても良いんだよ」

私が馬に乗ってるチエンを見てると思っただお祖母さんが言う。

「いい」

私は、いつも同じ答え。

馬に乗れないより、お祖母さんを1人残して行く方が、ずっと嫌だった。

お祖母さん（外伝）（後書き）

えっらい間が空いてしまいました。

全ては、作者が全くプロットを作らないのが悪いのです。

ごめんなさい。

一話書いたら、次はどうしようかな、のスタンスだったもので。

いつだったか、感想で、プロットを作らないとグダグタになります

よ、と言われましたが、正にそれでした。

反省。

読んで頂いたことに感謝

祖母さん（外伝）（前書き）

まだまだ外伝で、すいません。

## 祖母さん（外伝）

柵に沿って馬を走らせる。

我ながら手綱を持つ手に力が入っているのは明らかで、案の定

「もうちよつと力を抜いても大丈夫だよ」

柵の外であたしを見ていた祖母さんに注意された。

「うん」

頭では解ってるんだけどな、と思いながら返事をしたところで、ドアの開かれる音がした。

母さんが家の裏手にある出入り口から小包みを抱えて出て来るのが見える。

あたしと祖母さんが見ているのに気付いた母さんは

「じゃあ、ちよつと行ってきます」

祖母さんには真面目な顔で、あたしには軽く微笑みながら。

「いつてらっしゃい」

あたしが言い、祖母さんもそう言った後

「気を付けるんだよ」

と付け足した。

母さんが自分の馬に乗って出かけていく。

あたしが生まれて少して、母さんは配達業を始めた。

家計がどうなっているか、あたしはまだ知らない。

だけど、なんとなく宿屋の仕事が先細っていつていることはなんとなく分かる。

昔、まだ領地内の統治が満足でなかった頃は、商人や傭兵がどこそこで争いがあると、行き来したらしいのだけど、平和になってしまつと全てが落ち着いてしまつのだと母さんが言っていた。

あたしは子供ながら母さんの始めたことには賛成だったし、将来手伝いたいと内心思っていた。

まだ、手伝いたいとはつきり言ったことはない。

ちらりと祖母さんを見た。

祖母さんは、口元を微妙に歪めて、小さくなっていく母さんを見ていた。

祖母さんは母さんが配達の仕事始めたことに反対しているような気がした。

しているような、というのは祖母さんがはっきりと反対を口にしたことがなかったので、本当にそうなのかは分からないからだ。

でも、母さんが家を空ける時、祖母さんが宿の仕事を代わることを拒むのを見たことは無い。

多分まるっきり反対というわけではないんだろうけど、ただかえってそれが、私はここまでは手伝いますと示しているような感じも受ける。

だから、あたしが母さんの仕事を手伝いたいと言った時は怒られるのを覚悟した。

カテリーナが生まれた時のこと。

流石に母さんもその時ばかりは仕事を休まざるをえなかった。

なのに、母さんは頼む素振りを見せないし、祖母さんも手伝おうという様子を見せない。

父さんが手伝うと言っていたが、父さんも馬を預かって調教するという仕事を始めたばかりだったから手一杯なのは目に見えた。

祖父さんのバラノフは農家の生まれ育ちなので、馬に乗ることは上手くない。

祖母さんは祖父さんの仕事を手伝ったりしながら宿屋の仕事もしていたけど、母さんが宿屋の仕事をすることを私が手伝えば、祖母さんが母さんの代わりに仕事をするのは難しく無いと思った。

何故そうしないかと言ったら、祖母さんは、うーん、と要領を得ない。

「お祖母ちゃんはお母さんが嫌いななの？」



思い余って聞いた。

「そんなことは無いよ」

多分、あたしは泣いていたのかもしれない。

祖母さんはあたしの頭を撫で、宥めあやすように言った。

そして、口元を微妙に下げた後、とても言い辛そうに

「私も年だからね、とてもじゃないけど無理なんだよ」

あたしには、そうは思えなかった。

たしかに髪は白髪混じりで見た目も年相応であったけど、あたしに教える為にたまに手本を見せてくれる時なんて、年齢を感じさせないほど躍動的であった。

それ以上、手伝ってあげて、と訴えなかったのは、祖母さんの雰囲気、これ以上言っても無駄なんだなと心のどこかで感じてしまったからだと思う。

「じゃあ、あたしが手伝う」

よく分からない意地と、頑張っている母さんが見捨てられたという怒り、悲しみからとっさに言ってしまった。

「かまわないよ」

祖母さんは少し悲しそうで、僅かに優しい声だった。

覚悟に反して、母さんを手伝うと言った後も、あたしは祖母さんから手ほどきを受けることが出来た。

あたしとしては、祖母さんにはつきりと好まざることを言ってしまった、だから、てつきりもう教えてもらえないものだと思っていたのに、祖母さんの方から

「さて、やるうか」

と言われた時には、何をやるのか分からず、つい顔を見たままの状態で固まってしまった。

「何、変な顔してるんだい？別に教わりたくないってなら私はいいんだよ」

あたしは慌てて動き出した。

結局、祖母さんは母さんに対してどう思っていたのか掴み取れないままだった。

根っこの部分では、嫌い合っていないかったような気がするが、互いに譲れない部分があつて、互いにそこを主張することもなく、互いに触れないようにしている。

そんな感じだった、のだろうか。

あたしは人物としての祖母さんは間違いなく好きだった。

明るくて、優しく、たまに厳しくて、子供がしたがる多少の無茶も祖母さんは子供のようによく笑いながら付き合ってくれた。

その点は母さんより好きな部分だったかもしれない。

だから、嫌われたくなくて、主張していたような気がする部分の理由を尋ねることは出来なかった。

祖母さんが亡くなる前日だった。

一年前に祖父さんが亡くなり、傍目から見ても、張りをなくしていた祖母さんは風邪をこじらせ、ベッドで寝ている日が続いていた。

宿屋の受付に座っていたあたしは、食事を持っていったカテリーナを介して、呼ばれた。

「すまないね」

咳き込みながら話す祖母さんは日に日に小さくなっていったる気がする。

「なにか欲しいものがあるの？」

聞くと、祖母さんは首を横に振り

「アンに渡しときたいものがあつてね」

体をベッドの横に備えついている小さな棚に伸ばした。

あたしは手伝い、引き出しから両手に乗るくらいの小さな包みを取

り出す。

手触りからして、小さな物がたくさん入っている。

「私とバラノフがコツコツ貯めてきたものさ」

言われてみると、袋一杯に銀貨銅貨が入っていた。

「あなたにあげるよ」

「え？」

突然のことについ声が出た。

「そのお金で中央に出な」

「何？急に？」

あたしは小袋と祖母さんの顔を交互に見た。

そんなあたしの動揺を無視して、祖母さんは話を進める。

「うちの一族は長いこと続いてきたけど、そろそろ終わる時なんだと私は思っただよ」

「ちよつと待つて、突然なんなの？」

ひとまず落ち着かせて欲しい。

話を止めようとするあたしに、祖母さんは

「突然ですまないねえ」

苦笑を浮かべ謝ると同時に、咳き込んだ。

口元を抑えながら

「どうやら、私もそう長く無いみたいだからね、これだけは言っておきたいのさ」

「そんな、」

まるで遺言みたいじゃない。

「そうさ、これは遺言さ、だから話させておくれ。言えるうちに言っておきたいからね」

また、一つ咳をし

「私はずっと考えてたんだよ、どうやったら男の子が育たないなんて馬鹿な話が終わるかをさ。そして、ようやく一つの結論に辿りついたんだよ」

祖母さんは、分かるかい？とあたしに振り、あたしは首を横に振っ

た。

「私たちがいつまでも貴族の誇りつてやつをどこかに抱えてたからさ」

私もそうだったけど、と祖母さんは口元を歪める笑いを浮かべる。「もう平民になるうじやないか、新しい道をいこうじやないか、そうすれば、きっと男の子が育たないなんて馬鹿な話は終わる」

祖母さんは真つ直ぐにあたしを見て

「アン、あんたはこの家を出な、その方がきつと良い」

その時の祖母さんには有無を言わせない迫力があつた。

迫力に負けて、あたしは首を縦に振る。

祖母さんは満足したように笑つた。

そして、祖母さんはそうやれば生まれてくると言い切る男の子に付けて欲しい名前を言ったところで体力の限界に至つたのか、話の合間にも続いていた咳き込みがさらに酷くなつた。

慌てて、寝ているように促した。

祖母さんはあたしに支えられながら

「メアリーにはこのことは秘密にしておくね。あの子は、お祖母さん、アンの曾お祖母さんだね、お祖母さんのことが好きだったから、この土地、貴族の誇りから離れることを好まないだろうから」

その言葉に祖母さんと母さんのすれ違いの理由を一端を聞いた気がした。

あたしの顔に出たのか

「そうだね、アンには気苦労をかけたね」

ごめんね、と言いながら、あたしの頭を撫でた。

それが祖母さんのはつきりと喋つた最後の言葉だつた。

祖母さんはそのまま意識を失い、たまにうわごとのように、バラノフとグラフの名前を呟くようにして眠り続け、未明に息を引き取つた。

その三カ月後、あたしは中央に出た。母さんには、一度行つて見たかつたからと、祖母さんの話はしなかつた。

言つたら止められるように思へたし、離れて色々考えてみたかつたからだ。

そして六年後、ジエームズを連れて戻つてくる。

最後は単に性分の話。

のこのこ逃げるようなマネは嫌だつた。

あたしは戻つてくると、配達の範囲を広げ始めた。

一平民として、この土地で商売をして、祖母さんの言っていたものに挑戦しようと思つた。

すると、あたしの思いに呼応するかに男の子が生まれ、その子にラカスと名づけた。

「もし男の子が生まれたら、わがままだけどね、ラカスって名づけてくれないかい？」

「ラカス？」

「我が家の一番最初のご先祖様、ラカム・ド・ヴェルヴィーユの名前をもらったのさ。平民のラカス、うちが平民として生まれ変わるには最適だろう」

祖母さんは、悪戯をした子供のように笑っていた。

祖母さん（外伝）（後書き）

外伝が続きます。

一人称をとっているので書けなかった部分が多く、しかも間を空けると読んでる人が宙ぶらりんになるかな、と結構一気になってしまった感じが。

それ以前に、投稿の間隔空けんなよ、という意見には、すいませんとしか言えませんが。

一応、プロット自体は、この流れが終わるところまで作ったので、あとは書くだけなので、間隔空けないようにします。広げた風呂敷をまとめるのに、とても苦労しました。上手くまとまってるの良いなあ、と。

読んで頂いたことに感謝

夢の世界（外伝）（前書き）

これで外伝はひとまず終わります。

## 夢の世界（外伝）

青年の名は、ジャック・ド・ヴェルヴィーユというらしい。

格好もそうだが、名前まで貴族みたいだと思ったら、実際本当の貴族だそう。

何の冗談なのだろう？

右手を突然骨にされ、怯え尻を引き摺りながら逃げ回る俺に、青年は困った表情を浮かべ

「安心しろ、僕も同類だ」

そう言っただけで自らの右手を左手で掴むとズルリと肉を剥した。

多分、俺を落ち着かせるための行為なんだろうけど、逆効果、俺は更に怯えの声をあげさせられた。

彼は肩を竦め、呪文のようなものを唱える。

すると、俺の右手が光り、ジワジワと肉の部分が復元された。

同様にして、彼自身の右手も治した。

「こっしたら話をきいてくれるか？」

俺はとりあえず、肉のついた右手を触ろうとする。

「触れるのは止めた方が良く。まだしっかりと定着したわけではないからな」

と止められた。

仕方無く、言われるままに立ち上がった。

青年は自分の名前を言い、俺の名前を尋ねる。

名前を言っ

「変な名前だな」

変な顔をされた。

そりゃ、その格好から考えられる時代の感覚からしたら、そうだろうと思う。

その流れから俺の時代背景の話になり、何か持っていないかと漁っ



た物の中で、ジャックが一番興味を持ったのは、たまたまスラックスのポケットに入れていたタバコ。

財布も持っていたので小銭やら札もあったので、ジャックの世界には無いらしい札と知らない絵柄について、多少の興味は持ったみたいだが、より強い関心を示したのはタバコだった。

ジャックもそうなのは分るのが、こつちにだって聞きたいことが山程ある。

「ここは何処なんでしょうか？あなた以外にも人はいるんですか？空は雲が渦を巻いていて、日は一切差していない。

明かりは焚火だけで、周囲を見ても荒野のような大地が広がり草も生えていない。

アメリカのアリゾナだったかの風景がなんとなく浮かんだ。

「ここが何処かは後にして、まず、ここにいるのは僕だけか、という質問の答えだが」

ジャックは俺から視線を外し、ぐるりと周囲に向けて、大丈夫だぞ、と叫んだ。

途端、周囲一帯からザリツと砂を踏む音がして、影が動き出した。

岩だと思っていたのは蹲っていた人間だったらしい。

30人から40人くらいだろうか、それが一斉に立ち上がったのには「うわっ」

つい声が出た。

「これも怯える必要は無い。皆、僕らの仲間だ」

わらわらと集まって来た人達は、多少服装や年齢に違いはあるものの、ジャックと同じ貴族のような格好をしていて、ジロジロと僕を見ってくる。

集団からの中から、よく来た、とか、なんか持ってきたか、とか聞こえるけど歓迎されてる、のかな？

戸惑う俺にジャックは

「すまないが、これを一本貰っても良いだろうか？」

タバコを一本持って聞いてきたので、頷いて許可を示す。

展開に押され、声が上手く出なかった。

ジャックがまたさつきと違う呪文を唱えると指先に摘んだタバコが光る。

「ふむ、なるほど」

感心するように頷き、また違う呪文。

唱え終わると同時に、ジャックの足下にバラツと俺のと同じ銘柄のタバコが小山のように出てきた。

「何それ？魔法？」

なんて便利な、と思ってしまうた。

「そうだが？」

ジャックは、何を当たり前のことを、といった風情。

そのやり取りの間に、集まってきた人達は好き勝手に出てきたタバコを啜え吸い出した。

自分でも変わった銘柄を吸っている自覚があるので、口に合うんだろうかとは思ったが、お気に召してくれたようで、それを聞いた後ろにいた人たちが詰めてきて、俺はジャックとともに場を少し離れる。

「すまん、こんな世界では楽しみなんて殆ど無いんだ。たまにあるこんな時が唯一の楽しみなんだよ」

俺は、はあと受けた。

「一応、他にも山程いるが、他の場所に隠れてる」

ジャックも持っていた、基になった一本を吸い出した。

「なにせいきなり暴れ出す者もいたからな、最近は無いがね、用心のためさ」

そして急に

「君は、酒は飲めるか？」

と、聞かれた。

「まあ、人並みに」

俺もタバコを啜えた。

「なら、しばらくは大丈夫だろう、正気では無いが女もいる、気に

しないなら好きに恋愛をしても良い。なるべく楽しみは見つけた方が良いぞ」

その言い方を聞くと、まるで牢獄に閉じ込められているような印象を受けた。

「間違ってはいないな。はっきりとした時間は分からないが、僕は少なくとも1000年はいる」

その言葉に、俺そんなに生きられないな、と我ながらずれたことを言ってしまった。

苦笑いするジャック。

とりあえず、説明をもらう前に、ライターを持っていなかった  
ので火を分けて欲しかった。

夢の世界（外伝）（後書き）

正直、あまり説明することも無いです。  
次から、本編です。

読んで頂いたことに感謝

**事の終わりの始まり（前書き）**

纏まっていると良いと思っ

## 夢の終わりの始まり

春が終わる頃あたりから、僕は自分の体に違和感を感じ出した。体がダルいというか、感覚と動きがずれるようになり、物を落としたり転ぶことが多くなった。

風邪かなと思うんだけど、咳が出るとか熱っぽいとかは無い。

祖母や母親に、ひき始めかもしれないから、大人しくしているようにと言われた。

僕もそうかもしれない、と薄ら寒い日とかは馬に乗ったりせずにナージェの面倒を見たり、寝る時の場所もわざわざベッドを動かしてもらい、窓から遠い場所に動かしてもらった。

そうやって用心しているつもりなのに、治るところか緩やかに悪化していった。

「風邪じゃないんじゃない」

同じ部屋で寝ている母親が言い出した頃、僕は感覚とのズレに加えて、食欲が無くなり味覚まで変になっていた。

味がぼんやりとしか感じられないくせに、香ばしいもの、強い味付けのものが食べられない。

食べないよりマシと、ナージェの食べ物より少しマシくらいのをようやく食べている。

味わえないため、以前は食べられなかったものがなんとか食べられるようになっていたのは怪我の功名というのかな。

そこまで達すると、流石に家族は心配し馬に乗ることを完全に止められた。

そして、違和感を感じ始めてから一番ショックだったことが起きた。その時には、餌、水を運ぶことも止められていて、祖父が運ぶのを見ているだけの僕に、あいつは、仕方無えなど、鼻を鳴らしていた。また、馬鹿にされちゃうな、と思いつつ、しばらく乗れないんだよ、と伝えた。

馬は、何？と聞こえなかったみたいに首を伸ばした。

「だから」

もう一度言う。

馬は更に首を伸ばすだけ。

それで、気付いた。

僕の言ったことが分かっていない。

首を伸ばしきった馬は、小さく嘶いた。

やっぱり僕も何を言われたか分からない。

僕は首を横に振って、それを伝えた。

今まで近く感じていた存在が急に知らない存在になってしまったみたいで、それがとても寂しくて、目の前に伸ばされた頭を抱き締めた。

馬も頭を僕の体に擦り付けるようにしてきた。

悲しんでくれている。

そんなことしか分からないのが、悲しかった。

そんな時、ジュネが

「私が少し様子を見てみましょうか」

と言ってくれた。

魔法を使える貴族様ならと、祖母は、申し訳ありません、と言い、そうして頂けますか、とジュネに頼んだ。

ジュネはさっそく自分の部屋で僕を簡単に診察をし

「風邪じゃないみたいですね」

と、僕の付き添いで来ていた祖母に言う。

僕がベッドで言われたまま横になっていると、部屋の隅で祖母に、何か思い当たることはないかと聞いているのが聞こえた。

「実は」

鼻を嚙るような音の後、うちの家系の男の子はこんな感じで亡くなるのだと、祖母。

ジュネが、出来る限りのことはやってみますからと、祖母を慰めるのが聞こえる。

翻って、当の本人である僕は、祖母の口から出た言葉に変な納得を感じていた。

死、という本来怖がるべきなんだろう概念も、どこか遠くの話のようには思えた。

お金の話も出ていたが、ジュネは、確実に治せるわけではないので、と辞退したみたい。

その日から、調査が一段落したというジュネは度々僕を抱えるようにして馬に乗せ、せっかくだから、と実験ではなく、場所によって違う石の質や、土の種類によって足跡の付き方が違うなど、鑑識作業のようなことを教えてくれた。

結構楽しかった。

祖母が、そんなに歩き回って大丈夫なの、と心配していたが「任せてください、できる限りのことをしていますので」

ジュネにそう言われては何も言えないようで、僕を見て目頭を抑える光景が時々見受けられた。

家族も何か気付いているようだったが、僕の手前、そ知らぬふりをするつもりらしい。

朝夕二回、ジュネが呪文のようなものを唱え、僕の体を光らせるんだけど、異常は無いらしい。

何の実感も無いまま過ごしていたある日の朝、ジュネに光らせられた後、ジュネは少し考える姿を見せた。

僕を無視して、ジュネは自分の鞆から小さい手帳を出すと、パラパラとページを捲っている。



探していたページが見つかったのか、何度か目を走らせると、閉じた。

「んー」

目をつぶり、困っているような声を出した後

「ごめん、ラカス君、ちよっとペンダントを貸してくれる？」

素直に首から外し渡した。

「今日一日借りても良いかな」

別に使う用事も無いので、頷き、ジュネが、今日は出掛けないからと言っているので、大人しくしつつナージェの相手でもすることにする。

その最中、偶然見えたのか、祖母が

「あれ、ラカス、ペンダントはどうしたんだい？」

ジュネとのやり取りを話すと、祖母は二階のジュネの部屋の方を見ている。

一応、夕方にジュネのところに行き、チェックしてもらったけど、やっぱり異常無し。

そして次の日、僕はジュネの部屋を尋ねた。

「なにかわかったの？」

ジュネは一枚の紙を見ていた。

寝てないのか、ベッドは綺麗なままだった。

ジュネは僕の質問に答えず、紙を僕に向けて掲げ、ジュネの目線から、僕の顔と紙が並ぶようにした。

しばらくそうした後

「ラカス君さ、ちよっと来て欲しいんだけど」

連れられるままに部屋を出て、階段を下りる。

行き先は、僕らが食事をとっている部屋だった。

「どうかしましたか？」

食器を洗っていた祖母は手を止めると、ジュネに椅子を勧めた。

僕と祖母も椅子に座る。

3人が座るや、ジユネが

「ラカス君のことなんです、原因が分かりました」

無機質な声色だった。

いきなりのことに、僕も祖母も固まる。

言われた言葉をじわじわと理解しだすと、

「本当ですか」

祖母はエプロンで目を押さえながら言った。

「それで、一つお聞きしたいことがあるんですが」

ジユネは声のトーンを変えず、喜んでいる祖母に、なんでしょうかと促されて、言った。

「ラカス君は一度、亡くなりかけた、若しくは亡くなったことはありませんか？」

「そんなこと」

祖母が立ち上がった時だった。

僕の心臓が強くうたれ、世界が回り、側面に強い痛みを感じた。

水の中を漂っていた。

寒くは無い。

それどころか、まるで細胞の全てが水に溶け出し、何処までも広がっていくような気すらする。

それがとても気持ち良い。

何かに抱かれるように深く沈んでいく感覚に、ゆっくりと瞼を閉じた。

ふと目を覚ますと、真っ黒な空があった。

何処だろうと体を起こすと、その場所には見覚えがある。ジュネの部屋で見た夢の風景と全く同じだった。

違うのは、目の前に立っている人物が2人だということ。

その2人を僕は知っている。

1人は、夢に出てきた青年。

もう1人は、

「こういうのも久しぶりって思うか」  
僕だった。

ラカスの顔より、誰よりも見慣れた、この世界に来る前の僕。

「久しぶりだな、俺」

前の世界の僕は、口元だけで笑いながらそう言った。

## 夢の終わりの始まり（後書き）

この展開は、少し前にハマったTOAの影響です。

説明は、それぐらいかなあ。

この辺、殆ど後付けなので、矛盾が無いと良いんですけどね。

読んで頂いたことに感謝

## 歴史（前書き）

正式な歴史が分からないので、ぼやっとした感じで。

## 歴史

「どーゆーこと？」

僕は何も理解出来ていない。

何はともかく、説明が欲しかった。

前の世界の僕が、隣りの青年を示し

「ジャックさんが説明してくれるから、それを聞け」

そしてポケットからタバコを出し、啜え、ジャックというらしい青年に、良いですか？と言った。

ああ、とジャックは手を差し出し、一言三言口にすると、掌の上に小さな火が浮く。

それでタバコに火を点け、ひと吸い。

「じゃあ、行ってきますんで」

「頼んだ」

何処かに歩き出した、前の僕をジャックが見送る。

「さて」

視線が2人の間を行ったり来たりしていた僕をジャックが見た。

「まず、始まりから話そうか」

昔々、まだ今のように領地というものが、中央に近い地域でしかきちんと決められておらず、各地でメイジがそれぞれの土地を持っていた時代、とある地域にヴェルヴィーユ家も同様にして土地を持っていた。

けしてお世辞にも大きいとは言えない広さだったが、なんとか家を保っていられたのは、ヴィーヴルという竜の住処が土地の中にあっただからだ。

ヴィーヴルは地母神のような存在であり、人間は収穫物等を捧げ一年の豊作を願う、その代表を代々勤めてきたのがヴェルヴィーユ家であった。

周囲のメイジは竜を恐れて攻め込めず、ヴェルヴィーユ家も自らの分をわきまえ周囲に嫉妬することをしない。

一種の中立国のようになっていた。

竜と人間が共生する平和な時代だった。

しかし、そんな時代も終わりを迎える。

中央の貴族は国家の権力を強くするために、国中の領地、全ての持ち主を明確にすることを始めた。

その方法は、中央の貴族に都合の良い、若しくはいち早く中央と繋がったメイジが中央の威光を身に纏い、周囲のメイジに下につくことを迫るのが大半だった。

ヴェルヴィーユ家は出遅れた。

「言い訳になるかもしれないが、その時は家中、他の事で頭が一杯だったんだ」

ジャックは、自虐的に見える笑みを浮かべた。

「僕が、ヴィーヴルと恋に落ちてしまったせいだ」

ヴィーヴルは稀に人間の姿をとることがあるらしい。

たまたまその姿のまま水浴びをしているところに、ジャックは出くわした。

「一目惚れだった。僕は知ってる言葉の全てを尽して、彼女を口説いた」

驚嘆すべきは、自分を口説こうとする人間に呆れたヴィーヴルが竜の姿に戻ってもジャックの態度に変わりが無かったことだろう。

興味を持ったヴィーヴルはジャックを試した。

ヴィーヴルは額に埋め込んだ紅い宝石によって、竜としての力を振るうことが出来る。

しかし、宝石が濡れることを嫌い、水浴びをする時にのみ外す習慣

があつた。

その時も、宝石は近くの岩の上に置かれていた。その宝石は人間に力を与えるとされ、宝石を狙い近寄ってくる人間もいるという。

ヴィーヴルは宝石が今、すぐ近くの岩の上にあることをそれとなくジャックに知らせた。

僅かにでも宝石に関心を示せば殺す心積もりで。

ジャックの行動に躊躇いは無かつた。

宝石に目もくれず、ヴィーヴルの入っていた湖に足を踏み入れた。

ヴィーヴルは、ジャックを受け入れた。

数年後、ヴィーヴルは女の子を産んだ。

女の子はデメテルと名付けられた。

しかし、この事は紛れも無く禁忌に触れることだとされた。

ジャックは隠そうとする両親から、形だけでも、と嫁をとることを迫られたが、全て突っ撥ねていた。

ヴェルヴィーユ家に時代の波が襲ってきたのは、そんな時だった。

「僕は、父さんや兄さん達と共に戦い、死ぬつもりだった。負けるのが目に見えていたとしても、僕達はメイジの誇りとして逃げることは出来なかつた」

それは、別れを告げたヴィーヴルに止められた。

「幾ら竜と言つても、そこら辺は人間の女と変わらないらしい」

ヴィーヴルは幾つかの条件をつけた上で、ヴェルヴィーユ家に力を貸すことにした。

「君がいつも身に着けていたペンダントがあるだろう?」  
僕は頷く。

「この世界はあのペンダントの中にあるんだ」

これには、あんな古ぼけたペンダントが、と驚いた。

「あんな、とは酷いな」

ジャックは苦笑い。



「あれは僕がヴィーヴルの住みかにしていたところの土から作ったものなんだよ。生憎、僕は土の系統じゃないから、あれでも良く出来た方なんだけどね」

ペンダントの中にヴィーヴルはこの世界を作り、ジャックとヴィーヴルは入った。

ペンダントを介してヴェルヴィーユ家に力を貸した。

そして、ヴェルヴィーユ家が危機を乗り切った後、ジャックの兄、ラカム・ド・ヴェルヴィーユが正式に貴族として認められ、ヴェルヴィーユ家の歴史が始まる。

ジャックとヴィーヴルの娘、デメテルはラカムの娘として育てられることになり、ペンダントはデメテルに贈られた。

以降、デメテルの血筋をヴェルヴィーユ家当主の血筋としてヴェルヴィーユ家は続いていく。

これが、ヴィーヴルの出した条件だった。

「よく、そんなの飲めましたね」  
せつかく貴族に認められたというのに血筋を残せない兄の気持ちは想像できない。

「兄さんには申し訳ないと思ってる。今でも、良しさ、と言ってくれた時の顔は忘れられないよ」

兄は弟に、どうせ死ぬ身だった、ヴェルヴィーユの家名が残るなら私の血筋なんて、と言ったそうだ。

兄弟仲はとも良かったらしい。

嫁をもらうのを断り続けられたのも兄の協力があったればこそだった、とジャックは言った。

そして、時は流れ、今の一宿屋になると。

「そんな力があっても没落するんですね」

「仕方が無いさ。時が経ちヴィーヴルの血が薄くなると共に、受けられる力は弱くなっていった。元々優秀なメイジを輩出する家系じゃないから、当然といえば当然かもしれない」

と、そこまで話した時

「貴様、自分ばかり先に行かず、手の一つも引かんか」

「貴女が、夫以外の者が触れるでない、って言ったんでしようが」  
男女の言い争いの声がした。

男は前の僕で、女は知らない人だった。

やっぱり貴族のような格好で、年はジャックと同じくらいだと思つ。  
女は僕たち、というかジャックを見つけると

「ジャック」

飛びか、失礼、抱き付いた。

「ウラ」

ジャックは受け入れ、見上げる形の女の唇にキスをした。

しばらくして唇が離れると、2人は顔を見合わせたまま、笑い合う。  
ジャックはその笑顔のまま、自分の体を開き、女を腰抱きにした格  
好で

「紹介する。僕の妻のウラだ」

と、言った。

妻？

その紹介されたヴィーヴルは

「妻のウラじゃ」

腕を組み、腰に回された手を視点に体を反らせ、ふふん、と鼻を鳴  
らしていた。

## 歴史（後書き）

まず、内容を理解してもらえないのかが心配です。  
上手く日本語が使えません。

ヴィーヴルのキャラは、微妙に後悔してるかもしれない。（笑）

読んで頂いたことに感謝

彼と彼女の世界（前書き）

筋は通ってるかは自信無いですが。

## 彼と彼女の世界

ウラは、腕を組み体を反らしたまま、しげしげと僕を見てきた。スレンダー美人というのが、僕がウラに対する第一印象。ほっそりとした体格で、卵形の輪郭に吊り目勝ちな瞳が良く似合っていた。

丁寧に梳かれている金色の髪が、ドレスの形の関係でむき出された肩に柔らかく当たり、体の前後に分けられ流れている。

「ふむ、ジャックと妾の血を継いでいるだけあって、まあまあじやの」

「どうやら及第点は頂けるらしい。」

「そういえばこの人って母親達の祖先なのかと、もう一度見た。うちの血筋、胸が小さいのはこの人が祖先だから、と納得。」

「今、失礼なことを考えんかったか？」

「いえ、べつに」  
「むー、と睨んできた。」

「まあ、良い。それで、どこまで話したのかの？」

「睨んでいた顔は、ジャックを見上げ尋ねた時には笑顔に変わる。」

「僕らの馴れ初め辺りまでかな」

「覗き込むようにして、にっこりと笑いながらジャックは言う。  
「なっ」

「ウラは顔を赤くした。」

「そ、そんな言い方をするでない」  
「腹部にめり込む拳。」

「ジャックは呻き声を漏らして崩れ落ちた。」

「全く、照れるでないか」

「どうやら、今の行為は照れ隠しだったらしい。」

「ああ、確かにうちの祖先だ、と確信した。」

「まだ若干顔が赤いが、一応照れが収まつたらしいウラが」

「では、その後の話をしようかの」  
ジャックの続きを話し始めた。

無事生き残り、広い領地を得たヴェルヴィーユ家だったが、領民の中に、ヴィーヴルがいなくなったのではないか、という不安が広まっていた。

ヴィーヴルは気紛れに空を飛び回ることがあり、それを見た者は祈りを捧げるなり貢ぎ物を出すなりするのが慣習となる程ヴィーヴルと民の間柄が近かったものだから、とても隠し通すことは出来なかった。

元々、ヴィーヴルを信仰していたのも、ヴィーヴルがその土地の民に豊作をもたらしてくれとされるとされていたからであり、実際、どんな年もヴェルヴィーユの土地は周囲の土地より出来が良かった。

それは竜の力を周囲に知らしめる一因にもなっていた。

ラカム・ド・ヴェルヴィーユは、ヴィーヴルがこの地を去ったことを発表し、その代わり、デメテルをヴィーヴルの加護を受けた者として立てることで、それを乗り切った。

領民は半信半疑だったが、その年の作物の出来は、例年と比べても遜色が無く、ひとまずデメテルを信用した。

しかし、デメテルは短命で亡くなる。  
辛うじて、1人、娘を残した。  
ジャックが補足した。

「多分、人間の体に竜の血は強すぎたんだと思う。それと、何代も女性しか生まれなかったのも、そのせいだと思う。ヴィーヴルという種は雌しか存在しないそうだからね」

それでも、時が経つにつれ、竜の血が薄くなり、寿命が延びだし、極稀に男子も生まれるようになる。

が、生まれてきた男子は皆、生まれつき体が弱い。

酸をかけられたように、魂が血によってじわじわと溶かされていくのが原因だった。

「どうやら、妾の血は男とは全く合わんようじゃ」

妾とジャックの仲はこれ以上無い程良いのにおう、と悲しげにウラ。助けてあげて欲しい、と願う母親達の思いをなんとか聞き入れたかったウラだが、いくらヴィーヴルといえど万能ではない。

結局、出来たのは、血によって傷付けられる魂の痛みを感じさせないようにするだけだった。

それでは、魂が殺されること、要は植物人間のようになることを止められたわけではない。

ウラは不憫に思い、そうなる前に魂をペンダント内の世界に呼び込むことにした。

一種の安楽死だった。

問題はまだ終わらない。

血がますます薄くなった頃、とうとう作物の生産量が下がり始めた。「血が薄くなった所で、妾の娘達じゃ、力を貸さぬわけは無いが」と前置きをし、

「困るのは、声が聞こえ辛くなったことじゃ」

ウラの娘達の願いをペンダントの中で聞いたヴィーヴルが力を貸すという形なので、扱える力というものに変わりがない。

しかし、血が薄くなると、その願いが聞き取りづらくなるのだと言う。

助長というやつなのか、水をやり過ぎて返って根腐れを起こすような、願いと結果が噛み合わない状態になった。

タイミングを見計らっていたようにして、周囲の、貴族となった者達が動き出す。

ヴェルヴィーユ家が国家の信仰している宗教と異なるものを信仰している、国に申し立てた。

中立国として存在していたヴェルヴィーユ家の、長く平和が続いていただけあって、豊かな穀倉地帯が狙いだった。

竜の力が衰えたと判断した周囲は、どんな取り決めをしたのかは分からないが、以前のように水面下ではなく堂々と国の旗を持ち、ヴェルヴィーユ家に迫る。

一国に田舎貴族が立ち向かえるわけもなく、ヴェルヴィーユの名は消えた。

「それで、貴様らの話じゃ、先程ジャックが妾の娘のために作ってくれた、この世の物とは思われんばかりに輝いておるペンダントの話をしたじゃろ」

その表現に、僕とジャックは顔を見合わせて苦笑い。

僕の生まれた時代になってもまだ、竜の血と男子というのは馴染まないらしい。

と、ここまで話したところで

「ちよつと良いですか」

これまで一切話していなかった、前の僕が割り込んだ。

「とりあえず、先にやっつけてしましましょう」

そう言つと、ウラは、ああそうじゃな、と頷く。

ウラは僕を真つ直ぐに見て

「続きはまた後にして、ひとまず先に貴様らの魂を元の形に戻す」  
そう言つた。

「そんなこと出来るんですか？」

「可能じゃ」

ウラはそう言つと、目を瞑り、一瞬全身に力を込めた。

すると、額が縦に裂け、裂け目から紅い宝石が見える。

「これを核にして、ラカスの魂を結び付ける」

ウラは額から宝石を取り外し、自分の掌に置くと、瞳を閉じ、集中し出した。

金色の髪が持ち上がり、ウラの全身を紅いオーラのようなものがうねり走る。



宝石が宙に浮き始め、宝石から二本の細い光が僕と前の僕の胸に伸びてきた。

僕の胸に刺されると、僕の体を紅いうねりが纏いだす。浮いた宝石が一瞬弾けるように光り、眩しさに僕は目を閉じた。

瞼の裏の白さが無くなったのを感じ、ゆっくり目を開けると、眼前の景色が一変。

雲に覆われていた空は真つ青な空になっていて、乾燥した大地は白い小さな花が広がる丘に、焚火は太い一本の大木に、寒々しかった風は初夏のような爽やかな風に。

「どうやら成功したみたいじゃな」

キョロキョロと驚いていた僕にウラは満足気だった。

「これが妾とジャックの世界じゃ」

ウラは手を広げ、世界を示した。

呆気にとられていた僕は

「なあ、俺」

と、前の僕に呼ばれた。

「お前はずっと外にいたけど、俺も一度くらい外の世界に行ってみたいんだ」

少しだけ良いだろ、と言われた。

「いいけど」

と答えた、が行けるのかとも思う。

「魂を元に戻したが、長い時間でくっついてしまった部分はある。短時間ならなんとか大丈夫だよ」

ジャックが言った。

前の僕は、じゃあ、とジャックとウラに言い、ウラは、うむ、ジャックは、言われたことはしといたから、と言った。

そして、僕に

「子供の体で悪いけどな、外で一本だけ吸わせてもらっわ」

お前と会うのもこれで最後だろうからな、と口元だけで笑いじゃあな、と軽く手を掲げた。

「家族を、大切にしろよ」  
そう言い残すと、スッと姿が薄くなり、消えた。

彼と彼女の世界（後書き）

一応、気はつけてるんですが、他の上手いやり方はなかったのかと疑問が止まらないです。

とりあえず、ウラはカテリーナレベルに書きやすいのが唯一の救いでした。

読んで頂いたことに感謝

夕暮れ（前書き）

なんか、長くなってしまいました。

## 夕暮れ

前の僕が消えた後、改めて変わった世界を眺めた。

なだらかに下る丘の麓一面に金色に輝く畑が広がっている。

あれは麦畑だろうか。

「ここは妾とジャックが生きていた頃のヴェルヴィーユを基にしたのじゃ」

ウラは風で靡く金髪を押さえながら言った。

さて、あまり時間も無いしの、とウラは続きを話しだす。

ウラとジャックはペンダントに入ってから、ずっとこの世界で暮らしてきた。

外の状況を知る手段は娘達の声と、この世界にくる息子達から歴史を聞くことのみ。

ヴェルヴィーユ家が攻め立てられたのも、それを嘆き悲しむ娘の声から知った。

貴族として、恥ずかしくない死の為に力を、と願う娘の声を無視し、ウラは、娘達と幾人かの共を貴族の目が届かないと思われた今現在僕が住んでいる町に娘を飛ばした。

領主がいなくなったヴェルヴィーユはすぐに白旗を振る。

大人しく領土を差し出せば、そこで戦争は終わりという貴族の決まりごとを知っていたジャックの考えだった。

国の旗を振っているのだから略奪行為も最小限に抑えられるだろうと下唇を噛んだ末ではあったが。

その当時、ヴェルヴィーユ家の再興を娘達が考えたかは知らないが、少なくともウラとジャックは望んでいなかった。

ヴェルヴィーユもいなくなり、竜の血が薄くなっていくヴェルヴィーユ

家は、もう以前のように存在することは難しいだろう。

特にウラは、今回は万が一助けられたが、これから先、もし再興を目指すなら再び娘達が戦火に立ち向かう機会が生まれることを嫌がった。

ジャックの言う、逃げずに戦うという貴族の誇りより、とにかく逃げて生き延びてほしいという母親の気持ちから。

ウラの願いは通じたのか、ヴェルヴィーユ家の生き残りは平民に紛れて生きて行くようだった。

ジャックの勧めでウラは力を制限した。

聞こえた声の内容を見極めること、そしてなるべく人目につかないように魔法の範囲を狭めた。

元々、聞き取り辛くなっていた声は年月が更に聞き取り辛くしていき、次第に殆ど魔法を使う機会が無くなった。

「強い感情が籠った声ならばどんな小さな声でも妾は聞こうとした」それが悲しみにくれる声なら、尚更な、とウラは言う。

兄を失った妹がいた。

夢の中で、会わせ、励ましてやるように言ったこともある、と例をあげた。

そして、僕が生まれる時がやってきた。

僕は生まれて直ぐ、魂が体から引き剥がされそうになった。

ジャックが、多分、と前置きをし

「君はペンダントを渡されるのが早すぎたんだ」

ペンダントが魂に安楽死を与えることは話した。

まだ生まれたての赤ん坊の魂は簡単に剥れた。

ペンダントは当主の証なので、本来ならもつと成長してからのはずらしい。

それと同時期、微かな声を感じたウラは娘に力を貸した。

「妾は外の状態が分からぬ。悩んだが、その娘の声が誰かに害をなす為のようではなかったのな、力を貸した」

それによって前の僕が呼び寄せられ、魂を分け合い、僕は生き延び、

前の僕はウラの世界へ。

…だけど、どうして僕は、急に魂を呼び寄せられたのだろうか。と、考え出すと、不思議に全く思い出せない。

僕が全く別の世界から来たというのは分かる。

が、それ以前、僕は何処で何をしていたのかが全く思い出せない。

「貴様の魂が持っていた記憶は、全て今外で一服してるやつが持っているはずじゃ」

今、僕の中にはラカスとして生きた記憶しかないのだと言われた。

「だって、ぼくが別の世界から来たってというのは覚えてます」

「それはな」

一つの体に二種類の魂というのは、やはり負担が掛かるものらしい。体調を崩したことがあつたはず、と言われた。

こちらに来て間もない頃、酷い風邪をひいた記憶がある。

「その頃、また声が聞こえ、力を貸した」

魔法で二つの魂を完全にではないが、混ぜ合わせ、なんとか一つにし、また生き延びた。

その時に混じった部分で二つの魂の中に完全に癒着した部分があり、それが僕の中に微かに残っているのだと言われる。

「それとな、ラカスの魂がこちらと外にあるお陰で、入って以来久しぶりに外の世界を見ることが出来た」

さすがにウラが作った世界だけあって、この中ならウラに出来ないことはないらしい。

「娘達が元気そうで何よりじゃった」

ウラは慈しむように笑い、ジャックがそっとウラの肩を抱く。

と、この時、日の光が赤みを帯びだした。

おお、日暮れが近いな、とウラ。

「先を急ぐぞ、で、今回のことじゃが」

そう言われて、ああ、と思い出した。

何故、僕はこうなったんだろう。

「ジュヌヴィエーヴ・サンドリン・ド・リール・デュドネがペンダ

ントを封印したんじゃ」

その名前に聞き覚えがあった。

「貴様はジュネと呼んどったな」

言われて、一回自己紹介された時に聞いたのを思い出した。

「なんで、ジュネさんが」

「知らん、戻ったら本人に聞け」

ウラはにべも無い。

というか、ジュネって何者？

「変わり者として有名な吸血鬼じゃ。昔会ったことがあるが、その時は吟遊詩人などをしておった」

話を続けるぞ、と。

ジュネが封印をしたせいで、二つの魂を混ぜていたもの、血から魂を守っていたものが無くなった。

体調が悪くなつたのは、そのせいだ。

「じゃあ、封印を解いてもらわないと」

「もう解いておる。だから、貴様はここにおるのじゃろう」  
なるほど、と納得。

話は全て終わったらしい。

一旦落ち始めた日は、もうすっかりオレンジ色になりだした。

最後に幾つか言っておきたいことがあるんだ、とジャック。

「向こうに行ってもしばらくは魂と体が馴染んで無いから、まとも  
に動けないと思う」

なにせ、今までずっと離れていた魂だからね、と。

「それと、馴染んだ後、魔法を使えるようになるんだけど」

「魔法？」

驚いた。

生憎と、そんなものの使い方なんてどうすりゃ良いのか分らない。

「だってヴィーヴルの宝石は今、君の中にあるんだよ」

ジャックは苦笑い。

そつえばそうだ、と自分の胸の辺りを見てみたが、何も変わった



気がしない。

「そんないきなり言われても」  
困る、と思っっていると

「貴様は、魔法を使っていたのじゃぞ」  
僕はウラの顔を見た。

「馬の言っていることが解ったし、馬も言っていることを理解してたじやろ？あれは妾が力を貸していたのじゃ」

アンが望んでいるみたいじゃったし、メアリーもなるべく怪我をしないように、と願っていたのでな、と言われた。

ジャックも微笑ましく笑い、あれは良い馬だね、大切にしてください方が良いでしょう。

僕は分らなかつたが、初めの頃、あいつは周囲が僕を心配している声を聞いて、落とし方や落とすにしても落とす後に踏まないように気を付けてくれていたらしい。

くそっ、隠れてカツコイイ真似しやがって。  
と思っただころで

「じゃあ、またあいつと話せるようになるんですか？」

ああ、とジャック。

「そのぐらいなら大丈夫だけど、宝石は君の魂を結びつける為と血から魂を守るのに力を使ってる。あまり無茶はしない方がいい」

あと、貴族に目を付けられないように気を付けること、と言われた。魔法はイメージの問題らしい。

使えると言われても、とても実感は無いけど、とにかくあいつとまた話せるのが嬉しい。

喜ぶ僕に、それと、とジャックは今度は表情を暗くした。

「これは謝らないといけないんだけど、もしかしたら、子供が作れないかもしれない」

常に宝石の力を使っているそうなので、生殖能力に影響が出るそう  
だ。

僕は、仕方ないと受け入れた。

本当なら生まれてすぐに死んでいたはずなんだから、生き続けられるだけで幸運だと思うことにした。

「それと、ウラが使う魔法の範囲を狭めてから、その範囲外で生まれた男の子はあまり血の影響を受けないみたいなんだ。もしかしたら、血はウラの魔法に反応していたのかもしれない、と最近気付いた。もし、君の妹に男の子が生まれたら、なるべく離れて暮らしてあげてほしい」

これは少し寂しさを感じたが、ナージエのためと、受け入れた。全て話し終わった頃、日は完全に落ちかけ、空に青みがかるところが出てきた。

ジャックが空を見上げ

「じゃあ、そろそろお別れだね」

「はい」

僕はここを去ることに後ろ髪を引かれるような思いが湧いていた。もうこの人達に二度と会えないんじゃないか。

そんな気がした。

「ありがとうございます」

何に対してかは分らないけど、僕を助けてくれたこと以外にも、とにかく子孫として、今まで見守ってきてくれたことに感謝。

ジャックは微笑むように笑った。

ウラは腕を組んで

「ラカス」

初めて名前で呼ばれた。

「妾とジャックに感謝しろ」

それは勿論してる。

「ならば、精一杯生きろ」

ニイと笑い

「それ以上の親孝行は無い」

悪戯っ子のような笑み。

それを苦笑いしながら見るジャック。

やっぱりうちの家系だと、改めてこの人達に親近感が沸いた。

「いってきます」

ついそう言ってしまったのは、ただこの世界を出て行くからだけじゃないと思う。

「元気にやれ、我が息子」

これ以上無い見送りの言葉だった。

## 夕暮れ（後書き）

後、2話で終わるので頑張りたいのですが、終わるのが、プロローグだという事実には愕然としてる作者です。

相変わらず、矛盾が無いことを祈りつつ。

読んで頂いたことに感謝

四十九日(前書き)

タイトルは次話と対で

## 四十九日

すとん、という軽い落下感を覚え、目を開けると、天井があった。戻ってきたんだな、と実感とする。

起き上がるうとする、腹筋に力が入らず頭を僅かに浮かすので限界だった。

腕を使おうとしても腕の先が棒になってしまったみたいになんか動かない。

これがジャックの言っていたことらしい。

肘を使ってようやく体を起こした。

すると、ジュネがいた。

周囲を見ると、僕が寝ていたのはジュネの部屋らしい。

ジュネは椅子に座り腕と足を組んだ姿勢で僕を見ている。

こころなし、その瞳は鋭い。

「今度は、本当のラカス君なのよね」

不機嫌な声に僕は首を傾げた。

理由を尋ねると、僕の前にこっちの世界に来た、前の僕に、もう大丈夫だから以上の説明もされず、部屋を出て行って欲しい、と言われたからだそうだ。

「詳しいことは俺の後に本人が来るから本人に聞けって、なんなのよ」

そもそも、あいつは誰なのよ、とお冠のご様子。

「ラカス君はちゃんと説明してくれるんでしょね」

少し前屈みになって睨んでくるジュネに僕も聞きたいことがあるから、丁度良い。

そう思っていると、階下からバタバタと足音がした。

その足音は階段を上がり、この部屋に近付いて来る。

何があったの？とジュネをみると、分からないわ、と戸惑い顔。

ノックもせずに扉を開けたのは、祖母だった。

「ラカスは」

息をきらせている祖母の瞳は涙が零れ、目の下に隈が出来ている。胸に当てた拳からペンダントの鎖が揺れていた。

突然名前が呼ばれたので、なんだろう？と思っていると、祖母は僕を見て、細い安堵の息を漏らして膝から崩れ落ちた。

祖母は二つ深く呼吸をすると、ハツとしたように顔を上げ

「ラカス」

転げるようにして僕を抱き締めた。

良かった、私やてつきり、と泣きながら。

しばらくそうされ

「ペンダントがいきなり割れたもんだから、ラカスの身に何かあったもんだとばかり」

見せられたペンダントは真っ二つに割れていた。

今さつき、握っていた手の中で何の前触れも無く割れたらしい。

ああやっぱり、と僕は思った。

「今日覚めたばかりなので、これから検査します」

ジュネはそう言っで祖母を部屋から出そうとした。

「ラカスはもう大丈夫なんですか？」

食い下がる祖母に、ジュネはチラリと僕を見て、返答を聞いてきた。僕が首を縦に振るのを確認すると

「もう大丈夫ですから」

それを聞いた祖母は胸を撫で下ろしながら、ジュネの言葉に従った。祖母が出て行くと、ジュネは椅子に座り直し

「さて」

聞かせて、と言ってくる。

僕はその前に聞きたいことがあった。

「ジュネさんは吸血鬼なんですか？」

僕の言葉が耳に入った瞬間、ジュネはビクリとし、微かに目が見開

く。

これは聞いておかないといけないことだと思った。

ウラはジユネのことを変わった吸血鬼だと言っていたが、それ以上のことは聞いていない。

万が一、僕の中にある宝石のことを知り、その手段があるかは知らないけど取り出されたりなんかしたら、大変なことなんじゃないかと思えた。

「誰から聞いたのかしら？」

驚いた後、俯いていたジユネがゆっくり顔を上げる。

につこりとした笑みを浮かべていたが、背筋がゾワリとする雰囲気があった。

内心、ウラの言い様からジユネを甘く見ていたことを知る。

僕は、唾を飲み込み、許しを乞う手段としてペンダント内に存在する世界について話した。

ヴィーヴルの名前が出たところで、ジユネは、ああ、と納得した声を出し、笑みをいつものものに戻してくれた。

「そうね、大分昔に彼女に会ったことがあるわ。いなくなったと聞いているのに、そんなところにいたのね」

ジユネは、はあ、と溜め息。

そして、身を固くしていた僕に、安心して、と。

「私は無闇やたらに人間を襲ったりしないから」

それは、僕が絵本の中で見た吸血鬼とは違った発言だった。

「吸血鬼なんて、せいぜい温血者の皮膚に寄生するダニのようなものよ」

そりゃ生きるために少しはもらうけど、そんな迷惑をかけることはいないわ、と言った。

ウラの言う、変わった吸血鬼というのは、これを指していたのか。ひとまず、ジユネは敵ではないと判断し、僕の身に何があったのかを話した。

ただ、宝石に依って魂がくっついていいることは言わず、ウラにやっ



てもらったとしておいた。

敵ではないといえど、向こうが強者であることに変わりはないからだ。

ジュネは、なるほど、と感心しながら聞いていた。

「じゃあ、結果的に私がペンダントを封印したのは良かったのかしら」

確かにそういえばそうかもしれない。

しかし、そもそも何故ジュネはペンダントを封印したんだろうか。

僕の疑問に、ジュネはリディアに出会った時の話をした。

その当時、ジュネは本当に調査のためにこの辺りに来たらしい。

そしてこの辺で一番大きい我が家に泊った。

その時にリディアと会い、リディアのしていたペンダントから不思議な力を感じたジュネは、リディアから我が家についての話をそれとなく聞き出した。

男の子が生まれ難い、育ち難い、という話とペンダントの力を結び付けるのにそんなに時間はかからなかった。

ペンダントのせいと考えたジュネは、リディアに封印の話を持ち掛ける。

「あわよくば持ち帰って色々調べてみたい、全くの興味本位からだったわね」

しかし、簡単に肯定すると思ったりリディアは

「これを持っていると、兄さんが近くにいる気がするから」

そう言っつて、難色を示した。

今考えるなら、ウラの言っつていた、兄を失った妹というのはリディアのことだったのだろう。

どこまで知っつていたかを知る術が無いが、ペンダントと兄に何かしらの関係があることに気付いていたのかもしれない。

「もしやるなら、私が亡くなっつた後にして欲しい」

そう言っつて、ジュネの話を断つた。

しかし、ペンダントの呪いについては気になつたようで、ジュネは

代替案として、どこか遠くに捨てることを提案した。

リディアはそれには頷いた。

「それで念の為に見に来たら、君が持つてるし」

ジュネはしばらく僕と行動を共にし、僕がペンダントにリディアのような執着心が無いことを確認すると、実験と称して、僕を眠らせ、ペンダントを封印した。

僕が体調を崩していたのは、ペンダントが掛けていたと思われる負担が無くなったために、感覚にズレが生まれたのだと考えたそうだが、しばらく放っておけば治まると考えたのだが、僕は悪化する一方。おかしい、と感じたジュネは、ペンダントを借りて調べることにした。

「何か特別な魔法がかかっているのは分かったんだけど、それが何かまでは分からなかった」  
でも、と続けた。

「ペンダントの表明に何か描かれているのに気付いたの」

ジュネは椅子から立ち上がり、近くの机から一枚の紙を持ち上げた。

「女性の顔だったのよ」

そう言っで見せてくれたのは、ウラの顔に良く似ていた。

「これ、ラカス君やアンさん、メアリーさんにどこか似てる気がする？」

ジュネはウラの顔を知らないらしい。

そういえば、ウラの本来の姿は竜だった。

ジュネとは竜の姿で会ったんだろう。

「それで、一つ仮説が閃いたの。ペンダントの力は、私の考えたのとは逆に君に生きる力を与えていたんじゃないか、ってね」

だから、ジュネは祖母に僕が死にかけたことが無いか確認した。

ペンダントの力を失った僕が、本来の状態に戻っていつていると思っただのだ。

僕が倒れた後、ジュネは慌てて封印を解き、僕は三日間眠り続け、今に至る。

「全く、この世の中、まだまだ想像出来ないことがあるのね」と首を振った。

僕は、こんなことそうそう無いと思い、苦笑い。そういえば、一つ疑問。

「なんでわざわざ確認に来たの？」

それこそ、放っておいても良さそうなもの。

「んー」

とジュネは誤魔化すような笑いを浮かべて

「だって、その力がトリスタニアに利用されたら困るじゃない」

目が見開く僕。

「私、アルビオンの貴族だもん」

ジュネはにっこり。

その後、祖母が呼んで来たらしい祖父と父親に抱き上げられ、抱き締められた。

更にその後、夕方にジュネに再び検査してもらった。異常は無し。

ベッドの上で座っていると、窓から夕焼けが見えた。

「あのしばらく一人にしてもらっても良いですか」

ジュネは、ラカス君までそう言うことを言うのね、と言いつつ出て行ってくれた。

静かになる室内。

体を引き摺るようにして窓際に立つと、太陽が半分沈みかけていたふと、手擦りの部分に何かあるのに気付く。

タバコの灰の塊だった。

前の僕はここでタバコを吸ったのだろう。

「ねえ、どんな気持ちで見っていたの？」

ここに立つて外の景色を見ている、前の僕を想像する。  
多分、ペンダントの中の世界は終わりを迎えた。

良く考えたら宝石の力である世界を作っていたのに、その力の源が  
無くなつて、世界を保っていられるわけ無いじゃないか。

終わった、というのはあくまで僕の推測なのに、心のどこかでそれ  
を肯定する悲しみがあつた。

手擦りに水滴が落ちる。

誰もそんなこと、一言も言わなかった。

僕は、ただ喜んでいただけだ。

「そんなの優しすぎるよ」

もうすぐ母親が帰ってくるはず。

言われた通り、家族を大切にする。

だけど、少しだけ、もう一つの家族を一番に思わせて欲しい。

## 命日（外伝）

ユラユラと揺れる水面が見える。

どうやら、あちらの世界にいたのはこっちの世界の時間では一瞬のことだったらしい。

と、同時に、圧倒的な現実には押しされ、本当にそんなところに行っただのか、思い出が希薄になる。

たまたま船に乗って、そこで少年に会った。

暇に任せて話していると、母親が来て、これから父親に会いに行くのだと言っていた。

そして、たまたま船が沈没しそうになり、たまたま逃げる最中に見掛けたその親子を助けて逃げ遅れた。

本来なら、助けなきや良かったとか考える場合なんだろう。

でも、そんな気持ちは微塵も無い。

親子は無事助かったんだとしたら、あの少年は父親に会える、良かったな。

そう思えるほど、後悔は無かった。

水面がゆっくりと遠くなる。

寒い。

あの世界は暖かった。

ジャックと、ジャックと会って直ぐに紹介されたウラに会った後、しばらく暗いままだったが、魂とやらがくっついた瞬間、世界が変わったのには驚いた。

五年くらいか、あの夜の来ない世界で暮らしたのは。

居た奴らは皆良い奴らで、毎日酒を飲んで原っぱで眠りこけたり、教えてもらったチエスをやり続けたり、お陰で退屈だとは思ったことが無い。

それと、皆でラカスの生活を見ていた。それも日々の娯楽の一つだった。

完全に平民の暮らしをしていることを嘆いた者もいた、でもその者達を含めて皆、子孫達が無事に生きていることを喜んでいた。

ラカスが、母親に授乳されていたのも見たし、祖母に抱かれて眠っていたのも見た。

母親と仕事について行ったのも、初めて話したのも、歩いたのも、友人達と遊んでいたのも。

父親と並んで座って勉強しているのには、その意味はそうじゃないだの騒いだり、祖父と馬に乗る練習も落ちる堪えるに一喜一憂。

妹が生まれた時は皆で喜び祝った。

あの世界では、年は関係無く皆ウラとジャックの息子として扱われていた。

ラカスの成長はまるで弟の成長を見るような気持ちだった。

息子ではない俺も、多分、そうだったと思う。

ペンダントが封印された時、まずラカスを心配した。

ウラから説明され、ペンダントの力が及ばなくなると命の危険があることは皆知っていたから。

封印が解かれ、ラカスの魂がこちらに来ると聞いた時、全員が何も言わないものの落胆をしているのが分った。

その時、誰ともなく、なんとかしてやれないか、と言い出した。ウラに聞いた。

悩んだ末、宝石を核として使えば何とかなるやもしれん、と言った時は、流石に息を潜める。

ジャックも何も言えず、沈痛な面持ちで俺らを見ていた。

この世界の中から宝石が出るということは、この世界の終わりを意味している。

ラカス一人の命と自分達全員の命。

簡単に答えの出る問題ではない。

そう思った時

「良いじゃないか」

一人が言い出した。

なあ、と呼び掛けられた声に皆がそれしか方法が無いなら仕方ないと、そうだな、と同調する。

「そなた達、良いのか？」

逆に戸惑っているウラに一人が代表して言った。

「弟が困っているのです。力を貸さない兄なんて、少なくとも此処には一人もいません」

娘が困っているなら、息子が困っているなら、ウラが言い続けてきた言葉だった。

「すまぬ」

ウラとジャックは深々と頭を下げた。

俺はその機に魂を元に戻すことを提案し、皆で後々のためと生殖機能を失くすことをやむを得なく決めた。

その後は、皆で浴びるように飲んだ。

「本当に感謝しておる」

ラカスが来て、俺がウラを呼びに行った時、皆はウラとの別れを交わしていた。

皆はラカスには会わないことにした。

全員で納得したものの、心の整理が出来たとは言いづらい。

現に、ウラと言葉を交わして泣いてる奴もいた。

ラカスの前で泣く訳にはいかない。

俺らは恩を着せたい訳じゃないのだから、ラカスには全て内緒にすることにしていた。

「何か伝えたいことがあるか」

そう尋ねたら、元気にいろ、と、家族を大切にしろ、それを伝えて欲しいと言われた。

そして俺に、お前ともこれで最後だな、と言

「お前も、弟の一人だったよ」  
全員が、ああ、と同意してくれた。  
その後、ラカスの前で涙を堪えるのに必死だった。

ますます水面が遠くなり、小さい四角のようになった。  
もう寒さは感じない。  
とうとう死ぬのか。  
俺は目を閉じた。

俺を含めて誰も反対しなかったのは、ウラとジャックに愛されていることを常に感じ取っていたから。  
世界は隅々まで優しくかった。  
何処にいても、見守ってくれているような気がした。  
良く晴れた日に、公園で相手をしてくれる父親のように、それを近くで見ている母親のように。  
単に、それが弟に代わってやらねばならない時間がきたただけだ。  
寂しさは勿論ある。  
が、それは兄として仕方の無いこと。

なあ、皆も、そうだったんだろう？



「おい、何をしておる」

急に聞こえた声に驚き、目を開けた。

水の中では無かった。

暗かった世界は、真っ白な世界に変わり、すぐ前にウラとジャック、その後ろに皆が立っている。

ウラは腕組みをし、胸を張った姿勢のまま

「今から、ヴェルヴィーユに行くのじゃ。貴様も来い」

「え？」

何を突然。

「貴様も妾の息子じゃろ」

後ろから、ラカスがいた町の話の話を聞かせてくれないとな、と聞こえる。

「そんな長い時間いた訳じゃねえよ」

皆揃って、泣きそうになること言うなよ。

「まあなんだって良いのさ、理由なんて」

ジャックは人好きのする笑みを見せた。

## 命日（外伝）（後書き）

これで、プロローグは終わります。  
ようやくです。

最初から、この展開だけは考えてたので、途中、原作キャラを出さず、怪我人が出るようなこともせず、長すぎる気がしないでもない日常を書いたのも、その方が説得力あるかな、と。

まあ、素人の考えなので、成功してるか分かりませんが、ぼちぼち原作キャラ出すつもりです。

出さないと、本当にオリジナルになりそうなので。

そういえば、昨日、友人に書いてることがバレました。

恐る恐る感想を聞くと、「戦闘シーンないよね」と歯に衣着せまくった感じで言われました。

しばらく凹んでたいと思います。

読んで頂いたことに感謝

## 出てきた登場人物のまとめ（前書き）

感想で希望があったので登場人物を纏めてみました。

## 出てきた登場人物のまとめ

<ラカス（ヴェルヴィーユ）の一族>

ラカム・ド・ヴェルヴィーユ・・・ヴェルヴィーユ家の初代当主

ジャック・ド・ヴェルヴィーユ・・・ラカムの弟

ウラ・・・ジャックの嫁

デメテル・・・ジャックの娘

ユデイト・・・ラカスの曾祖母

ポロフィルネス・・・ユデイトの夫

グラフ・・・ユデイトの長男（リディアと双子）

リディア・・・ユデイトの長女（グラフと双子）

カティヤ、マリナ・・・ユデイトの次女と三女

バラノフ・・・リディアの夫

メアリー・・・リディアの長女

チエン・・・リディアの次女

アンドイ・・・メアリーの夫

ヤン・・・メアリーの養子（チエンの次男）

アン・・・メアリーの長女

カテリーナ・・・メアリーの次女

ジエームズ・・・アンの夫

ラカス・・・アンの長男

ナージェジダ・・・アンの長女

<それぞれの友人達>

ジャンヌ・・・アンの友人

ゼノビア・・・アンの友人

リリー・・・リディアの友人

ナタリー・・・カテリーナの友人

<町の人達>

ミランダ・・・ラカスの幼馴染

シャロン・・・ミランダの姉

ヘレン ……ミランダ、シャロンの母親

セシル ……ヘレンの母親、（メアリー、アンドイの幼馴染）

ラッセル ……ラカスの幼馴染

ジェーン ……ラッセルの妹

マール ……ラッセル、ジェーンの母親

ガルク ……ラッセル、ジェーンの父親

ドーニ ……マールの母親（メアリーの友人）

## 出てきた登場人物のまとめ（後書き）

こういうのって、どこまでネタばれしていいのか分からなかったの  
で、ひとまずシンプルに。

何か意見があれば、是非。

## 時間

ペンダントの力が、僕の命を保つために使われていると理解してくれたジユネは、現状ではすることがないということで、とりあえずは諦め、帰ることにするそうだ。

「もし、何か体に問題が起こったならボウルガード伯を訪ねてきなさい」

乗り掛かった船だからと、そう言ってくれた。

「ボウルガード？」

少なくとも、ジユネの名前に入っていないなかった単語に首を傾げる。

「そう、私の家よ。奥様、と言えはすぐに分かるわ」

「え？」

聞こえた言葉に驚いた。

「何よ？」

ジユネは、文句でもある？と睨んでくる。

「だって」

吸血鬼でしょ、と言おうとして止めた。

うちがそんなことを言える資格が無いのを思い出した。

「結婚してるとは思わなかったから」

と、誤魔化した。

「そうよね、外見が全く変わらないのよね、それだけは不満だわ」  
言いながら自分の体を見渡すジユネ。

全世界の女性が羨ましがりそうな気がするのに当人は不満らしい。

「早く帰って会いたいわ」

ジユネは恋する乙女のような顔。

外見からすると、年相応に見えた。

ペンダントはラッセルの家で接いでもらった。



割れた跡は消えないけど、とても捨てる気もしない、また僕の首にかかっている。

町の人達には、僕はとても重い病にかかったことになっているらしい。

ミランダ、ラッセル、その祖母達をはじめとして、町中の人達が見舞いに来てくれたり、祖母達に一言言ってくれたりした。

ジャンヌとゼノビアからも手紙が、滋養強壮に効果があるという薬と一緒に届いた。

えらく苦くて不味かったけど、良く効く薬を送ってくれたと思ひ込むことにする。

それが夏に入る寸前ぐらいのこと。食事をとるために移動するにしても、体を起こしてもらったり、歩くのに支えてもらったりと一苦労。

なんとか自分一人で移動が出来るようになったのは、秋を迎えた頃。ナージエの相手をするぐらいなら、なんとかこなせるようになった。

大体は、ベッドで寝ていると、ナージエが来て「にーに、ごほんよんでー」

と絵本を抱いて持つてくる。

ベッドの上で、壁に背をつけて足の間になージエを入れ、絵本を読んであげるが多かった。

ただ、稀に僕の気分転換も兼ねて庭で遊ぶ時などは、一人で歩けるようになったナージエよりも僕の方が転ぶことが多かった。

「にーに、いちゃい？」  
心配そうに覗いてくる視線に

「大丈夫だよ」と答える。

どっちがどっちの面倒見てるか分かりやしない。

正直、何もしないのに飯を食わせてもらってるのが申し訳ないと思ひ始めた。

たまに遊びに来る、ラッセルやミランダが仕事を手伝っているのを

聞くと、余計そう思う。

一度、母親にそう言ったら拳を落とされた。

「いいかい、今のあんたは体を治すのが仕事なの」

確かに、そうなんだけどさ。

「うん」

ごめん、と言ったらもう一発やられた。

謝るんじゃない、だそうだ。

「ほれ、仕事だよ」

母親から本を渡された。

ゼノビアから送られてきた本らしいんだけど、付いてきた手紙には、覚えて下さい、の文字。

パラパラと捲るとトリストインの歴史らしい。

なんで？と母親に聞いたら、あたしに分るわけないだろ、との答え。

ゼノビアは、僕の将来についての考えがあるらしいので、それ関係なのかなと思いつつ、暇つぶしがてら読むことにした。

冬に入り、ようやく転ぶことも無くなって、好きに歩き回ることが許された。

さっそく放牧場に行く。

あいつが首を伸ばして、迎えてくれた。

今までもたまに馬小屋で顔を会わせているんだけど、祖父がつきつきりだったので頭を撫でたりとかその程度しか出来なかった。

馬が何度か軽く嘶く。

確か、イメージだと言っていた。

聞こえるはず聞こえるはず、と自己暗示をかけ、耳を澄す。

「まだ、乗れないのかよ」

以前よりはつきり聞こえた気がした。

「もうすぐさ、相棒」

まるで手渡すように、気持ち伝えるイメージで言うと、馬は奇妙な鳴き声をあげて前足を軽く宙に浮かせた。

驚いたらしい。

鼻息荒く、顔を僕の前を持つてくる。

「治ったのか？なあ、なあ」

「ひとまずね」

擦りつけてくる鼻先を抱き締めた。

と、ふと、今のうちに他の魔法とやらも挑戦してみようと思った。

周囲を見てみると、近くに祖父がいる。

馬小屋の掃除のために中に入ってしまっのを待つ。

祖父が道具を持ち入るのを確認すると、後は見ている者はいない。

とりあえず、炎を出してみようと思う。

草とか柵が燃えると大変なので、土のところに移動。

馬もついて来て、柵の上から首を出している。

「何してんだ？」

興味深げな馬に、人差し指を口にあてて、静かに、の仕草を見せる。

「見てのお楽しみ」

いきなり大きいことをするのも怖いので、土の上に掌サイズの火の玉をイメージする。

ギュツと一点を焦点にして、力を込めると、ぽん、と軽い音が響き、ロウソクの先のような炎が生まれ、すぐ消えた。

自分がやったことながら、驚きの声をあげた瞬間、心臓に熱湯をかけられたような痛みが生まれた。

耐えられず、呻き声をあげながら胸を押さえて転げ回る。

馬の鳴き声が五月蠅い。

しばらくして、やっと痛みがひいた。

「ラカス、どうした」

馬の鳴き声を聞きつけた祖父が、馬小屋から駆け寄ってきた。

蹲る僕を心配そうに見てくるので、まさか本当の話なんて出来ず、急に走ったら、こうなつたと説明した。

「無理をするんじゃない」

怒られた。

その後、祖母と母親にも怒られた。

魔法はまだまだ先の話らしい。

そんなことがあったものだから、僕はしばらくの間、ベッドに寝てるよう言われ、大人しく寝てる。

出歩くのも禁止されているのでゼノビアに言われた本を読んでもいいけど、名前が長いわ、内容が歴史から文化まで幅広いわでてこずっていた。

ある日の夕方、ラッセルとミランダが来た。

「ちよつとラカス、聞いてよ」

先に入ってきたミランダは不機嫌そうな声で開口一番。

後からのラッセルは苦笑いを浮かべながらも、どこか誇らしげだ。

「どうしたの？」

何かあったんだろうな、と思った。

ミランダはラッセルを指差し

「ラッセルが中央に行くっていうのよ」

「中央に？」

「そうよ」

聞き返した僕に、語尾にフンと聞こえそうなくらいご機嫌斜めらしい。

ミランダに非難されるラッセルを見ると

「まだ決まったわけじゃないんだ、父ちゃんの知り合いが中央で店をやってる」

近々ラッセルを見にくるそうだ。

それで見込みがありそうなら、機会を見て中央に連れて行くと。

「すごいじゃない」

僕は本心からそう思った。

「まだ決まったわけじゃないんだぜ」

ミランダが、ずるいと声をあげた。

「一人だけ中央に行くのよ、わたしだって行きたいのに」  
地団駄を踏む仕草をした。

「遊びに行くわけじゃなくてだな」

ラッセルはミランダを慰めるように言った。

「そんなの分かってるわよ」

わあ、わがまま。

僕とラッセルは顔を見合わせて肩をすくめた。

この世界では、七才でもう大人に混じって仕事を始める。

ただ、やっぱり当初は見習い扱いで給金は貰えない。

たまに僅かにお駄賃程度もらえる位。

そういえば、この前ミランダが姉のシャロンが僅かながら給金を貰い出したのを羨ましがっていたのを思い出した。

加えて、まだ子供の手伝い程度しかさせてもらえないのも不満がっていた。

だからミランダは、ラッセルが先に行ってしまった気がするのが嫌なんだろう。

ひとしきり悔しがり、ようやく満足したらしいミランダは

「頑張りなさいよ」

とラッセルを応援した。

僕も、きつと認められるよ、と応援する。

帰るといふ2人を、見送ることにする。

2人に止められたけど、友達相手だし家の玄関までくらいなら怒られはしないと思う。

ラッセルはジェーンを連れてきたらしいので、迎えに行く。

ジェーンはナージエを追いかけっこをしていた。

ラッセルが帰るのを促すと、ジェーンは嫌々と首を振った。

ジェーンはナージエに抱きついて帰りたくないことをアピールする。

ラッセルが困り果てていると、祖母が来てジェーンを宥め出した。

祖母に任せたラッセルが戻ってきた。

ナージエとジェーンが祖母を困らせているのを見てみると、ふとミランダがポツリ。

「わたし達、あのくらいから一緒にいたのね」

僕とラッセルの同意が静かに流れた。

## 時間（後書き）

一応、調べた資料がそういう年齢だったので、そういう年齢で。

だとすると、意外と五才でも、将来とか考えるんじゃないか、と。

読んで頂いたことに感謝

## 代金

春になった頃、ようやくまた歩き回る許可が下りた。

だけど、馬に乗ることはもう少し様子を見てかららしい。

ある日、遊び相手のナージエがお昼寝をしているので店番をしていると、ラッセルとミランダが来た。

やっぱりミランダは不機嫌で、ラッセルはそれを宥めてる。

ということは、と期待を持って聞くと、ラッセルは見事お眼鏡に叶ったらしい。

「ラッセルったら、受かったのよ」

内容は喜んでいるんだろうけど、声が不満の色。

「応援してくれてたはずなのに、こつ言うんだぜ」

ラッセルは肩を竦めて僕に言う。

「今だって応援してるわ」

でも、それとこれは別なんだってさ。

「いつ行くの？」

僕がミランダの言い分に苦笑いしたまま、ラッセルに聞くと

「来年の春頃」

ラッセルは誇らしげで、待ちきれない様子だった。

同年代の僕や他の子と比べてもラッセルは体格も良くて、一回り大きい。

たしかに、年を一つ二つ上に言っても通じそうだった。

「2人はずるいわ、どんどん先に行っちゃうんだもん」

ミランダは腰に手をやって、僕らに対して頬を膨らましながら言う。

「そう？」

僕らは顔を見合わせた。

「そうよ、ラッセルは中央に行けるし、ラカスは馬に乗れるし文字だって読んだり書いたり出来るじゃない」

僕が膝の上に置いていた本を差して言った。



「わたしだけが子供のままみたい」

そう言うけど、ミランダだって髪を三つ編みにして布で纏め、大人の着るような形の服を着てる。

シャロンのお下がりだから、と本人は嫌がってるけども。

服装だけじゃないけど、言い方とか振る舞いとか見ても、やっぱりミランダも女性なんだな、と思ってしまう。

3人で話していても、僕とラッセルがなんとなくミランダに対して気を使ってしまうのも、そのせいだし。

とは言え、ミランダだって内心、ラッセルの中央行きを喜ばしいものだと思ってるのは、長い付き合いのお陰で解る。

ただ、やっぱり寂しいことは寂しいと、僕もミランダも思ってる。

流石に2人してそれを言うとなラッセルが気にしそうだから、ミランダが僕に分までその役を引き受けてくれたただけだ。

ラッセルだって分ってる。

これから、ラッセルの家でお祝いがあるらしかった。

それから何日かして、ゼノビアが来た。

「こんにちは」

僕はナージエを足で構いながら、本を読んでいるところだった。

その本を覗き込むと

「ちゃんと約束守ってくれてるのね」

と満足気に笑う。

そして、本を手に取り

「覚えてるか確認してもいい？」

ゼノビアは本の中から適当に問題を出してきた。

さすがになるべく手元に置くようにしているので、大体は覚えたりもりではいたけど、やっぱり細かい年号や名前になると、うる覚えのところ結構あった。

「偉い偉い」

結果、正答率は高くないんだけど、それでも大雑把ながら流れを掴んでいるのは褒めてくれた。

「もうちょつとだね」

本を返された。

何の用事なんだろう、ただ確認しに来たわけじゃないだろうし。

ゼノビアは祖母からお茶を勧められながら、僕の治り具合を聞いていた。

てつきり母親に用事があると思ったら、違った。

夕食終わりにゼノビアは僕らの食事をする部屋に訪ねてくると

「今回はお願いがありました」

と切り出した。

家族全員が席の移動をする。

祖母と母親が並んで座り、正面の席にゼノビアを座らせた。

僕ら男性陣はあくまで聞き役。

ナージエは僕の膝の上に座って知らない顔であるゼノビアを興味津津に見ていた。

初めてゼノビアに挨拶をされた時なんて、僕の後ろに隠れてしまったのに。

「嫌われちゃったわね」

ゼノビアは苦笑いで隠れてるナージエに握手を求めると、ナージエは半身を隠したまま手を出した。

この一年弱、ナージエの相手をし続けたお陰で、僕に一番懐いていた。

それによって、害が無いと判断したかどうかは知らないが、少なくともゼノビアを嫌ってはいないみたい。

「で、何かしら」

祖母が促すと

「ラカス君をお預かりしたいのです」  
全員が僕を見た。

「どういうことだい？」

母親が説明を求める。

「実は」

ゼノビアの説明によると、ここら一地方の領主が使用人を募集しているそうで、それに僕を推薦したいらしい。

「まだ早すぎないかい？」

と思案顔の祖母。

「そちらのお嬢様がラカス君の一つ年上で、その近くの年齢の子を所望しておられたので」

ゼノビアの顔は真剣そのもの。

今まで微笑んではるところばかり見ていたので、その顔は新鮮だった。

「それにしても、まだ五才だよ」

祖母は僕を見てから不安げに言った。

「ラカス君は優秀ですわ。三つ程年上の子と比べても、なお」

ゼノビアの表情は揺るがない。

祖母は悩み、すぐの話なのかを尋ねた。

「いえ、近いうちに一度領主様の方で面接をしてから、ということになります」

それからゼノビアは僕の優秀さをあげ、それを生かす最適の場所と祖母に説得を迫る。

母親は一言も口を挟まず無表情で、それを聞いていた。

祖父も父親もゼノビアの考えには賛成のようで、たまに首を小さく縦に振る。

一人渋い顔で聞き続けた祖母も

「分ったよ、とても受かるとは思えないけど、とりあえず受けてみればいいさ」

とうとう根負けし、面接を受けることを了承。

それを聞いてゼノビアはホツとしたような僅かな笑みを見せた。その後、母親がせっかく来たんだから、と酒の準備を始めると「私は、もう寝るよ。なんだか疲れちまったからね」

祖母がそう言って退室する。

去り際に、ちらりと母親を見て目配せのようなものをした。

なんとなく話はまだ終わりきっていない空気が流れる。

その空気を読んだのか、祖父と父親も僕からナージエを受け取り退室。

僕も続こうとすると、母親に止められた。

3人しかいない空間に母親の準備の音だけが響く。

沈黙が怖くて、ふとゼノビアを見ると、目が合って、微笑まれる。

「はいよ」

ゼノビアにグラスを渡す時もなんか母親は怒っているような、そんな雰囲気があった。

「ありがとうございます」

全く意に介していないという雰囲気です。ゼノビアは受け取る。

僕の前には、薄めたものが置かれた。

こんなことは初めてだった。

驚き、母親を見ると、もう大人だろ、と言われた。

ゼノビアと母親が交互に注ぎあう。

「で、ほんとのところはどうかなんだい？」

一口飲んだ母親が急に言った。

聞かれたゼノビアは微笑を浮かべ、酒を一口含み、口を挟める空気ではなかった。なのでちびりちびりと舐めるように飲んでいた僕を見た。

「ラカスちゃんは、領主様の名前を知ってる？」

聞かれ、僕は慌てて首を横に振って答えた。

今まで、領主と一言で済んでいたからだ。

「ヴァリエール公爵、爵位の中でも一番上の位なの」

「それで？」

母親が先を聞く。

「そんな大きい取引相手は殆ど長年の付き合いのある大手ばかりで、うちのような中堅、しかも歴史が浅いところなんて、割り込む隙間が無いんです」

聞いた母親はしかめっ面になった。

「それでラカスカい？」

「そうです、ラカスちゃんがうちの切り札です」

2人から同時に見られ、ちよつと慌てる。

僕を無視して、それにしても、と母親。

「随分はつきり言うんだね」

呆れた、と酒を呷る。

「あら、初めから聞かせるつもりでラカスちゃんを残したんではないんですか？」

ゼノビアは口に手を当てて、言われようにさも驚いたとばかりに。

それは当たりだったらしく、母親も気にしてないようだった。

「上手くいくなら良いさ、失敗に終わるとは考えないのかい？」

こんなんでさ、と僕は頭を突付かれた。

「元々食い込む隙間なんて無いに等しいですもの、駄目で元々です。

ただ、その確率は低いと思います」

ねえラカスちゃん、と言われても、話が良く分っていない僕は困る。

「根拠は？」

「無いですよ、強いて言うなら私の勘です」

それを聞いて母親はあっさりと

「ラカス、お前が決めな。お前の人生だ」

僕に投げた。

母親は最初から僕に判断を委ねるつもりだったらしい。

その為に、一人の大人として認めるという意味表示の酒だったし、

ゼノビアの意図を聞かせた。

ゼノビアの説明としては、その領主の執事にでもなれば、ある程度

どの商会と付き合うかを決められる。

それだけでなく、お嬢様ともなれば色々入用な物は多い。

お嬢様に気に入られ、それをゼノビアのところに流して欲しいそう  
だ。

「それに、ラカスちゃんがお嬢様のお気に入りとかなれば、紹介し  
た私の株も上がりますし」

「僕に出来るの？」

言うは簡単だけど、行なうは難しそう。

だって、相手は人間で、絶対なんて有り得ない。

「大丈夫です、ラカスちゃんなら」

気の進まない僕にゼノビアは笑いながら請け負い、母親は一人我関  
せずと飲んでいた。

正直、期待に応えられる自信が全くと言って良いほど無い。

とてもじゃないけど即答出来なかったので、ひとまず保留にしても  
らう。

ゼノビアは二三泊るらしいので、その間に決めて欲しいとのこと  
だった。

なんか、本の代金がとんでもなく高かった気がした。

## 代金（後書き）

強引…ですかね。

元々考えていた流れなんです。

なんで、探してたかはまた以降に。

そういえば、ジュネについて書き忘れてたので、ここで。

ジュネは、正式には、ジュヌヴィエーヴ・サンドリン・ド・リール・デュドネで、キム・ニューマンの作品『ドラキュラ紀元』のキャラクターです。

ポウルガード卿は、その愛人です。

都合良かったので拝借致しました。

遅れて申し訳ありません。

読んで頂いたことに感謝

## 友達

午前中、僕は庭で寝転びながら空を見ていた。

小さな雲達が幾つも滑るようにして視界に入り、出て行く。

たまに痛みを感じるのは、ナージエが僕の頭の上に座り、髪を弄んでいるからだ。

正直、悩んでる。

ゼノビアの言ったことについて。

この件は、祖母も母親も全てを僕の判断に任せるつもりらしく、何も言ってくれない。

父親と祖父は、行くことに肯定的のようだけど、それぞれの妻から圧力がかかっているみたいで、一切その話を話しかけてこない。

実際、受かるかどうかは分からない、ゼノビアは大丈夫と言ってくれるけど。

ただ、受かったら、もうその時になって止めるなんてことは出来ない。

将来もらえる給金とかは確かに魅力的、だけど一人前になるまで何年という単位で帰ってこれないのかという気持ちだが、僕の中でぼんやり蹲っていた。

僕自身、行った方が良さそうだろなと思ってる。

聞けば、皆が皆、そう言うと思う。

それも解ってるんだけど、なんかこう、ふんぎりがつかない。

そんな感じでモヤモヤしていると、ふとラッセルが浮かんだ。

ラッセルも中央に行くのだから、僕と同じように帰ってこれないはず。

話を聞いてみようと思ひ立ち、祖母の許しを得て、ナージエと手を繋いでラッセルの家に向かうことにした。

ナージエはジエーンに会えると、ご機嫌だった。

ラッセルの家は鍛冶屋で、表の店先には斧や鍬が並べられている。



「あら、いらつしやい」

店の奥からラッセルの母親、マールが出てきた。マールは胸もお尻も大きい、ふくよかな体型で、ドーニ譲りのニコツと笑う顔が魅力的と町でも評判の女性だった。

僕が、ラッセルに話があると言うと、裏にいるわ、と言われた。

ナージエは、店の奥からドーニに連れられて顔を見せたジエーンを見つけると、よたよたと走って行ってしまった。

それを見たマールが

「仲良しさんね」

と笑う。

僕はマールに案内されて裏の工房に回る。

工房に来るのは初めてではない。

祖母に連れられて遊びに来た時に、離れたところから見させてもらったことがある。

その時と同じように、ふいごの音と金槌が鉄を打つ音が一定のリズムで繰り返され、ラッセルの父親であるガルク、そして何人かの弟子が汗みずくになって動き回っていた。

その中にはラッセルの姿を見える。

僕がラッセルを見つけたことをマールは気付き

「来年中央に行くからって、張り切ってるのよ」

説明してくれる。

僕もラッセルが父親の仕事を手伝ってるというのは聞いていたけど、こんなにガツツリ働いているとは思ってなかった。

急に、僕は邪魔をしに来たんじゃないか、という気になってきて、マールに改めて出直しますと伝えようとすると、その前にマールは丁度キリが良くなったガルクを呼んでしまう。

呼ばれたガルクはこちらを見て、汗を拭いながら歩み寄ってきた。

僕を視認すると

「おお、アンさんとこの」

二カツと男くさい笑み。

そして、すぐに口元をへの字にするような顔をして

「すまねえな、ラッセルは仕事なんだ、遊ぶならまた今度誘ってやってくれな」

僕が遊びに来たと思ったらしい。

僕もラッセルの邪魔をするつもりは無いので、頷き去ろうとする

「違うわよ、あなた」

マールが割って入ってきた。

「ラカス君はラッセルに話したいことがあるから来たのよ」

マールに言われてガルクは僕を見た。

目が、そうなのか、と聞いてきたので、マールに促される形で、はい、と返事をする。

ガルクは腕を組み、僅かに考えた後、工房の中にいるラッセルを呼んだ。

ふいごを動かしていたラッセルが、近くにいた弟子の人に代わってもらい工房から出て来ると、僕はまず邪魔したことを謝った。

「それはいいけど、それで、どうした？」

僕が相談したいことがあると言うと、気を利かせてくれたのか、マールとガルクは自分達の仕事場に戻っていく。

近くの木の束が纏めてあるところに案内され、そこに並んで座る。

僕は、領主の使用人になるかもしれない、と話した。

「すごいじゃん」

ラッセルは驚きながらも喜んでくれた。

「だけどさ」

なれるならそうした方が良いのは解ってるけど、どうしてもふんぎりがつかないのだと、本心を言い、ラッセルはどうだったのかを尋ねた。

ラッセルは空を見上げるようにして

「俺の時も、父ちゃんがいきなり中央に行きたいかって聞いてきた

な」

ラッセルも、行くか行かないかの選択は自身に委ねられたそうだが、やっぱり悩んだ、と言うラッセルだったけど、そんな素振りは見せてくれなかった。

それを言うと、空を見上げていた顔を僕に向け

「お前の顔を見た瞬間決めたからな」

「僕？」

聞き返した。

ラッセルは頭を掻きながら、言い辛そうに意味の無い声を漏らし

「お前つてさ、いつも俺の先を行ってる気がするんだよな。正直、

お前みたいになりたいって思ってた」

言葉を選ぶようにラッセルは言う。

「それで、悩んでる時にミランダに誘われて、お前の顔を見に行った時に答えが出たんだよ。これはお前に勝つチャンスだつてな」

そう言つて、笑つたラッセルの顔はガルクに何処となく似ていた。

「俺は行った方が良いと思うぜ。あくまで、俺の考えだけだな、何処にいたつて、この町が俺らの町つてことに変わりは無いだろ」

そうだろ、と言われた瞬間、モヤモヤがすーっと消えた気がした。

フツと体の力が抜けて、アレコレ悩んでいたのが馬鹿らしいことのような気になる。

「そうだね。じゃあ、受けてみようかな」

僕の答えに、ラッセルが口の端を上げて微笑むように笑う。

そして、ラッセルは伸びをし

「さあつて、もう一仕事だ」

勢いをつけて束から立ち上がる。

その後ろ姿に僕は、ありがとう、とお礼を言った。

ラッセルは振り返り

「ばーか」

と一言。

そして、面食らう僕に

「友達だろーが」

楽しいことを見つけたように笑う。

僕も釣られて

「知ってる」

何が楽しいかは分からないけど、なんか楽しくなって笑った。

見上げた青空は雲一つ無い。

僕はナージエを連れて帰ると、すぐにゼノビアに面接を受ける旨を伝えた。

## 友達（後書き）

我ながら相変わらず展開が遅いです。

普通なら、もうすんなりヴァリエール家に行ってる気がします。

これが、起きてしまったのでクオリティ、ということ。

…我ながら、ものは言い様ですね。

読んで頂いたことに感謝

## 心残り

ゼノビアは僕の了解を得ると帰っていった。

面接が行われるのは一月程先になるようで、その時には迎えに来てくれるらしい。

受かるかどうかは分からない、だけど出来る限りやってみようと思う。

一応ラッセルにも家族に言ったように、受かるか分からないから他人に言わないで、とは言った。

それと、二つ、心残りというか気になることがあった。

まずは馬のこと。

僕はなんだかんだで一年、あいつに乗っていない。

そして受かって町を出て行くとなると、当然置いて行かざるを得ないわけだから、下手したら僕が乗れるのも後僅かしかない。

それは、僕が、というより、あいつに申し訳ない気がした。

僕が乗りたいことを言うと、家族全員がやっぱり渋い顔。

だけど、今しかないのだと訴え、納得しきつてはいない様子ながら祖父がひとまず横で手綱を引くことで許可が下りた。

次の日僕が準備をし、放牧場ではなく僕が以前まだ乗れなかった頃に練習していた、下が土を掘り返してある馬場で待っていると、祖父が僕の馬を引いてきた。

馬が、ようやくだな、早く乗れ早く乗れ、と急かすのに、僕もだよ、とむず痒いような居ても立ってもいられないような気持ちで跨がる。「じゃあ、まずはゆっくり行くぞ」

祖父の掛け声で馬がゆっくり歩き出す。

久々だったせいで、馬が土の凹凸を踏み外して馬体が振れると、リズムを崩すこともあった。

すると、馬が

「しばらく乗らない間に下手になったな」

と馬鹿にしてきて、僕も

「お前も運動不足で足腰弱くなったんじゃない」とやり返す。

それでも、しばらくそうしていると勘が戻ってきた。

祖父もそれを感じ取ったらしく、気をつけるんだぞ、と言って手綱を離す。

僕は走る速度を上げて行く。

そのまま何周か走ってみても違和感は無い。

僕らは放牧場へと移ることにした。

祖父が祖母とナージエを呼んできて、そろって柵のところで見ている。

僕は草薫る風の中、手綱をきって馬を走らせた。

やっぱり、良い。

どういう仕組みかは解らないが、馬と普通に会話出来るようになった。

ただどうして走らせている時に、手綱から馬の背を挟む足から、気持ちが行き来する感覚の方がずっと話せている気がする。

ふといつだったか、僕に何かあったらお前は他に乗せる人がいない、と考えたのを思い出す。

それがこんな形で現実になるなんてな。

わがままな乗り手がいなくなって清々するよ。

また強がりを言っつて。

本音だけ、初めの頃なんて、こいつ一生乗れないなと思ってたんだ。

今の僕はどうだい？

…まあまあだな。

素直じゃないね。

乗り手に似たんだろ。

「ラカス、久し振りなんだ。そのくらいにしておけ」

祖父の声が聞こえ、僕らの会話もお終い。

ゆっくり歩いて、祖父達のところへと向かう。

「どう？」

僕はもう乗っても大丈夫でしょ、とアピールした。

祖父と祖母は、そうだね、と反対意見が見つからないみたいだった。

「おうましゃん」

祖母に抱かれていたナージエが手を伸ばした。

僕が軽く手綱を引き促すと、馬は分かってくれたみたいで、ナージエの顔の近くまで鼻先を持っていき、ペロリと舐めた。

ナージエはくすぐられたように笑い声を上げる。

「しかし、全く」と祖父。

「あつという間に抜かれてしまったな」

「そうですね」

少し悔し気に喜ぶ祖父を祖母が微笑みながら肯定した。

もう一つの心残りは、祖母のこと。

ゼノビアに受けることを言った日の夕食で改めて家族全員に面接を受ける旨を報告した。

初めから賛成していた父親と祖父は、それが良いと喜びを見せ、母親は、自分が決めたんだからと僕の考えを認めてくれたが、祖母だけは浮かない顔を見せた。

それが気にかかっていた僕は、ナージエが昼寝を始め、祖母が休憩をしていた時を見計らって理由を聞いた。

お祖母ちゃんは反対なの、と。

「ああ、反対だね」

僕の顔を見ず、目の前にあるカップの水面を見ながら言った。

「どうして？」

「大した理由はないよ」



水面の向こうを見ているように、祖母は遠い目をしていた。

「ただ、私が古いだけさ」

寂しさを含んだ響きにそれ以上は聞けなかった。

その夜、夕食の場で僕が受かったらの話になった。

この話題はたまにあがる。

外で言えない分、家の中ぐらいでしか話せる場所が無いからかもしれない。

その時も、祖母は昼間見せた顔を見せず、口元に僅かに笑みを見せながら父親達の話聞いていた。

そんな祖母を見てみると、父親達の話一つ一つが祖母を傷付けている気がして、僕に対して話し掛けられる言葉への返事が曖昧なものになった。

「どうした、ラカス？」

僕の態度に気付いた父親が、僕の目線を追い、祖母を見る。

そうすると、全員の視線が祖母に集まった。

「何かあったんですか？」

「昼間につい寂しくなるね、なんて言っちゃまったのさ」

家族全員の視線を受け止めるように口元だけで笑い

「気にすることはないよ、ラカス、私だってラカスが偉くなるのは嬉しいことなんだからね」

僕には、その言葉は真実に聞こえず、そして頷くことを強制しているように感じられた。

僕は、うん、と頷いた。

「今日はお祖母ちゃんと寝ようか」

寝室に向かおうとする時に、急に言われた。

母親を見ると、構わないよ、との答え。

僕は祖母について、祖母達の寝室に向かう。

先に入った祖母が布団を持ち上げて、僕を招き入れる。

しばらくじつとしてしていると、祖母の向こうから祖父の寝息が聞こえた。

僕は天井を見ていた。

「眠れないのかい？」

耳元で祖母の声。

僕は左側を下になるように体を動かして、祖母を見た。

「せっかくのところ、水を差しちゃってごめんね」

そう言ってきたので、僕は、良いよ、と答えた。

「それに、僕お祖母ちゃんが好きなら、行かなくて良いよ」

僕が行こうと思ったのは、帰る場所があるからだ。

ゼノビアの期待を裏切ってしまう形になるかもしれないし、もう目をかけてもらえないかもしれない。

でも、僕の行動が祖母を悲しませ続けるのだとしたら、大したことない。

生きていくだけならこのまま、町の中だって十分生きていける。大きくなってから、父親のいう書記官なりなんなり目指したって良い。

「馬鹿なこと言うんじゃないよ」

暗くて細かい表情は見えない。

だから、余計に祖母の声が濡れていることが分った。

「言っただろ、ラカスが認められるのは、お祖母ちゃんだって嬉しいんだよ」

「でも、嫌なんでしょう？」

夕食の場の会話が本音だとは思えない。

「それ以上に、ラカスが認められる方が嬉しいね」

僕の勘違いでなければ、強がりのような気がした。

さらに僕が聞こうとしたところで、急に祖母はわざとらしくくらいに明るい声で

「そうだ。ラカスに心配させたお詫びにお祖母ちゃん、ラカスのために何でもしてあげる」

何して欲しい、と聞いてきた。

僕は考える。

と、そういえば、馬に母親を後ろに乗せたことはあったけど、祖母を乗せたことは無いのを思い出した。

「一緒に馬に乗りたい、僕が手綱を持って」  
少しの間。

駄目、と尋ねた。

「いや、全然構わないよ。楽しみだね」

声は明るかったけど、やっぱり濡れたままだった。

## 心残り（後書き）

まだ、行かないのです。

こんな感じだから、オリジナルで良いんじゃない？と言われるのでしょうね。

反省はしてませんが、後悔するよか良いかな、と。

そんな感じで、やっていききたいな、と。

すいません、大目に見てやって下さい。

読んで頂いたことに感謝

## いつか（外伝）

私は馬に乗りたいとは思わない。

そんな私に、お母さんは伝統という言葉で私を馬に乗せようとしてきた。

「メアリー、もういい加減にきなさい」

お母さんはとうとうはつきり言い出したのは夕食の場。

それまでは何かの拍子に言われていたので、曖昧に誤魔化すことが出来た。

真正面に座るお母さんは、私の返事を聞くまでそうしているとわんばかりにじっと見てくる。

「まだ、いいよ」

それでも逃げようとする私に

「何が嫌なの、はつきり言いなさい」

逃がすつもりは無いらしい。

理由はある。

が、言いたくなくて、俯いてその場をやり過ごすしかないと思った。

お母さんは、溜め息を一つ。

「お祖母さんの相手ならチエンがするって言ってくれてるから。あ

なたが気にしなくても良いのよ」

ハツとして、そのチエンを見ると

「大丈夫、任せてお姉ちゃん」

胸を張っていたが、私が嫌がっているのはそういう理由じゃ無い。

「違うわ、そういうことじゃなくて」

「じゃあ、なんなの？口に出して言ってみなさいな」

私は理由を言おうとしたが、曖昧に声を漏れただけだった。

お祖母さんの傍にいるのは、私でありたい。

口に出れなかったのは、口にしても、決してこの気持ちを解ってく

れる訳ないからだ。

私が一番お祖母さんのことを解ってる。

その自信があつた。

私が言い淀んでいると

「そんな強制しなくても良いんじゃないか」

お父さんがお母さんを宥めるように言った。

私はその助け船に期待したが

「これは代々うちで伝えられてきたことなの。あなたは口を出さないで」

お母さんの言葉にお父さんは肩を竦める。

船は簡単に私を見捨てた。

「それで、いつからやるの？」

お母さんの言い方は、私がやるのを了承したような言い方だった。

「私、やるなんて言っていない」

「メアリー」

お母さんの手がテーブルを叩いた。

食器のぶつかる音がする。

私は首を竦めて俯く。

「全くもう、いい加減にして」

お母さんは溜め息混じりにもう一度言い

「お母さんもなんとか言っておいてよ」

お祖母さんに水を向けた。

それに少しホツとする。

お祖母さんは反対するに決まっている。

「メアリー」

聞き慣れた声に顔を上げた。

「明日からやるのか」

聞いた瞬間、椅子を倒しながら立ち上がり、部屋を飛び出した。

裏切られたと思った。

お祖母さんは私が傍に居なくなつて全然悲しくも何とも無かつた。

私は玄関の前に付けられている短い階段に蹲っていた。

もう冬になっていたので、何も羽織らず出てきた私を冷たい空気がまとわり出す。

すると知らず知らずに更に身を縮こまらせ、今私は1人だと自分自身に迫られ、さっきのは聞き間違いなのではないかという私を静かに殺していく。

後ろにあるドアの開く音がした。

「メアリー」

今一番聞きたくて一番聞きたくない声だった。

よいしょ、と階段を下りてくる音が聞こえ、隣りに来ると、私に何か質量のあるものが掛かった。

毛布。

「寒いだろ」

厚く着込んだお祖母さんは、おっと、とよろけながら私の隣りに座ろうとする。

咄嗟に体を支えた。

「ありがとうよ」

お礼を言いながら座ると私の頭を撫でながら、私のこと気遣ってくれてたんだよね、ありがとう、と口にする。

そして私をギュッと抱き締めてくれた途端、私の中をじんわりと温かいものが広まるのを感じた。

「私、いらなくないよね」

氷が溶けたみたいに涙が溢れてきた。

「当たり前だろ、メアリーがいなくなったらお祖母ちゃん寂しくて仕方無いよ」

顔を上げた私の涙を指で拭う。

「じゃあ、なんで」

私は尋ねた。

「そつだねえ」

お祖母さんは慈しむように笑い

「メアリーが馬に乗れるようになったら、後ろに乗せてもらってあちこち行きたいからさ」

私は、ぽかんとしてしまった。

「私の楽しみのためじゃ駄目かい？」

お祖母さんは眉を顰めて悲しそうな顔をした。

「うっん、駄目じゃない」

慌てて首を振って答えると、お祖母さんはパツと笑い

「楽しみだねえ、何処に行こうか」

抱き締めていた私を更に強く抱き締め、頬と頬を当てた。

「私がメアリーを要らないなんて、何があつたって口が裂けたって言わないよ」

優しい声で言われた。

結局、私が一人で馬を十分に操れるようになる前に、お祖母さんは亡くなってしまった。

それがいつまでも心残りだった。



## いつか（外伝）（後書き）

ユディトの死を書いてなかったの。

で、補足です。

ユディトのお母さんは厳格というか、真面目な人だったので、そのせいで、ユディトは家出のような形で旅をすることになったのです。それと、その厳格さからグラフ（リディアの兄）に伝統として乗馬を迫りました。

グラフは真面目に馬に乗る練習してましたが、志半ばでペンダントによって亡くなります。

リディアはグラフと仲が良く、先述したように夢の中でグラフと会い、グラフから馬について心残りがあることを聞き、馬に乗ることに關してリディアは並々ならぬ思いがあるので、メアリーに強制します。

これは書ききれなかったの、ここぞ。

これ書き出すと、ユディトの母親から祖母、曾祖母へと広がっちゃうので、書きませんでした。

一応、なんで厳格だったかという点、子供の頃流行病で身内が何人が亡くなったので先祖の加護の力を取り戻すため、と設定だけはあります。

なんか、本当に一族史になりそうだ。

読んで頂いたことに感謝

## 出立

翌日、早速祖母を乗せて馬に乗った。

季節も初夏を感じさせ出した頃で風が丁度良さそうだ。

祖母はお弁当の入った籠を持ち、後ろに乗る。

祖父に大丈夫かと言われたけど、馬は僕の馬にした。

そういえば、祖母が乗ってから気付いたけど、僕以外が乗るのって初めてかもしれない。

たしかラッセルも泣きわめいて乗せてもらってたけど、あれは秒殺だからノーカン。

そこで、ようやく祖父が心配してる理由が解った。

馬に、大丈夫？、と聞いたら、気にしない、と言われた。

「大丈夫だよ」

と祖父に言うつと

「まあ、ラカスが言うなら」

渋々納得して、抱いているナージエが馬に上がるうとするのを宥めるのに集中し出した。

2人に玄関前で見送られて、僕らも手を振りながら歩き出す。

町を抜ける間、僕らを見て、あらあら良いわね、とそこかしこから言われた。

セシルとドーニも笑いながら祖母に手を振っていた。

一応、僕が行くことが許可されてる範囲があるので、その村々を適当に回ることにした。

その途中の道や村で知っている顔に会うと、中には祖母の知り合いもいたので、昼食はその祖母の知り合いの家で食べた。

室内には、祖母の知り合いだけでなく、僕の祖母が来たということ、入れ代り立ち代り人が来て、祖母と話をして行った。

ただ、随分とすっかりしたお孫さんだよ、とか、うちの孫に爪の垢を煎じて飲ませたいよ、ぐらいならまだ良い。

「ただ、お乳をあげたのが随分昔のことのようだよ、とか、うちの孫とどうだい、とかはやめてほしい、マジで。」

祖母は楽しそうに聞いていた。

「お客さんの夕食の準備があるので、早々にお邪魔させてもらい、帰路に就く。」

その道中

「ラカスもいつの間にか大きくなっただね」

背中から声がした。

家に着くと、足音を聞き付けた祖父とナージエに出迎えられた。

祖母はさつさと降りるとナージエを受け取って

「さあ、夕飯作らないと」

と、足早に中に入って行った。

その後ろ姿を見た僕と祖父は顔を見合わせた。

「何かあったのか？」

聞かれても思い当たる節は無い。

「何も無いよ」

僕らは顔を見合わせて、首を傾げあった。

馬を馬小屋に入れ、片付けをして戻ってくると、ナージエがとことこ歩いてきた。

「にーに」

「何、ナージエ？」

「ナージエはわざとらしいまでに頬を膨らませ、腰に手をやって、怒ってますとアピールしている。」

「ナーチエおこってまつ」

うん、多分、そうだろうね。

「バーバなかしたらめーでしょ」

僕と祖父は小首を傾げながら、ひとまずナージエに引っ張られるようにして、夕食の準備をしている祖母のところへ。

「お疲れさん、夕飯はもう少し待ってくれ」

祖母の後ろ姿に向かって

「ごめんなさー、いうの」

ナージエが僕のズボンの裾を引っ張る。

お祖母ちゃん、と呼び掛けても、なんだい？と言っただけでこっちを見ない。

ナージエが、じっと見つめてくるので

「なんか良く分かんないけど、泣かせてごめんなさい」

ペコリと謝ると、えっ、と声を上げて祖母が振り向いた。

見ると、確かに目が赤かった。

祖母は驚きの表情で、僕と満足気なナージエを見て、何か思い当たっただらしい。

「ナージエ、違っただよ、悲しくて泣いてた訳じゃないんだよ」

何か誤解したらしいナージエに説明していると、鍋が吹きこぼれてあわわわ、と鍋を見始めた。

「お前の成長が嬉しかったんだろ」

後ろにいた、祖父が言った。

僕は、だったら良いな、と思った。

その後、本を覚えたり馬に乗ったりたまにナージエの相手をしながら過ごした。

そして、ゼノビアが迎えに来て、僕は町を出た。

## 出立（後書き）

ナージエを活躍させたかったのです。

前話が短かったので慌てて書いたもの。

なので（？）、「これも短いです。」

ようやくです。

読んで頂いたことに感謝

## 緊張（前書き）

すいません、間空きました。

仕事が忙しく、合間合間にちよこちよこです。

相変わらずの展開の遅さです。

## 緊張

僕は手摺の上で組んだ腕に頭を乗せて外の風景を見ていた。

ゼノビアの乗って来た馬車の箱は下の辺が全体の三分の二までである  
コの字のような形で、辺の無い部分は角に太い支えがあるだけな  
で、すれ違う風が顔を弄っていく。

時々突き上げられるように揺れるのを堪えるには、こうしているの  
が楽だった。

乗る時に見えた、箱の下で平行に並んでいた弓のように曲げられた  
二本の四角い鉄の棒は衝撃を和らげるためにあるのだろうけど、あ  
まり効果を発揮していないし、座席に敷かれたクッションも気休め  
にしかないらしい。

天井部分が少し出ているお陰で出来た日陰の中で顔を右に転がすと  
箱の前方が見え、鉄の棒は半円を描くように繋がっているその前に  
2人、御者が座っている。

2人とも20才くらいだろうか。

1人は、乗り込む際に鉄の棒の関係で高い位置にある箱に上がるた  
めに台を出してくれた人。

細身だけど、母親と同じように鍛えられているのが分かる体付きで、  
撫で付けた茶色の髪が先の部分だけ外に跳ねてるのと、どこか子供  
を思わせる笑みを浮べた鳶色の瞳が印象的だった。

もう1人は、こちらも体格はもう1人に似ていてバンドナを巻いて  
いる。

顔はずっと御者が座っている台にいたからよく分からなかった。

箱の後ろにも、前の御者台と同じように鉄の半円の先に台があつて、  
幌を掛けられているそこに、大きめのトランク鞆が三つ置かれてい  
るのが見える。

あの中に、僕の着替えが入っているそうだ。

また、視線を外に向ける。

風景が、たまに上下に揺れながら、後ろに流れていく。

まだそんなに僕の町から離れていないはずだから、風景を構成するものに大きな違いは無いはず。

だからなのか、たまに見たことあるような風景が飛び込んでくることもある。

すると頭の中で勝手にそれがどこだったかを探し始めるのに気付くでも、どんなに思い出そうとしても、思い出せるのは似たような景色であって、同じものは無い。

知らず知らず行なわれるそれらの作業が、余計に目の前の風景が知らない場所なんだということをやより強く感じてしまってる気がした。すると不思議なもので、顔に当たる風すらも僕が知っているものじゃない気がしてくる。

なんとなく、すぐに町を出てしまったことを後悔した。

普段目にする事のない馬車を見ていた子供達や、僕がゼノビアに連れられて馬車に乗るのを興味津津に見てきた奥様方の視線が恥ずかしくて、ゼノビアにすぐ出発してと言ってしまった。

知らない場所というものが、こんなに心細くさせるなんて思わなかった。

けして見つかるわけないと、自分でも解ってる。

なのに、まぐれでも知ってるものに会わないかと、つい外ばかり見してしまう自分がいた。

「ラカスちゃん」

2人掛けの隣りに座っていたゼノビアに呼ばれた。

僕が振り返ると

「緊張しているの？」

微笑みながら言われて、僕は自分が外ばかり見ている理由を知った。

「大丈夫」

それでも、僅かに噛みながらも無意識に強がった。

今弱音を吐くと、そのまま何かに足をつかまれてしまうような気がした。



ゼノビアは僕の強がりを見抜いたようでくすりと笑い、前に座っている御者に向けて

「お2人さん、さつきからソワソワしていますよ。何か言いたいことがおありですか？」

話しかけると、髪の毛が外に跳ねている方の御者が勢い良く振り返り「良いのかい？」

と、尋ねた。

ゼノビアは口元を押さえるように笑い

「構いませんよ。ラカスちゃんも同性の方が話しやすいでしょうしそして僕を向き、ねえ、と言った。

御者というのは、本来乗っている人に話し掛けてはいけならしい。許可を得た外跳ねの御者は僕を見て

「俺はロウ、こっちはラウザ」

と名前を言った。

ラウザが首だけ回して顔を見せる。

顎先だけの髭と、落ち着きの見える茶色の瞳を持っていた。

「俺ら2人とも、昔アンの姉御と働いてたんだぜ」

ロウは自慢気に言う。

母親が辞めた後も2人は働き続け、今では若いながらもちよつとした地位にいるそうで、本当なら僕を運ぶなんて2人がするような仕事じゃないし、そもそも部下を1人回せば十分だったらしい。

なのに、2人がわざわざ来てくれたのは

「ゼノビアの姉さんから、姉御の息子が貴族の家に乗り込むって聞かされりゃあ俺らが行かねえでどうする、って話だろ」

その言い様にゼノビアが笑いながら、そんな乱暴なこと言ってません、と訂正を促す。

ロウは無視して、僕をじつと見、姉御そっくりだな、と顎を擦る。

「だが、なんだその面は」

いきなり大きな声で、僕を指差した。

その行為にビクツと肩が震えた僕に、さらにロウは台から身を乗り

出して

「さっきから様子を見てりゃ、そわそわそわそわ」

僕の様子を真似てるのか、首を左右に動かしたり手をもぞもぞで

「ビシツとしるや」

迫力に押されて、首を縦に振って応じる。

それを確認したロウは僕に、笑え、と言ってきた。

何を急に、と思ったが、ロウが急かすので、頬を引きつらせながら笑い顔を作る。

「駄目だ、駄目。こつだ、こつ」

ロウは僕に手本を見せるようにして、につ、と笑顔を作った。

口角が綺麗に上がり、噛み合わされた犬歯がはつきりと見える。

さあやってみると言われたので真似をすると

「とりあえずは、よし」

満足はしてないみたいだけど合格点はもらえるらしい。

ロウは真面目な顔で、良いか、と前置き

「緊張しちまうのもビツちまうのも分かる。そんなの当たり前だ」

そう言くと、さっきより一層の笑みを見せ

「けどな、そういう時こそ逆に笑ってみせるもんだろっ」

その言葉は何故か、トンと軽く僕の胸の真ん中を突くようにして届いた気がした。

呆気にとられる僕に、ロウは言葉を続けようと口を開けた時

「俺らが、アンさんに言われてきたことだ」

今まで一言も発しなかったラウザが入ってきた。

聞いた瞬間、ああ、と納得。

確かに母親が言いそうな言葉だった。

僕は僕の深い部分にさっきの言葉が沁み込むように落ちていくのを感じる。

それは冬に陽だまりを見つけたような、安堵の形に似ていた。

途端、顔に当たる風が変わった気がする。

今まで素っ気無かったものが、僕を誘っているような鼓舞している

ような。

その変わり様があまりにも現金で可笑しく、僕は笑ってしまった。

「なんだよ、出来るじゃねえか」

それは俺が言う流れだった。だとラウザの胸倉に掴みかかっていた口ウが、僕の笑い声に気付き、肩を竦めるように笑う。

「驚いたでしょう?」

ゼノビアがこつそり、悪戯が成功した子供みたいな声で話しかけてきた。

多分、ゼノビアは僕が緊張することなんてお見通しで、この2人を連れてきてくれたのだと思う。

「うん」

ゼノビアは僕の答えを満足そうに受けると、前方に向け手を口に添えて

「さて御者さん、こちらのお方は、これから貴族様のお屋敷に乗り込むんですからね、しっかりと先導して下さいね」

応えたのは、手綱を持っていたラウザだった。

「お任せください。間違いなくお届けします」

手綱を持っていなかった口ウはゼノビアとラウザを交互に見た後

「そりゃ、俺の役目だって言ってるんだろ」

ラウザに手綱を渡すようにアピールしたが、ラウザは無視。

それでもしばらく続けていたけど、結局諦めて、ふてくされたように口笛を吹き出した。

## 緊張（後書き）

ロウとラウザは、ゼノビアとジャンヌを考えた時に、一緒に考えたキャラです。

一応、アンを入れて13人。

中央時代、傭兵紛いの仕事や運び屋、ドタバタ話を、アンの冒険というタイトルで書くつもりだったのですが、余裕が無いので諦めました。

近い内に、報告の方に人物紹介を書こうかなと思ってます。

それと、仕事が忙しくなると、更新速度が激しく落ちます。すいません、と予め謝っておきます。

読んで頂いたことに感謝

確認（前書き）

難産でした。

## 確認

僕が自分の町を出たその日は、太陽がオレンジ色に変わる前に宿に入った。

その町はその辺り一帯の中心となっている町だそうで、さすが領主の屋敷に近いただけあって、僕の町でたまに見掛ける商人とは服装からして違う商人がウロウロ歩き回っていたり、道端で普通に物を売っていたり、僕の町より整然としているのに何故かごちゃごちゃしてするような印象を受ける。

キヨロキヨロ目をやっていた僕を、他の3人は、もっと大きい街もあるのだと笑う。

僕は自分が田舎者なんだと実感した。

泊った宿屋も僕のとこより部屋が広い。

ただ、値段を聞くと僕のとこより広さに対しての金額が高い気がするから、なんか納得はいかないけど。

サービスだって負けてないし、と思うのは身贖戻というものか。

まあ、立地条件と宿を必要とする人数が違いすぎるのは分かっているんだけどね。

部屋に入っただけで、ゼノビアは僕の服を用意し始めた。

一応、一番最近会った時に軽く採寸されたのだけど、微妙に大きさが違うものだから、形や色合いが違うものを何種類か持ってきていて、実際に着てみたり当ててどっちが僕の雰囲気合ってるかなどというのが夕食前まで続く。

初めは僕もそれなりにあつちがあつちがと考えていたけど、男だから、段々ともう良いんじゃないと口にしそうになる。

でも、ゼノビアがそれを見計らったかのように

「せっかくの機会なんですからね、万全で望みましょうね」

両手に服を持ち、見比べながらそう独り言のように言われてしまうと、僕はもうこれで良いんじゃない、を飲み込み、渡された服を黙

々と着て見せるしかない。

僕だって、服装が全てとは言わないけど、会った瞬間に与える印象が大事なことぐらい知ってる。

結局決まった服装は、白いシャツに黒い七分丈のズボン、サスペンダーに黒のベスト、白いソックスに靴。

「ラカスちゃんは黒髪だから、黒ばっかりだと暗く見えちゃうと思っただけど、顔が端正だから返って引き立つわね」

とは、ゼノビアの最終的なコメント。

茶色やチエックも持って来ていたけど、それだと軽い感じになってしまっただそつだ。

僕には良く分かんない種類の話だけど、夕食の準備が整ったことを伝えに来たロウ達にも好評だったので、よしとしよう。

夕食を食べた後は、3人から若い頃の話聞いた。

若い頃の母親の話は本人からも聞くことがなかったので興味があったし、やっていた仕事柄色んな土地に行っていたらしいのでその土地の話聞くのも関心をひく。

面接の話は一切出なかったことに気付いたのは、翌朝スッキリ目覚めてからだつた。

すぐに朝食、そして僕だけでなく全員が着替える。

ゼノビアは良いとこのお嬢様が着るような服に、ロウ達御者も正装というのか、前日まで袖を捲っていた汚れが見えたシャツを綺麗なものに取り換え、ロウは髪形、ラウザは髭を整える。

準備が済むと速やかに町を出た。

大きな門に着いたのは、まだ太陽の勢いが増すか増さないかの時間だつた。

これだつたらもうちょっとゆっくりでも良かったんじゃないだろうか。

門の内側にあるちょっと大きい民家のような所から出て来た人と話

すラウザを見ながら、ゼノビアにこつそり言ってみた。

ゼノビアは苦笑いをし

「お屋敷に着くにはまだまだ掛かるんです。余裕を考えて、これでもギリギリなんですよ」

これには、驚く他無い。

どんだけ広いのかは聞かなかったけど、僕には想像もつかない広さらしい。

その証拠なのか、僕らが門を抜けた後、門番のような人が放った伝書鳩が勢い良く飛んで行き、あつという間に見えなくなった。

少なくとも、人が行って伝えるには結構な時間のかかる距離らしい。しばし進むと、納得せざるを得なかった。

門を潜ったのだから、以降は庭のようなものなんだろうけど、森はあるし川も流れてる、村すら見えた。

改めて貴族というものに脱帽。

屋敷、といつてもお城のみたいなものが見え始めたのは、先に泊った宿屋でもらった昼食を食べた後だった。

庭にも驚いたが、更に驚かされたのは、屋敷の周囲をぐるりと巡っている堀を渡るために橋を下ろしたのが、何かしらの仕掛けじゃなくて、人型の大きな土の塊だったこと。

「あれは何？」

つい興奮して聞いてしまった。

「あれも魔法の一種なんですよ」

僕はゼノビアの説明に感嘆の声を上げながら、塀の影で見えなくなるまで動く土人形を眺めていた。

僕は魔法と聞くと、火を起こしたり、病気を治すことを想像していたけど、確かに人形を作ることも出来るはずだ。

失念していたのは、自分の仕事は自分でやるといふ暮らしを送ってきたからだと思う。

馬車は正面に回らず、迂回して裏に回るようだ。

正面は見栄えがするように、飛び出した部分を作ったして工夫をし



であるが、裏に回る道の壁は絶壁と言えるぐらいグワツと立ち誇っている。

圧倒される前にあまりにも見たことの無い光景に妙に感心してしまった。

貴族って凄い。

裏口と言っても、全然普通の家の正面玄関より大きくて立派だった。メイドが2人待っていて、僕は中に案内される。

「この部屋でしばらくお待ち下さい」

そう言つて通された部屋も、多分貴族のためではなく商人の人が待たされる部屋だと思つただけで、しっかりと光沢の浮かぶ椅子にテーブル、壁には絵が掛けられていて、良く分からない僕が見ても高そうだ。

鏡も置いてあつて、馬車の揺れで乱れた服の折り目を整えていると、メイドが来て、お茶が用意された。

そのお茶も、そんな高いものではないんだろうけど、僕が飲んだものとは大違いに色が良く香りも良い。

「ラカスちゃんも落ち着くために、どう」

ゼノビアに勧められて一口含むと、広がる味と香りはまるで天と地。驚きを持つてお茶をもう一度見直していると

「そんなに美味しかったの」

微笑ましいものを見る目で見られた。

一気に飲むのがもつたない気がしてちびちび飲んでみると、ドアがノックされ

「お待たせ致しました」

と僕らを案内したメイドが入ってきた。

ゼノビアが頷いて立ち上がる。

僕は残つていたお茶をどうしようか迷つたが、メイドの目を気にして諦めた。

今度案内されたのは本当に応対室といった感じで、待たされた部屋

に比べて絵画等の装飾は少ないけど、椅子やテーブルの足に細かい金の装飾が施されていたりしていて、落ち着いて話が出来そうだけど、しつかり貴族の風格が存在している。既に人がいた。

髪をビシツと撫でつけ、パリツとした服は皺ひとつ無い。

整えられた髪の中に見える白い物や軽く笑みを作る顔に浮ぶ皺を見る限り、もう結構な年なんだろうけど、背中がスツと伸ばされ、待たせたことを謝り、僕らに座ることを促す流れは、まるで年を感じさせない程澱みが無く滑らかだった。

現在、僕の目の前に座るその人は、ジェロームといいますと初対面の僕に名乗った。

僕も慌てて、自分の名前を言い、今日はよろしくお願ひしますと添えて頭を下げる。

「はい、こちらこそ」

ジェロームは僕を言葉を笑みで受けて、軽く頭を下げてくれた。そして、まずゼノビアと軽い世間話のような挨拶を交わす。

最近の物価や珍しい品の話をした後

「それにしても、随分とお若い方を連れてまいりましたな」

そう言った瞬間、ジェロームの顔つきが変わった気がした。

それまでは品のいいお爺さんといった感じだったのに、急に厳しさというか一歩引いた様な冷たさを纏う。

「お嬢様の年齢に合わせた結果です」

ゼノビアの顔も変わる

薄ら笑みを浮かべているのは同じだけど、笑みが遠くなったような、そんな気がした。

「と、言いますと」

ジェロームが促す。

「お嬢様はまだ幼くいらつしゃいます」

ゼノビアは区切りを付けるように言った。

「上のお嬢様方もそろそろお忙しい時期になられますね」

時間が経つのはあつという間ですな、とジェローム。

話の中身は世間話の時と変わりが無いように思えるのに、どこかお互い探っているような雰囲気があるような気がした。

「僭越な言い方になりますが、お嬢様も寂しがるでしょうね」

「いえいえ、お嬢様も聡明なお方です。ご自分の立場を解ってらっしゃる」

ゼノビアの言葉をやんわりと否定するジェローム。

「でしょうね。ラ・ヴァリエール公のお嬢様ともなれば、やはり普通の貴族のご子息とは違うのでしょうか」

ゼノビアはすぐさま否定の言葉を肯定した。

そして2人は微笑みあう。

少なくとも表面上はそうだけでも、水面下ではなんらかの攻防があるのだと思い、僕は邪魔にならないように気配を消すので必死。

「そういえば、時の流れと言えば、一番上のエレオノールお嬢様などそろそろご結婚などもお考えになる年齢ですね」

ゼノビアが水を向けたが、ジェロームは苦笑いをし

「申し訳ありませんが、それは一使用人である私には耳にすら入らぬ話です」

一歩引いたようなところへ、ゼノビアは更に

「申し訳ありません。平民の下世話なところをお見せしまして」

一度謝罪の仕草をした後

「ですが、下世話ついでに言いますと、この国に暮らす平民としては御幸せになって頂きたいというのが正直な気持ちですわね」

ジェロームは、何も言えないと曖昧な笑いに留めた。

「一平民の願いと致しましては」

いつの間にかゼノビアの下世話だという話は、平民の願いへと摩り替わる。

「年上の男性を選んでいただきたいものです。あくまで、並べるのもおこがましいですが、私も同じ女性としての意見ですが、女性というものは知らず知らず頼れる存在という物を探してしまうもので

すし、その存在から肯定されたいと思ってしまうものですから、お相手はやはり分別のある年上の男性の方が安心してしまいます」

「なるほど」

ジェロームは頷いたが、深く同意したわけではなく、あくまで女性というものの一般論についての返答に過ぎないという風情だった。

「ですが、エレオノールお嬢様の御友人の方々も高名な貴族のお嬢様方でいらっしやいます。御心配には及ばないでしょう」

柔らかく、しかし、はっきりとゼノビアが含ませた何かを否定しようだ。

先ほどは否定を肯定したゼノビアだったが、今回はそうしなかった。

「それは心強いことですわ。でしたら、ヴァリエール公は随分と御心配なさってるでしょう。そんな御友人がいらしたなら、余計に。」

女性の話は男の方は立ち入ることが難しいでしょうから」

一息にゼノビアが話し返答を求める素振りを見ると、ジェロームは苦笑をして、ゼノビアに退室を促した。

ゼノビアは何か勝ったようなのだけど、特に喜ぶ様子を見せず変わらず口元に笑みを浮かべたまま、僕に軽く頷くようにして笑いかけると部屋を出て行く。

これからは、僕の番らしい。

2人つきりになると、ジェロームはゼノビアの時の冷たさが無くなり、元の優しそうな顔になる。

そのまま幾つか質問された。

まず、名前と住んでる町の名前。

僕が町の名前を言うと、ジェロームはそこがどんな町かを聞いてきたので、言葉遣いに気をつけながら周囲の風景や町の中にある店にはどんな職業があるのかを答えた。

そして僕自身は普段どんなことをしているのか、とか、最近何に興味があることなどまで聞いてきた。

そして、

「ラカス君の一番大切なものはなんですか？」

とも聞かれた。

「家族です」

あまり考えることなく、すぐに答えた。

ひとしきり聞き終わった様子のジェロームは、フムと一呼吸をおいて「肩の力も抜けたようですね、では幾つか質問してみるので答えてください」

と言った。

来た、と思った。

心構えはしていたものの緊張していないわけではない。

だけど今までの簡単な質問で緊張を結構ほぐれていた。

身構える僕に、ジェロームは、そういえば、と前置きをして

「質問の前に確認しておきたいことがあります」

「はい？」

僕は肩透かしを食らったような気持ちで聞き返す。

ジェロームの顔から笑みが消えに真顔になる。

「ラカス君がこの試験に受かった場合、お嬢様付きの用人になりますが、もし万が一にでもお嬢様に身に何かあれば、ラカス君自身は勿論、ご家族の方も命を亡くすことになりますが、よろしいですか」

とても静かな部屋の中に、落ち着いた声が沈むように響いた。

## 確認（後書き）

仕事の合間にちこちこ打ったせいで、長い上に所々おかしい気がします。変にいじくると更におかしくなる気がするので、投稿してしまいます。

今回凄い難産でした。

屋敷はジャンポール城（だっけな？）、周囲はイギリスのカントリーハウスの風景を参考に。

それと面接の試験内容ですが、リッツカールトンの面接で聞かれるらしいのをちよいパクリ。

あまり、勘違いものとかの展開にしたくないので、一流どころの面接で聞かれる質問を使いました。

本当なら屋敷の描写や風景も書きたいのですが、話が進まないののでひとまず諦めます。

あと、手の内を読ませない何気ない会話って難しい。

途中から書きながら意味分かんなくなりそうでした。

そういえば、初めて出た原作キャラがジェロームでしたね。

読んで頂いたことに感謝

## 選択

何を言ってるんだらう？

沈黙の中で、まず、そう思った。

今ジェロームは、お嬢様付きの使用人、と口にしたが、僕は単なる使用人としての面接に来たつもりだった。

まあ貴族、それも公爵となれば使用人も多くて、家族それぞれを担当する使用人がいるんだらう、僕はその中のお嬢様担当になるんだらう。

そういう認識だった。

年が近い人を希望しているというのも、長く仕えられる人の方が後々便利なんだろう、とか、お嬢様は関係無く小さい頃からの青田買いみたいなものかなと考えていた。

だから、ジェロームの言葉は僕には全くもってなんのことやらという状態にさせた。

僕は沈黙を静かに割るように

「あの」

と、ジェロームに尋ねた。

ジェロームは先の言葉を発して以来、口元にだけ笑みを浮かべた表情で僕を窺っている。

「よろしいですか？」

「いえ、そうじゃなくてですね」

さっきの言葉を肯定したものと取られそうになり、慌てて否定。

そして、お嬢様付きとは一体なんのことなのか、僕は単なる一使用人の面接という話で来ただけなことを告げた。

ジェロームは口元の笑みを深くする。

「そのようなことは私の知るところではありませんね」

バツサリと一刀。

「この場はお嬢様付きの使用人の面接の場で、受けるのはラカス君



だというのが私の知る全てです」

まさに正論だと思う。

僕は口を噤んで俯いた。

何故ゼノビアは教えてくれなかったのかと憤りもあるが、今そんなことを思っても仕方無い。

確認の答えを考え始めるしかなかった。

といっても答えはすぐに出てしまう。

僕には、その覚悟は出来ない。

家族全員が僕にとって大切な人達であり、公爵のお嬢様付きという仕事かたとえ将来どんなに得になることだとしても、簡単に天秤に乗せるなんて出来るわけ無い。

あまりはつきり言うのも失礼だと思い、なるべく申し訳なさそうに言おうと思った。

そこに

「驚きましたか？」

ジェロームが話しかけてきた。

そのタイミングに、言おうとした言葉を飲み込み、とりあえず、はい、と頷いた。

ジェロームは今までの表情をガラリと変え、苦笑いのような表情を見せた。

「さすがにラカス君はあまりにも幼いので、特別に本当のことを言いますよ」

いきなり態度を変えたことに驚く僕を無視してジェロームは話し続けた。

「実はゼノビア様には、この面接は普通の使用人の面接だと言うようにお願いしたんですよ」

先程は突き放すような言い方をしてしまいましたがね、と付け加える。

「お嬢様の御側に控える者を探しているわけですから、話を大っぴらに広められますと困ってしまうわけです。それにこれも試験の内

なんですよ」

ここまで話されて、さっきの驚いたかどうか聞いたのは、僕が単なる使用人の面接だと思っていたことに対してだと気付いた。

「万が一にでも、お嬢様の身に何かあってはなりませんからね、信用出来るかどうか見させていただいでるんですよ」

そう言うと、僕をじっと見

「先程一番大切だと思うものは、とお聞きしましたね」  
僕は頷いた。

「そこで、お金、自分等とお答えになられる者は信用が置けません。分かりますね」

もう一度頷く。

「ラカス君は家族とお答えになりました。まあ合格と言って良いでしょう」

「ありがとうございます」

一応、褒められると思うので頭を下げた。

ただ、僕は内心辞退しようと思っていたので、心苦しさはあったけど。

僕の返事を少し首を竦めるようにしてジェロームは受ける。

すると、ジェロームは椅子に座り直し、急に思い出したように

「そうそう、先程の確認の答えですけどね」

その言葉に僕はハツとし、返事をしようとしていたことを思い出す。

「まだお答えにならなくてもよろしいですよ。もう少しお考え下さい」

もう考えなくても大丈夫です、そう言おうとした。

しかし、ジェロームは

「その間、私は少し独り言を話しますので」

そう言うと、スツと視線を外した。

どうやらジェロームは僕の返事の前に何か言いたいことがあるらしい。

ジェロームは話し始めた。

まず、諸事情によってお嬢様付きの使用人を探さなければならなくなつた。

そしてさつき言ったように、話を広めたくなくて内々で探していたところ、ゼノビアがどこからか話を聞き付け、推薦したい子供がいると言つてきた。

元々ゼノビアの商会とは定期的な大きな取引は無いものの珍しいものや高価なものをたまに取引する程度の関係だった。

その程度の取引をする商会は他にも多数存在する。

商人というものは商売柄耳が早い。

ゼノビアの例が認められるならウチも、となるだろう。

だから、条件を出した。

もしゼノビアの推薦した子供が合格以外ならゼノビアの商会は今後一切の取引の停止。

それは相手が公爵家ということもあって大々的に伝えられるだろう。なれば、他の貴族も取引を敬遠するだろうし、他の商会との取引にも障害となるかもしれない。

下手をすると、倒産も有り得るやも。

ゼノビアの商会は確かな品質で相応の値段のために本音を言えば、取引を続けたいが、他の目もあるので、交わした条件を守らざるを得ないのが残念だ。

そこまで話すと、外していた視線を僕に向けた。

「どうですか？ 答えは出たでしょうか？」

僕は無言で首を横に振った。

服の背中の部分がジツトリと濡れているのが分かる。

肩が錘を乗せられたように重い。

正直、辞退したらゼノビアに謝ろうとは思っていた。

だけど、今の話を聞くととても謝って済む話では無い。

「ですか。では大切なことですから、良くお考え下さい」

ジェロームは一拍置いて

「と、言いたいところなんですけど、申し訳ありませんが私この後にも予定が詰まっておりますので、その確認は後に回して、先にテストを済ませてしましましょう」

ジェロームにそのように提案されても、僕はとても他のことなんて考えられる状態では無かった。

なにせお嬢様付きの使用人になってもならなくても、家族とゼノビア、どちらかを犠牲にする可能性を持ってしまった。

待つて欲しい、とは言ったが、申し訳ありませんがテストが終わらなかつた場合は不合格とされていますので、そう言われてしまうと素直に受け入れざるを得ない。

そして、そこに至って今から受けるテストも気が抜けないことに気付く。

ゼノビアが飲んだ条件は、合格以外と言っていた。

ということは、テストの点で不合格の場合もゼノビアのところは取引停止になるということ。

「では、始めましょうか」

ジェロームは淡々とテストを始めた。

## 選択（後書き）

えー、また随分と間が空きました。

仕事が忙しくてモチベーションガタガタだったのですが、来週夏休

みが貰えそうなので、少しモチベーションが生まれました。

久々過ぎてノリが分からなくなってます。

またぼちぼちやって行きたいです。

読んで頂いたことに感謝

## 不安

テストは、まずトリスタニアの歴史の知識を確かめるものから始められた。

ジェロームがブリミルの誕生から大筋を拾うように話してゆき、一区切ついたところでそこまでに起きた出来事の名称、有名な地名人物名、歌われた歌などを口頭で尋ねるといふ形式だそうだ。

それらの中で、僕はとりわけ人物名が苦手だった。

それ以外のものは、両親に地図を書いてもらって大体の位置関係を知れたし、出来事の名前や歌についてもその地域の物に由来していたり風景を絡めてあったりして、暗記するにしても覚えるきっかけみたいなものがあつた。

だけど人物の名前は、長い上に規則性があるわけでもなし。

しかも、第五代く伯爵初代侯爵のように稀に爵位を二つ以上持つ人もいるわ、似ている名前や近い一族の名前もあるわで覚えきれない。

が、今更そんなことも言つてられなかった。

とうとうジェロームの話が一区切つくと、第一問目が問われた。

最初だけあつて様子見なのか、簡単だと思つた……んだけど、答えを口にしようとした瞬間、それは本当に合ってるのかと不安が湧き出してくるのを感じる。

それでも、合ってるはずと、不安を押し込めて答えを口にする。

怖々とジェロームの顔を窺つと、ジェロームは顔色を一切変えず

「では、次の問題です」

正解不正解を言わず、次へと移つた。

どうやら、僕は自分の言つた答えが正解かどうか分からないまま答え続けなければならぬらしい。

僕の不満を他所に、出された2問目もすぐに答えが浮ぶことは、浮んだ。

でも、やはり本当に合っているのかと不安になる。

どこまで難しい問題が出されるかわからないから、なるべく最初の問題は間違えたくない。

合っているのか、頭の中の記憶を手繰っていると、不図さっきの答えが合っていたのかを勝手に考える出してしまう。

終わったことだ考えるなど、そう思えば思うほど程焦ってしまい、とうとう足が震えだし背中を汗が伝い出した。

「分かりませんか？」俯き気味になっていた僕を下から覗き見るジエローム。

「いえ」

このままだと次の問題に行ってしまう。

落ち着け、落ち着け。

自らに言い聞かせていると、無意識に左手が胸元、服の合わせを押さえていた。

布越しに硬いものを感じる。

そのの形を確かめるようにして柔らかく握りつつ、一度深く呼吸。

僕は覚悟を決めて、一番最初に浮かんだ答えを言った。

相変わらずジエロームは正解不正解を言わない。

ただ

「次からはもう少し早くお答え下さい」

そう言われた。

「はい」

僕はペンダントを一度強く握り締めた。

そこからは妙に腹が座った気がした。

といつても、急に僕の頭が良くなった訳ではないから、分からないものや自信の無いものも当然ある。

それを、次に引き摺らないと決めた。

浮き足立ちそうな気持ちをペンダントを握って、ここに繋ぎとめる。

次の問題は、と考え続けた。  
そんなやりとりを繰り返していると、ふいにジェロームが祖父の姿と重なった。

夕食の前、祖母が準備をしている僅かな時間のこと。

僕が歴史の勉強をしていることを知った祖父は、僕にその日何を知ったかを聞いてきた。

それは僕がベッド生活を送っていた時もそうだった。

僕がその日に知ったことを本を指しながら説明すると、祖父は、問題を出してやるうと言って僕から本を受け取り、今聞いたところから問題を出した。

祖父も文字は少し解るみたいだけど、初めて聞いた名前も多いようで、出す問題もたどたどしく、僕の方で祖父の問題の意図を汲み取らなければならなかった。

僕はその日に見た名前だからうる覚え、それでも一応浮んだ答えを言うと、いつも祖父は本を目で追った後、誤魔化すように、正解と言う。

祖父が居なくなっただ後、こっそり本を見て不正解だったことを知るのもいつものこと。  
変なやりとりだった。

なんか、それを思い出した。

「以上です」

とジェロームに言われた時、ひとまず終わったとホッとした。

次は文字についてだそうだ。

テーブルの天板の下は引き出しになっていたようで、ジェロームはそこから紙の束を取り出した。

まず筆談のようにジェロームが文章を書き、僕がその答えを下に書く。

何回か繰り返し返して、ある程度読めると認めたのか、今度はジェローム



ムの言ったことを文章にするように言われた。  
幾つかの文を繋いで作るような長い文章を見ると、さつき祖父を思い出したせいも、父親を思い出した。

ゼノビアからもらった文字の本は有名な人が書いた本らしくて、そういう人は何故か難しい言い方を好むらしい。

その言ってることを、夜に外で2人して地面に色々書きながら、あーだこーだ。

早く寝なさい、と怒られながら2人で導き出した結果をゼノビアに手紙で聞いたら、全くの間違いで、顔を見合せて笑うこともままあった。

もしちゃんと解ってる先生とかに教わってたならそんな手間のかかることは有り得ないと思う。

でも、そんなことをしたお陰でちゃんと理解して覚えられたとは思う。

そんなことを思い出しながら、言われた中であつた知らない単語を言い換えによつてなんとか形にする。

それも父親とあーだこーだした所だった。

「はい、結構です」

渡した紙を含めてトントンと紙を揃えながらジェロームは言った。

整えた紙をまた引き出しに仕舞い、今度は小さな円柱の筒のようなものをテーブルの上に置く。

上底と下底を銀の細工の付いた台座が覆っていて、台座同士を4本の柱が結んでいる。

ジェロームは引き出しを閉めると、左右の指を組み合わせて握り、肘を腿に立てるようにして120°以上開いた形で構え

「次の質問が最後です」

握られた拳がリズムをとるように一定の間隔でゆっくりと上下。

「質問をする前に幾つか注意事項があります」

話しても良いですか、と聞かれたので、頷き、進めることを促した。

「まず、私が質問をした後は、答え以外の発声を一切認めません」  
拳が一番低い位置に下ろされる。

「次に、時間はこの砂時計が落ちるまでとします。3分程でしょうか。それまでに答えることが出来なければ、それも不正解とします」  
僕は疑問を感じた。

今までの傾向とは全く違う。

「では、よろしいですね」

心臓の音はつきり聞こえた。

唾を飲み込み

「はい」

返事を返した。

「では、最後の質問です」

ジェロームは砂時計を手に持った。

「どちらか一方しか助けられないとしたら、ラカス君は、お祖母さんとゼノビアさま、どちらを助けますか？」

砂時計がひっくり返された。

## 不安（後書き）

ガッツリ2人きりの会話と緊迫感の勉強にと、挑戦したけど難しい  
ものですね。

歴史についてもあやふやだし、文字も良く分からないし。

後でもうちよっと手を入れたいかも。

読んで頂いたことに感謝

問題を聞いた瞬間、自分があまりにもテストに集中していたことに  
気付き、ハツとした。

たとえテストの点が悪かったとしても、その後には家族とゼノビアの  
商会、どちらを選ばねばならないことを思い出したからだ。

というか、この問題の答えがそのまま直接、どちらを選ぶのかに繋  
がるような気もする。

そこまでの意図があるのか聞きたいが、言葉を発してはならないと  
言われてしまったので、聞くことが出来ない。

下唇を軽く噛みながら考える。

そもそもどちらが正解という類いの問題では無い、…と思う。

ただ、この一連のテストをお嬢様付きの使用人の採用試験だと考え  
ると、ゼノビアはお嬢様の代替なんじゃないだろうか。

実際、このテストの合否はゼノビアの商会に倒産を与えてしまっ  
たかもしれないわけだから。

そう考えると、正解はゼノビアなんだろうか？

この問題の意図はこのような気がする。

一番大切だと言った家族を見捨てられるか。

はっきりと言わなくても、ゼノビアと答えてしまえば同じこと。

だとしたら、ゼノビアは本当に正解なんだろうか。

堂々巡りだった。

正直に言つと、助けるなら祖母を選ぶ。

2人を思い浮かべても浮かんでくるのは圧倒的に祖母の方。

確かにゼノビアは本をくれたり目をかけてもらって感謝してる。

だけど、祖母は多分家族の中でも一番長く近くにいた気がする。

僕のために何度笑ってくれただろう、何度心配してくれただろう、

何度味方してくれただろう。

何度泣いてくれただろう。

僕には感謝の言葉すら無い。  
見た砂時計の砂はもう僅か。  
残り時間は無い。

…後悔しない方にしようと思った。  
どちらが正解か分からない。

ジェロームがお嬢様に何かあった場合の話をした時、ゼノビアの名前を出さなかった。

この部屋に入った時の手際、風格からして、言い忘れたということはない、と信じよう。

落ちたところでゼノビアの命に何かあるわけでもなし、生きてはいける。

そう考えると、この後に聞かれるだろう確認の答えも決まった。  
砂時計の砂はもう先の細くなった部分くらいしかない。

これで良いよな。

声に出さないように自分に言い聞かせながら、ペンダントを握った。  
脳裏にこの面接を受けることを決めた時の祖母が浮かぶ。

真っ暗なベッドの中で、僕が気にしないようにふるまってくれた祖母。

最後の砂粒が落ちる瞬間

「ゼノビアさんを」

僕は答えていた。

「ゼノビアさんを助けます」

ジェロームは口を僅かに動かし、何かを考える素振りを見せる。

「ゼノビア様ですか」

確認の言葉に、はい、と答える。

「お祖母さんを見捨てるわけですか？」

「そうだよな、そう思えるだろうな。」

「いえ」

僕は否定した。

ジェロームは訝しげな顔をする。

「私はどちらか、と言いましたが」  
はつきりとした理由、という程ではない。

「もし、僕が本当にどちらかを選ばなくちゃいけなくなったら、お祖母ちゃんは、僕にゼノビアさんを助けるように言う気がしたんです」

答える瞬間に、お祖母ちゃんは大丈夫だから、そう言って笑う祖母がいた。

気付いたら僕の口は、ゼノビアと言っていた。  
しばし沈黙。

ジェロームはじつと僕を見ている。

その僕はどこかすつきりした気分でした。

多分、選んだ理由を言う必要は無かったと思う。

それでも、言わないと駄目な気がした。

わがままかもしれないけど、これで受かっても僕の力ではないと思  
ったから。

「合格です」

空耳だと思った。

「ラカス君をお嬢様付きの使用人に採用致します」

驚く僕にジェロームがにっこりと笑って言う。

まだ最後に回された確認を答えていないと聞いた。

ジェロームは苦笑いをしながら、軽く頭を下げる。

「申し訳ありません。あれはラカス君を試す為の嘘です」

嘘、と僕は声をあげる。

ええ、幾らなんでも1人に全責任を負わせるなんてことはしません、  
と言いつつジェロームは引き出しから何か文章の書かれた数枚の紙  
を出す。

その文字は、見たことのあるゼノビアの筆跡に似ていた。

「本当のことを申し上げますとね、ラカス君を普通の使用人として  
雇うことは元々決まっていたのですよ」

今は嫁いってしまったゼノビアだが、元々は結構大きな商会の娘だっ

たらしく、細かい話はしなかったが、ジェロームはゼノビアを高く  
かっているそうだ。

実際使用人は募集していたそうで、ゼノビアが僕を推薦した時もゼ  
ノビアならと僕の雇用を認めたらしい。

さすがに年齢を聞くと幼過ぎるということから二年程待つて  
という話にしたが、ゼノビアはどこから聞き付けたか、お嬢様付き  
の使用人を探していることを聞き付けてきた。

さすがにそれは出来ないという話になり、とりあえず面接をして欲  
しいという話になったらしい。

ジェロームもそこまで言うなら会って見たいと思ったそうだし、ゼ  
ノビアもお嬢様付きは駄目だけど使用人なら合格と聞けば僕のモチ  
ベーションが上がると思ったらしい。

もつとも、寸前まで僕を売り込んでいたそうだけど。

「ですから、ラカス君がどれほど優秀かは伺っておりまして」  
パラパラと見せた紙の中には僕がゼノビアに送った手紙が混じって  
いた。

「私は、君を落とすつもりで試しました」

ジェロームは手に持っていた束をテーブルに置く。

「優秀さは確かに採用するにあたり必要なことですが、どんな状況  
でも冷静に判断を下せるかどうか、今回はそれを指摘させていただ  
くつもりだったので」

それからジェロームは僕のテストの結果を総評した。

歴史の知識は最後にゼノビアが訪ねてきた際に僕をテストをした時、  
文字はゼノビアに送った手紙と比べて、の話。

歴史は一ヶ月あっただけあって、ゼノビアに聞いたものとはほんの  
少しだけ下回ったが、許容範囲。

文字もわざと難しい単語を使ったのもあり、文法が所々間違ってい  
るが、意味は分かる。

及第点でしょう、と評価された。

最後の問題については答えより最後まで考えきる姿勢を見たかった

そつだ。

なんだ、と肩が落ちる。

「では、ゼノビア様をお呼びするのですが」とジェロームは言い

「その前に、一つ聞きたいことが」

僕はまた何か試されるのか、と身構える。

そんな僕を見て

「これは試験ではありません。単なる私個人の興味です」

そつ前置きをして、もし本当にゼノビアの商会と家族のどちらかを選ばなければならなかったらどうしていたか、を聞かれた。

僕は曖昧に笑つて誤魔化そつとした。

答えは浮かんでいた。

ただ、それは採用が決まつた今、大つぴらに言えることでは無かつた。

ジェロームは僕が何かしら浮かんでいることを見抜いたようつで、けして口外しないし、どんな考えだとしてもここだけの話にして、これからの仕事に影響させないと約束してまで聞いてくる。

僕はそつまでいうなら、と

「受けようと思ひました」

「万が一が起こつたならどうするつつもりで？」

ジェロームが興味深そつに聞いてきたけど、受けようと思つた理由がちよつと失礼極まりなかつた。

「まず謝つて、駄目ならどんな手を使つても逃げだして、家族に逃げるようつに言つて、それとゼノビアにも伝えて、僕1人で許してもらおうかと思つてました」

言つとジェロームは笑い声をあげる。

「堂々と逃げると言つとは思ひませんでした。それで、ラカス君は何故逃げないんですか」

確かに逃げられるかどうか別にして、逃げられたならそつのまま逃げるこつも考えられる。



だけど、それは出来ないと思った。

「どんな形であれ、一度請負った仕事なんで」

「それも家族どなたかの考えですか？」

「はい」

僕にとって働くというのは、少し前まで一緒の馬に乗って見ていた母親の姿、そのものになっていた。

「お母さんはそうすると思うし、僕もそうするのが正しいと思います」

ジエロームに笑いながら

「良い御家族ですね」

目を細めて言われた。

僕は少し照れくさかった。

年月（後書き）

ハンターハンターのハンター試験より。

本当は、NASAかどっかの話で見たような気がする心理学者が精神的に追い詰めるのをやりたかったんですが、作者では無理でした。

無意識だったのですが、作者は相当祖母を気に入ってるみたいです。  
（笑）

ナージエは将来で絡むので、出番無し。

各キャラのイメージに沿っていけば良いと思う。

ゼノビアの設定がようやく書けます。

まあ、良いとこの人みたい、とは書いていたような気がするので、飛び道具では無いとは思いますが、どうだろ？

ジエロームにはジエロームの意図があるんですけど、こづいっ時一人称って不便だよなあ。

読んで頂いたことに感謝

## 驚き

二度目になる景色でも、あまり明確に覚えていないものだと思った。太陽は雲一つ無い空で悠々と輝いていて、もうすぐ本格的な夏だなと思わせる景色。

僕は帰り道に着いている。

宿屋の出発はゆっくりだったが、夕暮れ前には到着するそうだと。

「しかし、流石姉御の息子だねえ」

ロウが昨日僕の合格を聞いてから、もう何度目になるか分からない言葉を感じたように言った。

ロウもラウザも僕が単なる使用人の試験を受けると思っていたそう  
だ。

中央では本当にヴァリエール家の使用人の募集の話が出回っていたから、全く疑問に思わなかったらしい。

「なんで言ってくれねえんだよ。水臭いだろ」

僕がロウに本当はお嬢様付きの使用人の試験だったことを言うと、

ロウはゼノビアにそう言った。

「だって、絶対ラカスちゃんに伝えようとするじゃないですか」

ゼノビアははつきりと言った。

まさに凶星だったみたいで、ロウは目を泳がせながら

「言わねえよ、なあ」

振られたラウザも、ああと言いつつ、目を逸していた。

「流石ラカスちゃんですね」

ロウの流石と言ったのを受けてゼノビア。

でも、ゼノビアも部屋に呼ばれてジェロームから僕の合格を聞いた

時は、目を見開き驚きを隠せなかったように見えた。

まあ、元々不合格の流れを決めていたのだから、無理は無いと思う。その後、帰り道で僕がそう決められていたことをジェロームから聞いたことを話すと、ゼノビアはあらあらばれちゃいましたかと眉尻を下げる笑みを見せ、どこまで本当か分からないけど、今回の目的を聞いた。

要は、将来的な売り込みだったらしい。

人事権を持っているジェロームに僕を合わせ、普通の使用人として雇われてもそれなりに優遇してもらうのが目的だったらしい。

普通に入っても、優秀さを直接執事長であるジェロームに見せる機会は無いに等しい。

直接会ってテストが受けられるなら、こんな機会は無い、と思ったらしい。

それとゼノビアはジェロームが気にかけていることは薄々気付いていたらしい。

もっともそれに甘えるわけでは無く、チャンスを与えられたのだから他より良い物をと、自らも飛び回っているそうだから、まあ、良いのかなあ。

それと、ゼノビアの祖父の話をする

「ええ、もう代替わりして父が会長ですが、商会を大きくしたのは祖父ですからね。祖父としても、商人としても尊敬している人です」僕からしたら、ゼノビアはジェロームと対等にやり合っているように見えたんだけど。

「私なんて祖父に言わせるとひよっこですよ」「やっぱり凄い人ってのはどの世界にでもいるらしい。そんなもんなんだからね。」

結局町に着いたのは、太陽が沈みきるにはもう少しかかりそうなくらいの時間だった。

出る時は町の外に停めていたけど、今回は家の前まで行くそう。

「久し振りに姉御にあうからな、驚かしてやんだよ」

ロウは悪戯っ子みたいな顔で言う。

ラウザも仕方無い奴と言いつつも、母親を驚かすことについては満足でもないみたい。

この仕込みとして、出発前に町の中に入らなかったし、少し前に母親に送った手紙に、忙しくて休みが取れないと書いたそうだから、随分と手の込んだことで。

「やっぱ、せつかくだからな。楽しい方が良いだろ」

確かにそうかもしれないけども、もし僕が落ちてたらどうするつもりだったんだろ。

2人は僕が少なくとも合格することを知らなかったわけだし。

聞くと、ロウに、お前何言ってるんだ、という顔をされた。

「姉御の息子で、嬢ちゃんが目えかけてんだから、受かるに決まってるんだろ？」

僕は呆気にとられた。

そこまで僕が、いやこの場合母親とゼノビアか、2人を信用していることをはつきり言われるとなんか妙に納得してしまった。

「まあ、その時はその時だな」

ラウザは多少考えてはいたみたいだけど、どこかそんなことは殆ど起こりっこないと思っていたようにもとれた。

なんとなく付き合いの長さみたいなものを感じ、ちょっと羨ましかった。

そして、そのサプライズだけ。

予め帰る時間を聞いていたのか、家の前では祖父母とナージエは勿論、父親と母親がいた。

馬車が泊る時、母親は御者台に座る2人に気付いたらしい。

少し驚いていた。

ああ成功したな、と思い、なんか珍しい母親の姿にむず痒い気分

なる。

すぐに話したいんだらうけど、一応ロウとラウザはゼノビアが雇っている形なので、僕らが降りる為に台を出したり、荷物を下ろしたりするのを優先する。

まず一番に降りた僕に祖母と母親が寄ってきた。

ただいま、おかえりのやりとりもそこそこに

「それで、どうだったんだい？」

と祖母に聞くのを躊躇うような感じで聞かれた。

「受かったよ」

なんか気恥ずかしくて、結果だけ告げた。

驚きの為の沈黙。

「すごいじゃないか」

祖母に抱き締められた。

祖母の肩越しに見えた母親も口の端をあげるようにして笑っている。聞き付けた父親と祖父も駆け寄って来たが、妻達に仕事しな、と言われ荷運びに戻らされていた。

戻りがてら、祖父が父親の肩を叩いて喜んでいた。

荷物が運び終わり、ロウとラウザが裏に馬車を留めて戻ってきた。早足で近寄ってくるロウは企みが成功したと笑みを浮かべている。

「姉御、おどっ」

多分、驚いただろって言いたかったんだらうね。

その前に母親の綺麗なラリアットがロウの顔を打ち抜いていた。人っで一回転するもんなんだと知った。

「ちよっ、姉っ」

ロウを打ち抜いた勢いそのまま、ラウザも一回転。

後頭部と顔を押さえのたうち回る2人を仁王立ちで眺めながら「忙しいって言った癖に、何こんなところで油売ってんだい」

僕はその光景に古い友人の1人であるゼノビアを見ると

「懐かしいですね、アンさんのラリアット」

懐かしい目で3人を見ていた。

なんか、母親達の長い付き合いがあまり羨ましく無くなった。

驚き（後書き）

なんか、久々に母親の出番に落ち着く。（笑）

この辺は次への繋ぎなんですが、面接とかも含めて、ちょっと挑戦してみたいことを幾つか試してみようかと。そんな感じで。

読んで頂いたことに感謝



## 初恋

母親達の再会も無事終わり、さてこれから僕のお祝いをしようかという雰囲気の中で、あの、と僕は声をあげた。

「ちよつと出かけてきて良い？」

僕にはやらないとならないことがあった。

ラッセルとミランダに合格を伝えること。

今も遠巻きに僕が帰ってきたのを見て、祖母達に何があったか聞きたそうなお様方がいる。

噂話で伝わる前に2人には自分の口から伝えたかった。

理由を言つと、すんなり許可は下りた。

僕はまずラッセルの家に向かう。

もう日暮れだけあつて、工房に回るとラッセルは大人に混じつて後片付けをしていた。

ラッセルは僕に気付くと、近くにいたガルクに僕を指示し、おそろく許可が下りたんだろう、手に持っていた道具を片付け、駆け寄ってきた。

「どうだった？」

開口一番聞かれた。

「なんとか受かったよ」

やったな、と肩を叩かれた。

力仕事をしてるだけあつて結構痛い。

「ミランダには言ったのか？」

それを聞かれると、僕は口をムニムニと動かして誤魔化した。

実はミランダには僕が面接を受けに行くことを言っていなかった。

ラッセルには落ちたら恥ずかしいからと言っていたけど、本当は抜け駆けするような気がして言い辛かったからだ。

結局、受かったら言おうと思つて言っていない。

まずラッセルの家に来たのも、それが理由だった。

内心、ラッセル来てくれないかなあと思うけど、来てくれたら来てくれたで、逆効果な気もするけど。

そんな僕の心を読んだように

「行くんならさっさと行った方が良いと思うぜ」

「だよな」

それは解ってるんだけどもさ。

もう日が暮れちゃうから、とラッセルに背中を押され、ミランダの家に向かうことにする。

後ろから、ラッセルの受かったってさという声が聞こえる。

「ラカス坊」

ガルクに呼ばれて振返ると

「おめでとな」

そう言われた。

他の弟子の人達も言ってくれ、両手を振って応えた。

ミランダの家を訪ねると出て来たのはシャロンだった。

シャロンは僕らより四つ上だから、もう大人として働いている。

相変わらずの三つ編みだけど、頭に巻いている布は新しそうで、自分で買えるだけのお給金は貰ってるようだ。

そっつうのもあるし、なんとなく、働いてますって感じが出ててやっぱ僕らとは、なんか違う。

シャロンにミランダを呼んでもらうと

「何？」

あからさまに不機嫌なミランダが出てきた。

ツンとして僕を見ようとしてない。

「実はね、この三日間、領主様のところの使用人の」

「知ってるわ。ラカスのお祖母ちゃんから聞いたもの」

取り付く島も無さそうだった。

「黙っててごめん」

と謝っても、ミランダはこっちを見てくれない。  
どうしたもんだろうか。

「それで、結果はどうだったのよ？」

「一応、受かったんだけど」

下から窺うようにして答えると、ミランダは口を尖らせた後、溜め息を一つついた。

「まあ、謝ってくれたから、内緒にしたことは許すわ」

そして、笑みを浮かべ

「おめでとう、ラカス」

祝ってくれた。

「本当にごめん」

もう一度謝った。

「本当にそうよ、なんで言ってくれないのよ」

「だって、言って落ちたら恥ずかしいし」

本当のことは流石に言えない。

「そんなの恥ずかしかること無いわよ。ラカスが一生懸命本読んだの知ってるもの」

まだ少し怒っているみたいだけど、ミランダはいつもの感じに戻ったように思えた。

僕が一安心していると、ミランダはキョロキョロと辺りを見回し深呼吸をしている。

何してるのか聞こうとした瞬間、ミランダの顔が近付いてきて、唇に柔らかいものが触れた。

突然のことで呆気にとられている僕に

「これはお祝い」

顔を赤くしたミランダがいた。

「私ね、ラカスのこと、ちょっとだけ好きだった」

過去形だった。

どう返事をしたら良いのか分からず、言いあぐねる。

「頑張りなさいよ。簡単に辞めちゃ駄目だからね」

あーあラカスも出て行っちゃうんだ、と呟きながらミランダは後ろ手に組み踵を返し、家の扉に一步踏み出した時

「ミランダ」

呼び止めていた。

「何？」

反るようにして上半身だけこっちを向いた。

「僕も、ミランダのこと好きだった」

いるのが普通過ぎて、考えたことは無かった。

だけど、ミランダの過去形を聞いた時、何かが終わった気がした。

僕もミランダと同じ気持ちを持っていたのだと思う。

これは恋じゃないかもしれない。

でも、多分これは恋だった。

ミランダは目を見開いて驚いた後、急にしゃがみこむ。

慌てて近寄り、どうしたのかと隣にしゃがみ込むと、いきなり肩にのしかかられる。

「なんで、今そんなこと言うのよ」

涙混じりのかすれ声が聞こえ、背中を両手でポカポカと叩かれた。

叩く振動で冷たいものが頬に振ってくる。

僕は何も言わずじっとしていた。

そういえば、と思う。

初恋は実らないものだそうだ。

僕の初恋もそうらしい。

## 初恋（後書き）

一応、これで面接の件は終わります。

そういえば、今日友人のパソコンで見て知ったんですけど、逆お気に入りユーザーだっけ、あれが最後に見てから10人くらい増えたことにびっくり。

読んで頂いたことに感謝

## ナージェ

翌日、ゼノビア達は早々に帰ってしまったそうだ。

なんでも、ロウとラウザの都合らしい。

僕が起きたのは、家族全員が仕事に出ってしまった後だったから、祖母にそう聞いた。

聞いていてふと疑問。

昨夜の記憶がミランダの家から帰ってからプツリと無い。

「そりゃそうだろうさ」

祖母曰く、昨日僕が戻って来た時点で、母親達は再会を祝って、と既に飲み始めていて、僕が姿を見せると今度はラカスの合格祝いと称してまた乾杯。

その際に僕にも酒を渡されて、飲むように言われ飲んだ。

疲れていたのもあったのか、あつという間に椅子にもたれ掛かって寝てしまったそうだ。

そう言われれば、うっすらとだけ母親達が騒いでいるのを見た気がする。

そのままぐっすり朝まで寝ていた僕を、母親はゼノビア達の見送りで起こそうとしたら、初めてのことで疲れてるんでしょうから、と言われ起こされなかった、と。

気を遣ってくれたのはありがたいんだけど、ちょっと残念。

一言ぐらいお礼が言いたかった。

そんなことを漏らしたら

「手紙を書けば良いんじゃないかい？ロウさん達は中央で働いてるんだろ」

そうしよう。

その日、三日間いなかった分かって欲しがるナージェの相手をし

つつ手紙を書いて過ごすことにする。

夕方、母親が帰って来ると

「明日からラカスも配達に行ってもらおうよ」  
そう言われた。

まだ金銭は駄目だけど、伝言とか手紙を配達するのだとか。

荷物をいれる鞆は元々祖母が使っていた物で、母親が始めた頃に使っていた物を貰う。

ベロンとした蓋みたいなのが被さった感じの年季の入った肩掛け鞆だった。

馬は好きなのに乗って良いと言われたので自分のにする。

いつもの如く急な話だったけど、今回の話はちよつと楽しみだ。

そして、これも毎回のことで、止めようとした父親がお腹を抱えて蹲っている。

「だって、せつかく良い所で働くのが決まったのに、大怪我でもしたら」

とは父親の弁。

「こんなことも出来ないで、働くななんてちゃんちゃらおかしいね」  
んー、今回は母親の方が正論かも。

だけど父親の言っていることも分からなくは無い。

父親が、祖父もだけど、僕がお嬢様付きの使用人と知ったのは昨日のことだったらしい。

それまでは僕の考えてたのと同じ、主にお嬢様を担当する、ぐらいだと考えたみたい。

祖母と母親は何か勘付いていたようなのに、男性陣に一切言わないのがウチらしいというかなんと言うか。

「だって、決めるのは当人だろ。周りがなんやかんや言っただって五月蠅いだけだからね」

父親は、そりゃそうだけどさ、と小声で言ったが、母親に、  
「何？と聞かれて、何でもないと怯えながら下がった。」

とは言いつつも父親も昨日は随分騒いでいたような気がする。

いつもなら、僕が酒を飲むのを一回ぐらい止めただろうし。まあ、母親の言ったことを止められたことなんて片手で足りる程度なんだけども。

すぐすご引き下がった父親は、夕食の時にはちょっと嬉しそうな顔になった。

実際働くのはまだ先の話で、半人前にすらなっていない僕だけど、大人に片足突っ込んだということで、少しだけ酒を飲んでも良いと母親から許可が下りた。

一見、一口ぐらい簡単に飲ませてくれそうに見える母親は、僕にけして飲まそうとしなかった。

酒は働く人間が飲むもんだ、と働かない僕には飲む権利は無いんだって。

確かに、僕がやってたのはお手伝いレベルだよなあ。

「息子と飲む日が来るんだもんなあ」

父親が飲みながら、しみじみと。

一方、僕は昨日の記憶も無いし、前に飲んだのは薄めたものだったので、初めて味わう酒に恐る恐る口にして

「おいしくない」

前の世界では人並に飲んでいたら、体が子供ということを考慮しても少しくらいはと思ってた。

初めて飲んだこっちの酒は、そんなこと関係無く、臭いし、不味い。顔をしかめる僕に

「ラカスには少し早かったか」

祖父は心配そうに

「これが大人の味だ」

父親は笑ってる。

母親も笑い飛ばす。

「あたしの息子だ。そのうちあたしより飲めるようになるぞ」  
いや、それはもう人間じゃないです。

多分、男性陣は似たようなことを考えたんだと思う。



一斉に小さく首を横に振った。  
ナージエも飲みたがって手を伸ばしていたけど、さすがに祖母に止められていた。

更に、その夜。

いつも通りナージエが寝る時間になり寝室に行くことになったので、僕も酒で眠くなったので一緒について行った。  
寝室にベッドは二つある。

両親とナージエが寝てる大きめのと、僕が寝てる小さいの。  
母親がナージエを大きい方に寝かせようとすると、ナージエがぐずった。

いやいやしながら僕のベッドを指差すので、母親が

「お兄ちゃんここで寝たいのかい？」

と聞くと、ナージエは頷く。

別に拒否する理由も無いので、ナージエは僕と一緒に寝ることになった。

先に僕が入り、母親によってナージエが入れられると、ナージエは僕にしがみついてくる。

「随分と好かれてるもんだ」

その様子を見て母親は呆れ気味。

「昨日だって大変だったんだよ。にーにがいない、にーにどにー、って」

全く、と

「しっかり甘えときな」

ナージエの後頭部を撫で、じゃあおやすみ、と言い残して母親は部屋を出て行く。

「お兄ちゃん居なくて淋しかったんだ？」

顔を押しつけたままのナージエはそのままコクリと頷いた。

こんなにも慕われてるのは照れくさいものがあるが、近頃滅多にぐ

ずらないナージエが僕がいないからと泣いたのは、ちょっと嬉しい。こーゆーのもシスコンって言うのかしらん。

しばらくナージエをこちょぐったりしてたけど、すぐに寝息が聞こえてきた。

それでも、しがみつく手を離してくれないけど、まあ、良いや。

とりあえず、窒息だけさせないように体に動かそうとして

「こーに」

寝言が聞こえた。

ナージエは口元に笑みを浮かべてムニヤムニヤしてる。

なんか知らんが、楽しそうだ。

一体、どんな夢見てることやら。

## ナージェ（後書き）

すいません空きました。

ちよつと頭をザックリやってしましまして、髪剃られるわ、酒煙草禁止されるわでやる気が全く湧きませんでした。

これもちよこちよこ打ってたものです。

久々に書いてみて思うんですが、なんで6人家族にしたんだろ？人が多過ぎです。（笑）

読んで頂いたことに感謝

## 町の日々

太陽の位置はまだ低い。

見上げた空には雲が幾つかあるだけ。

今日も暑くなりそうだ、とか思いながら馬を走らせてる。

母親に言われて配達を始めて数日、赤ん坊の頃から母親が仕事してるのを見てるから手順は分かっている。

道も分かる。

馬に關しても信用してるし、周囲に気を配るのも忘れない。

問題は無いと思う。

つい笑いが零れる。

前回最後にこの道を走ったのは、母親から手綱を渡された時だった。

その時の僕の緊張っぷりったら、自分のことながら、無い。

あんな力入れちゃ駄目だろ。

それを思うと、なんか色々感慨深い。

まあ、油断はしないように心掛けるけどね。

そんなことを考えながら、朝に言われた村の一つ目に着いた。

もう殆ど顔見知りの奥様方が集まってくる。

「ラカスちゃん、領主様のところで働くんだって。すごいじゃない」  
今のところ回った村全部で、まずそう言われる。

娯楽の無い生活の中で、噂話というのは貴重な娯楽なんだと思う。

恐ろしいのは、奥様方の耳の早さだろうか。

僕の町に住んでる娘からとか、村々の間でも話は伝わり、僕の話はあつという間に広がってる。

そういえば、ラッセルの話も広まっていた。

それと

「お兄ちゃん」

僕と同じ年か、少し下ぐらいの子供達も集まってくる。

元々、母親と来てた時に母親の仕事中にその村の子供と遊んでたから、顔見知りと言えば顔見知り。

どうやら馬に興味があるみたいで、母親の時は怒られると思い近寄らなかつたのに、僕ならイケると踏んだっばい。

繋いだ馬の回りをウロチョロしてる。

一応、蹴らないように、とは言ってるし、後ろから近寄ると蹴られるから、とも言ってる。

脅しとして一度、足を蹴り上げてもらったから大丈夫だとは思う。本当なら見ていられば良いんだけど、僕には大仕事がある。

「あの、すいません」

女性と言つのは集まるとおしゃべりを始めるので、邪魔にならないように手紙の受け取り手続きをしてもらう。

関係無い人もいるから、話を遮らないようにして宛先人を見つけるのも一苦労。

仕事の中で、この時間が一番キツイです。

僕の仕事が終わっても、今度は、うちの孫なんてどうだい、とか、ちよつと年上だけど、とか言ってくる。

酷くなると、お手付きしちやっても良いんだよ、とか。

僕には理解出来ないのだと思って、ちよつと下ネタな話してるんだと思う。

だけど、悲しいかな。

意味が分かってしまう自分が嫌だ。

困り果てながらも、愛想笑いで誤魔化して隙を見つけて逃げるように次の村に向かう。

まあ、なんとかこなせてる、とは思う。

その日も、奥様方のセクハラじゃないかという時間を乗り越えて町にたどり着いた。

今日の夕飯何かな、と歩いていると

「ラカス、おかえり」

後ろから声がした。

ミランダだった。

会ったのは僕が帰って来た日以来で、咄嗟に身構える。

別に、どっちが悪いことしたとかじゃないし、友達を辞めるとか話をしたわけじゃないけど、気まずいっただけ無いです。

そして、そう思ってるのは僕だけじゃないって思ってたんだけど

「聞いて聞いて」

ミランダは興奮気味に話しかけてくる。

「何？」

近付けてくる顔から逃げる為、反るようにして聞く。

「私ね、明日からお姉ちゃんの仕事手伝うんだよ」

あれ、今までも手伝ってたんじゃないの？

ちゃんと聞くと、今まではあくまでもお手伝い。

明日からは、シャロンの補助で少しだけだけど、器械に触れるらしい。

「良かったじゃない」

僕の感嘆に胸を張ってエツヘンとミランダ。

「そういえば、ラカスはお使い？」

「ううん、少し前から僕も配達で回ってるんだ」

へー、とミランダは声を出し、ペシンと僕の背中を叩いた。

「お互い頑張ろうね」

勢いに押され頷く僕を残し

「じゃあね」

とミランダは自分の家と違う方向に向かおうとする。

ミランダこそお使いの途中かと思って聞くと

「これからラッセルのとこ行くの」

どうやら、ラッセルのどこにも自慢しに行くらしい。

ミランダはスキップをするように歩き出した。

なんか圧倒されてしまった。

顔を合わせ辛いと思ってた僕が馬鹿みたいだ。

実際会ったらこっただけドギマギして、向こうは全く何もなかったみたい。

女ってすごいな。

なんて思っていると、いい加減待たされていた馬に手綱をグイッと引かれた。

「ごめんごめん」

歩き出しながら、ふとナージエとジェーンも将来ああなるんだよなとちよつと父親みたいなことを考えた。

町の日々(後書き)

なんか平常運転って感じ。  
(笑)

読んで頂いたことに感謝



## 兄達と妹達

夏の終わりに、ロウ達とゼノビアから手紙がきた。

ロウ達からは、元気にやっつてるか？と始まり、もし中央に来ることがあればサンジェルマン商会を訪ねて来い。

ロウかラウザの名前を出せば分かるから。

今度はちゃんと飲もうぜ、とあった。

僕は以前母親達が飲んだ翌日に片付けられていた酒瓶の数を思い出し、なるべく行かないようにしようと決めた。

ゼノビアからは、随分お疲れのようだったので別れの言葉も無く出發したこと、細かい契約等はゼノビアの方でやっついてくれることが書いてあった。

それと具体的な日取りや準備するものは追々お知らせしますが、働くのは春からになると思います。

そういう一文があった。

後、半年。

それが長いのか短いのかは分からない。

でも、想像してたより待遠しいとは思わなかった。

手紙がきた数日後、僕が仕事を終えて帰ると、祖母からナージエを迎えに行つて欲しいと頼まれた。

ナージエとジエーンは仲が良い。

しかも2人で遊んでいてもお互い相手を泣かすことも無いし、無闇やたらに歩き回ることもそんなに無いので、用事がある時とかどちらかの家に預けたりすることが多い。

それ以外にも祖母同士が仲良いから、ミランダの祖母セシルも加えて集まったりした時とか、孫を置いて帰ることもまま。

そんな場合迎えに行く役は僕とラッセルが仰せつかる。

丁度夕飯前で祖母母親が忙しいのもあるし、ナージエはラッセル、ジエーンは僕に懐いてるのもあり、僕らが行くと妹の友人がとても喜ぶらしい。

僕がラッセルの家に着いた時、ナージエとジエーンはラッセル相手にままごとをしていて、ラッセルにパンだのスープだのを交互に渡してた。

いつものことながら毎回思うんだけど、なんで妻が2人いる斬新な設定なんだろうか？

まあ、当人達が楽しいなら良いけど。

「にーに」

ジエーンが僕に気付いた。

ナージエの真似なのか、ジエーンは僕を、にーに、と呼ぶ。

ナージエもラッセルを呼ぶ時はジエーンのように、おにー、と呼ぶ。

「やつと来たか」

ラッセルは座ったままゴロンと背中を倒した。

「お疲れー」

ラッセルを労う。

僕も今回と逆の場合、ラッセルが来るまで2人の相手をするところがあるので、結構な重労働だと知ってる。

「最近、急にかまって欲しがるんだぜ」

今までは見るだけで良かったのに、とラッセルが溜め息まじりに僕が苦笑いで輪の中に座ると、ジエーンが近寄って来たので膝に座らせた。

それを見てナージエも同じことを希望。  
軽く揺るとキャキャと笑う。

「そういえば、最近ナージエ、僕と一緒に寝たがるんだけど」

一度一緒に寝て以来、味を占めたみたいで度々一緒に寝てる。

ふと、ラッセルのともそうなのかな、と思い聞いてみた。

「ラカスんともか」

同様らしい。

ラッセルはジェーンを受け取り自分の膝に置く。

「お前らは、なんなんだ？」

ラッセルはジェーンに覗き込みながら聞くと、ジェーンは意味が分からないと小首を傾げる。

僕もナージエを見ると、ナージエも傾げた。

まあ良いやと膝に妹を乗せたまま少し話をする。

僕がゼノビアの手紙の話をする

「じゃあ、行くの同じ日にしねえ？」  
と提案された。

ラッセルの所は予め知らせさえすれば、割りと融通が利くらしい。  
もしゼノビアに聞いてみて大丈夫そうならそうしたいと答えておく。  
全く段取りが分からないので、この場ではなんとも。

それだけ話すと夕食もあるので、お暇することにした。  
手を繋いで帰ろうと歩き出すと、ナージエは繋いでない方の手をブンブン振り回している。

「楽しかった？」

聞くと

「うん」

ナージエは笑顔で答えた。

ラッセルにはミランダとのことは言っていない。

面接に行くことを話さなかったことについては謝ったら許してくれた、とだけ言った。

ラッセルも、そう良かったな、と言ったのでそれ以上のそれについて話していない。

一応、終わったことだし無理に話すことも無いと思う。

その夜もナージエは僕のベッドで寝たいと言い出した。

一緒にベッドで寝ていると、ふとラッセルも今頃そうなのかもと思  
い、つい笑ってしまった。

「どしたの？」

気付いたナージエに聞かれた。

「なんでもないよ」

背中を再び軽く叩き出す。

こんなことをラッセルもジエーンにやってるんだらうか。

体の大きな友人の微笑ましい想像をおかしく思っていると、胸元から小さな寝息が聞こえてきた。

## 兄達と妹達（後書き）

感想にあっただんで、幼馴染みの年齢で一応。

今の寿命と単純に比較すると、5才って今の7才くらい？

身近にいるラカスの影響と大人に混じって働いているのを考えて、10才弱ぐらいの意識の高さはあって良いんじゃないかと。

知識とかは別にしてですが。

まあ、変に子供っぽいとその話に割かなきゃならないのがあったので。

思考はシンプルに、難しい言葉は使わないようにしてますけど。

子供って難しいです。

読んで頂いたことに感謝

## コッ

ミランダは以前と同じように、僕に話しかけてきた。

そのお陰もあつてか秋に入る頃になつて、ようやくミランダと普通に話せるようになった。

僕が気まずさを感じていた一番の理由は、僕がミランダを好き自覚してしまい、はっきりとそれを言ってしまったこと。

その場の勢いというのもあつたけど、その後どう接すれば良いのか全く考えて無かつた。

だからミランダの態度には、僕の言葉によつて何かしらの変化を与えられなかつた寂しさよりも、助かつた。

正直そつちの方が強い。

とは言いつつ、ミランダを好きだと自覚してしまったことは消えない。

ふつと身を寄せられた時の汗の匂いとか笑いかけられた時とか、頭と関係無くドキッとしてしまう。

好意を持たれてるのは知ってるから、上手くやれば恋人として付き合つことも出来るかもしれない、とたまに考えてしまわないことも無い。

だけど、ミランダは、僕がこの町に後半年しかいないからとかじゃなく、やっぱり幼馴染みでいて欲しいって頭のどっかで思うんだ。たとえ、それが臆病だと言われても、僕の中には幼馴染みとしてのミランダの場所があつて、それを変に弄つてしまつて元に戻せなくなるのが怖かつた。

その日、僕は仕事が休みだつた。

収穫前の時期で、行き来する手紙の大半は請求書。

僕が扱うことを許されている手紙は殆ど無く、それらも二度手間だ

からと母親が行く。

稀に全く母親のルートを外れ、単なる手紙だけの時は僕が行くけど、数日に一回くらい。

代わりと言ってはなんだけど、ラッセルのところはこれから冬ということで壊れた箇所修理の仕事で忙しいらしい。

ジェーンがよく遊びに来るようになった。

今日も午前中はナージェとジェーンの相手をしつつ祖母の手伝い。

昼過ぎになって2人がお昼寝を始めたので、僕は勉強をしていた。

面接は合格になったけど、ジェロームにはまだまだと言われてしまったので、やれる内になるべく十分になっておきたい。

ゼノビアからの手紙が届いたのはそんな時だった。

手紙を読むと案の定、僕の出立の日にと持って行く日用品のリストが書かれていた。

とうとう来ちゃったか。

それが本音。

昼食の後片付けをしていた祖母を呼んで手紙を見せると、祖母は僅かに口の端を動かし

「なるべく早い内に用意しとかないといけないね」  
とだけ。

僕が頷き、そのまま戻ろうとすると、祖母に呼び止められた。  
なんだろうと思っっていると

「ミランダちゃんのこと、後悔がないようにするんだよ」  
突然出された名前にびっくりする。

「なんでミランダが出てくるの？」  
明らかに動揺してしまった。

「気付かないわけではないでしょう」

さも当然のように言う姿は、まるで全てを知っているかのような印象を受ける。

「うん、分かってる」

返す言葉に、力が入らなかった。

自分でも分かっていた。

助かった、では何にも終わらず結局は宙に浮いたまままでいることを。そして、それはいつか後悔に変わりそうなことも。

祖母はそんな僕に、ちよつと休憩するからおいで、といつも食事を  
する部屋に連れ座らせた。

祖母はお茶の用意を始める。

僕は後ろ姿の祖母にポツリポツリ、あの夜にあったこと、それから  
のミランダの態度と僕が戸惑ったことを話す。

僕が話し終わってから、祖母はとうに支度が終わっていたお茶を持  
って僕の隣りに座った。

僕に一つ渡しながら

「それで、ラカスはどうしたいんだい？」

そう聞いてきた。

「わかんない」

今の正直な気持ちだった。

「ミランダのことは好きだけど、ミランダとはずっと友達でいたい」  
これもそう。

我ながら矛盾してると思う。

「私がラカスの行動を決めるわけにはいかないよ。人を好きになる  
のは当人の問題だからね」

祖母の声は僕の、静かな部屋の中に浮かんだ答えを優しく包み込む  
ように響いた。

「でも、ラカスより長く生きてる分、どうすれば後悔を少なく出来  
るかは知ってるよ」

祖母は僕の頭に手を置く。

「自分の気持ちに正直になりなさい。そして、その時出来ることを  
全力でやりなさい。それが後悔を少なくするコツさ」

頭に手を置かれたまま祖母を見上げる。

「ミランダちゃんは、ありのままのラカスを好きになってくれた。

じゃあ、ラカスが出来ることってなんだろうね？」



「いつも通りの僕でいること?」

「そうだね」

祖母は優しく微笑む。

「人を好きになると、全てが変わってしまう気がするけど、ラカスがミランダちゃんを好きなら、いつものラカスでいた方がミランダちゃんは喜ぶと思うよ」

言ってることは分かるけど、それはとても難しいことのような気がする。

「自信無い」

僕の言葉を受け、祖母は笑いながら、ラカスなりで良いんだよ、と言う。

「セシルから聞いたただけだね、ミランダちゃん、ラカスと会った夜、ずっと泣いていたそうだよ」

聞いた瞬間、胸がギュツと締め付けられたような気がして、俯いた。

「嬉しかったんだろうね」

予想外の単語に、その単語を発した口を見る。

「そりゃそうだろうさ、ずっと好きだった人に好きと言ってもらえたんだから。でも、ミランダちゃんは考えたんだろうね。ラカスがこの町を出る時に未練が残らないように、笑って見送れるように、自分はどうするべきかってね」

祖母は優しく励ますように

「応えてあげなさい。ラカスがミランダちゃんを好きなら」

僕は頷いた。

出来る自信はあまり無い。

実際今も会う時とかドキドキしてしまうのだし。

それでも、その方が後悔しない気がした。

その覚悟っていうか、決めたのが表情に出たようで、祖母は満足そうに笑って

「頑張りなさい」

頭を一撫で。

祖母は仕事に戻るようで席を立とうとする。

「やっぱり、ラカスの初めての恋人はミランダちゃんだったねえ」  
急に聞こえた言葉に、慌てて、違うと言った。

「ミランダとは友達として付き合っっていくんだよ」

祖母は振り返り

「一緒にいるから恋人じゃないんだよ。好きな者同士が互いを思  
つて何かをしている関係のことを恋人と言うのさ」

口の端で笑いながら祖母は言った。

その姿は、さっきの気付かない訳ないと言った姿に重なる。  
かなわないな。

そう思った。

その日、ジェーンを送って行った時、ラッセルに僕の出立の日が決  
まったことを告げた。

## コッ（後書き）

また間空いてしまった。

言い訳をいくつか。

まず、PSPを買ってしまったこと。

喧嘩番長がどうしてもやりたかった。

いつか4の二年生の話とか書いてみたいです。

それと、作者の人間性が浅いせいで祖母の言葉がどうしても深くならない、どうしようも無かったです。

そもそもゼロ魔ってこんなノリじゃないし。

まあ、今更ですね。

それと、幾つか長編を始められれば、と考え中です。

それもゼロ魔なんです、本当に原作キャラが出ないので、どうしたもんかと。

まあ、出来る限りでやっけて行くスタンスで。

読んで頂いたことに感謝

## 男友達

祖母と話をした後、心が軽くなった。

状況は何も変わって無いのに、こんなにも変わるものかと自分でも驚く。

ミランダを素直に可愛いと思えた。

こんなにも表情豊かだったことを知った。

たとえ照れても、笑ってミランダをからかうことが出来た。

恋人ではないから、手を繋ぐことさえしていない。

ただ、帰り道に会ったりとかナージェやジェーンの送り迎えで会った時に話をするぐらい。

それでも周囲の目というのは思ったより敏感らしく、僕とミランダが歩いているのを見て、あらあらと今までと違う目で見てきた。

その目を見つけた時、僕は覚悟を決めた。

夕食を終えた後、祖母にだけこっそり行き先を告げて、家を出た。行き先はラッセルの家。

ラッセルは僕の突然の訪問に驚いていた。

どうした？と聞くラッセルに、僕は話があるからと玄関から連れ出し、工房の前のちよつとした空き地へと向かう。

そこは以前、僕が使用人の面接を受けるべきかどうか、ラッセルに相談したところ。

その場所で僕はラッセルに、ミランダに好きと言われたこと、好きだと伝えたことを告げた。

「良かったじゃんか」

ラッセルはやや表情を強張らせながらも、そう言ってくれた。

そして、僕は言った。

「でも、友達のままでいたって、僕が言った」

言った瞬間頬が弾けた。

骨と骨がぶつかる鈍い音が頭を貫き、背中から突き抜けるような痛み。

熱い塊が、喉の奥から溢れた。殴られたと理解し体を起こすと、肩をいからせたラッセルがいた。

「なんでそんなことを言ったんだよ」

話す合間合間の呼吸にも怒りが籠っていた。

「僕は後半年もしないで町を出て行くんだぞ。何年かかるか分からないのに、出来るわけないだろ」

口を開ける度に、頬骨が軋んでいる気がする。

「だとしても、お前しか出来ないんだよ」

やっと立ち上がった僕を、再びラッセルが殴る。

背中から倒れた後、勢いで後方に回転し、着いた足で地面を踏み、身を屈めながら肩をラッセルにぶつけた。

油断していたラッセルは僕と一緒に地面を転がる。

僕はすぐに起き上がり、ラッセルに馬乗りになって

「人にばかり頼るんじゃないよ。僕にだって出来ないことはあるんだよ」

思いっきり殴りつけた。

「このやろっ」

下から服を掴まれると引つ張られ、転がされた。

後は上下入れ替わって殴り殴られ。

それがしばらく続いた気がするけど、元々体格も違うし、力も向こうが上。

殆ど殴られっ放しだったから、どのくらいかは分からない。

ともかく、もうどこがどう痛いか分からなくなった頃、馬乗りになられながらも頭を庇っていた腕の外側から硬い物が左の耳のあたりを打った。

瞬間、意識が薄れ、取り戻した時には両腕は地面を触っていた。

開くのも億劫な視界の中で、胸の上に乗っていたラッセルはゆっく

りと左に傾き出し、感じていた重みが滑るようになつて消えた。  
左側から地面を打つ音。

視界にあるのは二つの月と無数の星。  
荒い呼吸だけが聞こえる。

しばらくそうしていて、やっと辛うじて喋れるようになった。

「氣いすんだ？」

ちやんと言葉になつていているか心許無かつたけど、左から、ああ、と返事があつた。

そして、まだ荒い呼吸を挟みながら

「なんで、お前が言つたなんて嘘つくんだよ」

「だって、殴り辛いだろ」

言いながらむせた。

馬鹿、と聞こえる。

「偶然見ちまつたんだよ。お前らが歩いてるとこ」  
分かるに決まつてんだろ。

殴られた耳の辺りが鈍く痛む。

だから、最後の言葉は一段と聞き取り辛かつた。

## 男友達（後書き）

これで恋の話は一応終わりです。

正直、随分かかったな、と思います。

まあ、ミランダというキャラを置いてしまった時点で何らかの形で恋の話はしなきゃならなかったでしょうし。

まあ、今の作者の力量ではこんな感じですよ。

少しずつでも上がっていけば良いなあ。

そういえば、初めてのアクションシーンなんですが、難しいもんですね。

読んで頂いたことに感謝

一人の男（外伝）（前書き）

父親の話



## 一人の男（外伝）

収穫を迎えて数日、僕は畑の後片付けの為に畑に出ていた。刈られた麦畑は去年より少し広い。

それを満足しながら見ていると、荷車の音が聞こえた。

見ると、例年通り今年の作物やらを積んだ馬車と周囲を囲む馬に乗った人影。

あの中にアンもいるのだろう。

もうこの町に来てから何度も見る光景だけど、心配してしまうのは変わらない。

今はアンで、その前はお義母さん、さらにその前はお義母さんのお母さん。

今更といえれば今更な話なんけども、僕が代われればな。

毎年そう思う。

馬なんて1人で乗ったこと無いし、一度アンに乗せてもらったことはあってもすぐに落ちてしまった。

アン曰く、センスが無いそうだ。

生まれた村でも喧嘩なんて殆どしたこと無く、家族と言い争ったくらいで、村のちょっと大きい子にすぐまれるともう逃げたくて仕方なかった。

力が無くても偉くなれると思って始めた勉強も結局中途半端で、自棄になって初めて酒を浴びるように飲んで、気が大きくなって悪ぶって入った店にアンがいた。

人生って分からないものだ。

その日の夜、僕は寝室に向かうお義父さんとお義母さんを見送り、1人酒をしていた。

春からこちら毎日畑を耕していて、ここ何日かは、少し手伝いをす

るくらいで、ほぼ何もしないでのんびりすることが許されている。こうしてチビチビ飲みながら、今年頑張った自分を思い返すのが毎年の習慣だった。

来年はどのくらい広げようかと考えていると、部屋の扉が開く。

眠たげに目をこするラカスだった。

「どうした？」

聞くと、寝ぼけたナージエに傷口を叩かれ起きてしまい水を飲みに来たと、言う。

ラカスは数日前にガルクさんのところの息子と喧嘩をし、身体中に軟膏を塗り布を当てていた。

顔にも幾つか小さな布が張り付いている。

「一緒に飲まないか」

滅多に無い機会と思い誘うことにした。

「いい」

顔をしかめて嫌がる。

「少しだけだから」

新しいグラスを取り出し指一本分だけ入れて見せ、ようやく椅子に座った。

「乾杯」

グラスを出すと、ラカスが軽く当てる。

そして舐めるように口にすると渋い顔をした。

「そんなとこだけお父さん似なのな」

「お父さんも飲めなかったの？」

ラカスは僅かに意外そうだった。

「全くと言っていいくらい飲めなかったよ」

初めて口にした時はラカスと大差無かった。

それでも生きてく中で少しずつ飲めるようになったが、増えても大した量でもなかった。

人並みに飲めるようになったのは、アンとその友人達と飲むようになったから。

美味いと感じたことなんてなかったのに、アン達の輪の中で飲んでいて初めて美味しいと思えた。

また飲みたいとも思えるほどだった。

「お前も良い仲間が出来ると良いな」

言われたラカスは実感出来ないようだ。

訝しげにグラスの酒を見ている。

それを見ながら、今更言うことではないかと思り返す。

ラッセル君と言ったっけ。

ラカスが傷だらけ泥だらけで帰って来た夜、まずアンが、どうしたんだい、と驚き聞いた。

「ラッセルと喧嘩して、ボッコボコにされた」

あっけらかんと笑いながら言った時、いつもなら、やり返してきながら言うようなアンが、そうかい、と呆氣にとられていた。

そんなアンの姿は少し面白かった。

そして、ラカスが羨ましいなと思った。

ガルクさんは鍛冶屋だけあって、毎日金槌を振り回している身体は僕と比べ物にならない程筋肉が隆々としている。

ラッセル君も最近はガルクさんの手伝いながらも混じって仕事しているらしいし、以前見掛けた時もラカスより一回りぐらい大きかったと思っただ。

僕だったら逃げ出してしまいうるのに対し正面から立ち向かったこと、負けて傷だらけにされたのに笑っていること。

アンの喧嘩も見たことはあるけど、やっぱりある種の男同士の喧嘩とは違うのだと思う。

勝ち負けが分かってからどうじゃなくて、する前から何か信頼関係が見えるような。

まあ、僕が言うなとか言われるんだろっけ。

「急に笑いだして、どうしたの？」

ラカスに言われて自分が笑っていたことに気付く。

「いや、」

なんでもないと云おうとして、止めた。

「お前が羨ましいなと思った」

「何？いきなり」

突然言った言葉に面食らったようだ。

まじまじと見てくる息子の顔で僕に似ているところといえば、髪の色と耳にかかるくらいの長さだろうか。

酔いもあつて

「お父さんがラカスぐらい頭が良かったり、馬に乗れたりすれば今とは違う人生だったかもな」

そう言った。

親バカかもしれないが、ラカスは頭が良いと思う。

ラカスと文法を勉強していても昔とった杵柄で教えることが出来る部分はあるが、分からない部分で2人で話していたりすると、ラカスの、こうじゃないという言葉は的を得ていることが多いがな。

馬に関しては、アンがこっそり僕に悔しがってくらいだから言わずもがな。

ラカスの年ぐらいの時に僕もそうだったら、今頃中央で働いていたかもしれない。

そう考えて、自分の言ったことをラカスが誤解するかもしれないと気付いた。

「いや、別に今の暮らしが嫌だつてわけじゃないんだぞ」  
慌てて否定。

「おかげでアンと出会えたし、お前にも会えた。今の暮らしになんかの不満も無いぞ」

そう付け足した。

ただ、言わないけども、1人の男としてラカスが羨ましいのは事実ではあつた。

一抹の切なさを覚えつつも流石に息子に気を使わせるわけにはいかず、変な空気にしてしまったこの場を繕うことを考える。

ラカスがなんと云えば良いのか、窺うように僕を見ていた。

そんなラカスを見て、ふと近頃仕事仲間から聞いた話を思い出す。

「そういえば、最近ミランダちゃんと仲が良いそうだな」

丁度その時酒を舐めていたラカスはぶはっと噴出した。

「ちよつと、何言い出すの」

語気強く言うラカスは明らかに照れているのが見て取れる。

寝めれた時などに隠すようにして照れるのは見たことはあるが、こんな風に慌てながら照れる姿を見たのは初めてだ。

そんなものを見せられると、一本とつたような気持ちになる。

「いや、お前とこんな話をしたことないなと思ってな」

何気無さを装いながらも、その下でニヤニヤしてしまう自分が分かる。

「ミランダとは友達なの」

言い切る強さで、それ以上でも以下でもないと言いたいようだが、それは逆効果だ。

聞いた話はまんざら噂話でもないらしい。

しかしまあ、息子の恋愛にアレコレ言うつもりも無いし、もう少ししたら離れ離れになるのだから変に突っ突くのも可哀相だ。

「なんだ、そうなのか」

言い方に含みを持たせるのはささやかな嫌がらせ。

「じゃあ、お父さんはお母さんのことを今でも好きなの？」

ラカスはまだ少し顔を赤くしつつ、仕返しのつものようだ。

「好きだよ」

さらりと言ってやった。

僕が照れるとでも思ったのだろうが、夫婦であるのに今更といったこと。

うつ、と詰まったラカスは苦しげに

「いつも叩かれたりしてるじゃん」

「あれは、僕達の愛情表現の形なんだよ」

自然と笑みが出た。

アンは見た目や普段の行いからは想像出来ないだろうけど、意外と弱いところがある。

ラカスが初めてアンと馬に乗った時、手綱を持つ話になった時、一人で乗った時、僕は本音を言うと、専門であるアンやお義母さんが大丈夫と言っただから大丈夫なんだろうと思っっている。

でも、決断したはずのアンは瞳にジワジワと不安が広がっていくのが見えると、つい小さく反対の意見を言ってしまう。

安易に賛同するよりもその方が生来の負けん気に火がつくのを知ってるから。

アンの中では大丈夫だろうと決めたことでも、ラカスの顔を見ると自信が揺らいでしまう。

でも、不安そうな姿を見せたくないと思える。

そんな彼女は笑いたくなる程可愛いと思う。

それでもたまには僕だって止めたい時もある。

ゼノビアさんから初めて絵本を送ってもらった時のように、僕が一生懸命話せば聞いてくれることも知ってる。

だけど、なるべくアンはしたいようにさせてあげたいと思っってしまうのは、甘いかな？

「ラカスにはまだ分からないだろうけどね」

上からの言い草にラカスは不満そうに唇を尖らせた。

羨ましいと密かに思う人を悔しがらせたことが愉快で、思わず声をあげて笑ってしまった。

僕が、君の父親になってしまった以上、いつか僕は君に超えられなければならぬだろう。

僕は、馬も満足に操れやしなないし、学問も中途半端、腕っ節も弱いし気も弱い。

しかも、君を羨ましいとすら思ってる。

もう僕は超えられてるのかもしれない。

でも、一つだけ。

自分の好きな人を世界の誰よりも好きで、誰よりも知ってる自信がある。

たったそれだけ。

それだけだけど、君に勝ってる部分があるからまだ負けを認めるわけにはいかない。

僕は、生まれて初めて負けが見えているのにもかかわらず、逃げ出さずに立ち向かっている。

それは僕がこの町に来て、変わることが出来た部分だと思う。

数日後、アンの帰ってきた夜。

寝室で何故かアンとラカスが言い争っていた。

「嘘だね。そんな話信じられる訳ないだろ」

「そんなこと言われても、本当だもん」

僕が仲裁に入り、話を聞くと

「あたしがいないっていうのにナージエが泣かない訳ないだろ」

アンはラカスに聞かせるように僕に言う。

困ってしまう。

実際ナージエは泣くどころか嬉々としてラカスのベッドに潜り込んでいた。

「ナージエは全然泣いてないもん」

ラカスの言葉は真実だ。

アンがギロリと睨む。

2人を見上げていたナージエ本人が、寂しくなかったと言っても、あたしに心配をかけない為と譲らない。

「やっぱり寂しそうにはしていたかなあ。さすがにナージエももう

お姉ちゃんだから、泣くような年齢じゃないしね」

僕が当たり障りの無いことを言うと、アンは

「ほらあ、やっぱりあたしがいないと、寂しいんだよ」

「泣いてないけどね」

ラカスの一言がカチンと来たらしい。

「そうだね、ラカスも本当は随分寂しかったみたいだしね。今夜はたっぷりと構ってあげようかね」

ポキリポキリと指の骨を鳴らした。

「僕、今日はお祖母ちゃんと寝るから」

「待ちな」

逃げたラカスをアンが追いかけて行った。

僕とナージエが残された。

僕は、楽しそうと後を追いつ出すナージエを抱き上げると、宥める言葉を考えながら2人の後を追いかけた。

昔は、中央で働けたら幸せだと思ってた。

今は、この暮らしがもうちよっと続けば良いのにと思ってる。  
人生って分からない。

人生って面白い。



一人の男（外伝）（後書き）

結構前の外伝でラカスを心配する母親を書いたので、その補強みたいな感じ。

生まれついて強い人はいないって言うけど、じゃあ強いってなんだろう？と。

弱ってしまった時、身近に支えてくれる人を持たた人って強い人なんじゃないかなと思って母親と父親のキャラを作ったので、とりあえず満足。

読んで頂いたことに感謝

誘う（前書き）

タイトルは、『オオソウ』ではなく、『いぞなつ』で。

## 誘う

無事収穫が終わると、少しずつ僕の仕事が増えてきた。

まだまだツケの支払いの時期だから、そういう村は母親が兼ねてしまう。

僕に任せられるのは日に一件とかもざら。

それでも、気にし過ぎかもしれないけど、稀に仕事が無い日とかあると家族の一員として申し訳ない気がしてしまう。

まあ、僕が出かける度にナージエがあからさまに不満そうにしているのには、苦笑してしまうけどね。

ミランダがわざわざ家まで訪ねて来たのは、朝夕に冬が忍びこみ出した頃。

僕が配達を終えて、馬を片付けようと裏手に回ると、薪を割っていた父親に、ミランダちゃんがいると言われた。

その顔は明らかに含みがあったけど、無視。

馬を片付けたら行くと言い残し、なんだろうと思いつつ片付け、馬小屋を出た。

ミランダが立っていた。

その急さに声を上げて驚く。

厚着をしても顔や首筋に触れる空気は肌寒い。

実際ミランダも首筋から寒さが入らないように気持ち首を竦めていた。

そんなに片付けに手間取ってないはずなのに、そんなに急ぎなんだろうか？

「とりあえず、家に入らない」

なにもこんなとこで立ち話をしなくてもと思いい口にした。

「ラカスにお願いがあるの」

小声で言われる。

そして、縮めた首で辺りをキョロキョロ。

祖父が少し離れたところで放牧してあった馬を小屋に入れておいて、僕らの声は聞こえないと思う。

薪割りをしていた父親ももう家の中に入ってしまったようだ。

ミランダはそれらを確認すると

「連れて行って欲しいところがあるの」

そう言い、僕はミランダの拳動不信な行動に合点がいった。

まあ、行きたいところはあるけど親達には知られたくないとか、そんなところだろう。

「良いけど、何処？」

だから敢えて理由も聞かなかった。

「その時に言うってことじゃダメ？」

下から覗き見て甘えるように。

惚れた弱味というもので、ちょっとドキッとしながら、良いけどと言ってしまう。

「で、いつなの？」

「明後日の夜」

これも先と同じように言われたけど、さすがに、良いとは言えなかった。

聞くまでは配達の間とかを考えていたけど、夜と聞いてしまうと軽々に了解できない。

僕がそこで渋るのはミランダも予想していたらしい。

「ラカス、お願い」

僕の服を掴み、顔を近づけながら言われると、正直内心グラッとくる部分もあるけど、やっぱり簡単に頷く訳にはいかない。

「せめて、場所だけでも教えてくれない？」

せめてそこが近ければ、まだどうにか出来るかもしれない。

甘いなあ、と我ながら思う。

以前なら、ここまで譲らなかった。…と思う、さすがに。

ミランダは僕の言い方に、最低でも場所を言わないと話が続かないと考えたようで

「山の方」

ポツリと出た場所は僕の了承を難しくした。

ミランダが口にしなかつた理由通り、まずちよつと行つてくる距離には遠過ぎた。

そして僕は、ごめんと謝る。

「僕、山の方の道、全く分からないんだ」  
本当だった。

小さい頃から母親と一緒に配達に行っていたし、僕が1人で行くようになってからも脇道とか興味本位で入ってみたりしているから、この地域の大体の道は分かっている自信はある。

だけど、山の方は例外。

僕が本当に小さい、まだ赤ん坊の頃、母親に連れられて数回行った微かな記憶しかない。

山の方は鉱山資源の採掘と林業が主な産業となっている。

そして、これは僕の後から考えた推測が混じるのだけど、そこで働いている、いや働かされている人達は、なんらかの罪を犯した人達が罰として働かされているんじゃないだろうか。

身体に罰を与えられ、さらに危険な重労働をしている姿は僕の微かな記憶の大半を占めている。

それぐらい、僕にとって衝撃的なことだったのだと思う。

それらの記憶以降、僕は山の方に行った覚えが無い。

母親、若しくは祖母が僕の戸惑いを見抜き気遣ってくれたのだろうか？

山の方は殆どお金のやりとりだし、手紙もほんのわずか。  
僕に回って来ることは無い。

「そう」

ミランダは口を尖らせ悲しそうな顔をする。

仕方無いこととはいえ、好きな人が悲しんでいるのを見ると、心の奥が抓られるように痛い。

そのせいか、つい

「ラッセルなら分かるかも」

と言ってしまった。

「ラッセル？」

小首を傾げるミランダに僕も確信は無いながら

「もしかしたら、だけど」

たしかラッセルは彼の父親に連れられて山の方に買い付けに行ったことがあつたはず。

少しは知っているかもしれない。

それを言うよ

「もし、ラッセルが知ってたらラカスは馬を出してくれる？」

僕は言葉を詰まらせる。

自分が言ったものの、それとこれは別の話だと思う。

だけど、ミランダの提案には結果的に少し心惹かれるものがあつた。

僕とミランダとラッセル、幼馴染み3人で内緒で出掛ける、それも夜に。

その想像は、僕の鼻先をくすぐり天秤にそつと錘を加える。

「良いよ、ラッセルが知っていて、一緒に来るって言うなら」

僕の口から、良いという言葉を引き出したミランダは、行くことが決まったような笑みを見せた。

ふいに祖母の言葉を思い出した。

「自分の気持ちに正直になりなさい。それが後悔しないコツさ」  
時と場合による。

こんな時に持ち出したら、祖母はきつとそう言うだろう。

だけど、ねえ？

## 誘う（後書き）

また続く話の一つ。

一応続くのはこれが最後のつもりです。

山の方のことは、最初の方でちらりと書いとききました。

ラッセルが父親と買い付けに行つてるといふのも、どっかで（笑）書いておきました。

両方思い当たる方は、本当に凄いと思います。

それと、正直な話ここんとこ間が空いてしまうのは、話のプロットを全く考えて無いので、次の話考えて資料集めて破棄して話考えてを繰り返しているからです。

まあ作者は話考えるだけで楽しいんですけども。

なんて、この話を2回も消してしまった不器用な作者なんですけど、投げずにぼちぼちな感じでやってきますので、どーか御愛顧の程を。

読んで頂いたことに感謝。

## いつの間にか

ミランダの行動は早かった。

その日もジェーンが来ていたから、ラッセルの家まで送るのに付いてきた。

ナージエも当然のように付いてくる。

小さな2人は、働くようになって滅多に構ってもらった時間の無くなったミランダに代わる代わる話し掛け、ミランダは笑顔で2人の話を聞いている。

僕はその光景を見ながら、なるようになるだろうとラッセルに全部任せることに決めた。

ラッセルが知らなきゃそもそもどうしようもないし、行かないと言えばそれまでだと思っ。

なにせ僕は詳しい地理を知らないのだし。

顔を見せたラッセルは訝しげに眉を顰めている。

苦笑いの僕の横でミランダがこれ以上無いくらいの笑みを浮かべているからだ。

いくら不安を抱かせない為とはいえ、やり過ぎだと僕は思うのだけでも。

「どうした？」

顔は僕を向きつつ、目はミランダを見ていた。

案の定、違和感を抱いてしまったらしい。

「ミランダに聞いて」

それだけ言つと、小さい2人を連れて上がらせてもらっ。

ナージエもジェーンも、僕らの会話を断片的にでも聞いて親とかに言ってしまうされると面倒臭い。

実際行くなら行くでもそうだし、行かないとなったとしても疑われ



監視の目を続けるのは厄介だから。

それに、僕の内心は行きたい行かない方が良いが半々ぐらいなので、ラカスはどう思う？なんて決定を求められなくなかった。早々に逃げることにする。

勝手知ったる他人の家で2人の相手をしていると

「あら、ラッセルは？」

いつもなら夕食の準備をしているマールが不意に顔を見せた。

僕が、ミランダも来ていてその見送りに行っている、と言うと、あら、とマールは細い目を軽く開いた。

「ラカスちゃんが良いの？」

僕はナージェとジェーンにちよっかいを出しつつ

「ジェーンが構って欲しがってるから」

まさか、夜に出掛ける為の説得中だなんて言える訳ない。

マールは、困った子ねとジェーンを見遣り

「私が見てるからラカスちゃんも行ってくれば？」

「別にいいよ」

僕が断ると、マールは、大人ね、と驚くように一言。

言われて、やっとマールの言いたかったことに気付いた。

どこから耳に入れたかは知らないけど、僕とミランダのことを知られていたことに照れつつ、うん、まあね、とだけ相槌を打っておいた。

「ラッセルも見習って欲しいわね」

掌を頬に添えながらマールは途中だったらしい夕食の準備に戻っていった。

去り際、ラッセルも好き嫌いは無くさなくちゃねと言っていたから、多分今日の夕食にラッセルの嫌いな物が出るんだろう。

その辺の話をしに来たと思われるマールの足音を聞きながら、ラッセルごめん、と小声で謝しておく。

そんなことをしていると、ラッセルが戻ってきた。

若干浮かないような顔をしたラッセルは僕の横に座る。

ミランダは帰ったようだ。

「明日、時間とか言いに来るってさ」

増えた遊び相手に喜ぶ2人を相手しつつ、僕にだけ聞こえるように小声で。

「行くことにしたんだ」

僕も小声。

少し声が弾んだ。

ジェーンが脇の下をこちよぐられたせいで笑い声を上げる。

「だって、俺行かないと2人で行くんだろ」

ラッセルの声はさつきより少し大きい。

諦めが含まれた言葉に違和感が湧く。

「僕は、ラッセルが行かないって言ったら行かないって言ったけど？」

ん？とラッセルは漏らす。

顔を見合わせた僕らはきつと同じことを考えた。  
やられた。

だから、ミランダはラッセルの言質だけとって帰ったんだ。

「僕、そんな無茶言わない」

八つ当たりのように、笑い転げるジェーンを見ていたナージェの脇をこちよぐる。

「そうだよな、ラカスは言わないよな」

ラッセルはジェーンを抱き上げると軽く上に放り上げ受け止める。

僕もナージェを同様にするけど、ラッセルのより幾分低い。

それでもナージェは楽しんでくれるから良しとしよう。

まあ、たとえ不意打ちのような形でも、行くとなれば行くことについて考える。

ラッセルに、危険なことはないのかと一応尋ねた。

ラッセルは、道は切り開かれているし動物についても父ちゃんからそういう話は聞いていないと言っ。

人が頻発に入っているからだろうか？

心許無い話に、ラッセルは、聞いてみようかと言ってくれたけど、怪しまれるんじゃないと言うと、ラッセルは、それもそうかと止めた。

当然といえば当然ながら、ラッセルもとても詳しいという程でも無さそうだった。

不安要素が消えたわけでも無い。

それでも、帰り際にこっそり

「なんだかんだ言ったけど、3人で出掛けるのは少し楽しみかも」  
笑いながら囁いた。

ラッセルは口の端をあげ

「実は、俺もだ」

僕らは笑みを交わした。

まあ、良いか。

ミランダの行動に対して僕の中で、そして多分ラッセルの中でも到達した答えだと思う。

ミランダが何をしたいか分からない。

ラッセルも、聞いても教えてくれなかったらしい。

でも、ミランダがこうまでしてしたことなんだから、きっと僕らは手伝うべきなんだろう。

それは、ミランダではなくラッセルだったとしても僕とミランダは手伝っただろうし、僕の場合もラッセルとミランダは手伝ってくれるだろう。

僕らはきつとそうだろう。

いや、いつの間にかそうなっていたんだろう。

いつの間にか（後書き）

ラカスを取り巻く関係を家族から少しずつシフトしていきたいです。  
そろそろそんな年齢かなあと。

展開の速度の関係で最初の方、幼馴染みの話を割りと削ったので、  
こつこつ風を書いて違和感が無いか心配です。

読んで頂いたことに感謝

## 招かざる

その夜は、数ヶ月に一度の二つの月が重なり合う夜だった。僅かに重なり合わない部分が円から飛び出し、滑らかな曲線を見せる。

その姿は、まるで片方の月の皮膚を裂き、ずるりと今にも体液を滴らせながらも一方の月を吐き出すかのようで、神秘とグロテスクが紙一重で均衡しているような気がした。

僕は、そんな時の月が苦手だった。

嫌い、では無い。

古い月が新しい月を産むという考えは僕の胸の奥をゾワゾワさせたが、けして不快では無く、むしろ悦楽に近いような。

何故かは分からない。

分からないから、嫌いではなく、苦手だった。

その月の端が目印にされた木にかかると、僕は静かにベッドから身を起こした。

それが待ち合わせの時間だと、昨日ミランダから言われた。

外からの虫の声と一定のリズムの寝息が部屋の中を満たしている。

それ以外の音を混ぜないようにゆっくりと布団から下半身を引き抜く。

向こうに見える両親はどちらも、深く眠っているようだ。

母親は支払いの時期がまだ続いているので、一日中走り回った疲れとお酒によって。

本人曰く、この時期に飲む酒は美味いそう。

そして、父親は朝早く起きる必要が無くなったので、結構遅くまで母親がお酒を飲むのに付き合っただけでベロベロになっていた。

僕にとっては好都合。

身を屈めて忍び足でドアに向かおうとした時

「コーに」

急に背骨を上につ張られたようになりながら、声をあげるのだけは堪えた。

一緒のベッドで寝ていたナージエが上半身を起こし、眠たげに目をこすっていた。

「ごめん、起こしちゃった？」

小声で、髪に手櫛を入れるように撫でながらナージエの上半身を倒す。

「お兄ちゃん、ちょっとおしっこ行ってくるから」

なんとかこの場を誤魔化し切り抜けようとする

「ナージエも行く」

寝起きで上手く回ってない口で言われた。

本音では断りたいが、さすがに断れない。

仕方無いかと、ナージエをベッドから下ろしていると

「どうしたんだい？」

母親の声。

心臓が跳ねた。

「おしっこ行ってくる」

上半身を腕を使って持ち上げている母親に、なんでもない風を装い、言う。

内心は激しい鼓動の音が聞こえてしまわないか、ビクビクしていた。

「大丈夫かい？」

ナージエを示して聞かれた。

「大丈夫だよ」

昼間に連れていったことはあるけど、夜は暗いので危ないからと母親を起こすように言われていた。

なので、小声でも少し強めに言った。

母親も僕を信用してくれたのか、自分が眠いのか分からないけど、気をつけるんだよ、と言うと布団を被り直した。

すぐに寝息が聞こえてくる。

僕は静か息を吐きながら胸を撫で下ろした。

ナージエの用を済ませたら寝かしつけて、トイレを装いつつ出掛け  
てしまおうと考えていたから、母親に起きられ、僕が先に行くこと  
になったらどうしようかと思った。

さっさと済ませてしまおうと、ナージエに厚いコートのような物を  
着させる。

トイレは半分外に接しているような作りなので、僕も同様に羽織る。  
可愛い欠伸をするナージエの手を引きながら、約束の時間に遅  
れるなあと考えていた。

トイレの前に着き、ナージエを中に入れようとすると、首を横に振  
り出した。

どうしたの？と聞くと

「ナージエも行く」

僕を見上げて言う。

ここに至って、嫌な予感がした。

「お兄ちゃん、おしっこしたらナージエと一緒に寝るんだよ」

首を傾げる演技をし、ナージエの言ってる意味が分からないとアピ

ール。

すると、

「ナージエも行くの」

首をブンブンと振り、見える瞳にうつすらと涙が溜まり始めている。  
僕は確信を持った。

うん、間違いなくバレてる。

そして、このままだと泣く。

「分かった、分かったから泣かないで」

ナージエの涙を指先で払う。

もう、背に腹は代えられなかった。

ナージエがどこまで勘付いているかは分からなくとも、泣かれてし  
まっては全てがおじゃんになってしまう。

運良くナージエは厚着をしているから、納戸に隠しておいた僕の服

一式から首巻きと僕の羽織っていたコートを買って念入りに風が入らないようにする。

僕も着替えると、食事をする部屋のテーブルに、ちよつとラッセルとミランダと山の方に出掛けてくるという置き手紙を残し、家を出る。

置き手紙は僕が言い出した。

万が一途中でバれてもなるべく大騒ぎにならないようにと。

多分、十分大騒ぎになると思うけど、まあ行った人間と場所だけでも、と。

紙はゼノビアから貰ってる手紙用の紙で、こんなことに使うのは少し申し訳ないと思いつつ、ミランダとラッセルにも分けた。なるべくなら気付かれる前に帰ってきたいんだけどなあ。

「お前もか」

待ち合わせ場所は僕の家裏、馬小屋の前。

家の裏のドアから出ると、丁度ラッセルがいた。

僕のドアを開く音に驚き、身構えながら僕の姿を確認した後、ラッセルは言った。

僕の横にナージエがいるように、ラッセルの横にはジエーンがいた。ジエーンも厚いコートを重ねて着ていて、外側のコートは随分大きいのを強引にたくしあげてある。

多分ラッセルのだろう。

「なんか今日に限って、どうしても俺と寝たがったんだよな」

言い訳のように言うラッセルの言葉は、そのまま僕に起きた出来事でもあった。

滅多に言わないけども、疲れてる時とか大の字に寝たいのでナージエの要望を断ることがある。

その場合、下唇を突出して不満タラタラの顔で分かってくれるんだ



けど、今日はとうとう泣き出した。

母親も疲れているのもあって

「頼むよ」

そう言われては、一日中働いてるわけではない僕は頷くしかなかった。

ラッセルも似たような話だった。

「ラカス、なんか言ったのか？」

小さな2人は手を振りあい再会を喜びあった後、手を繋いで僕らの前を歩いている。

僕は特に思い当たることは無いが、たしかに服の準備とかでコソコソしてたかなとは思う。

「ラッセルは？」

ラッセルも僕と同じように、そう言われてみればという程度だった。

「どんだけ鋭いんだよ」

ラッセルの言葉に僕も同意する。

そんな話をしながらミランダを待っていると、しばらくして足音が聞こえ、ミランダが来た。

「お待たせ」

息をきらせ、両腿に両手を乗せて肩を上下させるミランダは、広げた掌二つ分四方の小さな取っ手の付いた袋を持っていた。

何だろう？

しかし、それを聞く前に

「なんで？」

ミランダに本来居ないはずの小さなお客さんがいる理由を聞かれました。

僕とラッセルは顔を見合わせると、僕らも分からないと肩を竦めて見せた。

## 招かざる（後書き）

話自体は前話の翌日には出来ていたんですが、ゼロ魔の世界の天体の設定が分からず、困りました。

水の精霊が50回程交差したとか言ってますが、月はどういう軌跡で動いてんだろか、と。

一応、ゼロ魔のモデル時代の天動説とか見てみたんですが、サツパリ分かりませんでした。

なんで、適当です。

公式設定とか分かる方いたら教えて下さい。

お願いします。

展開が遅いのは今更ですね。

読んで頂いたことに感謝

## 出発

ナージエとジエーンについて僕らの話を聞いたミランダは、仕方無いわね、とあっさり了承した。

僕らと同様に、ここまで来てしまった以上、悶着を起さずに帰らせる手段が見つからないと至ったのだと思う。

「とにかく出発しましょう」

ミランダに急かすように言われて、馬の準備をしに馬小屋に入る。

元々3人の予定だったから僕の馬で行くつもりだった。

昼間の時点で馬には言っておいたので、暗い小屋の中に入るとすぐに待ちくたびれたように馬が首を伸ばしている。

「お待たせ」

僕が一声かけると、遅い、と鼻息を荒くする。

いつもなら寝ている時間なので、少しご機嫌ななめだった。

僕は、ごめんと行って鞍の準備を始める。

さすがに祖父にバレるから付けっ放しには出来なかった。

それとラッセルに頼んで、僕にとっては高い位置にある柵から鞍を一つとってもらおう。

気を付けて、とは言っておいた。

その間に小屋の奥の方で寝ている馬のうち一頭に起きてもらえるように説得する。

僕らの物音で起きてしまっていたが、僕の姿を確認すると、なんだとばかりに警戒して上げていた首を下ろす。

「本当に申し訳ないんだけど」

どの馬に頼んでも皆首を背けて聞こえない振りをする。

僕の馬の母親、つまり母親が乗ってる馬の妹が息子が行くならと身体を持ち上げてくれた。

「ありがとう」

頭を下げてお礼をする。

馬の母親は、ジエーンとナージエにじつと見られ続けて居心地悪そうな息子を見てから僕を見て、軽く鼻を鳴らす。

息子の友人の頼みとあっちゃあね。

僕は自分の馬以外は、はつきりと言ってることは分からない。

でも、そう言われた気がした。

もう一度頭を下げた。

了解を得ると、ラッセルに手伝ってもらい急いで二頭に鞍と手綱を取り付けて小屋を出る。

バランスを考え、自分の馬に僕が乗りナージエとジエーンを乗せ、ラッセルとミランダには母親馬に乗ってもらうことにした。

ミランダが跨がる際に、先に跨がったラッセルがミランダが持ってきた袋を預かった。

「何持ってきたんだよ？」

僕も疑問に思っていたことをラッセルは袋の中を覗こうとしながら聞いた。

「ちょっと、見ないでよ」

ミランダに足を叩かれたラッセルは見るのを止め、後ろに跨がったミランダに返す。

そしてミランダが跨がるのを手伝いながらそのやりとりを見ていた僕に向けて小さく首を振った。

中身は分からなかったらしい。

行く理由は聞かないようにするけど、出来るなら知っておきたいんだけどなあ。

全く、一体何しに行くのやら。

目的地は準備をしながら聞いた。

「山の方に柏が一杯生えてるところがあるらしいの」

ミランダはそう言い

「父ちゃんと山に行った時に見ただけどよ」

ラッセルが付け足した。

行く目的は秘密としたが、ラッセルに道を知ってるか聞いた時に場所だけは言っていたらしい。

僕が心変わりしないよう、ラッセルに僕に言わないように釘を刺したと言っただから恐れ入る。

僕がある種感心していると、ラッセルに

「柏ってあれだろ、幹が細目で葉っぱが中々落ちない奴だろ」

記憶をほじくると、たしかに柏ってそんなのだった覚えがある。

誰かに聞いた気がしたけど、誰かは思い出せなかった。

ミランダも同程度の知識だった。

3人が一致したから多分そうなんだろうと若干あやふやながら目的地を知る。

そこまでの道を知らないので、ラッセルに僕が知ってる一番山寄りの村を言つと、そこからなら分かるとはっきりとした答えが返ってきた。

内心で、ラッセルの記憶を危ぶんでいたことを謝しておく。

それにしても、なんで3人も似た知識を持っているかが引っかけた。

小さい頃、祖母ドーラセシルと出掛けた時にでも聞いたんだらうか？

虫の音色が包む夜道に馬の足音が響く。

それと、笑い声と驚く声。

笑い声は僕の前に座る2人で驚く声は左やや後方につく馬に乗ってる2人。

人が歩くより、はるかに速いがそんなに速度は出してない。

そして、僕は左手を伸ばしてラッセルの握る手綱を少し僕の方に弛ませてもらい、それを握ってる。

絶対とは言い切れないものの、ラッセルが手綱を持たなくても、おそらく問題は無いと思うんだけど、ラッセルが不安がるので持つ

だけで良いと言って手綱を持たせた。

すると、やっぱり不安だと言い出してこの形に落ち着いた。

「お前すごいな」

実際に走り出して直ぐラッセルに言われた。

「まあ、このくらいの速さなら、なんとかね」

自慢するのも恥ずかしいので、謙遜して応える。

ミランダも、すごいわと言ってくれ、ナージエもジエーンも、にーにすごい、おにーすごいと口にする。

そんなちよつと照れてしまってる僕に対し、僕の馬は元々ご機嫌ななめなのがますます加速していた。

彼曰く、僕がすごいのではなく、そう出来るように走っている自分がすごいそうだ。

なんなら両手とも向こうでも良いんだぜと、僕に迫ってくる。

僕は苦笑い。

そりゃどんな乗り方だよと思いつつ、お前のお陰だって分かっていると、言っても、まだ臍を曲げている。

ナージエとジエーンに

「このお馬さんも褒めて欲しがってるから」

と耳打ちして、2人の讃辞によりようやく機嫌を直してくれた。単純というか面倒臭いというか。

道中の問題は無かった。

月の明るさは十分だし、安全のために近道の林に入らずきちんと開かれてる道を使う。

それでたまに凹凸があると声があがるくらいだろうか。

しかし、僕の前の2人はむしろ凹凸を求めているようでもあったけどね。

「ラッセル、ちょっと代わって」

凹凸に驚くのがラッセルだけになった頃、ミランダが言い出した。

「こんなんじゃないやいつまで経っても着かないわよ」  
言い分はもつともだと思う。

僕が2頭分の手綱を持つ形だと、さすがに速度を上げられない。  
万が一ラッセルが恐くなり手綱を引いてしまつと手綱の左右の長さ  
の関係で馬が右に引つ張られて危険だった。

「大丈夫なのかよ」  
怖々首だけを回して尋ねたラッセルの影から身体を傾けて顔を出し  
たミランダは僕を呼ぶ。

「私は手綱を持つてるだけで良いんでしょ？」

大丈夫かなあと思いつつ、うん、と頷いて見せた。

「じゃあ、代わるわ」

一旦馬を止めて、ミランダとラッセルが入れ替わり、僕は自分の馬  
の手綱だけを持つ。

「さあ、行くわよ」

あつという間だった。

速度を上げた為に少し先行する形になったので、チラチラ後ろを見  
ながら走っていたが、もう少し速くても大丈夫とミランダが言つて  
くるので、最後の方は普通に走つたんじゃないかと思うくらいだっ  
た。

村が近付いたので、速度を落とし並走するようにして馬を止める。

大丈夫だったかと、まず聞いた。

ミランダは笑い

「結構楽しかったわ」

なんでもないと口をつた様子。

ナージエとジェーンも僕にしがみつきながらも楽しそうな悲鳴を上  
げていた。

女性つてすげえ。

「大丈夫？」

ミランダの後ろでラッセルはミランダにしがみつくようにして大きな身体を丸めていた。

弱々しく顔を上げると震えのある小声で

「大丈夫」

駄目そうだった。

とりあえず村に入らない方の道を道なりに良いのか聞くと、首を微かに縦に振る。

ここからは知らない道なのでゆっくりと馬を進めることにした。

「もう、だらしないわね」

ミランダが背後でぐったりするラッセルに呆れたと。

「しょうがないだろ。なんでかは分かんないけど、馬が苦手なんだよ」

ゆっくりだとまだ大丈夫なようでラッセルも言い返す。

「変なの。なんで？」

「俺も分かんねえよ」

僕はナージエが膝下くらいまでの高さに伸びていた黄色の花を欲しがっていたので手折って渡しながら、2人の話を聞いていた。

ふと、ある光景が浮かんだ。

ラッセルって、ちっさい頃僕の馬に乗って振り落とされたことがあったような。

それがトラウマになってんのかな、とか思いつつ特に言わず、ジエーンの分の花を手折ってあげた。

そんな感じで進んで行き、分かれ道になるとラッセルに聞く。

しばらく行くと、左右が林となっている真直ぐに伸びる緩やかな坂になっていた。

その坂の真ん中あたりにかかろうかという時

「この辺で止めてくれ」

ラッセルの声で馬を止めた。

曲がり角も何にも無いからってつきりどっかを間違えたのかと思った。



「上から見ると多分この先ぐらいなんだよな」  
戻るのがどうか窺うと、ラッセルは右の林を指差していた。

出発（後書き）

眠いので、誤字チェックは明日以降に。

読んで頂いたことに感謝

## 約束と

林の中は様々な木が一つの群れをなしていたが季節柄裸になっている木も多く、一つとなつている月の光でも足元を照らすには十分だった。

踏み出す足が枯れかけた落ち葉を潰し、カサカサと音を作る。

「多分、そんな遠くないと思うんだよな」

そう言うラツセルの言葉を信じ、木の根が自由にうねる上を馬が走るのには不安があつたので徒歩により目指すことにした。

徒歩で歩いて落ち葉の下に根つこがあつたり、急に柔らかくなつてたりする。

帰りを考えると無理はしたくないし、ミランダのお陰で予想より大分早く着いたから、焦ることは無いと思う。

ただ、ナージエとジエーンの歩く速さに合わせるとなると、その余裕は使いきってしまったらしい感じがする。

最初2人を馬に乗せようとしたら嫌がり、勝手に歩き出してしまった。

落ち葉を踏むのが楽しいらしいし、僕らが歩いているのだから自分達も歩きたいらしい。

飽きるまで好きにさせた方が早いと判断。

2人を囲むように僕ら、そして前方に経験豊富な母親馬、後方に僕の馬という形をとった。

2頭とも耳をキョロキョロと細かく動かしながらゆっくりな僕らに合わせている。

林に入つてすぐはまだ知らない土地だからと警戒しながら歩いていた僕らだが、何も起きずにいると、僕を含めて、次第に緊張感が緩みだした。

「ラカスってすごいよな」

ふいにラッセルに話しかけられた。

大丈夫、と後ろを歩く馬に尋ねていた僕は急に名前が出たことに、何が、と返した。

「何がって、俺ラカスが町の外で馬に乗ってんの見たこと無かったからよ」

ラッセルは前後の馬を指差し

「馬の知識も無いから、馬って手綱を持ってないと駄目なもんだと思ってた」

言われて見た母親馬は僅かにこっちを見ていた。

そうそう、とミランダも話出す。

「私もラカスがこんなにすごいとは思わなかった」

「そう？」

僕にはあまりすごいことをしてる実感は無かった。

なにせ母親がそうだったから。

母親が呼べば放牧地の隅の方からだってすぐに来てたし、仕事で回ってた時も母親の仕事靴を啜えて母親に渡すのを見ていた。

当時こそ母親を馬使いのような目で見ていたけど、今なら分かる。

こっちの考えを押し付けるんじゃない、意識を通じさせられれば、馬も人も変わらない。

同じように分かり合えるし、こっちのことだって考えてくれる。

あーあ、とラッセルは後頭部で手を組む。

「俺ももつと小さい頃から金槌持ってたればなあ」

組んだ手を下ろし、掌を眺め右手で金槌を振る仕草をした。

「最近やつと少し叩かせてもらえんだよ、簡単なやつなんだけどさ。でも、全然なんだよな」

「私だってそうよ。お姉ちゃんの足、引っ張ってばっかだもん」

溜め息をつきながら肩を落とす2人に

「簡単にやられたら、僕が困るよ」

そう言った。

「僕だって今みたくなるまで何回も落とされたもん」

ねえ、と後ろの一番落としてくれた者を見た。

僕らの話を聞いていたらしい馬は、お前へったくそだったもんな、とニヤリ。

それは僕も分かっていることなので、言い返せず舌を出して見せた。ラッセルはしきりに金槌を振う仕草をするので、ふと思いついたことを言ってみる。

「もしさ、ラッセルが一人前になったら、僕に金槌の使い方教えてよ」

馬具は頻繁には壊れないが、長く使っていると金具が緩くなったり歪んだりする。

自分の馬のやつを自分で直せたら良いなど、たまにガルクのところ  
に修理に持って行く祖父を見ていて思う時がある。

僕の問いにラッセルは一瞬キョトンとし、口の端を僅かに上げた。

「駄目駄目、金槌の振り方でもそんなに簡単に教えて良いもんじゃねえんだよ」

まるで何十年も経験した師匠のように言う。

「なんだ」

つまんないの、と僕は呟く。

「だたし」

ラッセルは人指し指をピンと伸ばし

「そんな時にお前が俺に馬の乗り方を教えてくれたら教えてやるよ」

将来自分で色んなところに買い付けに行くから、馬に乗れないと不便だろ、と続けた。

そのもってまわったような言い方について笑みが出た。

「良いよ、約束ね」

「おう、約束な」

「ずるい、私も」

ミランダが割って入ってきた。

「ミランダもなんか直したいの？」

僕が聞くと、違うわよと言われた。

「私にも馬の乗り方教えてよ。代わりに布の織り方教えてあげるから」

ねっ、と言われても、正直興味無い。

ミランダは先程の体験が相当に楽しいものだったらしい。

「約束だからね」

ぐっつと顔を寄せられ、嫌と言えず頷いた。

そして下からも、ナージエも、ジエーンも、と服を引っ張られて、2人とも約束。

勢いで約束させられたけど、もしそうなたらと想像する。

大人になった僕が同じように大人になったラッセルやミランダに乗り方を教えている。ラッセルはガルクさんのような体格だろうから、意地悪して少し気性の荒い馬に乗せてしまっ。

当然のように落とされ、僕と大人しい馬に乗るセシルのように穏やかな女性になったミランダが笑う。

そしてその後、ラッセルに金具の直し方を教わるんだけど、仕返しとばかりに僕のやることなすこと全部に駄目出しをしてくるんだ。

そんな僕らをミランダが笑いながらちゃちゃを入れてくる。

そしてなんとかラッセルから合格をもらうと、今度は私の番と、ミランダが僕らを機織り器のところに連れて行くとする。

僕とラッセルは目で合図をして、ミランダがこっちを見ていない隙に逃げ出す。

気付いたミランダが僕らを追いかけて来て、僕らはなんだかんだ言いつつも結局はやらされる。

そして最後は、3人で酒を飲みながら小さい頃、こっそり夜に出掛けたことを話すんだ。

すると、ナージエとジエーンが、私達も行ったと話に入ってきたりする。

ふと、無意識のうちに描いたの想像は、僕とラッセルに何も起こらず町で暮らしていた。

知らず胸が熱くなるのを感じる。

僕ら3人は黙ってしまった。

同じようなことを考えたんだと思う。

妙にしんみりしてしまった空気を破るようにラッセルが

「ミランダが一人前だなんて想像つかないよな」

わざとらしいまでに明るい声で言った。

「何よ、突然」

「だって、ミランダこの前、糸を絡ませて怒られたんだろ」

ラッセルの話は初耳で、ミランダは、ラッセル、とラッセルの服を引っ張りながら話すのを止めさせようとする。

「何それ、僕知らないんだけど」

ラッセルに乗った。

ミランダに引っ張られてもびくともせずラッセルは話す。

「この前初めて器械を使わせてもらったらしいんだけど、あんまりにも緊張したらしくてさ」

僕とラッセルは会話を続け、ミランダは僕らが話す度に、違っの聞いて、と呼び掛ける。

なおも僕らが無視して話し続けると、からかわれていると気付いたよついで

「もう、2人も止めてって言ってるでしょ」

肩口をグーで叩かれた。

そして、僕とラッセルはそれぞれの妹からも、いじめたら駄目ですよと怒られた。

僕らはミランダに謝る。

「良いわよ、気にしてないから」

ブイツとそう言うと、ミランダの歩調が早くなった。

僕らは妹達を抱え上げると、ミランダに謝りの言葉をかけながら後

を追う。

ずっと、繰り返されてきたやりとりだった。



## 約束と（後書き）

この中の想像が、つまりはタイトルの『起きてしまったので』という事です。

起きてしまったことだけど、それでも前向きに生きていけるよ。そんな話を書きたいですね。

少し前に、喧嘩の話をアクションシーンの練習で書いてみたら、特に悪いという感想がこなかったので、あんな感じで良いのかしら。コツとかあれば是非。

読んで頂いたことに感謝

## 知らない

様々な種の混じる林を抜けた先は、背の高い種類のみがある程度の間隔をもつて生えていた。

どの木も上の方に僅かに枝が見えるだけで、とても素人が簡単に上れるように思えない。

微かな記憶が、ここが林業が行われている場所だと思い当たらせた。尋ねると、ラッセルが肯定する。

初めて見たミランダと小さい2人は、天に聳え立つような木々の先を見上げながら感嘆の声を上げていた。

先の林と比べて見通しも良く、落ちてる葉も少ないので、ナージエとジェーンが木の回りをくるくると駆けながらついて来る。

僕らも、これで疲れてくれれば良いかなと思いつつ、2人が転んだりしないように注意を払いながら歩いていた。

急に前を行く馬が足を止めた。

何? と思い、見ると頭を左右に振りながら耳を動かしている。

咄嗟に後ろにいるはずの自分の馬を見ると、前の母親馬と同じようにしていた。

何が起きた?

そう僕が尋ねる前に、耳の端に遠吠えのような声が引つ掛かった。

「馬に乗って」

考える前に4人に言っていた。

僕に視線が集まる。

まだ事態が掴めていないみたいだった。

再び、さっきよりはつきりとした遠吠えが、僕が説明する前に林に響いた。

それを聞いたラッセルとミランダは慌てて前馬に走って行く。

僕は、まだ理解していないナージエとジェーンを抱え馬に乗る。

「手綱は持つてるだけ。それで身体を屈めて」

「う、うん」

来るまでと同様に手綱を持つミランダは戸惑いながらも身を丸くする。

「ラッセル、鞍を掴んで良いから上から被され」

「お、おう」

ラッセルも吃りながらも指示した通りの格好になった。

それらを確認すると、僕も懐の2人に被さるようにして態勢を低くする。

「頼んだ」

僕の言葉で2頭の馬は走り出した。

届いた遠吠えが、さっきまでより近いことを知らせた。

飛ぶようにして、眼前に迫る幹を躲すと、すぐにまた幹。

左腰を押し上げられる力を感じると、耳に入り込む強引に丸められたような風の音に、布を裂いたような音が混じる。

かすったらしい。

すぐに手綱を持つ右手が地面に着きそうなくらい前のめりになり、尻を突き上げられるような姿勢のまま、右腰を横から押される。

たまに前を走る馬が視界に入り、ミランダとラッセルは殆ど鞍にしがみつくようになっていく。

それで良い。

懐から聞こえる喜色ばんだ甲高い声は、もはや雑音と同等。

「白い犬さん」

跳ねた瞬間、そう聞こえた。

肩越しに後ろを見ると、無理矢理引っ張られたように伸ばされた黒い地面を、縫い合わせるように白い物が後を追って来ていた。

それも2頭。

白い毛並みが月の光で反射し、残像を残しながら2頭が、まるで蛇のように交差する。

喉でかき回されたような声が聞こえる。

明らかに向こうの方が速かった。

馬が鈍く嘶く。

「追いつかれるぞ」

そう言っていた。

少し前から気付いていたのかもしれない。

「なんとかならない？」

「こつちだつて色々やってんだよ」

確かにそうだった。

急に方向転換したり、わざと難度の高そうなルートを選んで、この様。

「お前、なんとかしろよ」

しかも、話す馬の息も上がり始めていた。

「なんとかつて、無茶言うな」

僕は手ぶらだった。

変に武器を持って立ち向かうよりも、逃げの一手の方が良いと考えていたからだ。

「前に、火とか出してただろ」

馬は考えても無かったことを言い出した。

「ひ？そんなん出せる訳ないだろ」

「出してただろ、じいっと見てたら、急に火が出て、そしたらお前またたおっ」

とうとう語尾がかすれ出した。

限界が近いと感じた。

言われたことは全く記憶に無かった。

だけど、馬は見たと言っ。

やった覚えも無く、出来る気もしなかったが、再度振返った時には、2頭は全体像が分かるまでになっていた。

犬と言っていたが、それよりはるかに大きい。

体高が幼い馬ぐらいあり、僅かに開かれた口から、犬歯が光って見

えた。

より近くにいる1頭の唯一身体の中で黒い鼻先をじっと見ながら、目に力を込める。

すると、腹の下の方から上がってくる何かが、胸、首を抜けて目を潜り抜けたような気がした瞬間、パツと僕の拳くらいの火が燃え尽きる寸前のように、一瞬現れた。

それで十分だった。

驚いた普通の犬と変わらない鳴き声をあげ、着地を崩した1頭は地面を転がった。

僕は、出たと驚く。

な、と馬が言い、言葉を続けた。

「でも、お前、その後倒れたんだよな」

大丈夫か？という問いと、僕の心臓に直接熱湯をかけたような痛みが襲うのは同時だった。

「それは、早く言え」

それだけ言うと、痛みを堪えるために身を丸めた。

多分、肘で心臓を押えた為に、懐の2人を抑える柵をする物が無くなったのだろう。

腕に乗られるような感触があった。

見ると、ナージエが首を伸ばして後ろを窺っている。

「ナージエ」

注意しようとした瞬間、馬が幹を躲すために身体を右に傾けた。

重力に従い、ナージエが僕の腕を支点にくるりと、落ちた。

「ナージエ」

気が付いた時には、僕の身体は半分ずり落ちるような態勢になっていた。

辛うじて、左手だけで掴まっている状態で、両足とも鐙を外れていた。

馬がよれ、高く嘶いた。

少し前を走る馬上の2人がこっちを見た。

目が合う。

そこまでだった。

心臓が一度強く打った途端、目眩のように世界が歪み、僕の左手は離れた。

ラッセルがゆっくり振返ったのが見えた。

そして、馬だけが走り去り、ラッセルが宙に浮かんだまま取り残された。

僕はナージエを抱き抱えると、背中を打ち抜かれたような痛みを感じ、転がった。

僕が止まったすぐ近くで、地面を擦る音がする。

「にーに？」

心配気な声が聞こえても、息が出来ない。

何かを呼ぶ女性の声と馬の嘶きがする。

「行け」

辛うじて出た言葉は空気が抜けるような音に聞こえた。

通じたかどうか分からないが、叫び声は糸を引くように遠くになっていく。

代わりに喉でかき回された声が近付いてくるのが分かる。

全身の痛みを堪えながら起き上がると、ジェーンを抱えたラッセルが同様に起き上がるところだった。

僕が見たラッセルは投げ出されたジェーンを抱き留めるためだったと理解。

ラッセルとジェーンに対し、申し訳なさやら様々な感情が浮かぶが、その感情を言葉に纏める余裕は無かった。

視界内に白い2頭がゆっくりと、しかし確実に歩を進める様があった。

「にーに」

ナージエが怯えるように涙ぐみながら僕にしがみつく。

おにー、という声が聞こえた。

ちらりと見たジェーンもラッセルにしがみついていた。

この段に至って、ようやく事態を理解したらしい。

白い2頭はいつでも襲い掛かれるような態勢をとり、唸り声をあげながらギリギリと近付いてくる。

勝つ手段なんて当然無かった。

足が震える。

全身が心臓になったみたいだ。

出来ることなら、へたりこみたかった。

それを踏み止どまれたのは、僕の後ろに隠れたナージエの身体が震えているのが分かるからだ。

今にも霞みそうな使命感が細い糸になって僕を空からぶら下げている。

白い内の1頭が明らかに前足に力を込めた瞬間、馬の足音が響き、白い2頭が改めて身構える間に、僕の馬が僕らと白いの間に入る。

馬は一度白いのに向けて高く嘶き威嚇するが、どちらも体重を後ろに移動しただけだった。

僕はラッセルを見た。

ラッセルも僕を見ていた。

合った視線の先にお互い同じ物が映ってるのを感じると、頷きあった。

僕とラッセルはそれぞれの妹を抱えると、馬に服を噛ませた。

さすがに2人はきつそうだった。

「頼むな」

僕はそう言い、馬の頭を撫で、ナージエの手を握る。

ラッセルも

「頼んだぜ」

と、馬とジエーンを撫でた。

「行け」

馬の尻を叩くと、一瞬躊躇った後、走り出した。

それぞれの兄を呼ぶ声が段々遠ざかり、僕らと白いのが残る。

馬が行ってしまった以上、逃げるチャンスはもう無い。

そもそも4人が乗る暇など与えてはくれないだろうし、乗っても追いつかれるのは今までの追いかけてここで証明済み。

これが一番被害が少ない方法だった。

僕はラッセルにも乗って欲しかったが、ラッセルはその気を見せず、僕に乗るように目で促して来た。

僕も乗る気は無かった。

「兄貴って大変だよな」

ふとラッセルが言った。

「全くだね」

僕が答える。

白いのが2頭逆回り込むように動く。

不思議と死ぬことへの恐怖は消えていた。

僕らがすべきは時間稼ぎ。

良く分からない勇気が僕らを満たしていた。



知らない（後書き）

なんで魔法を使ったことを覚えてないのかはまた次回。

白いのは、もののけ姫のモロの息子をイメージしていただければ。

ところで、アクションシーンはちゃんと書けてますでしょうか？

自分では良く分かりません。（笑）

読んで頂いたことに感謝

**簡単な言葉（前書き）**

申し訳ありません。

前話の後書きで嘘を吐きました。

## 簡単な言葉

濡れた闇のような、艶めく瞳が僕を見ていた。

瞳の周りを金色が縁取り、月の光を纏っているようだった。

白いのは頭を下げ、背中をしなやかに反らせた姿勢から音も立てず、右前足を交差させ、僕から見た右前方へと一步踏み出す。

僕はそれを受けて、やや前に出してある左足を摺り足で左後方に下げ、右足も弧を描くように摺らせ左足の後ろに引きつける。

僕と白いとの距離は、白いの背後に生えた木を考えると、5、6メートルぐらいだと思っただけど、白いの周囲だけ遠近感が狂い、まるで目の前にいるみたいに一挙手一投足まではつきり見えた。

お互いが円の四半分程移動した時、白いのは浮かせた右前足を虚空で止め、足首を返して地面を搔き出した。

数回地面を搔くと、微かな窪みが出来、その斜面に鋭い爪を引っ掛けるように置く。

背中を反らせ低く構える身体を更に低く、口先が地面に着くすれすれにまで下げる。

前足の付け根付近の銀色に輝く白い毛が、盛り上がる筋肉によって絞られるように微かに立ち上がるのが見えた。

僕は息を抑え、白いの首が持ち上がる瞬間のために、蹴り出す右足に力を込めてその時を待つ。

白いのは大きな白い岩になったみたいに身動き一つしない。

搔き回すような唸り声が静かに地面を這う。

僕は細く息を吐いた。

一つ。

二つ。

三つ。

岩が一瞬僅かに嵩をましたような気がした。

飛び掛かるための筋肉の動きに体毛が更に引き絞られたのだ。

そう判断し、力を込めていた右足で地面を蹴り、左に跳んだ。

しかし、聞こえたのは僕の出した音だけで、白いのが溜めていた唸りを吐き出した声は聞こえない。

背中を寒いものが走る。

目だけで白いのを見ると、白いのは這わせた身体を少し浮かした態勢であり、改めて勢いをつけるように身体を地に押さえ付け、声の塊を吐き出しながら飛び掛かってきた。

背中 of 寒いものは焦りに変わり、僕は既に殆ど地面と平行になった身体を少しでも遠くへ落とすために、浮いた状態の左足に力を入れて下に振ると、指の先が地面に触れた。

殆ど伸ばしきった状態から無理矢理左足を伸ばすと辛うじて身体が前に押し出された。

その瞬間、伸ばしたままの左足のズボンが引つ張られるような感触がしつっ、地面に着いた。

左腕を中心に痺れるような痛みが足の先、頭のとっぺんまで抜けていく。

その痛みは、地面にぶつかった痛みなのか、痣となった部分が揺さぶられた痛みなのか、心臓の痛みなのか、もう分からない。

それでも、すぐに起き上がり、白いのを視界に入れると、慌ててさつきと同程度の距離をとった。

その距離は、僕が辛うじて逃げ出さない距離だった。

それ以上離れれば、心が折れ、多分、怖じ気付き逃げ出してしまおうと思う。

そして、その行為は即、死に繋がるのだと感じていた。

白いのは爪の先に引つ掛かっていた布切れを、前足を振り、払っている。

それを見て、左足のふくらはぎに熱を感じることに気付くが、一々確認する気も起きず、再び白いのがさつきと同じように身構えたまま右回りにゆっくりと歩き出すのに合わせて、僕も一定の距離を保つように動く。

そうしていると、白いのは適当なタイミングで回のを止め、右前足をかき出す行為を始める。

白いのの行動は、何故か同じパターンの繰り返しだった。

「ラカス」

僕と同様にパターンに気付いているらしいラッセルの声が聞こえた。白いのから目を離せないので手を上げることで応える。

視界内に居ないので、ラッセルが見ているのかどうかも分からないが、口で返事をして集中がきれるのが嫌だった。

さっき白いのの向こうでラッセルが、少し離れたところで最初と変わらずもう1頭の白いのと向かい合っていたのが見えた。

聞こえた声は息切れしてる様子は感じなかった。

2対2ではすぐに決着がついてしまふと考えて、1対1と1対1になるように離れたのだけど、どうやら無様に転げ回っているのは僕の方だけらしい。

ジワジワといたぶるように、いや、実際にたぶっているのかもしれない。

白いのが一定の規則性をもって襲いかかってきているのが、その証拠だと思う。

ゆっくり右回り、右前足をかく、飛び掛かる。

最初の数回は勘で逃げれた。

その内に僕が規則性に気付くと、今度は僕が気付いたことに白いのは気付き、フエイントを入れ始めた。

まるで、僕をいたぶるのを遊びとしているみたいだ。

なんて性格の悪い、と思うが、対面する白いのの鼻の上に黒い斑点がばらばらと浮かんでいるような気がする。

もしかしたら、こいつは僕が出した火に当たったやつで、僕に対する仕返しなのかもしれない。

どっちにしても、と思っていると、白いのは出来た窪みに足を掛ける。

次は溜めも無く、直ぐさま飛び掛かってきた。

フエイントも無し。

それをなんとか紙一重で躲す。

起き上がり距離をとる僕に、また白いのは右回りを始めた。

フエイントがあると知っても、外れればその時点で終わり。

むざむざと騙されざるを得ないのが現状。

それに対する打開策も浮かばず、似たやりとりが繰り返されつつけていた。

そもそも、体力からして僕が不利であり、さらに駆け引きの上でも常に劣勢をとらざるを得なかった僕の終わりには自分でも気付かない内に来た。

何回と騙されたフエイントに再度引つ掛かり、足を掠められつつも避けたところで、立ち上がった僕の膝が、支えが無くなったように折れた。

立ち上がるうとしても足に力が入らず、かえって足を滑らせて尻もちをついてしまった僕を見て、白いのは全てを察したようだった。

左右の頬肉を持ち上げて、自慢するように尖る牙を見せつける。

笑っているみたいだ。

そう、僕は思った。

白いのは身構えることも無く、軽い足取りで歩を進め出す。

単に転がっただけの距離はほんの目と鼻の先だった。

白いのが近寄って来る光景は、映し出された映像のように、現実味が無かった。

世界を激しい雨音のような荒い息が鳴り響く。

その中をとどめをささんと悠然と進む様は美しい強者の姿だとすら思った。

立て、ラカス、という声も映像に向けて叫ぶ観客の声みたいに他人事に感じられた。

僕、死ぬんだな。

あっさりと、頭に浮かんだ死という単語が腹の下に飲み込まれた。ぽっかりと空いた頭に不意に祖母が浮かんだ。次に母親が浮かび、祖父、父親、馬、カテリーナ、ラッセル、ミランダ、町の人、村々の奥様方、そしてナージェ。

そういえば、ナージェに馬の乗り方教えるって約束したんだよな。約束したのが随分と昔のことのような気がした。

白いのは、ちよいと前足を伸ばせば届く位置にいる。低く唸る鼻の先の黒い部分はやっぱり焦げた後だった。

ざまあみる。

口がゆっくりと開かれ、鈍色の牙と真っ赤な口内がはっきり見える。

ごめんなさい、それと、ありがとうございました。

脳裏に浮かび続ける人達には1人1人言いたいことは一杯ある気がするのに、突き詰めればたったの二言だった。

まあ、良いか。

静かに目を閉じて首を竦めた。

もう荒い息の音は聞こえず、きーンという甲高い音が耳鳴りのように響いている。

これが鳴り終わった時に。

そう思った。

甲高い音が少しずつ高くなり始め、少しずつ聞き取れなくなっていく。

尾を引くように消え去ろうとした瞬間、爆発したような音がした。

僕は身を竦め、驚きのあまり何？と目が開いた。

視界は真っ黒で、いやに湿っぽく生臭い。

先の爆発したような音が続けて聞こえる。

良く聞くと犬の鳴き声に似ているような気がする。

世界が滑るように向こうに流れていくと、小さくなり白いの顔が現れる。

鼻から吹き出される息を浴びながら、自分が見ていたのは白いの口内だったと気付く。

目の前の白いのは僕に一瞥をくれると、もう1頭に向かって吠えた。もう1頭が吠え返す。

白いのは横目で僕を見つつ、口を歯ぎしりのように動かした。すると、急に踵を返して走り出した。

もう1頭は一度遠吠えをすると、先に走り出した白いのを追いかけていく。

すぐに2頭の姿は見えなくなる。途端に僕は後ろに倒れこんだ。

空からぶら下げられていた糸が全て切られたみたいに、指一本動かすのも億劫だった。

空では重なった月が浮かんでいる。耳にぶつかる音引きずる音が聞こえ

「ラカス大丈夫か」  
月の代わりに泣きそうなラッセルの顔が見えた。

「なんとか」  
そう返すのが精一杯だった。

ラッセルは深く息を吐き、視界から消え、横から倒れる音がした。風と風が枝をしならせる音だけ聞こえる。

冷たい風が気持ち良かった。どれくらいそうしていただろう。

風が弱まった時を見計らうように、俺たち、と横から聞こえた。「生き延びたんだよな」



言葉の意味を理解するのに少し時間がかかった。

自分の状態に意識を向けると

「あんまり実感ないや」

身体が泥のように重いくせに、痛みだけが虫のように身体をはい回る。

生きているという実感より、疲れたという一言しか出ない。

とりあえずこのまま寝てしまいたかった。

また風が勢いを強め出す。

すると、風の音に混じってひづめの音が聞こえたような気がした。

まさかね、と思ったが、僕の聞きまちがいはなかったらしい。

ラッセルが起き上がり、手を振りながら呼び掛けた。

ひづめの音は近付いて来て、僕の横で止まる。

黒い影が目の前に来て、柔らかく湿った物が僕の頬を撫でた。

この感触を、僕は知っている。

距離をとって見えたのは僕の馬だった。

「また、会えたね」

馬は二度二度と頷くような仕草をし、弱々しく振える声で嘶いた。

また、会えた。

それを聞いた瞬間、自分が生き延びたんだと実感した。

「なんとか間に合ったみたいね」

女性の、聞き覚えの無い声が空から聞こえた。

簡単な言葉（後書き）

えーと、忘れていた理由と、多分突っ込まれるだろう、子供じゃ避けられないよの理由はまた次回、…かそのまた次回で。（弱気）

読んで頂いたことに感謝

## 目的

僕は自分の馬に跨がり後ろにラッセルを乗せて、前方の母親馬に乗っている女の案内に従って走っていた。

女は、デーメーテルと名乗った。

実りを迎えた麦畑のような金色の豊かな髪を後ろで緩く縛り、とても女性らしい身体に僕らのような服装を纏っていた。

デーメーテルはラッセルから僕の状態について話を聞くと、腰から細い木の枝みたいな棒を引き抜き、小声で何か呟いて棒を振った。すると、僕の身体がうっすらと金色が覆い、痛みが引き出した。

「貴族様？」

起き上がった僕を見たラッセルは驚きの声を上げた。

僕も驚いていた。

てつきり魔法を使える人は全員それなりの格好をしているもんだと思っていた。

デーメーテルの服は良く見れば新品と言えるぐらい綺麗だったけど、ゼノビアの格好と比べても田舎の人という感じだった。

ラッセルの問いにデーメーテルは、そんなところよ、と少しきつそうな顔でつまらなそうに答えた。

僕らがひとまずお礼を言うと、この先に家があるから来なさい、と言われた。

「そこで貴方達の連れも待っているわ」

その言葉に僕とラッセルは顔を見合わせた。

しばらくついていくと背の高い木の林は終わり、また様々な種が混じる林になった。

しかし、そこはちょっと前に通った林と違い、似た種類が多かった。

「柏ってこれだよな」

後ろで僕にしがみついているラッセルが言った。

「だと思っ」

僕もちゃんと分かってるわけでは無いけど、そうだと思った。ということ、白いのにさえ会わなければもうちょっとでたどり着けたらしい。

先に進めば進むほど柏は増え、やがて切り開かれたような広場みないなところに小さな家が建っているのが見えた。

デーメーテルはその家に向かうみたいで、近付いていくと建物の前に幾つか人影が見える。

その人影は僕らを確認すると僕らの方に向かって走り出した。

顔が見えるまでに近付くと、先頭はミランダで、遅れてナージエとジェーン、そしてその後ろで2人を気遣う知らない女の子だった。

僕らが馬を止め、僕とラッセルが下りると、ミランダは聞き取れない言葉を叫びながら2人一辺に抱き付いてきた。

ミランダは顔をグチャグチャにしながら泣いていた。

辛うじて、ごめんなさい、だけ聞こえた。

「まあ、生きて会えたんだし」

なあ、とラッセルは僕に。

「まあね」

正直な話、また会えると思っていなかったもので、文句の一つも考えていなかった。

それにここまで泣かれてしまうと責める気も起きなかった。

「気にすんなよ」

「そうそう」

そうやってミランダを宥めていると、ナージエとジェーンが各自の兄にぶつかるようにしがみついていた。

こっちもグチャグチャの顔だった。

大丈夫だから、と背中を擦ってやっている、ミランダの向こうに知らない女の子が息を乱れた息を整えていて、ふいに目が合った。

ナージエの面倒を見てくれたようなので、ありがとうございませ、とお礼。

女の子はびくりと肩を震わせた後に目を逸らし、いえ、とだけ言っ  
た。

そして、僕らのために馬に乗ったまま待っていてくれたデーメーテ  
ールと二言三言話すと来た道を戻っていく。

「その子達の気がすんだら来なさい」

デーメーテールはそう言い残すと馬を走り出させた。

3人ともしばらく泣き続け、やっと泣きやんだので家まで歩きなが  
ら話を聞くと、僕らと別れた後、馬の走るのに任せていたらここに  
着いたそうだ。

ナージエとジェーンも母親馬の後を追って来た僕の馬がここに届け  
たらしい。

そして、助けを求めてデーメーテールが僕らのところに来るに至っ  
た、と。

「結局、あの人誰なんだ？」

貴族じゃないみたいなのに魔法使えるみたいだし、とラッセルがミ  
ランダに聞いた。

「わかんない」

ミランダは首を振った。

ミランダの知っていたのは、あの女の子はディアンヌという名前だ  
ということだけだった。

もしかしたら、デーメーテールの娘なのかもと思った。

年は僕らより少し上のような感じだった。

そして、髪の色はデーメーテールと同じ金色。

顔つきは大人しそうだったが、そう考えるとなんとなく似ているよ  
うな気がした。

まあ聞いてみれば良い話だ。

おじやまします、と家に入ると、デーメーテールに椅子に座るよう

に言われた。

家の中は最低限の家具だけがあり、デーメーテールとディアンヌの2人だけ。

椅子もテーブルとセットなのが四つしかなく、ナージエとジェーンは兄達の膝の上で、ディアンヌはわざわざ丸椅子を台所の方から持つてきてテーブルから少し離れたところに座った。

テーブルにはお茶が置かれていて、小さな2人の分もあり、2人は少し温めにされていた。

「ありがとうございます」

僕が、改めて助けてくれたこととお茶を頂いたことにお礼を言うと、他の4人も口々にお礼を言った。

「良いのよ、単に気紛れを起こしただけだもの」

デーメーテールは本当にそうなのだ態度で示すようにカップを軽く揺らしながら流した。

「それより、理由が聞きたいわね」

揺れる水面を見ていたデーメーテールの瞳が上がる。

「どうして、こんな夜遅くに出歩いていたのかしら？」

デーメーテールの声は静かだった。

だからこそ余計に含まれた怒りを感じて、僕は俯き黙り込んだ。というかそもそも僕は来た理由を知らない。

目でミランダを窺うとミランダも俯き、口元をムニヤムニヤと動かしている。

「貴女が原因のようね」

ミランダの肩が振えた。

僕と同じくラッセルもミランダを窺っていたようだ。

「話さない」

強い口調ではなかったけど、有無を言わせない力があつた。

ミランダは俯いたまま小さな声で

「妖精さんに会いたくて」

ポツリと言った。

## 目的（後書き）

眠いので、ここで限界です。  
誤字チエックも明日以降に。

えーと、気になる方（もし居るならば）のために幾つか。  
ミランダの知ってる人でそういうことに詳しい人物がいましたよね。  
その人の入れ知恵です。

後、データーテール。  
厳密に言うとは違うけど、一度名前出てるんで、正体はその辺の知り  
合いな感じで。

読んで頂いたことに感謝

## 将来

「妖精？」

僕とラッセルが聞き返した。

「妖精つて、あのラカスが持つてる絵本に出てくる、あれか？」

ラッセルが僕より一瞬早く口にする。

ミランダは頷き、肯定。

今度は僕の番と

「その、この辺に妖精がいるの？」

「見た人がいるなんて聞いたことないぜ」

ラッセルが付け加えた。

僕もそんな話を耳にしたことは無い。

「私も無いけど」

とミランダ。

でも、と続く。

「ジュネさんが、月の重なる夜になら会えることがあるって」

言葉は尻つぼみに閉じていき、最後は言い淀むように終わった。

「ジュネさんが言ったのか？」

ラッセルが出てきた人名を聞き返す。

まるで、そのジュネという人物を知っているようだった。

僕はその人が誰なのか、咄嗟に出てこない。

2人が知っているなら僕も見ただことあるはずなのに。

ラッセルは言ったぎり次の言葉を考えこむ様子で、ジュネについて

とても聞ける雰囲気では無いので僕は口を閉ざした。

沈黙が生まれ、それまで黙って僕らの話を聞いていたデーメーター

ルがするりと入る。

「それで、妖精に会ってどうするつもりだったのかしら？」

先の質問の続きを尋ねた。

ミランダは膝の上でスカートを握るように拳を作りつつ、黙ったま



ま。

デーメーターもそれ以上何も言わず、ミランダを見つめていた。居心地の悪い時間が流れる。

それまで膝の上で知らない景色にキョロキョロしていたナージエとジエーンまでも流れる空気を感じ、注目を浴びているミランダを窺いだした頃、ミランダは数回小さく頷く仕草をした。

そして、2回、深く息を吸い、吐くとおもむろに椅子の横においていた袋に手を伸ばし、そこからテーブルの上に持ってきたものを置いていく。

この季節に良く道端で見かける花で作った王冠に首飾り、折り畳まれた白い布、太めによられた糸を編み込み作られた細くて短い縄のような物。

それらの中でミランダは縄のような物を示し

「春になったら、ラカスとラッセルが町を出て行くんです。それで、お祖母ちゃんに聞いてお守りを作ったんですけど、本当なら祭司様とかに祈ってもらったりしないといけないのに、私にそんなお金無いし、それで」

「それで、妖精に頼もって考えたわけね」

はい、とミランダは小さく頷く。

「そんなことの為に」

デーメーターは溜息を一つ。

その時、ふいにジエーンが目の前に置かれた折り畳まれた白い布に興味を示し、手を伸ばした。

「それと、もう一つ」

ジエーンが広げた布にはいくつもの花が刺繍してあった。

春や夏、秋、それぞれの季節を彩っていた花々が重なり、広がる。

広がっているんだけど、正直、下手くそ。

花の所々に白い部分が出来ていて、本来滑らかな輪郭を描くべきところはみ出た糸で凹凸が生まれている。

「私、将来ドレスとかに刺繍をする仕事がしたいんです」

これでも精一杯作ったんです、と拙い刺繍を自虐的に言った。

「ジユネさんが言っていました。妖精さんに捧げる物は花で作った首飾りとかが良いって。こんなの受け取ってくれないかもしれないけど」

デーメーテールが刺繍を手に取り

「子供の手遊びだね」

一瞥して冷たく言うと、ミランダは身体を震わせた。

「これならそこいらの雑草の方がまだマシだね。誰に教わったか知らないけど、教えた人も随分といい加減な教え方したもんだね」

デーメーテールの言葉に関係無いはずの僕がムツとした。

教わったのは多分セルだろう。

そういうのを趣味のようにしていたセルの刺繍は、僕が見ても綺麗だと思っていたし、ミランダだって一生懸命やったのは見て取れた。

「そんな言い方しなくても良いだろ」

ラッセルが訴えるように言う。

「良いの」

ミランダが止めた。

「自分でも分かっている。お祖母ちゃんは、上手く出来たって言うってくれたけど、まだまだ全然だって。妖精さんにだって、そう言われるだろうなって思ってた」

ミランダは俯き気味だった顔を上げた。

「でも、逃げないって決めたの。たとえば、その場で踏まれたとしても、私は絶対に諦めないって」

真直ぐに向けられた視線をたわいも無く受け止めたデーメーテールは、僅かに口の端を上げると、フンと刺繍を折り畳み置いた。

「貴女達のところにだって物売りの1人や2人は来るだろうに。そいつらに言ってもらえば良いだろう」

デーメーテールの指摘に、ミランダは、恐かったから、と答えた。

「2人の為にお祈りをしてもらうって理由が無いと、恐くて出来な

かったから」

「そんな我侭のせいで、目的の2人が死にかけたって訳ね」  
うっ、とミランダは怯んだ。

「俺らは気にして無いぜ」

ラッセルが割って入り、なあと僕に。

多分、そういうことでは無いと思いつつも、ミランダが責められるのは可哀相だと思った。

「こうして今は生きてるわけだし、気にすることないよ」

「そういうこと言ってるんじゃないの」

デーメーターは当然のように僕らを諫める。

僕は言い返す。

「デーメーターさんの言ってることも分かるけど」

そうそう、とラッセル。

「ここに来るまでミランダが何したのか知らなかったけど、今の話を聞いたら言わなかった理由も分かったから。そりゃ少しは頭にくるけど、それはなんていうか、仕方ないと思うし。そもそも俺が簡単に分かるなんて言っちゃったのが原因っていうか」

それを言ったら、僕も単に楽しみにしていただけで、山の方がどんなところなのか調べようともしなかった。

「僕も悪いんです。何も考えませんでした」

ごめんなさい、と僕らが頭を下げると、ナージエとジェーンも倅って頭を下げた。

「2人は悪くないんです。言い出したのは私なんです」

ごめんなさい、とミランダの声が聞こえた。

しばらくそうしていると

「いいから顔を上げなさい」

恐る恐る顔を上げると、額を抑えるデーメーターがいた。

「全く呆れるわね。貴方達、この子のせいで死にかけたのよ」

それは確かに事実だと思う。

でも、それ以上に

「今でも、あの白い奴を思い出すと震えがくるし、刺繍がけなされたのは僕も頭にくるけど、それ以上にミランダが進む道を決めたってことを聞いた時、嬉しかったんです」  
本心だった。

僕とラッセルだけ進む道を決めて、ミランダだけが取り残されているような気がずっとしていたから、ミランダが話を聞いた瞬間、素直に良かったなと思ってしまっていた。

「俺も同じです。言いたいことはラカスの奴に全部言われちゃったけど。俺ももう二度とあんな目に会いたくないけど、今俺らは生きてるし、ミランダがやりたいこと見つけたっていうのはスゲー嬉しいです」

なあ、と頷き合う僕らを見たデーメーターは信じられないと頭を振った。

「まあ、良いわ」

デーメーターが立ち上がるとテーブルにそって回り、ミランダの前に立つ。

「お友達は貴女を責めないと言っているけど、貴女はその2人を死に追いやろうとしたことは紛れも無い事実なのよ。それははっきりと自覚なさい」

見上げていたミランダはしっかりと頷く。

「はい」

乾いた音が響いた。

デーメーターがミランダの頬を張った音。

そして僕とラッセルにも。

「犠牲になるというのはけして格好いいものじゃないわ。今回助かったのは偶然と思いなさい」

頷くと頬に鋭い痛みが走った。

ナージエが心配そうに見ている。

「全く、こんなに呆れるのは彼女以来だわ」

手をぶらぶらさせるデーメーターの呟きが聞こえた。



## 将来（後書き）

ミランダが進路を決めるといふのは予想出来た人が入ればいいな、  
と思いつつ。

ラッセル、ラカスという順で進路決まった。

すぐ前に、ラカスが面接に出掛ける話があり、ミランダが出掛けた  
いって言い出した。

ラッセルにもラカスにも進路が決まった時点で秘密にされていたミ  
ランダが逆に2人に秘密と言う。

恋話とアクションシーンに続き、伏線に挑戦してみたんですが、果  
たしてこんなんで良いのだろうか？

それと、ラカスもラッセルもミランダを許した訳じゃないです。  
ミランダが責められているのを見て、ついつい感じて。

読んで頂いたことに感謝

今はまだ

妖精さんはいるんですか？

「見たこと無いわね」

デーメーテールは考える風もなく、あっさりと答えた。

僕らが生まれるよりも前からこの辺に住んでいるというデーメーテールがそう言うのなら、本当にいないんだと思う。

尋ねたミランダも残念そう顔をしつつ、そうですか、と受け入れていた。

「ごめん」

そう、僕らに。

仕方ないよ、と僕らはミランダに言った。

泊まっついていきなさいというデーメーテールの言葉を僕らにはありがたく受け取り、寢床の支度を手伝う。

入ってすぐ感じた通り、ここはデーメーテールとディアンヌの2人暮らしたったようで、ベッドは二つしかないそうだ。

事情は、なんとなく聞けなかった。

ナージェとジェーンが、お父さんは？とディアンヌに聞こうとするのを僕らは止める。

ディアンヌは困ったような笑みを浮かべていた。

何故聞いてはならないかを尋ねる2人に小声で、ちょっと出かけてるんだよ、と勝手ながら言い聞かせた。

もしかしたら本当に出稼ぎかもしれないが、だったらベッドが無いはずはないと思う。

すると、ナージェがジェーンの手を引きディアンヌに歩み寄ると腰の辺りに抱き付いた。

「こーしてるとね、寂しくなくなるの。ナージェもね、たまににーににしてもらうから知ってるの」

ディアン又は突然のことに驚いた後

「ありがとね。寂しくなくなったわ」

と、2人を抱き締め返していた。

それを横目に僕らはテーブル移動をして空いた場所に、借りた布団で僕とラツセルの寢床を作る。

そうして寢床は出来たが、知らない場所に来た興奮も手伝いすぐには寝付けず、ディアン又を交えて話をしていた。

年の近い友達がいないのだとディアン又の背中を押したデーメルは、少し離れた所に机と共に出してきた糸車を使い、小さい2人の気を引いていた。

ハンドルを回すと巻きつけられていた綿がよられ細い糸になる。

2人はそれが楽しいようで、代わりばんこに回している。

笑い声が聞こえるそっちに比べて、僕らの方は少し様子見といった感じ。

たしかにディアン又はこういったことに慣れていないようで、僕らの話を聞くばかりで、話を振ると戸惑いの表情を浮かべて曖昧な答えを返すだけだった。

その度にミランダが、さすが同性だなと思わせるフォローをし、ディアン又も自分から話し出さないまでも時折はにかむような笑みを浮かべるようになりはしていったものの、男性に対して多少の恐怖心みたいなものがあるのか、ミランダが尋ねると割合すんなり答えてくれるが、僕らが話しかけると全く最初と進歩が無い状態。

しかも、本当にこの辺のことしか知らないらしく、推測される家庭環境もあつて込み入った話も聞けず、話は次第にミランダの話題が多くなっていく。

「さっきの刺繍を見せてくれない？」

話の中でディアン又が言い出した。

恥ずかしいから、とミランダは断ったが、さっきは見えなかったからと再びお願いされると、ミランダは、本当に下手っぴだからね、と言ってから渡した。



「素敵ね」

一見したディアン又はそう言い、並ぶ花一つ一つの名前を挙げていく。

ミランダは、お世辞は良いわよ、と言いつつ照れ隠しなのか挙げられた花一つ一つが何処に生えているのかを話し出した。

ふいにラッセルが立ち上がる。

ミランダが、どうしたのか尋ねた。

「ちよつと外行ってくる。こんな時間に出掛けたことなんて無かったからな、見ときたいんだ」

ミランダ達はそのまま話してて良いから、と言いつつ残り、危ないわよ、というミランダの言葉に、少し見ただけだよ、と扉に向かう。

「僕も興味ある」

ラッセルの後を追った。

家の前の開けた部分は水の代わりに光が溜まった湖のようになっていた。

風によって動く木々の影が水面の揺らめきを作り、転がる石が光を反射する。

湖を縁取る林の間に差し込む光は湖から生まれた川のように、湖の淵では2頭の馬が身を寄せあつて眠っていた。

ラッセルと僕は黙ってその光景を見ている。

「心せめえなあ」

ラッセルは独り言のつもりだったのだろうが、湖畔が静かなせいで僕の耳にも届いた。

「何が」

つい尋ねた。

ラッセルもつい出てしまった言葉らしく、驚いていたが、言葉を選ぶように話し出す。

「さつき、ミランダがディアンさんに刺繍を見せた時さ、つい文句を言いそうになつたんだよな」

ミランダには言いなよ、と慌てて付け足す。

僕が、言わないよと言うと

「デーメーテルさんに言った、ミランダがやりたいこと見つかって良かったってのは嘘じゃないんだせ」

ラッセルは、嘘じゃないんだけどな、と繰り返す。

「デーメーテルさん言っただろう、ミランダのわがままで俺らが死にかけてたって。それがさ、なんかひっかかるっーかさ」

一旦そこで言葉をきって、掌を僕に見せる。

微かに震えていた。

「思い出しただけでこんなんだぜ。ミランダを責めるつもりは無いけどよ、口が勝手に言いそうになるんだよ。情けねーな」

自虐的に言った。

「そんなことないよ」

僕も掌を見せた。

あの白いのを思い出しながら出した掌は勝手に震えだす。言わないけども掌だけでなく足まで震えている。

「僕だって、ミランダのしたことを全部許せるかって聞かれたら、出来ない。だから、僕も出てきたんだもん」

ミランダの刺繍に価値が無いのは僕だって分かる。

まだ、ミランダやナージエ、ジエーンの為だったと思えば抑えられるけど、あれの為だったと思うとモヤモヤした気持ちになる。

ミランダに謝られ、気にしないで、とは言ったものの、ミランダが気にしているのは一目瞭然なので、何も言えないし、一言言えばズルズルと続いてしまいそうな気がした。

ただ、モヤモヤ全てがミランダに向けられたものでは無かった。

「でも、悔しいなあ」

「何がよ」

「あの、白いのが、さ」

もし事前に知っていたら、何か準備していたら、あんな風にならないように出来たんじゃないだろうか。

「あんなん、知ってたとしてもどーしようも無いだろ」  
ラッセルはそう言うけど

「母さんなら、なんとかしたと思うんだよね」

「ラカスの母ちゃんがか？」

僕は頷く。

母親は若い頃、中央で人や物を運ぶ仕事をしてたとロウやラウザから聞いたし、ジャンヌ達とも色んなところへ行っていたと聞いた。

全てが順風満帆では無かったようだし、今回の僕達みたいに知らない場所に行くこともあつたはず。

「力が欲しいなあ」

単純な腕力、必要な情報を集められるだけのツテや資金、経験など何があれば今回のような目に会わなかったかのか。

それすらも僕には分からない。

「正直、甘く考えてた。少し馬に乗れるからって、それでどうにかなると思ってた」

今回は偶然だったと、痛いくらいに解っていた。

「それを言ったら俺だってそうさ。父ちゃんが言ってた。男なら、できねえなんて口にすんなって。俺も甘く考えてたんだよね。少し知ってるって、知ってるの内に入らないんだよね」

「ごめんな、と僕に。」

「できねえって言うべきだったんだよね。俺は、まだそんなこと考えなくても良かったんだよね。そのせいでお前ばかりよ」

「良いよ」

お互い様だよ、とは言えなかった。

その言葉は僕らの決意を馬鹿にするような言葉だった。

「早く大人になりてえよな」

「なれるよ。僕らなら、きつと」

勝負だな、と静かにハイタッチを交わすと、綺麗な音が天に昇った。

「そういえば、ジュネさんって誰？」

「お前覚えてねえの？去年ずっとお前んちに来て、お前の病気も見てもらってたろ」

「…思い出せない」

「まあ、お前、なんかずっと体調悪そうだったからな。俺も風邪の時の記憶ってあんまり無いし」

「…そうなものかなあ」

## 今はまだ（後書き）

気分転換にパソコンで打ってみたので、ついでに文頭下げ（っていうのかしら？）をしてみました。

携帯だと改行と見分けつき辛い為に確認が面倒臭いので、携帯の時はやりたくないのですが。

一応、ミランダの行為に対して憎々しい部分もあるよ、と。そんな感じで。

読んで頂いたことに感謝

## 夢の隙間

目の前に祖母がいた。

「さて、お掃除をするから手伝っておくれ」  
突然の言葉に、勢いで頷いてしまった。

周囲を見渡せばそこは僕の家で、いつも食事をとる部屋があった。一体なんなんだろうと思っていると、祖母の、すごいすごい、と声。祖母の視線を追うと、柵の中で掴まり立ちをしている赤ん坊がいる。それが、まだ満足に歩けない頃のナージェだと気付いた時、なんだ夢かと納得。

納得すると、頭の中に眠る前のやりとりが思い出されてきた。

僕とラッセルが室内に戻った時、ミランダとディアンヌはずっと2人で話していたようで弾む声が絶えず、ディアンヌの表情は出る前と全然違う。

2人はまるで以前からの友達のように見えた。

ミランダすげーな、とラッセル。

僕も同意した。

打って変わってナージェとジェーンは眠たげに目を擦りだしていて、船を漕ぎかけていた。

そんな状態の2人に、もう寝たらと言ってみても2人は首を横に振る。

僕らが起きてるから自分達もまだ起きてるの、だそうだ。

僕とラッセルは、どうする？と顔を見合わせた。

僕らはもう寝ても構わないし、そう言われると眠いような気もしてきたのだけど、問題はミランダとディアンヌをどうやって止めようかということ。

僕もラッセルもそういう女性同士の会話に割って入るのが苦手な上に、初対面のディアンヌに気を使ってしまい、気が引けた。

困っている、見かねたデーメーターが僕らの代わりにディアン  
又にもう寝るように促してくれた。

その後、ナージェとジェーンはデーメーターのベッド、ミランダ  
はディアン又のベッド、僕らは床の布団へ。  
多分あつという間に寝てしまった気がする。

「ラカス？」

呼ばれ、はっと我に返ると、祖母が開いた扉から半分体をだした体  
勢で僕を見ていた。

「どうしたんだい？ボーンとして」

なんでもないと答えて祖母の後を追おうと歩き出すと、祖母が扉の  
向こうに姿を隠した、その時

「あら、お出かけですか？」

「ええ、ちよつと見て回ろうかと」

祖母と誰かの会話が聞こえた。

玄関のところにお客さんがいたらしい。

そういうこと自体はたまにあることなんだけど、何故かお客さんの  
声を聞いた胸の内がもぞりと動いた。

僕はその声を聞いたことがあるような気がした。  
だけど、とっさに誰とは出てこない。

無性に気になり、若干早足になりながら出入口口に向かう。

出入口口から祖母の後ろ姿が見え、声の主を見ようと祖母の横へと  
部屋を出た。

「ラカス、もう歩いて大丈夫なのかい？」

廊下の向こう側には祖母が居た。

慌てて横を見ると、本来祖母がいるはずの空間には何も無い。

今出た部屋を見ると、そこは食事をとる部屋ではなく、寝室だった。

「にーに、めーよ」

祖母の後ろから、トコトコと歩くナージェが姿を見せる。

「えっ？」

つい声が出た。

急に時間が飛んことに気付いた。

どうなってるんだらうと、扉や自分の体を触ったりしている

「ほら、ナージエも心配してるから、無理しちゃ駄目よ」

祖母に言われてひとまず、うん、と頷こうと考えた。

「っをするから手伝っておくれ」

「うん」

今度は急に目の前に大きくなった祖母がいた。

僕は驚き、しりもちをつきそうになる。

周囲を見ると、食事をとる部屋。

再びの出来事に思わず、えー、と今度は割りと大きい声が出た。

にも関わらず、祖母はそんな僕の声が全く聞こえていないみたいに扉の前に置かれた洗いや入れの籠と掃除道具に向かって歩き出し、途中で掴まり立ちのナージエを褒めた。

そのやりとりを見て、二つ前と同じシーンだと理解する。

すると、急に何よりも先に玄関にいた人を知りたくて仕方なくなってきた。

直ぐに祖母の姿を確認すると、もう扉から出ようとしている。

慌てて後を追いかけて、扉から出た。

「ラカス、もう歩いて大丈夫なのかい？」

廊下の向こうには祖母。

やっぱり横にいたはずの祖母がいない。

そして、出てきた部屋もやっぱり寝室に変わっていた。

「にーに、めーよ」

夢ながら、全く腑に落ちない。

なんなんだ。

「ほら、ナージエも心配してるから、手伝っておくれ」

また、目の前に大きな祖母が現れた。

瞬きのような瞬間に全てが変わった。

今度は驚き過ぎて声も出なかったのだけど、まるで僕が返事を返し



たかのように祖母は受け取り踵を返す。

頭は既に混乱している。

なんて質の悪い夢なんだ。

直ぐに部屋を出なさい、そして玄関にいる人物を見るの、そうすれば終わるわ。

そう、耳元で誰かが囁いた気がした。

僕は扉を目指して走った。

普段なら室内で走ると祖母は注意するのだけど、ナージエを褒めていてこつちをまるで見ない。

その横をすり抜け、扉を開けて、部屋を出る。

祖母は居なかった。

玄関に1人、金髪の女性がいた。

後ろ姿なので顔はわからないが、背格好からして20代だろうか、

僕の住む町ではまず見かけない高そうな服を着ていて、手に小さな鞆を持っている。

女性は玄関前のホールを横切り、外に出ようとしていた。

「あの」

自分では結構大きな声を出したつもりなんだけど、金髪の女性に聞こえた様子は無い。

もう一度、そう考えた時

「あら、お出かけですか？」

いつの間にか、僕の後ろから籠と掃除道具を持った祖母が話しかけた。

遥かに僕より小さい声なのに、祖母の声は女性に届いたようで、女性も玄関の扉の取っ手に手を添えたまま、身体を開くようにこつちをむこうとした。

ブチン、という何かが千切れるような音が響き、布に描かれた絵を吊るしていた糸が切れたみたい目の前の光景が落とされた。

全ては目に見えないほどの厚さになってしまい、残されたのは真っ暗で何処までも続きそうな平らな地面に立つ僕だけだった。

いや、違う。

すごく薄いけど、僕の足元から影が伸びていた。振り返ると、僕の身長くらいありそうな角の丸まったひし形をした赤いものが僕の胸のあたりの高さから浮んでいる。

赤いものはキラキラしていてまるで宝石のようだった。

でも、その表面には血管のようなものが浮き出っていて、絶えず一定のリズムで蠢いている。

不思議と、気持ち悪いとは思わなかった。

それよりも赤いものを見てみると、親しみや愛しいという温かい気持ち湧いてきた。

その赤いものの傍には僕の胴体くらいありそうな木の幹みたいなものがいくつも転がっていたので、その一つに腰を下ろして赤いものを眺めることにする。

近くに寄ると、とても小さいけど赤いものが動く度に鼓動のような音がしていた。

目を閉じて、鼓動を聞いているとその音はまるで心臓の音のように思え、ふいに昔祖母に抱かれたまま眠った時を思い出す。

赤いものの鼓動が僕の心臓の音に重なり、見えない管で繋がっているように思えた時だった。

微かに地面が揺れている気がした。

目を開けると、僕の目の前で僕が腰掛けていている程の太さもある木の根っこがその身を揺すりながら地面から生えてきていた。

僕の目の前だけでなく、赤いものを取り囲むようにして10本、それ以上の根っこが天に向かって伸びている。

それぞれの根っこが赤いものの天辺に届くぐらいの長さになると、根っこの先を赤いものに向け一斉に赤いものに巻きつき、絞め上げ始めた。

赤いものの絞められていない部分が膨れ、血管がよりはっきりと浮かび上がる。

それを見た瞬間、僕は目の前の根っこに飛びついていた。

足で根っこにしがみ付きながら根っこを赤いものから剥がそうと力一杯引つ張る。

根っこはビクともしない。

むしろ僕のほうが引つ張られているくらい。

そもそも10本以上ある根っこは赤いものにそれぞれが絡みつくようにしているから、僕がどんなに引つ張ろうが意味の無いことは解っていた。

でも、赤いものが絞めつけられることは僕の心臓が絞めつけられることと同じだと思った。

「やめろ」

両手を重ね合わせて根っこに振り下ろす。

根っここの表面はざらざらとささくれ立っていて叩いた僕の手の方が皮が擦り剥けた。

それでも何度も叩く。

なにかが飛び散った気がして、手を見てみると細かい切り傷がいくつも出来ていてそこから血が流れていた。

それでも叩き続けた。

一層膨れ上がりそれまで見えなかった細い血管まで浮き上がりだした赤いものの為に来るのはこんなことしかなかった。

手の感覚が無くなった頃、急に赤いものが光りだした。

赤いものが一回鼓動を打つたびに光は強くなり、みしみしという音がする。

何度か繰り返された後、バチンという音がして絞め上げていた根っこがちぎれ飛ぶ。

僕も一緒に飛ばされた。

きゃあ、という女性の悲鳴の様なものが聞こえた瞬間、目が開いた感触がした。

星空と空にレースのような影がかかっているのが見えた。

しっかりと地面に足を付けているような感覚を感じ、それまで見ていたものが夢であり、目が覚めたんだと理解した。

「大丈夫？」

ふいに声が聞こえた。

起き上がるのと体を起こそうとしても持ち上がらない。

それでも顔だけが持ち上がり、すぐ傍に2人しゃがみ込んでいるのが見えた。

僕に背を向けている一人が、その向こうでしりもちをついたらしいもう1人を気遣っている。

「誰？」

僕の問いかけに、手前の1人が振り返った。

デーメーターだった。

「あら、起きてしまったの？」

その時になって僕は自分の置かれた状態を知った。

僕は頭だけ出された状態で地面に埋められている。

しかも、指先から肩までと足の先から太ももまでに何かが巻きついているような感触があり、無理やり引つ張ろうとすると巻きついてあるものが食い込み痺れるように痛む。

事情を聞こうとデーメーターを見ようとした瞬間、頭を掴まれた。

デーメーターの顔がすぐ間近にあった。

「大きな声を出さないで頂戴ね」

視界の上の方に金色の光が見える。

僕の頭を掴んでいる手が光っているのだと思う。

「頭をぐちゃぐちゃにされたくないでしょう？それに貴方のお友達もね」

デーメーターによって向けられた先には、寝た時と同じ位置でラッセルとミランダ、ナージエとジェーンが僕と同じように頭だけ出された形で埋められていた。

それ以外の違いといえば、デーメーターとディアンヌが僕の前にいること。

「貴方は私の聞いたことに答えれば良いの」

分かるわね？との問いに首を縦に振って応じた。

いい子ね、とデーメーターは言いつつも手は離してくれない。  
ただ、ほんのわずか笑った。

## 夢の隙間（後書き）

たまたま見た某スレで知ったのですが、『起きてしまったので』はゼロ魔の平民ものというジャンルの先駆けらしいですよ。

まあ、大きいところでつて話でしょうけど。

にしても、これでゼロ魔SS書きの1人としての仕事は十分にしたんではないかと思えます。

なんで、これからの平民ものの行方は他の人に任せて、私は好き勝手やっていこうかと。

ってことで、今回の話です。

何も無く終わらないだろうと皆様思っただろうし。

ただ、こういう展開ってどうやれば良いのか分からず無理矢理振り切った感があります…。

どうやれば良いんでしょうね？

分かる方が入れば是非助言下さい。

では

読んで頂いたことに感謝

## なじみ

デーメーターは笑った後にようやく手を離してくれど、その手を服のポケットに入れた。

「チャラ、と金属が擦れる音がして

「これは何処で手に入れた？」

目の前に出された手にはペンダントがぶら下がっていた。直ぐに、それは僕がいつも着けているものだど気付く。

「返せ」

つい、奪い返そうと右手を引っ張ってしまい、巻き付いているものがより一層食い込んだ。

「質問に答えなさい。貴方はこのペンダントを何処で手に入れたの？」

デーメーターは恐い程の真剣な顔をしている。その迫力に押されそうになった。

それを隠す為に強く

「それは、うちに代々伝わってきたものだ」

だから僕のものだ、と言いつ返す。

すると、デーメーターは、何、と眉をしかめる。

直ぐさま落ち着きを取り戻すと今度は尋ねるように聞いてきた。

「貴方は貴族というものではないみたいだけど」

デーメーターの中で何があつたかは分からないが、さっきみたいに脅すような口調では無くなったので、僕も戸惑いながらも普通に聞かれたことに答える。

「昔はそうだった、とは聞いてるけど」

たしか祖母がそう言っていた気がする。

「そういえば、貴方、ラカスって呼ばれていたわね」

何か一つ一つ確かめるような様子のデーメーターに、僕の名前だけど、と。

「それは、何か意味があるのかしら？」

「貴族だった頃の初代の人の名前だ、とは」

これも昔祖母から言われた気がする。

「ああ」

デーメーターが嗚咽のような声を上げた。

「貴方、男よね」

突然あさつての方向の質問に、うん、と答える。

デーメーターは信じられないとばかりに口を押さえ、短い単語を言った。

聞いたことの無い単語と発音で、何を言っているかは分からなかった。

デーメーターは何か思いに浸っているのか考え込むようにし、しばらくそうしていた。

「貴方に聞きたいことがあるの」

顔を上げたデーメーターの口調は一転して気落ちしたように暗い。何？と聞き返すと、ペンダントを見せられ

「割れた後があるわね。いつ割れたのか分かるかしら？」

これも、祖母から聞いた覚えがある。

僕が去年大病をした際、快方に向かった時に割れたそうさ。

実際僕は生死の堺をさまよったそうだし、祖母は僕の代わりになっ  
てくれたと言っていた。

迷信染みた考えだとは思うけど僕もそんな気がして、ラッセルの  
ところで直してもらった後もずっと身に着けていた。

「その時、あの女が来たのね」

僕への質問ではなく、自分に言い聞かせるようなデーメーターの  
言葉は恨みとか怒り、そういうものに包まれているように感じた。

「あの女？」

「ジユヌヴィエーヴなんとかっていう小賢しい吸血鬼よ。貴方達が  
ジユネと呼んでいた人物」

また、その人か。



思い詰めるようなデーメーテールの顔を見ながら記憶を探っても、ラッセルと話したときのようにそんな人物は出てこない。

「そうでしょうね。貴方、その前後からの記憶が消されているもの。デーメーテールの言葉は、僕に一定の驚きを与えたが、やっぱりという思いもあった。」

さっき見た夢は薄々僕自身の記憶のような気がしていた。

あの飛んだ時間が消された時間なんだろう。

でも、何故？と考えていると

「それと、言っておくけど、貴方の心臓は殆ど止まっているわ」

最初、何を言われたのか分からなかった。

ジワジワと言われたことを理解し

「嘘でしょ」

信じられる訳ない。

だって、僕はこうやって生きてるわけだし。

「本当よ。生きていられるのは、心臓の代わりが動いているから」

そう言われて、ふいに夢に出てきたものが浮かぶ。

「赤い石みたいなやつのこと？」

デーメーテールは少し驚いた顔をする。

「何故知ってるの？貴方の記憶には無いはずよ」

僕はさつき夢に出てきたことを話し、それが何なのか尋ねた。

「自然が作った魔力を含んだ石。以前、人間は賢者の石と呼んでいたわね」

つまらなそうに教えられた。

なんで、そんな凄そうなものが僕の中にあるんだろうか。

「あの吸血鬼に決まっているわ。あの女が」例の知らない単語「の石を勝手に使ったのよ」

知らない単語は文脈からして人名らしい。

「今から返すことって出来たりしない？」

「もう手遅れよ。その石が無ければ生きていないわ」

それに、と

「石は貴方の心臓となっているのよ。貴方からその石を出すとしたら心臓を取り出すことになるのだけど」

急いで僕は首を横に振った。

流石にそれはあんまりにもの話だ。

しかし、デーメーテルは既に僕を見ておらず、顔を背けるように俯き髪の毛によって表情が隠されていた。

「あの女がやったのよ。そうに決まっているわ」

そのようなことを呪詛の言葉のように繰り返していた。

繰り返される言葉は段々早くなっていき、ある一点をピークに急に遅くなった。

「何故、貴女は人間なんかのために」

そう言った瞬間、髪の毛で隠されていた顔から月の光を反射するものが音も無く落ちた。

「きつと、自分の選択を悔やんだに違いないわ」

肩が小刻みに震え出していた。

「していないと思うよ」

僕はそう口にしていた。

その、僕に石をくれた人のことは分からないけど、きつと後悔はしなかったと思う。

どうしてあの時、石に巻きついた根っこが許せなかったのか、今、冷静になってみて分かった。

あの石を見ていた時に感じた居心地の良さは、祖母とか母親とか、それこそ祖父、父親が僕に愛情を向けてくれた時のくすぐったいような気持ちの時に似ていた。

そう考えると、僕があ石に好意を抱くのは当然であり自然なことだった。

だからこそ、それを苦しめるような根っこが許せなかったし、あれだけ必死に叩き続けた。

デーメーテルの言う後悔とか恨みが欠片でも存在したなら、あの石はあんなに優しくはなかったと思う。

きつと、後悔なんてしてなかった。

「ただ与えられただけの人間が、自分に都合の良い言葉を口にしないで」

濡れた瞳で僕を睨むデーメーテルの言うことはもつともだった。石をくれた人物は、話を聞く限りではもう亡くなっているのだと思う。

それにひきかえ僕はこうして生きている。

いくらでも僕は都合の良い言葉を言うことが出来た。

でも、僕は自分でも不思議なほど、その『女の』人が後悔していたなんて認めたくなかった。

「絶対にその人は後悔なんてしてなかった」

「黙りなさい」

デーメーテルは再び僕の頭を掴んだ。

「一度でもその口を開いてごらんなさい。その瞬間に頭を肉片にしてあげるわ」

「何度でも言つてやる。絶対に後悔なんてしていない」

恐怖は頭に無かった。

この、とデーメーテルが言いかけたのに被せて怒鳴った。

「それに、あの人を選んだことを後悔するしないなんてもので片付けるな」

何かを選んで全く後悔しない人なんていない。

何を選んでも、きつと誰でも多少しくらいは後悔をするはずだ。

だけど、後悔とかそんな後ろ向きな考えの及ばない前向きな力もあることを僕は知っている。

改めてその力に対して、やっぱり後悔したはずだ、なんて言いたくなかった。

デーメーテルも怒鳴り返してきた。

「彼女を知りもしない貴方が、どうしてそんなことが言えるの」

お互いが怒鳴りあい、荒れた息を整える為に少し間が空いた。

その間に、自分と相手の言ったことを思い返すと

「え？」

僕とデーメーターの声が重なった。

「ちよつと待ちなさい。貴方、今なんて言ったの？」

デーメーターの質問は僕が自分に対して疑問に思ったことと一緒にだった。

知らぬ間に僕の中に1人の人物が浮んでいた。

記憶を消されているせいか、顔は全く浮ばないけど、胸を張っている小柄で金色の髪を持つ、さつき夢の中に出てきた金髪の女性とは違う人だった。

その特徴を言うと、デーメーターはその人が石の持ち主だと言う。

「彼女に会ったことあるの？」

「あるような気がするけど」

「けど？」

必死に霞みそうになるその人のことを思い出そうとする。

だけど、何故かそうすればそうするほど、胸が締め付けられるような気持ちになり、涙が溢れそうになる。

「なんでだろう。その人のことを思い出そうとすると悲しくてしょうがない気持ちになる」

それを聞いたデーメーターの手が頭から外れ、溢れて零れた僕の涙を拭った。

「彼女らしいわね」

ぼつりとデーメーター。

そして改めて、僕に向かい

「謝るわ。彼女は勝手に決められたんじゃないかった。彼女は彼女の判断で貴方に石を与えたのだとしたら、私だって後悔したただなんて言いたくないもの」

「ちよつと待つて」

1人で分かれて、いきなり謝られても困る。

説明を求めると、デーメーターは自分の考えを纏めるように話し出した。

「今まで私は、吸血鬼がなんらかの方法で勝手にペンダントから石を抜き取り貴方に与えたのだと思っていました。と言うのも、彼女が外と会話できないと言っていたのと、時が流れるにつれて外との意思の疎通が難しくなっているようだったし、てっきりもうそんなことは出来なくなっていると思ったの。でも、貴方の話を聞くとそうじゃなかった」

多分だけと、一旦前置き。

「吸血鬼がなんらかのちよっかいを出して、なんらかの形で貴方と彼女が会うことが出来た。吸血鬼が絡んでいるのは間違い無いと思うわ。アレが気付かないはずないもの。もしかしたら大病したというのにも絡んでいるかもしれないわね。いえ、おそらく絡んでるでしょうね。それがちよっかいかもしれない。それによって結果的に貴方へ彼女が石を渡す破目になった」

「つまりは、どういうこと？」

あまりに早口な上に、途中気になることがあつて話が追えなかった。

「つまり、全ての原因は吸血鬼で、貴方の記憶を消したのは彼女、」その後、また知らない単語を言う。

一体その単語はなんなんだろうと思ひ眉を顰めると、デーマーテルはそれに気付いたようで

「ああ、確か、人の姿をしていた時は、ウラと名乗っていたわね」その名前を聞いた瞬間、聞いた覚えは無いのに寂しいような悲しいような感情が湧く。

しかし、それ以上に

「人の姿をしていた時？」

そっちの方が気になった。

「ええ、彼女は元々竜だもの」

デーマーテルは当たり前のごとくのように。

竜というのも驚くけど、それを普通のごとくのように言うデーマーテルも、さっきの彼女が言っていたとか、時が流れるにつれとか、まるでずっと見ていたみたいと話していた。

「もしかして、デーメーターさんって？」

尋ねると、ああ、とデーメーターも今気付いたよう度。

「そうよ、私は人間じゃないわ。ハマドリユアス、貴方達が探していた柏の樹の妖精。そして貴方に石を与えたウラの古い友人よ」

こともなげに言われた言葉に、僕は呆気にとられ、驚くことさえ出来なかった。

## なじみ（後書き）

なんか、上手く纏まらないです。

一人称の限界を感じます。

そして、携帯打ちの限界も。

ウラという名前はドイツのホフマンという人の『ファルンの鉱山』の登場人物です。

結婚の日に死に別れた夫を50年待っていて50年目の結婚の日に出会えたという女性の名前です。

そういう話がハルケギニアにあって、理想的な誠実な女性像として受け止められていたのを、ジャックがウラの本名が上手く言えないので、そう呼んでるという設定です。

ウラはその話が気にいったのと、ジャックが呼んでくれればそれで良いという感じ。

賢者の石は実際に手に入れたという14世紀のニコラ・フラメルという人曰く、赤かったそうなので。

ちなみにヴィーヴルの石はガーネットですけど、まあ同じ赤なので勘弁して下さい。

読んで頂いたことに感謝

らしい

突然の自己紹介に驚く僕を余所に、デーメーターは近くでしゃがんだまま黙って僕らのやりとりを見ていたディアンヌに向かって何か言った。

ディアンヌは頷き、地面に向かって話しかけるように囁く。すると、まるで囁きに従ったかのように僕に巻きついてきたものがスルスルと外れ、覆っていた土が勝手に割れる。

寝そべったままの僕の服の隙間からも転がるように土の粒が出て行き、多少土の匂いのようなものがするが殆ど汚れていない。

「起きなさい、少し話しておきたいことがあるわ」と、デーメーター。

ディアンヌが再び地面に話しかけると、少し離れたところから太い根っこが伸び、絡まりあってテーブルを作る。

その周りにUの字形に根っこが丸まって背もたれの無い椅子が三つ座るように促されたが、その前にディアンヌにラッセルとミランダを解放して欲しいと頼んでみる。

「心配いらないわ」

答えたのは、いつの間にかお茶のセットを乗せたお盆を持つデーメーターだった。

デーメーター曰く、短時間で疲れが取れるように大地の力を借りているらしい。

「それと、彼らは手足を縛り上げていないしね」

根っこが巻きつけられていたのは、僕だけだったみたいだ。

変な吸血鬼に細工されているかも知れなかったからね、との理由がらしい。

まあ、ひとまず安心していいのかな、と考えつつ、席に座り、デーメーターからカップを受け取る。

相変わらずというのか、ディアンヌは僕をチラチラと見るだけで話



しかけてこようともしない。

クツションになつていたミランダがいないせいで、さっきよりも及び腰みたくなつていた。

「話つていうのはね、あのお嬢ちゃんが言つていたでしょう、今日みたいな月の交差する夜は妖精に会いやすいって」

埋められたままのミランダを指差してデーメーターが話す。

月が交差した夜に妖精に会いやすいのは、その夜は全ての生き物がいつもより敏感になるからだ。

「実は、貴方達が林に足を踏み入れた時点から貴方達に気付いていたわ」

僕は初めて聞く話に頷きながら聞いていた。

「ただ、問題なのは気付いたのが私達だけじゃないってこと」

一拍の間をおき、他に誰がいるというのかと考える僕に

「この辺一带に棲む動物達も気付いたのよ。言つたでしょう？全ての動物達が敏感になるって」

そう言うと、デーメーターは僕のペンダントをテーブルの上に置き、僕の心臓を指差す。

「それと、貴方の中にある石ね。今は制限がかかっているけど、本来は竜が持っているものよ。よりよつてこんな夜じゃ、何か変な物が来たつて気付かないほうがおかしいわ」

「制限？」

出てきた単語に自分の心臓を見してみる。

「本当なら、この規模の林ならすぐに焼き尽くすことだつて出来るのよ。今は蠟燭の火しか出せないみたいだけどね」

それすらも体に影響が出るみたいだし、と言われて、僕の中に疑問。何故、デーメーターは僕が火を出したことを知っているのだろうか？

でもしかし、妖精なんだからどつかから見る事が出来たのかと考えていると

「あの子はすぐに気付いたわよ」

デーメーターのクスリという笑い声。

「あの子？」

尋ねるとデーメーターは、ラッセル達の更に向こうを指差した。木々が重なり合う向こうにびよこびよこと動く影が見えた。

良く見ると、僕の馬と母親馬。

2頭は木の陰から首を出したり引つ込めたりしながらこつちの様子を窺っているみたいだった。

僕はてっきりデーメーターを警戒しているのだと思った。

「私は彼らには何もしないわ」

そう言いながらデーメーターはテーブルの上に握りこぶしを置いた。

ひっくり返して開くと、一枚の葉っぱが乗っている。

デーメーターは息を吹きかけると、葉っぱは金色を纏い浮かび上がった。

テーブルから離れたところに葉っぱは流れ、ぴたりと中空に止まるやいなや光が強くなり、金色の塊のようになる。

それがまるで練られた小麦粉を伸ばすみたいに、決められた輪郭に沿うように広がっていく。

広がった先達が一点に集まると弾ける様に光り、残ったのは銀色の毛並み。

途端、吼えられ、僕は椅子から落ちた。

出てきたのはあの白いのだった。

「やめなさい」

今にも飛び掛つてきそうな鼻先に焦げ跡が白いのが、デーメーターの声にびたりと動くのを止めた。

「何故、あの子たちがこつちに来ないか分かったかしら？」

僕にそう言いつつ、焦げ跡がある方を手招きで呼び、近寄ってきた白いのを右手で撫で回しながら金色に光る左手で鼻先を撫でると焦げ跡が消えた。

「ありがとう、大変だったわね」

そう言いながら頭を撫でると、白いのは僕を睨みながらさつきと逆の手順でデーメーテルの掌に戻る。

「デーメーテルさんのだったんですか？」

抜けた腰をテーブルに掴まりながら椅子に戻る。

「そうよ」

と、簡単に答えられた。

別に嫌味を言いたいわけじゃないけど、僕とラッセル、特に僕は白いの達によって死にかけたただけども。

「ええ、殺しかけるつもりだったわ」

なんでもないことのように言われた。

デーメーテルの考えていたのは、こうだ。

まず僕等を白いの達に襲わさせて瀕死の状態にする。

そうした後で、僕が何者か調べ、大したことが無いようなら傷を治して記憶を消し、林の外の近くの村にでも放置する予定だったそう  
だ。

記憶を消すなんて冗談みたいな話だけど、実際僕自身消されているのでリアリティがあった。

そして、記憶を消しても襲われた記憶が全部無くなるわけじゃないらしい。

記憶の深い部分で襲われた恐怖感はずえ、林に入ることに対して恐怖だけは抱き続けるようにする。

その恐怖が強ければ強いほど消えずに残り続けるそうだ。

「貴方もそうでしょう？記憶は消されてるはずなのに、貴方はウラのことを完全に忘れたわけじゃない」

何故そうするかと言うと、二度と軽々しく林に入らないようにするのと

「私がそうしなかったら、貴方達、他の動物達に襲われてあつという間に死んでたわよ」

だ、そうだ。

「助けてくれたんですか？」

「少し違いわね。貴方達が死んだら人間は林に火を放ち、動物達を狩るでしょう」

別に助けるつもりではなく、単に都合があっただけらしい。

「でも、貴方の石がなかったら気付くのはもう少し遅れたでしょうから、結果的には助けたことになるのかしら」

運が良かったのは、僕とラッセルがミランダ達を逃がしたことと、白いのの鼻先を焦がしたこと。

幾ら敏感になる夜とはいえ、広い林の中で僕のような変わった存在ではない単なる人間の気配を追うのはデーメーターでも容易なことではなかった。

仕方なくデーメーターはミランダ達を回収した。

それと、僕が鼻先を焦がしてしまったせいで怒ったあの白いのが時間をかけてじわじわと僕を追い込んでくれたお陰で、デーメーターの待ての合図が間に合った。

結構ギリギリだったのだと話を聞いて知った。  
でも、と僕。

「よく、僕らを助けてくれましたね」

デーメーターの話の聞いてみると、仕方ないのかもしれないけど、僕等の優先順位は低そうだ。

白いのを止める必要性は無かったと思う。

「あら、助けなかった方が良かったかしら？」

慌てて首を横に振り、感謝していません、と頭を下げた。

そんな僕にデーメーターは苦笑いを浮かべ、先と同じように握り拳をテーブルの上に置いた。

また白いのか、と身構える僕の予想とは違い、掌にあったのは二つの摘まれた花だった。

随分と乱暴に扱われたみたいで茎は何箇所も折れ、花弁は何枚か無くなっていた。

その花に見覚えがあった。

ここに来るまでの道中に僕が摘んで、小さな2人に渡した花に似て

いた。

「そうよ、とデーメーターが肯定する。」

「ナージエ、それとジェーンと言ったかしら。あの子達がね、私に会った途端これを渡してきて言ったのよ。それぞれのお兄ちゃんを助けて欲しいって」

「そう言うつと、またその花に息を吹きかけた。」

「花は金色に包まれ、みるみる小さくなり二粒の種子になった。」

「お嬢ちゃんが言っていたでしょう？妖精にお願いするには花を贈るのが決まりだって」

「もつとも、と続けて」

「断ることも出来るんだけど、私は受け取ってしまったからね。仕方ないわ」

「ふふつ、とデーメーターが笑う。」

「自分達が持つている一番大切なものだったんでしょね」

「僕は降参するほか無い。」

「邪魔に思っていた二人に命を救われたわけだ。」

「それと、あの子にも感謝することね」

「そう言うつて、デーメーターは僕の馬を示す。」

「おちびちゃん達に頼まれて、貴方達2人を助けるとは答えただけど、貴方だけは別だったわ。貴方だけはしばらく動けない状態にするつもりだった」

「そうデーメーターは言うけど、僕も寸でのところながら無事だった。」

「あの子、迷うことなく私を乗せて貴方のところに向かおうとした。馬には戦う為の牙も爪も無い。鳥の様に羽があるわけじゃない。それなのに、自分よりはるかに強い生き物のいる場所に向かうなんて、どれだけ貴方を助けたかつたのかしらね」

「ふうとデーメーターは溜息を一つ。」

「少し、嫉妬したわ」

結局その場で動けなくするのを止めて、デーメーターは貴族を装

い僕等を泊め、疲れを取ってくれる代わりに皆の記憶を読んだ。馬達だけはそうはせず、会話によって僕のことを聞き出したと話した。

そして、さっきの僕との会話と僕等の記憶を見たこと、馬達との話によって分かったこととして

「貴方の記憶は吸血鬼を見た時から、貴方が火を出した時までが消されている。多分だけど、記憶に一番近い魔法を起点にして、ウラに魔法を使えるとも言われて試しに使った。そこを終点にして消すように予め決められていたんでしようね」  
そう言われた。

そうなんですか、としか言えなかった。

「その石自体、人間にとつたら珍しい物だからね。忘れた方が良く考えたんでしよう」

デーメーテルの言ったことは確かにそうだろうなと思った。

石自体の価値は僕自身もまだ良く分かっていないけど、けして人に言いふらして良いものだとは思えない。

でも、とデーメーテル。

「言わないでおく危険性を考えなかったのね」  
と溜息。

そして、どこか抜けてるあの子らしいわ、と思いつくように呟いた。

らしい(後書き)

ナージエとジエーンの花の伏線がさり気なさ過ぎた気がしますね。  
反省

ウラ達が魔法使えると言ったのはそういうことでした。  
感想で、チート過ぎるみたいな意見が来ましたが、その時点でネタ  
バレしたくなかったので言いませんでした。  
申し訳ありません。

誤字チエックは後日に。

読んで頂いたことに感謝

## 平民

デーメーターは柔らかい表情を見せた後、ちらりと僕を見てからディアンヌの名を呼んだ。

「ちよつと結界を張ってきてちよつだい」

言われたディアンヌは目を軽く見開き驚きを表しつつも頷き、席を立った。

それに合わせるようにデーメーターも席を立つ。

僕も雰囲気で腰を浮かすと

「貴方はそのまま良いわ」と言われた。

少しの間、一人で居心地悪く待っているとデーメーターだけが手に瓶とグラスを二つ持って戻ってきた。

「動物達から分けてもらった果実酒よ」

冬にむけて動物達が木の窪み等に蓄えておいた木の実が発酵したものだと言われた。

そんなもの飲めるんだろうかと思っただが、この辺の人間達も稀に見つけると喜んで飲んでいるから大丈夫だろうと言われる。

グラスに赤紫色の液体が注がれ、僕の前に置かれた。

見慣れない飲み物を様々な角度から眺めると、とろりとした色の中に大小様々な種が浮かんでいる。

なるほど、と関心を持った時だった。

まるで金属同士をぶつけたような甲高い音が林中に響き渡る。

「何？」

僕が音の発生源を求めて空を仰ぐと、視界の端に金色が映った。

デーメーターだった。

金色が全身を覆い、一度強く点滅した途端デーメーターの姿は一変した。

僕らが着るような服から、一枚の大きな白い布を肩掛けしてから巻



き付けたような服になり、腰のところまで蔓のようなもので留められていた。

金色だった髪も光を固めたような一層鮮やかな色に変わり、僅かに葉の付いた細い枝を幾重にも丸めた物を被っている。

そして何よりも、肌から神々しい光を発しつつも、陽炎のような儚さを併せ持つという不思議な存在感が生まれていた。

「驚いたかしら？これが本来の姿よ」

口にした言葉もデーメーターの口ではなく、風が何処からか運んできたような妙な違和感があった。

僕は突然の変化に、何故？と曖昧な質問をする。

「この姿になれば、貴方の中にある石の制限を解けるわ」

デーメーターはうっすらと笑みを浮かべた。

「どうする？」

選択権は僕にあるのだと言われた。

僕は、戸惑いの後にやっと言われたことを理解する。

そして、魅力を感じていた。

つい、何時間前にラッセルと話していた力。

デーメーターは本来の石の力からすれば、この規模の林は簡単に焼尽くせると言っていた。

勿論そんなことするわけないけど、それだけの力を持っていたなら今回みたいに白いのに襲われた時に、今回のようにむざむざと命を差し出すことも無かっただろう。

今回は偶然が重なっただけだった。

一つでも足りなかったなら、僕や僕達は取り返せないものを抱えさせられ、失わなければならなかったかもしれない。

今回は助かったけれど、いつ来るか分からない次回は？

そして、それだけじゃない。

「人間の世界だと、魔法が使える使えないで随分と暮らしぶりが違うのね」

デーメーターが僕の心を読んだかのように言う。

確かにそうだった。

日頃、町の人達の話聞いていて、僕らは平民と呼ばれる人種だと知った。

貴族との違いが魔法を使えるということも、それだけのことで生まれながら持つてる富が違うことも。

上手いことやれば、僕も貴族と呼ばれる人種になれるんじゃないかと淡い期待が湧く。

貴族になれば、もっと生活も豊かになるし、家族だってもっと美味しいものを食べたり領主のような広い家で暮らせる。

恩返しという言葉が浮かび、これまでしてもらった数々のことが走馬燈のように続く。

と、そこで妙なことに気付いた。

流れる記憶は、僕が生まれたばかりの頃にまで至り、なおかつ割りとは鮮明に思い出された。

普通、生まれたばかりの記憶って覚えていないものなんじゃないだろうか？

最近もナージエに夜泣きが凄かったと言っても、ナージエはきよとんとするばかりで全く覚えていないようだった。

そして、それ以上に気味が悪かったのは、僕が生まれたばかりの頃よりももっと前、そこにまだ記憶があるような気がするからだ。

もし、記憶が石を並べて置いて行くようなものだとしたら、最初の一個目だけ石が退かされ、置いた跡だけがあるような。

そんなわけ無いと頭を振って勘違いだと自らに言い聞かせる。

「どうしたの？」

急に頭を振り出した僕にデーマータールが声を掛けた。

僕は、なんでもないと答え、目の前の果実酒を飲んでも良いか尋ねた。

構わないと言われ、口にする。

甘くて飲みやすかった。

僕に、デーマータールに対し、消された記憶は幾つあるのか、と尋

ねるだけの勇氣は無かった。

生まれてすぐにペンダントが、つまり石が傍にあった。

僕は本来、この世界にいないはずの人間だったんじゃないだろうか？  
もしそうなのだとしたら？

仮定の想像は、恐怖と絶望に似ていた。

心臓が早鐘のように鳴り出し、急に自分自身が希薄になった気がする。

「随分と顔色が悪いみたいだけど？」

窺ってくるデーメーテルは、それに気付いているのだろうか。

僕の手はペンダントを掴んでいた。

今現在僕が持っている唯一の家族との繋がりだった。

ペンダントを心臓に押し付ける。

僕自身が心臓になったみたいに、耳の中に一時の間もおかない心臓の音だけが聞こえていた。

嫌だ。

闇雲にそう思った時だった。

ふいに僕のものでは無い心臓の音が微かに混じる。

ゆっくりとした一定のリズムが段々大きくなり、僕の心臓の音をかき消すまでに大きくなると、次第にその音しか聞こえなくなった。

すると、まるでその音が僕の心臓の音のような気になってきて、指や足、身体の隅々まで血が流されている感覚が生まれ、僕という形がすっかりと存在していることを感じさせられた。

誰かが僕の存在を肯定してくれた。

そんな気がした。

「もう大丈夫です」

顔を上げた僕にデーメーテルは、そう、と返した。

「それで、解いて良いのね」

「このままじゃ、駄目ですか？」

確認をするようなデーメーテルに遠まわしに否と言った。

「魔法は要らないの？」

デーメータールは不思議なものを見ているような顔をする。

「皆と、同じ場所に居たいんです」

僕はそう言った。

「僕は、自分の意思でこの世界に来たわけじゃないと思うんです。もし、母さんと父さんが出会わなかったら、とか、僕じゃない僕が生まれていた可能性だってある。それに僕だって違うところまで、こんな田舎じゃなくて、別のところで毎日馬に乗らずにやりたいことだけやってたかもしれない」

「だけど、と続ける。」

「お祖母ちゃんもお祖父ちゃんは優しいし、父さんも頼りないところがあるけど色々教えてくれるし、母さんもたまに怖いけどいつも気にかけてくれるし、カテリーナさんもナージエも、僕の馬も居る。母さんの友達も町や村の人達も親切だし、ラッセルやミランダみたいな友達もいる、この場所が僕は好きだから」

僕はこの世界が好きだ。

「だけど、好きになれたのは皆が居たからだ。」

「貴族の家に生まれて、今よりお金があって何もしなくても生きていけるような毎日よりも、僕が過ごしてきた毎日の方がずっと幸せだと思っから。だから、魔法は確かに便利かもしれないけど、僕は皆と同じ場所に立って居たいんです」

「ごめんなさい、と頭を下げると、デーメータールは呆気にとられたような顔をしていた。」

そして、次の瞬間クスクスと笑い出す。

「ごめんなさい、嘘をついたわ。私にはその石の制限を解くことは出来ないの」

今度は僕が呆気にとられた。

「ちよつとした悪ふざけよ。私は最初から、貴方の記憶を全部消すつもりだった」

「だって、色々教えてくれたのに？」

問い掛けた僕に、勘違いしないで、とデーメータール。

「私は1人の妖精として、人間が力を持つのは見過ごせないわ。たとえ今は制限されているとしても、人間のことでだからいつ何処で制限を解こうとするか分かったものじゃないもの。貴方が知ってしまったことを消すのは当然の勤めよ」

デーメーターは細く息を吐いた。

「でも、いいわ。記憶も石もそのままにしておくことにするわ」

「良いんですか？」

「あら、消してしまっても良いの？」

それは嫌だけど

「消さないとデーメーターさんが他の妖精とかから何か言われるんじゃないんですか？」

さつき、勤めと言っていたから義務かなんかなのだと思った。

過程はどうあれ助けてもらったわけだし、それでデーメーターが何か言われるのは恩を仇で返すような気がした。

「心配要らないわ。別に義務って訳じゃないし、私が見逃したのは人間じゃなくて、竜の血をひくものだもの。問題無いわ」

デーメーターがそう言うならそれで良い…のかな。

「それに、貴方には彼女、ウラのことを忘れないで欲しいからそれは勿論、と僕は強く首を縦に振った。

デーメーターはそんな僕を見てクスリと笑い、果実酒に口をつけた。

「悪戯ついでにもう一つ良いかしら？」

「なんですか？」

「顔を良く見せて欲しいの」

そう言われたときには既にデーメーターの手が僕の顎に触れていた。

「女の子みたいね」

「よく言われます」

僕は口を尖らせながら答えた。

不満を湛えた言い方にデーメーターは笑い、なお僕の顔を左右上

下に振る。

「でも、ジャックと言ったかしら、ウラのつがいの面影が少しあるわね」

好き勝手されつつ、疑問があつたので聞いてみた。

「もし、僕が魔法を欲しがったらどうしたんですか？」

「問答無用で記憶を消してたわね。それと、人間を一層嫌いになつてたわね」

「嫌いなんですか？」

「当然よ」

きつぱりと言われた。

まあこれまでの言い方からしてそうだろうけど。

「だけど、貴方とジャック、その周りの人間だけは少し嫌いじゃなくなつたわ」

悪さをして謝る子供を見る母親のような笑みでデーメーテルは言った。

ありがとう、と僕から手を離す。

そして、僕にグラスを持たせて、乾杯とグラスを当てた。

「それを飲んだら寝なさい。夜が明ける前に起こしてあげるから」  
「少なかった果実酒はすぐに空になり、デーメーテルの言葉に従い、また掘られた穴に体を横たえる。」

土で覆いかぶされる前にデーメーテルにペンダントを少しの間貸して欲しいと頼まれた。

少し躊躇う。

僕は圧倒的に無力で、万が一渡して記憶を消されてしまったらと考えた。

デーメーテルもそれに至つたよう

で「朝にきちんと返すわ。ウラと水の精霊の名に誓って」

水の精霊というのは良く分からないが、ウラの名前を出したなら信じても良いかとペンダントを渡した。

「おやすみなさい」

土が動き、僕に覆いかぶさるのを見届けると、デーメーテルは僕から離れ、また椅子に座ったみたいだった。

しばらくの間、寝付けないままうつらうつらしていた。

体を包む土は熱を発しているみたいで、温かいお湯に浸かっているみたいだった。

だけど頭だけがまだ興奮しているらしく、寝付けずにいた。

どのくらいそうしていたか分からないけど、ふいにデーメーテルの声が聞こえた。

「今日、やっと貴女の子供に会えたわ」

頭だけ動かすとデーメーテルがグラス片手に一人で椅子に座わり、独り言を呟いていた。

いや、対面に果実酒を入れたグラスが置かれていて、見えない誰かと話しているみたいだった。

「あの子だったら、貴女と同じことを言ったわ。この場所に立って居たいだなんて。あの時の貴女みたいな顔をして」

対面に座っているのはウラなんだと気付いた。

「貴女は説明してくれなかったけど、ジャックの隣ってというのは、要はあの子の言ったことなんでしょう？」

馬鹿ね、と言ったデーメーテルは鼻を噉り上げた。

「本当に馬鹿よ貴女。人間なんかに惚れて、貴女は竜なのよ、それなのに人間と同じ場所に立ちたいだなんて、そんなの聞いたこと無いわ」

デーメーテルの噉り上げる頻度は増え、涙声になっていた。

「貴女のことだから、残される私の気持ちも考えなかったんでしょね」

そこで僕は耳をそばだてるのを止めた。

仰いだ空では重なった月が随分と低い位置になり、朝が近づいていた。

## 平民（後書き）

長かったけど、まあラカスの設定は大体完了ということだ。

この話のヒロインはエレオノールのつもりなので、貴族のプライドに対して、平民を全肯定するキャラクターを目指してましたが、出来てますかね？

記憶に関しては、転生してきたもう1人の記憶です。

別れた際に、ラカスの記憶はラカスに全部残して、もう一人の記憶は全部持って行ってしまったので、記憶が無いのです。

デーメーテルは気付いてません。

単にエレオノールと話し合えるだけの認識力が欲しかっただけの転生だったんですが、色々複雑になってしまいました。

ドリュアスは様々な種類がありますが、柏は耐火性が強いため水の妖精と呼ばれるそうです。

周囲の人間関係を家族から友人に移したように、感情とかも2人っきりの単純な関係から複雑な関係にしていきたいですね。

読んで頂いたことに感謝



## それぞれの

「いつせーの」

掛け声と共に僕とラッセルはテーブルを持ち上げた。

「そのままよ」

ミランダが濡らした布で浮いたテーブルの足を拭いていく。

「流石、男の子ね」

セシルが大袈裟に驚き、僕らを褒めた。

僕らがデーメーターとディアンヌに別れを告げ、教えてもらった道を辿り、僕達の町に着いたのは太陽が白っぽい空に全身をさらけ出した頃だった。

町の入口には人だかりが出来ていて、馬も数頭。

すぐに僕らのことだと分かった。

正直、なんとか町に忍び込めないかと考えもしたが、さすがに出来ない。

幾ら今が暇な時期だとはいえ、遊んでいるわけでは無い。

そして、僕らも悪いことをしたという自覚がジワジワと湧きあがる。だけど…

僕らに与えられた罰は町長を始めとする町の代表者数人のお説教と自分達の家族のお説教、そして町の全ての家をまわって謝罪とお手伝い。

帰って来た次の日から、僕ら3人は朝から家々をまわっていた。

ナージエとジェーンには、2人をしばらく会わせないと罰が下った。

お陰でナージエは勿論、ジェーンも夜泣きはしないものの、しょっちゅう泣きわめいてるそうだ。

彼女ら曰く、僕ら3人は会っているのに、と云うが、だったら代わって欲しいと思う。

同じ町でも住む人は様々。

「まあ、そういう年頃なものね。でも、もうしちゃダメよ」と簡単に済んだところもあるし

「全く、忙しい時期に。男と違って女には休みつて無いのよ」と、たつぷりお説教した上にたつぷりお手伝いさせられた家もあった。

それも今日で終わり。

最後はミランダの家だった。

ミランダ自身も言い出しつぺは自分だと言ったが、實際馬を出したのは僕だったし、道を教えたのはラッセルだった。

町長達は、ミランダが僕らを庇ってると思っっているようだった。

まあ、別に良いけどさ。

セシルに言われた部屋の掃除が終わると

「綺麗になったわ。ありがとうね」

そう言われ、お茶をご馳走になった。

そして

「うちで最後かしら？」

聞かれたので、頷いた。

「お疲れ様。それと、ミランダが迷惑をかけたわね。私からも謝るわ、ごめんなさいね」

セシルは僕とラッセルに深々と頭を下げた。

僕とラッセルは慌てて、そんなの止めて下さいと止めた。

ラッセルは頭を掻きながら

「いや、もう止めなかった俺らも悪かったつーか、なあ」

「僕も別に、迷惑とか思ってないですし。だから気にしなくても」  
僕とラッセルが言っつて、ようやくセシルは頭をあげる。

「ミランダから聞いたわ。ラカスちゃんとラッセルちゃんはミランダを守るために死にかけたって。もしそうなら、私は2人の家族に合わせる顔が無かったわ。本当にごめんなさい」

ラッセルが再び頭を下げそうになるセシルを止めた。

「そんな、大袈裟な」

「大袈裟なものですか」セシルが静かに被せた。

「ミランダの置き手紙を見た時、すぐにミランダが言い出したことは分かったわ。ラカスちゃんもラッセルちゃんもこんなことするよな子じゃないもの」

僕が、そんな買いかぶられてもなあと思っっていると

「ラカスちゃんなら多分何度目下見に出掛けて準備万端にしてからでしょうし、ラッセルちゃんならお父さんにちゃんと自分の考えや覚悟を手紙なりに残してから行くでしょうね」

こんな突飛なことするのはうちだけよ、とセシルは言った。

「本当に、ミランダを守ってくれてありがとうね」

セシルは再び深々と頭を下げた。

「さて、行くか」

ラッセルが努めて明るい声で言った。

「そだね。やっと終わった」

僕も明るく答えた。

「むー」

ミランダだけが膨れっ面だ。

そんなミランダにラッセルは声をかける。

「まあだ、根に持ってるのかよ」

「だって、私だけ考え無しってどうか」

セシルは、やっぱり赤ん坊の頃から見られているだけあって、僕らを良く見ていた。

確かに僕が行くなら何度か下見に行っていたし、ラッセルもガルク

さんだけには、何故自分がそうするのか、を伝えていたと思う。たとえ、喧嘩別れに終わって飛び出す形になつたとしても。

「それはミランダの良いところじゃない？」

「なんか、褒められている気がしないわ」

ミランダは不満だという顔をするが

「ミランダがいなかったら、これ、手に入らなかったよ」

僕がズボンの裾を引つ張ると足首には例の短い紐が結ばれている。本来は手首らしいんだけど、僕は使用人の仕事で見えたら困るし、ラッセルも火の傍ということで足首にした。

ラッセルも同様に裾を引き

「妖精がお呪いをかけてくれたものなんて滅多にないしな」

そう言った。

デーメーテルとディアンヌが妖精だつたと僕以外の2人も知っている。

僕が言ったのでは無く、後日僕らが行つたと話した場所に大人達が行き、広く搜索したが、建物はおろか人っ子一人おらず、数人の年寄りから、そういうえば昔そんな話を聞いたことが、みたいな話が出て、僕らは妖精に会つた幸運な子供ということになつたからだ。

ただ、ミランダはそれも不満なようで、膨れっ面は戻らない。

「妖精じゃなければ良かったのに」

そんなことまで言い出した。

あの日の朝、慌ただしい出発の準備中、ミランダはディアンヌから短い紐を受け取っていた。

お祖母さんから教わつたお呪いをかけた、とディアンヌは言った。

そつと覗き見たデーメーテルは何か言う様子も無い。

ディアンヌはもう一つ短い紐を出した。

「それと、これ。私からの刺繍のお返し」

多分ミランダのを真似たんだろうけど、ミランダのそれより数段綺麗に出来ていた。

ミランダは目を見開き

「良いの?」

と尋ねる。

ディアンヌは少し照れながらも穏やかに笑い

「友達の証に受け取って欲しいの」

ミランダは飛び付くようにディアンヌに抱き付き、ディアンヌは小さく悲鳴をあげた。

「私、次に来る時はもっと上手なの沢山作ってくるわ」

「ええ、待ってるわ」

ディアンヌはミランダを抱き締めかえすと頬を擦るように寄せた。

僕は、後でこっそりミランダにデーメーターとディアンヌが妖精であることを教えようと考えていたが、辞めた。

あまりに無粋に思えたからだ。

「多分珍しいよな、妖精だったてことを嫌がるのも  
笑いながら言うラッセルに

「だって、初めてのこの町の外の友達だったのよ。もう二度と会えないなんて、」

ミランダは手首の紐を見せた。

「これのお返しも出来ないのよ」  
ぽつりと

「そんなのずるいわ」

ミランダはディアンヌが妖精であったことを知ってから度々そう言うが、その度に僕は少し違うように思っていた。

「多分、また会えるよ」

「どうしてよ?」

「俺もそんな気がするぜ」

訝しげなミランダと、意外に同意を示したラッセル。

ラッセルと目が合うと、なんとなく同じ考えのような気がした。

「何よ、2人だけで分かったような顔して」

説明しなさいよ、とねだるミランダに、言い出しっぺの僕が言うことにする。

あくまで僕の勘だよ、と前置きをして

「ミランダがディアンヌさんを友達だっことを忘れなければ、いつか会える気がするんだ」

縁があれば、また会える。

デーメーテルが僕にペンダントを返してくれた際に言った言葉。ペンダントに彫られた古い友人に向けてなのか、僕に向けてなのかは分からない。

だけど、縁って何だろうって考えると忘れないってことなんじゃないかと思う。

覚えていない、じゃなくて、忘れないこと。

忘れなければ、どんなに時間が掛かってもまた会える。

デーメーテルの言葉だけじゃなく、ディアンヌの態度や言葉もそう言っていた気がした。

傍目で見っていた僕と、多少言葉は違ってもラッセルも同様に感じていたのだと思う。

「私、絶対ディアンヌのこと忘れないもん。絶対ディアンヌを私の作った刺繍で驚かせてやるんだから」

ミランダがそう宣言した時、丁度一軒の家の前に着いた。

「じゃあ、私はここで」

「おう、頑張れよ」

「頑張つて」

僕らの応援を背にミランダは家の中に入って行く。

それを見届けると不意にあくびが出た。

ラッセルが笑う。

「お前もそろそろ眠いんだろ」

「まだ、慣れないや」

僕ら3人の生活も少し変わった。

ミランダは本格的に刺繍を学びたいと町で一番上手い、さっきの家

の奥様のもとに通うようになった。

ラッセルもこの後、ガルクさんと一対一で鍛冶の特訓。

そして、僕は朝今までより早くに起きて祖父に馬の飼育について教わっている。

3人で示し合わせたわけじゃない。

それぞれが自分の意思でそれぞれに教えを乞いに行った。

だから、義務ではない。

僕は誰も起こしてくれない、ミランダも行かなければ教えてもらえない、ラッセルでさえも自分で頼まなければガルクさんから口にならない。

自分の都合でやらないことは自由だった。

でも、僕らは始めた。

帰って来たあの日、僕らの胸の中に悪いことをしたという自覚がジワジワと湧きあがった。

だけど、自分達の夢の形もつつすらと立ち上ぼってきたことを覚えている。

ラッセルの夢は早く一人前の鍛冶職人になること。

ミランダの夢は誰よりも綺麗な刺繍をつくること。

僕の夢は、昔母親が中央でしていた人や物を運ぶ仕事をする事。

思えば、その仕事をしたいとなるのは自然なことだったのかもしれない。

ある程度使用人の仕事をした後でも十分だし、そのまま見習いとして入るより社会の仕組みを知った後でも遅くないと思った。

少し前に2人に言った時、ラッセルは笑いながら

「良いじゃん。そしたら、俺の作ったの運んでくれよ」

と言った。

ミランダも

「私のもよ。丁寧に運んでよね」

笑いながら言った。

デーメーテールの家に行く前は、ずっと3人で町で暮らしていたら

なんて考えていた。  
多分、それはきつと楽しいと思う。  
でも、僕らはきつと、それよりも楽しい未来を作れるんだ。  
今は、そう思える。

ラッセルと別れ、家に帰ると、家の前に祖母とナージエがいた。  
ナージエは蹲って玄関横の地面を見ている。

そこにはデーターからもらった種が埋まっている。

芽が出る頃、ジェーンと会えると聞いて、そこに蹲っているのが、  
習慣になっていた。

祖母が僕に気付く。

すると、ナージエも気付いて、騒ぎ出した。

その声が聞こえたのか、玄関の扉が開き

「やっと終わったみたいだね」

母親と父親、祖父が出てきた。

「ほら、お兄ちゃん帰ってきたから」

祖母がナージエをちゃんと立たせた。

ナージエは改めて

「おーかりー」

「ただいま」

僕は大きく答えた。



それぞれの（後書き）

キャラクターの性格とかが変わってるかもなので、後日、手を加えるかも知れませんが。

読んで頂いたことに感謝

孫2人（外伝）（前書き）

祖父の話

## 孫2人（外伝）

僕が物置をゴソゴソとかき回していると

「あなた、何をしてるんですか？」

振り返ると、メアリーが立っていた。

もしかしたら、と思い

「僕の手帳をどこに仕舞ったのか知らないかい？ほら、昔僕が書いていた茶色の」

尋ねると、メアリーは呆れた様子で

「それなら、先週引つ張り出していたじゃありませんか」

そう言われた。

そう言われれば、そうだったかもしれない。

「その後、僕は何処に置いたんだっけな？」

「寝室の引出じゃないかしら」

メアリーの言葉に従い寝室へ行くと、確かに引出の中に手帳があった。

「やあ、あつたあつた」

「まだ、ボケてもらっちゃ困りますよ」

後を追ってきたメアリーが苦笑まじりに言う。

「まだまだ大丈夫だと思っただけどなあ」

僕は照れ笑いをしてごまかした。

やれやれ。

僕も随分生きてきたものだ。

気が付いたら、娘が出来て、孫が出来ていた。

昔誰かが言っていた、年を取れば取る程見たくないものを見ることになる、と。

自分が衰える様なんで、まさにその一つじゃないだろうか。

ラカスが夜中に出て行ってしまった日の朝、僕とメアリーが台所に行くのと、既にアンが一人座っていた。

「こんなに早く、どうしたんだい？」

聞いた僕らに、アンはラカスの手紙を見せてくれた。

ラカスが子供達だけで、しかもナージエまで連れて出掛けてしまったと理解した時、僕は慌てふためき、すぐに探しに行こうとした。僕だけでは手が足りない。

町長を起こして、町中の協力を借りよう。

部屋を飛び出そうとした僕を止めたのは、アンだった。

「お願い、父さん。朝まで、せめて日が昇るまで待って、何を悠長なことを。」

そう言おうとした僕の前にラカスの手紙が再び差し出された。

「遅くても朝には帰ってくる。ラカスは、そう言ってるから」

「だからって、何があるか分からないだろう？」

アンは腫れぼったい目で僕を見てきた。

「この手紙を見てから馬小屋に行ったら、ラカスの馬と母親がいなくなっていた。大半の動物が冬眠に入るこの時期なら、ラカスの腕があれば逃げ切れないはずは無いから。だから、お願い」

確かに、僕もこの時期なら、と同意出来ないこともない。

「だけど、子供達だけなんだぞ」

行き慣れた大人なら不意に起きたことでも対処出来る。

しかし、ラカスは子供で、行き慣れてもない。

「あたしが言えた口じゃないけど、あたしだって子供の時、無断で出掛けたりしたでしょ。痛い目にも散々あったし、馬鹿をしたりもした。だけど、それで自分の無力さを知ったりもした。あたし達がアレやれコレやれ言ってこなさせるのも必要だけど、自分で自分の意思を貫く大変さを知る機会を与えるのも大切だと思うの。だから、お願い父さん」

実際に僕の服を掴んだ娘の言葉に僕は力が抜け、近くの椅子に腰を

落とした。

口を挟まずに見ていたメアリーも隣りに座る。

僕は自然と溜め息が出た。

そして、自分の娘の、息子が心配で何度泣いたか分からない顔を見た。

アンは僕の自慢の娘だ。

小さい頃は確かに腕白で、何度迷惑をかけた家に謝りに行ったか分からない。

だけど、その時でさえ自慢の娘だった。

いつも真直ぐで、独りぼっちを放って置けなくて、率先して自分の輪に入れてやるような優しい子だった。

そんな娘が決めた決断に、言葉にならない気持ちが湧き、メアリーを見ると、メアリーは僕の気持ちを読み取ったようにコクリと首を縦に振った。

そして、僕の代わりにアンに話し掛けた。

「アン、分かったから」

メアリーの言葉にアンは僅かに安堵したようだった。

「だけど、ミランダちゃんの家はまだ寝てるでしょうから、せめてラッセルちゃんの家に行つてきなさい。ガルクなら、あなたの幼馴染みだから、少しは話しやすいでしょ」

「うん、分かった」

「せめて顔ぐらい洗って行きなさいね」

アンは、ありがとう、と頭を下げて部屋を出て行った。

僕とメアリーが残る。

「お茶の用意をしましょうかね。あなたも仕事にならないでしょうし」

メアリーが席を立つと、僕は頭を抱えた。

心配でしょうがなかった。

もし、馬が足を挫いていたら。

もし、ラカスが実践の場で二頭を操れなかったら。

もし、ナージエに何かがあつたとしたら。

悪い予想は次から次へ、湧いては消えない。

トン、と目の前にカップが置かれた。

見えた指先から辿って行くと、微笑むメアリーが見えた。

「懐かしいですね」

長年連れ添った妻は言った。

「アンが子供の頃は、私が今のあなたのようにだったね」

そう言われ、ふいに昔の記憶が甦る。

アンがガルクや他の友達と夜中出掛けたことに気付いた時の話だ。

メアリーは、アンに何かあつたら、と取り乱した。

僕も、心の中ではメアリーと全く一緒だった。

だけど、泣きじゃくるメアリーの前でそんなことも出せず

「アンなら、きっと大丈夫だから」

そう言い続けた。

「今なら分かるわ。あなたも私と同じ気持ちだったこと。でも、あ

の時は」

メアリーは隣りに座り

「とても心強かつたわ」

言葉が染み込むように腑に落ちた。

子供が居なくなつて一番心配するのは母親に決まっている。

その折れてしまいそうな心を支えるのは、一番近くにいる夫や家族

にしか出来ないのだと、今更ながら思い出した。

それにしても

「メアリーは随分強くなつたもんだ」

あら、とメアリー。

「あなたの自慢の孫が帰ってくると言っていて、自慢の娘もそう言っているのに、あなたの自慢の妻が信じなくてどうするんですか？」

出会ったばかりの頃のような悪戯めいた言葉に、一本とられたと苦笑い。

それに、とメアリーは付け足す。

「昼になつても帰つてこなかつたら、町中どころか領主様に頼んでだつて絶対見つけ出してみせますから」

「僕もそうするよ」

本心からそう思った。

この後、起きてきた義理の息子にラカスの手紙を見せたら、一目散に町長の所へ行こうとしたので、アンの言葉と夫としての立ち振る舞いについて話すと、シユンとなつた後

「流石ですね」

と、言われた。

メアリーは何も言わず、そ知らぬ顔をしていた。

と、言つても何もしないで済まされるはずはない。

ガルクのところはアンと幼馴染みだけあつて、アンと同じように朝まで待つようだったようだが、ミランダちゃんのところは女の子というだけあつて直ぐさま捜索隊を出そうと町長の家に駆け込んだ。幾らアンとガルクの考えはあつても、優先すべきことは人それぞれ。誰も反対をおしつけることは出来ないだろう。

人が集められ、町の入口に準備されたのは太陽が昇りきる頃だった。その時には、アンも気持ちを強く持つのがやつとのもようであり、探しに行きたい気持ちがありありと見えた。

誰が何処に行くか話していた最中、誰かが

「帰つてきたんじゃないか」

そう言った。

見ると、遠くに馬が二頭と小さい人影が四つ五つ。

近くで馬の足音が聞こえ、気付いた時にはアンを乗せた馬が走り出していた。

その後のことはあまり覚えていない。

大きな安堵が全身の力を抜いたこと。

ラカスが頬をはたかれたこと。

アンに抱きしめられながら珍しくラカスが人前で涙を見せたことを覚えてる。

それと、ラカスはもう子供という言葉で括れない年になったのだと思っただけ。

「お祖父ちゃん、これで良いの？」

昇り始めた日が射す馬小屋で、ラカスが蹄鉄を嵌めた自分の馬の足を示した。

僕はそれを確認すると、馬を立たせ歩かせる。馬の歩行に問題は無い。

「良いだろ」

そう言うと、ラカスは全身を使つて喜んでた。

ラカスは帰って来てから、少し変わった。

帰った翌日に僕の所へ来て、馬のことを教えて欲しいと頼み込まれた。

メアリーと話して、ちゃんと教えて欲しいなら僕と同じ時間に起きるように言った。

試す意味もあつたし、祖父ちゃんも真剣に教えるんだぞという意味もあつた。

言った次の日から、ラカスは僕が起きる時間に眠い目を擦りながら起きてきた。

何があつたか知らないが、アンの言ったことは正解だったのかもしれない。

元々、ラカスは馬と話が出来たのではないか、なんて考えていたほどだ。

次々に仕事を覚え、こっちもちゃんと教える為に古い手帳を引っ張り出す羽目になった。



馬の爪切りも出来た方が良くらしいの技術であり、出来ない者の方が多いにも関わらず、教えてと言い、完璧ではないとは言え大きな問題無くこなせるようになった。

たとえ話ではなく、本当に会話が出来るんじゃないかと、嫉妬するほどだ。

「やれやれ、そんなに簡単にこなされたら祖父ちゃんの立場が無いぞ」

半分本心で言うと、ラカスは真剣な顔つきになり

「まだまだだよ。自分で蹄鉄の釘を抜けないもん」

これには僕も苦笑いをしてしまう。

単純にラカスの力が弱いからであり、後何年かすれば、簡単に出来るようになるだろう。

「ラカスがいれば、祖父ちゃんは何もしなくて済みそうだ」

ラカスの頼もしさが逆に痛快だった。

「駄目だよ」

ラカスにはっこりと笑い

「祖父ちゃんには、僕の為の世界一の馬を育てるっていう大変な仕事があるんだから」

「そうだったな」

つい、忘れてしまいそうになる約束。

ラカスは賢い子だ。

僕がこれからの人生を賭けても難しいことに気付いているだろうに。だけど、それでも言い続けてくれる優しい子だ。

ふいにラカスの背後にうつすらと人影が見えた。

青年と言っっていい年頃だろうか、この辺では見ない服を着ている。

彼はラカスの後ろに寄り添うように立ち、微笑んでいた。

いつから見え始めていたか、はつきりとは思いつけないが、ラカスが喋り始める前から彼はラカスの背後に見える時があった。

最初はラカスの将来の姿かとも思ったが、すぐさま顔の彫りや目鼻立ちが違うことに気付いた。

悪い霊かとも考えたこともあったが、ラカスに何の害も及ぼすことはなかった。

これまで誰にも、メアリーにさえ言ったことは無かったのは、彼の姿が見える時、彼がいつも柔らかく笑っていて、瞳の奥に見える優しさがラカスそっくりだったからだ。

わざわざ詮索もしなかったのも、そういう理由があったから、だと今では思う。

ところが、去年、ラカスが病に伏してから、人影が稀にしか見えなくなっていた。

一つの仮説が浮かんだ。

その人影が、ラカスを助けてくれたんじゃないか、と。

日々を過ごす内にラカスは元気になっていき、人影は薄く頻度が減っていく。

仮説は確信に近くなっていた。

でも、僕は何もしなかった。

弱っていくラカスをもう二度と見たくはない気持ちに勝った。

「ラカス、そろそろ行かないと、ラッセル君やミランダちゃんが待っているんじゃないか？」

僕が言うと、ラカスは太陽の高さを見て、慌てて途中だった後片付けを済ませ馬小屋を駆け出して行く。

僕は小声で囁く。

「ありがとう」

何の罪滅ぼしか。

何度、ラカスの背中にこの言葉をかけただろう。

君がラカスの兄だったらな。

何度、そう思っただろう。

孫2人（外伝）（後書き）

作者の祖父の一人称が『僕』だったので、自然にそうしたのですが、男性陣の一人称が皆同じになってましたね。

まあ、良いんでないか、と。

書き始めた最初から一番最初に気付くのは祖父と決めていたので、書いて良かったです。

読んで頂いたことに感謝

## はなむけ

「あれ？これだけ？」

僕の目の前には、今日配達する手紙が幾つか。

「いつもそのぐらいだろ」

母親は、自分の配達分を鞆に整理して入れながら言う。

まあ、確かにいつもと変わらないけどさ

「だったら、行かないで良い村がない？」

ついさつき母親の言った、今日回る村の数はいつもより多かった。

だから、てつきり今日は数が多いんだなと思ったんだけどな。

祖母が母親の手紙を紐で纏める手を休め、言った。

「ラカスももう配達行けなくなるだろう。だから、きちんと今までのお礼を言ってきなさい」

僕は言われてやっとそのことに思い至り、うん、と返事をした。

「あら、ラカスちゃん。久し振りじゃない」

最初に行った村には配達の手紙が一枚も無かった。

それでも、僕が春から町をでてしまうのでご挨拶にきましたと言う

と、僕を迎えてくれた数人の奥様方は、ちよつと待っててね、と言

い、あらかたの家の奥様方を呼んできてくれた。

「ねえ、ラカスちゃんが挨拶に来てくれたわよ」

そんな声が村中に響くのは大分恥ずかしかったが、わざわざ洗濯やらの手を止めて出て来てくれるのは、なんていうか、嬉しい半分むず痒い半分。

僕は前方を取り囲む奥様方や数人の旦那さん、子供達の前で深々と頭を下げた。

「短い間でしたが、お世話になりました」

もう緊張してしまい、とりあえずそれだけしか言えなかったが、そ

れでも頭を上げると拍手が起きた。

「頑張つてね」

「偉くなるんだよ」

事情を知っている人が口々に言ってくれた。

「ありがとうございます。頑張ります」

僕が頭を下げたて答えていると

「ラカスちゃん、これ私達から」

奥様方の中でもリーダー格の数人が僕の前に出て来て、両手に乗るくらいの包みをくれた。

開けて見ると、真っ白い布だった。

「これで、メアリーさんに色々仕立ててもらいな」

この世界、真っ白い布というのは貴重だった。

同時に、裕福さの象徴でもある。

「せっかく領主様のとこ行くのに、変なとこで引け目なんて感じて欲しくないからね」

「そうそう、ラカスちゃんなら絶対偉くなれるからね」

おばさん達が保証するわ、と言つと、お姉さん達でしょ、と声が上がり、笑い声が湧く。

僕は包みを抱き締め

「ありがとうございます」

もう一度頭を下げた。

正直、うるっときていた。

その後に回った村でも色んな物をもらった。

良く効くという傷薬とか。

その中でも、とある村のこと。

その村でも、頑張つてねという言葉と送別のプレゼントをもらった。僕がお礼を言つと

「もう一つあるの」

そう言われた。

僕を囲んでいた人垣が分けられると、僕より年下の、ナージェの少し上ぐらいの子供が2人進み出てきた。

2人で僕に色んな木の実を紐で繋いだネックレスみたいなものをくれ、せーの、と2人で声を合わせ

「お兄ちゃん、頑張つて」

周囲から喝采が上がる。

2人は恥ずかしがるようにして、近くにいたお母さんの下へと走って行った。

僕はその2人を知っている。

ずっと昔、僕が赤ん坊の頃、母親に連れられてこの村に来た時、丁度子供を流産してしまつたお母さんがいた。

本来生まれてくるはずだつた赤ん坊に代わり、授乳させられたことがある。

その翌年、生まれた子供だつた。

「あなたをお兄さんだと思つてるみたいなの」

昔、そのお母さんは赤ん坊を抱え笑いながら、僕に言った。

そして、今日。

「僕もお兄ちゃんみたくなるんだ、つて毎日のように言つてるわ」  
そう、言われた。

僕が家に帰ると、祖母とカテリーナがお茶してた。

カテリーナは僕の両手一杯の荷物を見ると

「ラカスつてば、すっごい人気じゃーん」

と驚いていた。

「休みなの？」

とりあえず、おかえり、と言つてから聞いてみると、カテリーナは、  
ただいま、と応えた後

「そんなとこ、今回はお使い半分なんだけどね」

カテリーナはゴソゴソと自分の鞆を漁ると

「はい、これジャンヌさんとゼノビアさんから」

手渡されたのは、革の馬乗り用の手袋と掌に収まる小刀だった。

「手袋はゼノビアさん、小刀はジャンヌさん。見立てたのは、私とゼノビアさん」

どう？と聞かれた。

「良いの？」

僕は、つい聞き返してしまふ。

手袋も小刀もすごく良い品物だった。

実用重視だけど、細かいところまで丁寧で、手袋は指の動きを邪魔せず、小刀も相当切れそうだ。

間違いなく結構な額だと思う。

「良いんじゃない？ジャンヌさんなんて高給取りなのに、お酒買うくらいしか使わないし」

カテリーナはあっけらかんと。

「まっ、お陰で私は休みが貰えたし、ゼノビアさんに良いところの飯奢ってもらえたから良いけどね」

その後、カテリーナから先日盗賊退治の愚痴を聞かされた。

カテリーナ曰く、単独行動の任務を申し付けられたと思ったら、実は囷の役だったとか。

「私、か弱いんだよ。そんなか弱い子相手に毛むくじやらの男が十何人、いや百人はいたね。それがぐわーって」

…相変わらずカテリーナは大活躍してるらしい。

「だから、私のこの休暇は当然だね。もー、休むよ。力一杯休むよ。へトへトになるまで休んでやるんだからね」

握り拳で宣言したカテリーナの後ろで

「そろそろ、夕飯の支度をしようかね。カテリーナ、手伝いな」  
祖母が腰を上げた。

カテリーナの首がゆっくりと回る。

「お母さん、私今日帰って来たばかりなんだけどなあ、なんて  
「あら？何故かしら、急にカテリーナがジャンヌさんから貰ったお  
金で自分の物まで買ったことを誰かに喋りたくなっただわ」  
「手伝います。いや、手伝わせて下さい」  
「ごめん、庇えないや。」

夕飯の後、ラッセルの家へ、色々貰った物のうち、持って行ききれ  
ない物をお裾分けしに行った。

僕にくれた物だけど、使わないより良いだろうと思つた。

実際、マールも喜んでくれた。

その後、少しラッセルと話した。

僕が木の実のネックレスを貰った話をすると

「そりゃ、そうだろ」  
と言われた。

「こんな田舎から領主様のとこの使用人だけ」

「肩が重いよ」

僕が本当に肩を落としながら言うと

「将来、この辺でラカスつて名前が流行るかもな」

「やだよ、そんなの」

笑いながらのラッセルに僕も笑いながら返す。

「それを言ったら、ラッセルだってそうでしょ？」

祖母達の世間話から知ったことだけど、もしラッセルが中央で頭角  
を現せば、鍛冶以外、大工とかそういう職の人達が、素質のある人  
間がいるかも、と、この辺に目を付けてくれるかもしれない。

噂話は意外と影響する。

「ま、な。大工、鉾山の奴等にも言われてるよ。偉くなったら、う  
ちを優先に使ってくれてな」

今度はラッセルが肩を落とす番だった。

「期待されてるじゃん」



僕が茶化すように言っと

「まあ、本気で言っちゃいないんだろうけどな」

ラッセルは苦笑いを浮かべていたけど、僕を見る目の奥は笑っておらず、静かに燃えていた。

「僕だって、多分、本当にそうなるなんて誰も思っちゃいないよ」別に、昼間に受けた送別を信用していない訳じゃない。

だけど、分かるんだ。

なれる、じゃなくて、なれたら良いね、という微妙な温度の違いが僕もラッセルを見返しながら、ふつつつと胸の中がたぎるのを感じる。

僕とラッセルは、にやりと笑いあった。

## はなむけ（後書き）

2人の子供のお母さんの部分は回収したかったところなので、一応入れて見ました。

覚えていた人はすごいです。

カテリーナはなんなんでしょうね。

でも、それなりに良い目を見てると思いますよ。

でわ

読んで頂いたことに感謝

妹（外伝）（前書き）

ミランダの姉、シャロンの話。

もし、ミランダがラカスに会わないで成長したら（11才かな）みたいな感じで。

妹（外伝）

私が編み物をしていると

「シャロン、ちょっと来て」

と、お母さんに呼ばれた。

手を止めて台所に行くと、不安そうなお母さんに

「ミランダがまだ帰ってこないの。悪いけど、迎えに行ってきたくない？」

そう言われた。

「あまり遅くまでお邪魔したら悪いでしょ？」

などと言っていたが、本音はミランダがまた余計なことしないかというのがあからさまに見えた。

全く、と憤りに近い気持ち湧く。

少し前に勝手に夜中出掛けた時も、そう。

私は何もしていないのに、私までミランダと一緒に謝ってまわらされた。

今回もそう。

急に、教わりたいたいと言い出して、一人で勝手にお願いに行つて。

お陰で毎日、仕事場で会う時に

「いつもすいません」

なんて言わなければならぬ。

しかも、迎えにまで。

「そのうち帰ってくるでしょ」

と、私が嫌そうな顔をして、お願いだから、と押し切られてしまった。

「全く」

今度は口に出した。

「ミランダちゃんならもう随分前に帰ったわよ」と、ケラーさんは言った。

「そうですね。すいません」

私が申し訳なさそうに頭を下げると

「まだミランダちゃんが帰って来てないの」

ケラーさんが心配するように聞いてきた。

「いえ、多分行き違いになったんだと思います」

私は、慌てて答えた。

騒ぎになるのはまっぴらだ。

ケラーさんが扉を閉めた後、とりあえずアンさんのところへ行くことにした。

ミランダが行きそうなところはラカス君かラッセル君の家だろう。

そう、考えたところで、そういえばその2人が明日出発だと言うことを思い出した。

多分、最後に会いに行っただろう。

だったら、最初から言ってから行けば良いものを。

それで行き違いになったのだろうと家に帰ろうかとも思ったが、もし帰って無かった場合もう一度出掛けるのは面倒臭い。

だから、アンさんの家に向かうことにする。

ミランダは明らかにラカス君が好きなのだから、2カ所のうち、先にはしないだろう。

「全く」

私は再び呟いた。

今度は嫉妬が混じった。

「ミランダちゃんが羨ましいわ。ラカス君がもう少し早く生まれてたらねえ」

と私の友達が言っていた。

確かに、ラカス君は顔も良いし、もう仕事はしてるし、将来的に困らなそうではある。

夜中に勝手に出掛けたことも、友達の中では、遅しいわよね、と大

人と逆に評価を上げた。

ラカス君だったら拒まないわ、と堂々と言う人も出る始末。ただ、私がラカス君にそういう感情を持つことは無かった。

「ミランダちゃん？来てないなあ」

出てきたアンさんの妹さんは、カテリーナさんって言ったっけ、ちよつと考えてそう言った。

「すみません。お邪魔しました」

内心怒りを溜めながら、それでも丁寧な頭を下げてから、踵を返すと

「あ、でも、ラカスなら馬小屋の方にいるから、もしかしたらミランダちゃんは直接そっちに行ったのかもしれないよー」

そう、後ろから言われ

「ありがとうございます。行ってみます」

私は振り返ってお辞儀をした。

私が言われた通り、建物に沿って回り、裏手に出た瞬間見えたものに、慌てて建物の影に隠れた。

やっぱり、ミランダはいた。

だけど、ラカス君と抱き締めあつて口と口のキスをしていた。

一気に上がった心臓の早さを抑えるために深呼吸。

自分が見たものが信じられず、そつと顔だけで覗くと、2人はキスはしていなかったもののお互いの腰を抱き締め合うようにして何か話していた。

普通の恋人同士みたいだった。

私だって、隣り村のロンとキスくらいしたことある。

だけど、まさか4つ下の妹が自然にそうしていることがショックだった。

なんていうか、私はラカス君のそういうところが好きじゃない。

あのくらいの男の子だったら、もっと照れてほしいなと思う。

女の子の方がそういう知識をお母さんや年上の人から聞くから、ちよつと余裕があっても良いけど。

ラカス君はそういうのも普通に出来そうで、なんか嫌だ。

それに、恋愛に限らずとも私や町の子が一段ずつ上る横で、一足飛ばしにいつてしまう感じがする。

将来隣りに立つ自分が想像出来ないのも、恋愛感情が湧かない理由かもしれない。

領主様のところに行くのも当然のような気がする。

良いなあってという気持ちと、狡いなあって気持ちが半々くらいかな。お金が貰えるっていうのもそうだけど、領主様に雇ってもらえるぐらいの人間だから、ああいう風に振る舞えるんだろう。

私は違う。

特に誰かに認められることも無く、この町か近くの村で波風立たないように暮らしていかないといけない。

羨ましい、とは思うけど、ラカス君みたいになりたいとは、もう、思えない。

「うわあ、お姉ちゃん」

物思いに耽っていたところに、素頓狂な声。

逢瀬は終わったようだ。

「もしかして、見たなの？」

幾ら恥ずかしそうに照れても、姉を迎えに来させる妹に気を使える程、今の私は優しくくない。

「いつもあんなことしてるの？」

「いつもはしてないよ。たまに、少しだけ」

妹は顔を赤くして否定する。

たまにでも十分過ぎる気はするけど。

「それ以上はしてないでしょうね」

「そんなのするわけないでしょ」

更に顔を赤くする妹。

してはいないようだ。

妹が淫乱扱いされるなんて考えるだけでも嫌だ。

「さっさと帰るわよ。お母さん待ってるんだから」

「はい」  
歩き出した私に妹は大人しくついてきた。

帰り道、妹のキスで忘れていたが、ふとラカス君が明日町を出ることを思い出した。

「ラカス君、明日行くんでしょ」

聞くと、ミランダは

「昼前には出るんだって」

答えに、そう、と相槌を打ち

「寂しくなるわね」

と言った。

看過できない面はあるけど、好きな人が居なくなることは同情出来る。

ミランダは、んー、とちょっと考えてから

「少しね」

と素っ気無い。

「随分と薄情ね」

せつかく気を使ったというのに。

「別に気を使わなくても良いよ。さつき別れてきたから」

あっさりと口にした言葉を理解するのに、数秒かかった。

そして、どう答えるべきか考えながら、歯切れ悪く

「まあ、あんた達がそうするって言うんなら、良いんじゃない」

とだけ言った。

ずっと待っていると言うのもアリだし、すっぱりというのもこうゆう場合はアリだと思ったのだけど、ミランダは全く違うことを考えていた。

「お姉ちゃん、私ね、絶対にゲルマニアに行くんだ」

「ゲルマニア？」

突然出てきたのは、今まで口にしたこともないような地名だった。

「ちょっと、ゲルマニアって、あんた、そんな軽い気持ちで行ける



ようなところじゃないのよ」

「知ってる」

ミランダは本当に分かっているのか分からない口調で答えると

「でも、ケラーさんが言ってたの。最近中央でもゲルマニア製の物が増えてきたって。それに、ゲルマニアでは腕さえあれば、ちゃんとそれに合わせたお給料が貰えるのよ」

「ちよつと待ちなさい。たとえそうだとしても、それがどんなに大変なことか分かっているの？夢をみるのは自由でも、叶えられる人は一握りなのよ」

そう、たとえばラカス君とか。

でも、いくらこんな田舎で凄く凄く言われても、中央とかに行ったら普通になってしまふんじゃないだろうかとも思う。

「分ってる、それが難しいことだって。私はラカスやラッセルと違って、才能があるかなんて分からないもの」

「でしょう。だったら」

「でも、駄目。約束しちゃったから」

「約束？」

「そ、初めての友達とね。約束は破れないでしょ」

初めて、という単語に咄嗟に浮かぶのは

「ラカス君？それともラッセル君？」

「どっちでもないわ。私だけの友達よ」

なぞなぞのような言葉に戸惑う私が聞く前に

「やって駄目だったら謝れるけど、やらないで諦めたら合わせる顔が無いもの。それに、私はまだ子供だから、死ぬまで嘘をつき続けるには長すぎるわ」

ミランダは、そつと最近手首に巻き始めたヒモを触る。

「その、」

ヒモは関係あるの？と聞こうとすると、ミランダの言葉が重なる。

「それにラカスのことを嫌いになった訳じゃないもん。大人になつてからもう一度恋をするの。そうね、ゲルマニアの一番大きい町が

良いわ。そこで、ばったり再会するの。きっとお話しの内容に  
みたくに素敵よ」  
身振りまで加えて演じるミランダに呆れ、聞こうとした言葉を止め  
た。

溜め息が出る。

私がミランダの年の頃、何を考えていただろうか？

こんな夢物語、全く浮かびはしなかった。

なんとなく、お母さんみたいに普通に大人になって普通に結婚して  
普通に子供がうまれてと、受けいれていた気がする。

私はもう、そんな話を他人に真剣に語れない。

「ま、やれるだけ頑張りなさい」

全くしょうがないわね、と嘆息混じりに言っただけだ。

もし、私とラカス君が同い年だったら、私もミランダみたいになっ  
ていたんだろうか？

そう考えるとミランダが、少し羨ましかった。

翌日、ラカス君とラッセル君は迎えに来た馬車に乗って町を出て行  
った。

残されたミランダが涙を零すことは無かった。

妹（外伝）（後書き）

あまり原作を読み返して細かく確認するタイプではないので、流通はざっくりと。

一応、ラカスもやることはやってますよ。  
関心湧かないと書く気無いですけど。

やっと、生まれた町編が終わりました。  
もしかしたら、もう一話書くかもしれないですが、満6才で90話弱でしたね。

15か16才くらいまで書きたいので、恐ろしいことに、200超える気がするんですが、ぼちぼちやっていききたいと思います。

でわでわ

読んで頂いたことに感謝

領主の家に来てから十数日経った日の朝、僕が目を覚ましたのは大きな屋敷の裏の小屋の中だった。

「ラカス、起きてつかー」

まだ夜明け前の薄暗い室内で、隣りのベッドの上がもぞもぞ動き、短い髪ながら寝癖のついた頭が起き上がる。

彼の名前はトイー。

僕より6つ上の13才で、僕は今、彼と同じ部屋で生活している。

屋敷へ来た初日のこと、以前に来た裏口で中央に行くラッセルと別れ、不安になりながらも訪問を告げると、僕は屋敷から離れた馬小屋に案内された。

あれっと思う僕にされた説明は、田舎から出てきた子供をお嬢様の側に置くというのは結構非常識なことなので、形だけでも、屋敷の馬を扱う人のところで生活していたとする。

馬担当のところには預けるのは、僕の実家がそういう仕事をしていたから。

だ、そうだ。

面倒臭いことするなと思うが、由緒ある家柄らしいから仕方ないのかもしれない。

というか、そのしばらくの間はお嬢様の前に出ることも無くひたすら立ち振舞いの練習が待っていると言われた。

僕が今までそういったことをしたことも無いってのもあるんだけど、一番の理由は、お嬢様の近くに仕えるんだから一切の粗相のないように、だつてさ。

僕以外にもこの春から使用人として働いたことが無い人も来るそうなんだけど、僕ともう1人、つまりお嬢様のお側係は特別に一ヶ月早く呼ばれたらしい。

実は、その時点で少し嫌になった。

一応といえど、預けられている以上馬小屋の仕事はする。

朝は馬小屋の掃除とかをして、朝食も馬小屋の近くにある馬担当の人が暮らしている家で食べる。

朝食が終わると、午前中は屋敷の中で立ち振舞いの練習。

大柄でふくよかなロツテンマイヤーメイド長の下、僕とリンという名の女の子とひたすら歩いたり、お盆を持たされたり、カートを押したり、立ちっぱなしでいたり。

練習前とか終わり、稀にもらえる休憩時間によくリンと話をした。

リンは茶色い癖っ毛の長い髪を持つ、僕の2つ上、9才だった。

屋敷に来る途中にある門のところに住んでいて、突然今回の話が来たと言う。

面接なども一切無かったらしい。

多分、僕の場合は外からだったからだと思う。

考えたくないことだけど、リンの場合、既に人質にとっているようなものだし。

お陰でリンはこの屋敷に入ったことが無かった。

僕も一度しか来たことが無いから、リンと大して変わりは無かったが、リンの場合、領主の存在に深い尊敬と畏れの念を持っているように見えた。

その領主の屋敷の中というのは随分と気を使い、心細くて仕方が無いようで、同じ時期に来た同じ仕事の仲間である僕を見つけると、僕が幼いから心細いだろうと、話は無くとも近寄ってきた。

翻って僕はというと、他人の家ということに慣れないことは慣れないけど、元々領主というのは税を納める人というイメージで、あくまで仕事で来ているという感じていた。

領主である屋敷の主人が現在屋敷におらず、中央に行っているというのも大きいと思うけど。

そういえば、この前、僕とリンが仕えるお嬢様を見た。

練習が終わり、昼食の後のことだった。

昼食は屋敷の中で食べる。

コックが大量に作り、それを領主の家族から偉い順に下げ渡されていき、屋敷の中では僕らが一番下。

そして、僕らの時点でもそれなりの量が残る。

それを屋敷の周りに住んでる人達へと渡しに行った帰り、2人の女性を見た。

僕らは出入り口のある屋敷の裏手に向かっていたから、屋敷の正面玄関の前に居た2人とは随分距離があったのではつきりとは見えなかったが、髪の色が特徴的だったので気付けた。

背の高いピンクと低いピンクの2人。

誰なんだろう？と思う僕を他所に、リンは

「うえ、え、え〜」

と意味の分からない言語を話しながら、首をきよるきよると動かし、拳動不審の塊になっていた。

「あれが、領主様のご家族？」

とりあえずリンの態度から予想して聞いてみる。

しかし、リンにとって、あの2人を知らないとはとんでもないことらしい。

「あの方々が、次女のカトレア様と三女のルイズ様。しっかりと目と心に刻み付けなさい」

そう言われた。

へ。あれが、とリンにとっては罰当たりなことを考えていると

「私たちはルイズ様にお仕えするんだからね。ちゃんと覚えるのよ」

どうやら僕は小さい方について回るらしい。

どう見ても、僕と年はそう変わらない。

領主と僕らの違いは魔法が使えるかどうかなんだよな、と考え出したところで考えるの止めた。

不条理で嫌になりそうだったので考えないことにした。

「仕事仕事」

僕が呟くと、リンは僕がお嬢様を見て一生懸命頑張ろうと心に決めたと勘違いしたらしく

「その意気よね。お嬢様の側に早く居れるように頑張らないとね」とか言っていた。

まあ良いけどさ。

午後はまた少し練習をして、僕は馬小屋、リンは雑用見習いみたいなことをしているらしい。

夕食は馬担当の小屋で食べて、トイーと話しながらさっさと寝る。そんな生活を送っている。

一日（後書き）

まだ、キャラクターを考えてきれていないので、ちよつとずつ。

メイド長は、ハイジのあの人から頂きました。

確認してないけど合ってるんでしょうか？

それと、作者はリアルタイムで見えてないですからね。

読んで頂いたことに感謝



## 価値観

馬小屋の仕事というのは特別忙しいわけではなかった。

馬担当は、鷲鼻で顔半分を真っ白い髭で覆われたレボラが主で、レボラの妻のタナ、それとトリーの3人だけだった。

トリーとレボラは血縁関係では無いとトリーが言っていた。

その人数で十分なのは僕の実家と違い、そこで調教せずに既に調教された馬を仕入れてくるからだった。

実際にやる仕事といえば、管理とたまに馬車に繋いで走らせるくらいなもの。

出産も扱わないし、年をとれば売ってしまうらしい。

いざという時も屋敷から手伝いが来るそうだ。

まあ、それなりに肉体労働だけど楽と言えば楽。

僕が屋敷内での練習を終えて戻って来た時、トリーがレボラの許可の下、馬に跨がり、カツホカツホと走らせていた。

滅多に無いことらしいけど、緊急の際などに馬車に繋がずに走らせる練習という名目だそうな。

「坊主は乗れんのか？」

トリーを眺めながら柵に寄り掛かって煙草を吸っていたレボラが僕に聞いた。

「家では乗ってたけど」

はつきりと言うのもアレだったので曖昧にぼやかした。

レボラは、ほう、と呟いた。

レボラは当初、僕を単に雇主の都合と考えていたみたいで、仕事の邪魔をしなきゃ良い程度の目で僕を見ていた。

その目がちよっと変わり始めたのは、僕にフォークのような鋤を渡し、馬小屋に敷かれた藁の掃除をするように言った時だった。

藁の上には馬の糞が点々と転がり、近くの藁にくっついている。

その馬糞と汚れた藁だけを鋤で除けて、綺麗な藁を残すのは結構ツギがある。

上手くやらないとポロポロ落として綺麗な藁を汚してしまう。

レボラは僕が満足に出来るとは思わなかったんだろう。

しばらく時間を置いてから僕の様子を見に来た。

僕は丁度除け終わり、除けた藁を何回かに分けて捨てて行くところだったところだった。

レボラは

「ほう」

と声を出した。

まさか出来ているとは思わなかった様子。

その後、もうちょっと取るように言われた。

それは単に僕の家ではそんなに藁にお金を使えないので、汚れた藁はきつちり除けるが、藁をなるべく残すようにしていたからだ。

「もうちょっと捨てて構わん」

そう注意されたものの、僕の仕事は期待に応えることが出来たみたいだ。

「坊主、家で馬を飼ってるとか言っていたな？」

僕は、はい、と返事をした。

一応、来た初日の挨拶で言ったのだけど、評価の対象になっていなかったらしい。

僕が家の話をすると

「儂の家もそんな感じだった」

と、右の髭を少しつり上げて言った。

以来、少し気にしてくれる。

トイーが額の汗を拭いながら戻ってきた。

レボラは煙草を錆びた缶みたいな物に投げ入れると

「ぎこちなさが抜けんな。馬に乗らされてるようじゃ、まだまだ」とトイーに言った。

トイは、ちえつと舌打ちをし、馬から下り、鞍を外そうとする。

「ちよつと待て、トイ」

レボラがトイを止め、僕に

「乗ってみるか？坊主」

と聞いてきた。

僕は頷く。

正直ウズウズしていたところ。

トイは訝しげな顔をして僕を見る。

そして、レボラに

「こいつ、乗れんの？」

と聞く。

「家で何回か乗ってるとは言ってたがな」

と僕を見てきたので、僕はトイに向けて頷いた。

トイは頭を掻きながら

「じゃあ来いよ。俺が、持ち上げてやるから」

それを僕は

「柵から乗るから大丈夫」

と柵の下を潜り、馬の前に立つ。

興味を向けてくる馬の目は、流石に選ばれて来ただけあつて素直で

大人しい光を含んでいる。

良い馬だなと思う、その一方でなんか物足りない気もするんだけどね。

両手を開いて見せ、何も持ってないこと、悪意が無いことを示す。

「ちよつと乗せてね」

馬が小さく鳴いて答えた。

馬の行動に驚き、僕と馬を交互に見ていたトイから手綱を受け取ると、柵を上る。

「もう少しこっちに来てほしいな」

僕が柵を上るのを見ていた馬は軽く引いた手綱に従い、柵に近付いてくれた。

「ありがとう」

お礼を言い、そこからゆつくりと鞍の上に移る。

「じゃあちよつと回つてきます」

と、レボラとトイーに言うと、レボラに止められた。

レボラは新たな煙草に火を付けながら

「坊主、年は幾つだ？」

「この前、7才になりましたけど」

レボラは白い息を細く吐き出した。

「儂の目は節穴じゃねえ。ちよつと乗ったくらいで、そうなりやせんだろつ。何年乗つてる？」

僕は馬の腹を軽く叩き、歩き出させる。

「母親のお腹の中にいた時からですかね」

じゃあ行つてきまーす、と言つた後ろから笑い声が聞こえた。

その夜、ベッドに入つてもまだ、トイーは

「お前、すげえな」

と言つてきた。

「良かったぜ、お前が屋敷の方で。こつちに来られた日にゃ俺はお払い箱になつちまうからな」

良かった良かった、とトイー。

ふと気になり、トイーがなんでここで働いてるのか聞いてみた。

「そりゃ、一番は給料だろ。屋敷の外つたつて、畑耕すより割が良いからな」

聞くと、トイーはここに来てから4、5年経つていて、少ないながら給料を貰つていた。

「うちは弟が2人いるから俺がいなくても人手は足りてるし、ある意味出稼ぎみてーなもんよ」

そう言われたので

「だったら、リンみたいに屋敷の中だったら、もっと貰えるんじゃないの？」

トイーはリンを知っていた。

「あの門のこの子だろ。俺はそんな柄じゃないし、そんなに偉く  
なりたいとも思わないしな。俺は普通に生活出来れば良いんだよ」  
「まあ、そういう人もいるだろう。」

トイーがのそつと寝返りをうち、僕の方を向いた。

「お前も、周囲から偉くなれとか言われたクチか？」

「まあね」

「俺からしたら、偉くなるのも考えもんだと思うけどな」

あくまで俺の考えだけ、と前置き

「自分の時間とか無くなるし、身の危険だって増えるしよ」

身の危険、という言葉に

「そうなの？」

「そりゃそうだろ。ジエロームさん知ってるか？」

「うん」

「あの人滅多に外出しないんだぜ。魔法には人を操れるのもあるら  
しいし、旦那さまの代理とかで色々やってるから、代わりになって盗  
賊なんかからも恨み持たれてるしな」

僕は、はー、と溜め息が出た。

「まあ、その分良い物貰ってるんだろうけど、それで嫁さんも無し  
で一生尽くすのはキツいな。俺は綺麗な嫁さんと普通の暮らしがし  
てえよ」

僕は改めて、なるほどと感じた。

「あー、悪いな、水を差すつもりじゃなかったんだ。忘れてくれ」

トイーはそう言つと、欠伸をした。

「さっさと寝ようぜ、また明日も早いからよ」

僕は、おやすみ、と言って目をつぶった。

一日の疲れが身体を沈め、トイーの話がユラユラと浮かんでいた。

## 価値観（後書き）

作者のゼロ魔の平民の持つてるイメージって、貴族は貴族、平民は平民っていう感じです。

シエスタよりも、マルトー寄りな感じ。

イギリスのイメージが強いかもです。

読んで頂いたことに感謝

## 将来

一カ月を慣れないながらも過ぎすと、やっと屋敷の中で暮らすことになった。

広い屋敷の奥の奥、短い階段を下りて、半分地下みたいところが使用人達の部屋となっていた。

そんなに長くは無い一本道の左右にドアが並び、右側が男性用で左が女性用だそうだ。

僅かに地上に出た部分が明かり取りになっているものの、屋敷自体が隠すように覆い被さっているために、昼間にも関わらず薄暗く湿っぽかった。

偉くなればなる程まだ風の通る一本道の入口付近になるそうで、僕の部屋は真ん中を少し超えた位だった。

それより先は物置だと案内してくれたジュリアンに言われた。ジュリアンは男であり、14才だと自己紹介を受けた。

ぴっしりと固められた耳に掛かる程度の淡い白っぽい金色の髪、落ち着いた琥珀色の瞳が既に大人の雰囲気纏わせていた。

そして、綺麗な顔をしていた。

女顔の僕と違い、男性の顔なのだけど肌が綺麗とでも言うのか。

そして、もう一人、マックスという人も同室だった。

マックスの黒髪はジュリアンより少し長く、ジュリアン同様ぴっしり固めているが、前髪のところ少し遊ばせてあり、金色の瞳は好奇心と落ち着きを混ぜたような奇妙な余裕を持っていた。

女性にもてそうだなと思う野性的な男性の顔をしている。

マックスも13才にも関わらず、ジュリアンとは別の意味で大人を感じさせた。

部屋は二段ベッドの4人部屋で、下2つが開いていた。

すぐにもう1人来る予定だそうだ。

以降、僕の場所は屋敷の奥の奥、そのまた奥の二段ベッドの下の段

になった。

その夜のこと、先輩2人と話していて、ジュリアンとマックスは同じ時期に屋敷に雇われて来たことを知った。

2人とも僕位の時に勤め始めたとも聞いたから、もう6年7年、僕のこれまでの人生分屋敷で働いていたことになる。

僕はその長さに驚いたが、ジュリアンは苦笑いでまるで大したことないように

「僕らなんてまだまだですよ。ここでは僕らなんて見習いも良いところですよ」

と口にした。

ジュリアンが言うには、この屋敷で働く人の殆どは何処かで使用人として働いていた人達で、そこで高い評価を受けて初めてこの屋敷の採用試験を受けられるそうさ。

改めて、領主の凄さを感じた。

感心する僕にマックスがからかうように言う。

「お前、どこから来たんだ？」

僕が生まれた町を言う

「本当に田舎から来たんだな」

半分感心半分驚きの様子で言われた。

その言い様に、僕は少しムツとしたが、本当のことなので何も言わずにいる

「悪い悪い、馬鹿にするつもりは無かったんだ」

と、ちよつと真面目な顔になり、僕に領主について教えてくれた。

僕は今まで、領主はあくまで領主であって、僕のいる領地も他の領地も同じような領主だと思っていた。

だけど、領主の中にも色々位があるそうさ

「この領主は幾つかあるうちの一番上の公爵っていう位でな、更に公爵の中でも一番上っていうぐらいなんだわ」

そう説明されても、僕には理解しきれない話だった。



辛うじて

「とんでもなく偉いってこと？」

我ながら間の抜けたことを言った。

「まあそう思っただけで間違いじゃないでしょうね」

ジュリアンが苦笑いで肯定する。

僕の言葉に吹き出していたマックスが僕に

「でも、お前運が良かったな」

と言ってきたので

「なんで？」

「お前の生まれた町の山超えてすぐが隣りの領地だからだよ」

「そんなに違うの？」

「全然違う」

なあ、とジュリアンに問い掛けた。

「そうですね。まず、税の額が決まっていなくても大分違いますね」

ジュリアンの話をマックスが引き継ぐ。

「あくまで聞いた話だけだな。どうやって金額決めるか知ってるか？」

僕は首を横に振る。

「領主家族がその年使った金額って話だぜ」

僕は、まさかと思ったが、僕の町は偉い人の領地内にあつた訳だから、単純に否定出来なかつた。

僕が自分の知っていた世界の狭さに驚いていると、ジュリアンが荷物を持って立ち上がった。

どうしたんだらう、と思う僕を他所に、マックスがジュリアンにむけて

「丁度良いから、こいつも案内してやれば？」

そう言つとジュリアンは僕を見て

「そうですね。案内するので付いてきて下さい」

と僕をドアの外へと促す。

「何処行くの？」

聞いた僕にマックスが応える。

「お勉強部屋。お嬢様の側付きっていうなら必要だろ」

イマイチ理解出来ないまま、僕はジュリアンについて部屋を出た。

ジュリアンが蠟燭を手に向かったのは、一本道の一番奥、突き当たりの部屋だった。

ドアを開くとうつすらとカビ臭さが流れ出す。

「ここが、マックス曰く勉強部屋です」

ジュリアンによって照らされた室内は幾つかの棚、そこに仕舞われた紙の束、三組の椅子と机によって占められていた。

ジュリアンは一冊を手に取ると、机の上に開いて置く。

「文法？」

書かれていたのは言語の仕組みについてだった。

「おや、読めるんですか？」

ジュリアンがちょっと驚いた顔をした。

「まあ、少しなら」

書かれていたのは、僕の家にあるのとは少し違っただけ、そういうことが書かれていることは分かった。

それにしても、と思う。

紙の束と言うのがピッタリだった。

端を紐で留められてはいるが、インクが掠れている箇所はあるし、紙の質はバラバラだ。

「これはね、ここで勤めた使用人達が残して行った物なんです」

ジュリアンが僕の心を読み取ったかのように話出した。

「旦那様に認められた限られた数人だけは、旦那様の書物の中の幾つかを読むことが出来ます。それを後々の使用人が読めるようにと写した物なんですよ」

「なんで、そんなこと？」

「僕らが学ぶためですよ。高い教養があれば、より引き立てて貰いやすくなるからです」

そして、続いてジュリアンが話したことは、僕には意外だった。

「他にも、使用人から商人、または別の仕事になる者のために」

「他の仕事？」

「そうです。使用人の中には商人と知り合い、そっちの道に行く者もいますから」

「それって、良いの？」

僕は、使用人になったらそのままをを目指すのが普通だと思っていた。

将来中央で働きたいという僕の考えは邪道だと。

「あまり大きな声では言えませんが、構わないでしょう。人それぞれに自分の道を選ぶ権利があるのだから」

ちよつと間が出来

「ジュリアンは、将来どうするつもりなの？」

意識せず、口にしていた。

ジュリアンの話に半分呆気にとられていたというのが正解だと思う。

「僕ですか？僕はこの屋敷の執事長になることですね」

ジュリアンの言葉は僕に、少なくとも蔑みをもたらした。

てつきりジュリアン自身がそうすると思っただからだ。

「期待に応えられませんでしたか？」

ジュリアンは僕を見ていた。

「執事長になれば、様々なことが出来るようになります。この領地をもつと良くするのが僕の夢です」

駄目ですか？と笑いかけてきたジュリアンに、僕は首を横に振る。

「それで、ラカスはどうするつもりなんですか？」

優しい笑みを浮かべ尋ねられた。

僕が言い淀むと、ジュリアンは察したように

「誰にも話しません。約束しますよ」

と、言われたので、中央で人や物を運ぶ仕事がしたいことを話した。

「立派な夢ですね。是非叶えてください」

ジュリアンは変わらない態度で言った。

「でも、お屋敷の仕事を手を抜いてはいけませんよ」

「よお、おかえり」

僕一人で部屋に戻ると、マックスは自分の寢床から顔を出した。

「どうだった？」

僕は、勉強部屋であったことを話した。

「まあ、ずっとここで働きたくても、こっちの都合でついていけない場合もあるしな」

マックスはそう言う。

ふと気になり、マックスは将来どうするのかを聞いてみた。

「俺か？俺は金を溜めて、色んなところを回って、一番気に入ったところで暮らすのが夢だな」

「じゃあ、なんで此所で働いてるの？商人とかもあるでしょ」

「さつきも言っただろ。公爵様っていうのは世界共通なんだよ。その屋敷で働いてたっていう肩書きがあれば、大抵のところ雇ってもらえるからな。元手がいららないだろ」

マックスは当然のように言った。

僕は、勘違いをしていたのだろうか？

今まで貴族と平民は人間というくりの中で上下に別れているのかと思っていた。

だけど、ここに来てからは、貴族と平民が別の種族のように利用したりされたりしていた。

どっちが正解なのか、まだ僕には分からない。

## 将来（後書き）

ゼロ魔の原作では、平民が虐げられているように書かれています。平民とはいえ人間ですから、したたかな面も持っているはずなので。

読んで頂いたことに感謝

## 事情

びつくりするくらい柔らかい絨毯、木目が浮き上がる階段の手摺からは本物そっくりの花々が垂れ下がる。

その先に、何本もの大木をギユツと固めたような重厚な扉が見えた。「粗相のないように」

僕とリンの前を歩いていくメイド長が首だけを回して言った。

はい、と僕とリンは答えたが、リンの声は明らかに震えていた。

僕の声も幾分強張っていたかもしれない。

なにせ、僕らはこれから初めて、リン曰くルイズお嬢様のお顔を間近で拝見出来るのだから。

そしてリンとまた違った意味で、僕の内心も戸惑っていた。

まだ、トイー、マックス、そしてジュリアンの話を聞いていなければ、素直に今から会う人は僕の領地の主の娘なんだと思えたかもしれない。

だけど、今の僕には、貴族という人種の娘としか思えなかった。

既に貴族との接し方を決めていた3人と違い、僕自身どういう気持ちであれば良いのか中途半端な気持ちでいた。

メイド長は僕の気持ちなんてお構い無く、スタスタと扉の前に立ち、何度されたかわからない程繰り返された僕達の服装のチェックと立ち姿を確認すると、扉をノックし、失礼致しますと中に入る。

僕らも続いて入ると、僕は危うく驚きが声となって出そうになった。広い。

なんていうか、広い。

僕の町の普通の家が丸々入るんじゃないだろうか？

一辺を暖炉と色鮮やかな壁画が、反対の辺には幾つもの絵画、大きな硝子を使ったバルコニーへと繋がる扉からは厚さは違えど瀟洒なカーテンが幾色にも垂れる。

中央のテーブルには何かの物語が描かれた大きな花瓶と溢れんばか

りの花が甘い匂いを部屋中に振りまいていた。

「お嬢様、本日より、この者達2名がお嬢様のお側に控えさせていただきます」

メイド長の声に我に帰った。

どう接するもなにも、部屋に入った時点で圧倒されていた。

布が擦れる音がする。

音源は部屋のやや奥の絵画の近く、僕の家族が全員で寝れそうな大きなベッドの上。

小さな山が口を開くと、以前見た顔が出てきた。

違うのは、僕らの方向をにらんでいることだろう。

と言っても恐いといった感じで無く、失礼かもしれないけど、ナージエが母親に怒られて泣く寸前の、悔しそうな顔に似ていた。

「いない。出てって」

ナージエ、違う、ルイズお嬢様は短く言った。

「申し訳ありません。そうおっしゃられても、旦那さまからの御言いつけですので」

メイド長は頭を下げ下手に出ながらも、譲らなかった。

とりあえず、僕とリンは何がおきているのか皆目見当も付かず、視線がメイド長とお嬢様を行ったり来たり。

帰って、と、旦那さまの御言いつけが繰り返された結果、メイド長が「とにかく、これは旦那さまの決めたことですので」

と打ち切り、僕らに

「では、後はお嬢様に従いなさい」

そう言っただけで部屋を出て行ってしまふ。

僕はひとまず、力一杯、えー、と叫びたくなかったが、なんとか堪えた。

隣りのリンを見ると、オロオロとするばかりで僕以上に助けを求める目をしていた。

しかも年下の僕に

「どうしたら良いの？」

と聞いてくるし。

僕に聞かれてもなあと思いつつ

「とりあえず、お嬢様の指示があるまで待ってれば良いんじゃない？」

「そ、そうよね」

そんな訳で、2人で恐る恐るお嬢様を見ると

「出てって」

枕が飛んできた。

枕自体はヘナチヨコで、遙か手前に落ちただけで僕らを嫌っているという意思は届いた。

「出てって」

ヘナチヨコ枕がもう一つ。

「はい」

僕は一カ月間散々練習したお辞儀をして、部屋を出て行こうとした。

「ち、ちよつと良いの？」

リンは僕とお嬢様を何度も窺いながら、僕を追ってきた。

「だって、お嬢様に従えって言われたでしょ」

リンに言つと、扉の前でお辞儀をして部屋を出た。

リンも慌てて出てきた。

その日は、ほぼひたすら扉の前に立っただけだった。

夜、僕が自分の部屋でそれを話すと、マックスとジュリアンは苦笑いを浮かべ、つい昨日部屋の一員になったカールはどうしたら良いか分からずに曖昧な顔をしていた。

カールは僕のいっこ上の8才で、普通の使用人見習いで屋敷に来た。名は体を現すのか、金色の髪はクルンクルンとカールしていて、クリクリとした青っぱい瞳が僕から見ても愛らしい。

てつきり屋敷に勤める人はジュリアンやマックスみたいに大人っぽい人ばかりかと思ったら、そうでもないらしい。



カールの父親は領地内でも有数の商人だそうで、本人は気付いて  
いるかは別にして、多分両親は将来を考えてなんだろうなと思う。

まあ、それはともかく

「なんであんなにご機嫌ななめなの？僕が何かした？」

そっちの方が問題。

「安心しろ。別にお前らが何かしたわけじゃねーよ」

マックスが手をひらひらさせて言う。

「じゃあ、何？」

「ルイズお嬢様のすぐ上のカトレアお嬢様がな、近々御静養に此所  
からちよつと離れたところにある別荘に移られるんだよ。それが嫌  
なんだろ」

静養？身体のとっかが悪いのかしら？

それよりも

「ってことは何？八つ当たりってこと？」

マックスの言ったのは、つまりはそういうことではないだろうか？

「それがそんな簡単な話じゃないんだな」

マックスはチツチツと立てた指を振ると

「ジュリアン、パス」

パスをされたジュリアンは口をへの字にした後

「旦那さまは、この際ルイズお嬢様に姉離れをしてもらいたいわけ  
ですよ」

「それで急遽雇われたのが、お前とリンってわけだ」

良いところだけマックスがさらっていった。

そういえばゼノビアも、お嬢様に年の近い人をつて言っていた気が  
する。

最後をさらわれたジュリアンがチラツとマックスを見ながら

「ルイズお嬢様も旦那さまに直接言われたわけではないんでしょう  
けど、なんとなく感じる物があったんでしよう。だから、ラカスと  
リンに、いらなと言った。そういうことだと思えます」

間を置かずに言ったお陰で、今度は最後をさらわれなかった。

それはともかく、確かに旦那さまの言うことはルイズお嬢様が通るべき道だと思う、けど

「そんな急がなくても良いんじゃないの？」

徐々に離れていけば良いと思う。

「さつき言っただろう。カトレアお嬢様には御静養が必要だったな」マックスが掌を差し出して示すように言った。

そう言われても、カトレアお嬢様はそんなに悪い状況なんだろうか？

「殆どの魔法使いが匙を投げた。原因不明、とにかく安静に」

最後に貴族の真似をして偉そうに言ったマックスにジュリアンが苦笑しながら補足。

「本当ならもつと早い時期に移る御予定になっていたそうなんです  
が、一番上のエレオノールお嬢様に魔法学院に入学して欲しいと強く希望されていたようで、移るのを延期していたんです」

「魔法学院？」

「ええ、貴族の御子息の学校です。本来ならエレオノールお嬢様も他の御子息同様行くはずだったのですが、カトレアお嬢様のこともあり、行かないと自ら決断なされました」

僕はそこで疑問に思った。

「なんで？行っても問題無いでしょ？」

別に、ずっと側で看病する訳じゃあるまいし。

僕の疑問にジュリアンが応えようと口をあけた瞬間

「阿呆」

とマックスが口を挟む。

「貴族っていうのはそれなりに体面が大事なんだよ。うちは今も将来も何も問題ありませんって顔でパーティーにだって行かないやならないし、なにより旦那さまに万一のことがあったらどうすんだよ。カトレアお嬢様は病弱、ルイズお嬢様は幼すぎる。次の当主のエレオノールお嬢様だつて、その場合学生って肩書きはマイナスイメージにしかないだろ」

マックスの言うことは冷静に考えれば、そうなんだけど

「阿呆って」

阿呆って言われた。

「考える考える。誰につくかで色々変わってくるんだからよ」  
マックスはそこで少し声のトーンを落とす。

「此所だけの話なんだがな、カトレアお嬢様が御静養に行く時に分家を作られるらしいんだよ。ゆくゆくは本家はエレオノールお嬢様だろ。ルイズお嬢様はカトレアお嬢様につくだろうから」

「マックス」

鋭く発したジュリアンの声に背中をビリツと電気が走った気がした。ジュリアンがマックスを窺める目つきで見ている。

「2人はまだ来て間もないんです。そういうことを口にすべきじゃないでしょう？」

マックスは、へいへいと手を振った。

ジュリアンは、今の話は気にしないでください、と言い

「さっきの魔法学院の話ですが、カトレアお嬢様が強く主張なされたために、エレオノールお嬢様は魔法学院に行かれました。カトレアお嬢様も回数は少ないながら、エレオノールお嬢様の代わりをこなしていました。一昨年、御無理がたたり倒れられてしまったのです。結果、エレオノールお嬢様は1年足らずで学院をお辞めになられました。そして、さすがにそのようなことがあつてはと、カトレアお嬢様は御静養を受けいれたという訳です」

「えーと、とにかく僕は何をすれば良いんでしょうか？」

何故か生徒が先生に質問するような口調になってしまった。

「ルイズお嬢様の自立心を芽生えさせれば良いわけです」  
ジュリアンの解答は酷く抽象的で。

どうしろって言っただよ。

僕は両手を上げて後ろ向きにベッドに倒れこんだ。

## 事情（後書き）

昨日書いたんですが、手直しのために延期しました。

原作にエレオノールの使い魔が出てないので、居ないってことになりました。

…作中の言ってること、筋通ってますよね？

読んで頂いたことに感謝

## 身分

春真つ直中の麗らかな陽気。

小鳥達が戯れながら飛んでいる。

「良い天気だね」

僕がボソツと呟くと

「本当ね」

隣りに立っているリンもボソリと呟いた。

相変わらず僕らの仕事場はルイズお嬢様の部屋の扉の前である。

ジュリアンからルイズお嬢様のご機嫌ななめの理由を聞いたはいけど、一朝一夕でどうこう出来るものでも無い。

とりあえずメイド長に言い付けられた通り、朝ルイズお嬢様の部屋に来て、出てつてと言われ、日がなずつと立っているだけ。

昼食はルイズお嬢様が家庭教師みたいな人から講義を受けている間にリンと交代で大急ぎで食べる。

自分達の分を取り、残った物を屋敷の周囲で働いている人達に渡しに行くのはカールを始めとする後から来た人達の仕事になった。

一応僕らは、ルイズお嬢様の御側係なんていう肩書きがあるので、他で働いていた人達は別にして、そういう人達は来て早々に担当になる、まだ何をしろと明確に決まっていないういカール達が僕らより下になるというわけ。

そのお陰というか、そのせいでというのか、僕とリンが食事をしないとカール達も食事が出来ないのです

「うー、急いで食べたから気持ち悪い」

とリンが漏らすこともしばしば。

僕もたまにある。

そういう決まりなんだから気にすんなどマックスは言うけどさ、だつて待つててくれる訳だし、なんかカール達に悪いじゃん。

そんな感じで膨らんだお腹をこなれるのを陽向ぼっこしながら待つ

ていると、突然扉が中から開かれた。

僕とリンはその音に背筋を一層伸ばし、扉を向いて並んで待つと、不機嫌そうなルイズお嬢様が出て来る。

僕らをキツと睨むと、わざとらしくツンと無視する仕草をして僕らと反対方向に歩き出した。

僕らはお嬢様から離れるなど言われているので、ルイズお嬢様の後を追って歩き出す。

すたすた歩くルイズお嬢様はしばらく進むと急に立ち止まった。

くるりと僕らの方を向き

「ついてこないで」

そう言っただけ歩きだす。

僕らは理由はどうあれルイズお嬢様に注意されたわけなので、一カ月の練習で言われた通り、申し訳ありませんでした、とその場で頭を下げる。

が、僕は頭を上げるとルイズお嬢様を追って歩き出す。

素直に部屋の前に戻ろうとしていたリンが小走りで追いかけて来たメイド長から、移動は走るなって言われてるんだけどなとか思っている

「戻らなくて良いの？怒られるんじゃない？」

そう聞かれた。

「お嬢様がどこに行ったか知りませんっていう方が怒られる気がするんだけど」

僕の返事にリンはちょっと考え

「そうかも」

と口にする。

だけど、僕も正解だと考えてこうした訳じゃない。

多分、どっちを選んでも怒られる気がしたけど、より情状酌量をもたえそうな気がした方を選んだだけ。

ジュリアン達が気付いているんだから、さすがにメイド長だってそっとうなあって。

幾つか側にいなくても良い例外を言われたが、今の状況は出された例外の外。

やり過ぎなきや良いんじゃないかと思う。  
さて

「ついてこないで」

「申し訳ありませんでした」

「ついてこないで」

「申し訳ありませんでした」

結果、着いたのは日当たりの良い広い庭だった。

そこにルイズお嬢様と同じピンク色の女性がいる。

「ちい姉様」

早歩きをし過ぎて肩で息をしていたルイズお嬢様がカトレアお嬢様を見つけるや駆け寄って行った。

「あらあらどうしたのルイズ、そんなに汗をかいて」

カトレアお嬢様がハンカチを出してルイズお嬢様の額を拭きながら聞く。

「だって」

ルイズお嬢様は素直に拭われながら、そっと追ってきた僕らを見て示した。

カトレアお嬢様は僕らを見る。

「あら、可愛らしいわね」

おっとりとした口調で僕らに話し掛けると

「ルイズを宜しくね」

花が咲いたような笑顔で言われた。

僕は初めてルイズお嬢様の部屋に入った時以上の衝撃を受けた。

「精一杯御仕えさせて頂きます」

そう言うのがやっとだった。

リンも何回も頭を下げては上げて、また下げるを繰り返す。

カトレアお嬢様はそんな僕らが面白かったらしく、口元を抑えて優雅に笑う。

その姿が恐ろしい程に様になっていて、僕は初めて貴族に、敬意と呼ばれるだろう気持ちを持った。

リンが何故そこまで領主を恐れ多い存在と思うのか、その理由が少し分かった気がする。

そして、カトレアお嬢様に抱き付きながら嫌そうな顔をするルイズお嬢様が、そこまで強く僕らを嫌おうとする理由も。

カトレアお嬢様から

「ルイズは私が部屋まで連れて行くから」

と言われ、僕とリンは持ち場となっている部屋の前に戻ることにした。

離れたら怒られるんじゃないか、なんて微塵も浮かばなかった。

恐縮しきつた強張りがまだ抜けない僕にリンが

「カトレアお嬢様に話し掛けられちゃった」

と興奮しきりに話しかけてくる。

僕も身体が火照っているのを感じた。

なんか、生まれながらの身分の差というのに初めて触れた気がする。



身分（後書き）

カトレア登場。

それだけの話です。

読んで頂いたことに感謝

嘘

その日は仕事が無かった。

というのもルイズお嬢様が何処かにお出かけになられたからだ。

何処かの貴族と会うんだろ、とマックスは言う。

僕とリンはまだ、領地の外の貴族の前に立つことを許されていない。それで僕は朝起きてからルイズお嬢様の部屋に行くまでにしなければならぬ仕事を終えると、こんな時こそと鼻息荒いメイド長の特訓を受けた。

それも午前だけだったので、午後がぼっかり空いてしまう。

なので、久々に馬小屋の手伝いに行くことになった。

ジュリアンの好意だった。

ジュリアンは僕ら使用人見習いのまとめ役なので、使用人見習いの一日の仕事は一度ジュリアンに渡され、それをジュリアンが割り振っていた。

「今日は特に人手が足りないところも無いですし、ラカスもなるべく馬に関わってほしいでしょう?」

僕の将来の夢を知っているジュリアンはそう言ってくれた。ただ

「普段の仕事も手を抜かずこなしていますし」

ちゃんと普段の仕事ぶりを見てますよと暗に言われたけど。

そんな訳で僕がレボラ達が住んでいる小屋に向かうと

「あれ?ラカスじゃないか、どうしたの?」

入ってすぐの部屋のテーブルでレボラの妻のタナが書き物をしていました。

タナは聞いた話だと、タナもまた実家が馬を扱う家だったそうで、ここでは実際馬に触れる部分を全てレボラに任せて、馬小屋にかかる経費、道具の管理、稀に買い付けをしている。

日に焼けた赤っぱい髪の毛をピンでくるりと纏めた、まさにチャキチャキという形容詞が似合う女性だった。

僕が、今日は馬小屋で働く旨を告げると、タナは、ふーんと頷き「仕事着ならトリーの部屋に仕舞ってあるよ」

「はい」

僕は勝手知ったるとトリーの部屋に行き、着替える。

久し振りに着た作業用のダボツとした服が懐かしい。

屋敷で着ているビシツとした服も着心地が悪いつてわけじゃないけど、やっぱりこっちの方がしっくりくる。

肌に馴染む感触にニマニマしていると

「あんだ変わってるね。あっちで働いたらこっちで働きたいなんて思わないよ、普通」

タナが片方の口の端を上げる笑い方で僕を見ていた。

「僕の実家がこういう仕事してるんで、この格好だとなんか落ち着くんです」

見られていた恥ずかしさを隠しながら言うと、タナの笑いが深くなつた。

気が通じたというか、たまたま誰かと話していて、その人が自分と同じ物が好きだったのを知った時に出してしまうような笑みだった。

「こっちが好きなのはわかるけど、あんだの本業はあっちだろ。ほどほどにしときなよ」

タナの言葉は励ましと注意が混じっていた。

「レボラなら、今日新しい馬が来るから馬小屋の方にいるはずだよ」

「はい」

僕は馬小屋に向かって駆け出した。

その後、僕は夕方まで仕事を手伝い、屋敷に戻った。

ルイスお嬢様は翌日の昼過ぎに戻られる予定らしかった。

その日の夜、同室のメンバーで少し話した後、ジュリアンは普段通り勉強部屋に行った。

僕もたまに行っているのだけど、蝋燭代は自分持ちなので頻度は増やせない。

町を出た時に母親から貰ったお金でジュリアンの買い置きを一本買ったけど、僕の給料がいつから貰えるのか分からないので無駄遣いは出来ない。

それと、マックスもジュリアンに続きドアに向かう。

「どこ行くの？」

と、つい聞いた。

「お子様にはまだ早い話だ」

掌をひらひらさせて躲された。

言い方からして、酒か色恋だと思う。

両方とも、まあ少しだけ、経験してないわけじゃないんだけど、マックスや大人から見たら子供の粋を出ていないんだろうな。

そう考え、言い返せず、不満を顔で示すに止まる。

「2人は先に寝てな」

バイバイと手を振ってマックスは出ていった。

部屋の中が僕とカールの2人になると、カールが話しかけてきた。

「今日、ラカス馬小屋で働いてたでしょ？なんで？」

僕は今日の昼食をレボラ達と食べたから、カール達が食べる順番の前に僕がいなかった。

不思議がつっていると、残った昼食を渡しに行った人が馬小屋で僕を見たらしい。

それで僕がなにかやったのかと思ったそうらしいのだが、ジュリアンに聞く勇気は無かったようだ。

僕は少し考え

「今日は人手が足りてるって言われたし、馬小屋に新しい馬が来たから手伝いだよ。僕の家そういうことしてたから」

ルイズお嬢様が出かけていることはカールも知っていたし、僕の将来の話はしなかった。

あまり言いふらしていいことだとは思えないし、申し訳ないけどカールはジュリアン達程信用出来なかったから。

それでもひとまずカールは、へー、と納得してくれた様子。

僕もここに来てから知ったのだけど、基本的に他の人の仕事を手伝ってはならないらしい。

手伝ってくれた、よりも、仕事を奪われたと感じるそうだ。

1人で仕事が出来ない人と見られるのだろうか？

「ラカスの家つてこの前言ったところでしょ？大きいの？」

カールはまた聞いてきた。

ジュリアンらがいると気後れして殆ど喋らないのだけど、2人が仕事で遅くなったりすると結構頻繁に話しかけてくる。

多分リンの時と同じことで年の近い者、そして同性が僕しかいないからだと思う。

上はマックスと同年くらいになってしまっし、基本的に女性の方が多い。

使用人の中で一番偉いのは執事長のジェロームなんだけど、娘が三姉妹なのだから女性の数は仕方ない。

お陰でリンは仲良くできる友人を既につくり、仕事の時以外で話しかけてくることはあんまり無くなった。

「家の広さでいうと宿屋もやってたからそれなり、それと馬を走らせる場所があるから結構広いといえば広いかも。でも、カールの家とじゃ比べ物にならないよ」

家以外の部分が広い僕の家と違い、以前聞いたカールの家は単純に大きい。

「でも、毎日馬に乗れるんですよ？」

「甘いよ。だって冬も休めないんだよ？」

年でいえばカールはいっこ上だけど、僕のほうが先にいたのと担当の仕事を持っているということで、同い年のように話すことが普通

になっていた。

「ラカスみたいなのがいて良かったよ。ジュリアン達と一緒にいると緊張しっぱなしでさ」

カールはそう言う。

僕だってジュリアン達と話すのは苦にしているわけじゃないけど、それなりに気を使う。

僕もカールみたいなのがいて良かったと思う。

僕とカールは眠りに落ちるまで他愛無い話を続けた。

周囲の環境が全く変わってしまった。

帰りたくない？

そう聞かれたなら、多分、僕の答えにほんの少し嘘が混じる。

嘘（後書き）

うーん、2部になっても展開の早さは変わらないですね。  
頑張ります。

読んで頂いたことに感謝

## 魔法使い

春が終わろうとしていた。

朝と夕方はまだ肌寒いんだけど、昼間の日差しは暖かいを僅かに超える。

だけど、太陽が雲に隠れると風が涼し過ぎる気がした。

そんな微妙な時期。

だからカトレアお嬢様が体調を崩されたと聞いた時、季節の変わり目だもんなと思いついた。

僕はカトレアお嬢様が好きだ。

恋愛感情ではないと思う。

どうやらルイズお嬢様の部屋の窓から庭が見えるようで、庭を散歩するカトレアお嬢様を見つけると部屋を出て行くみたいだった。

そのルイズお嬢様に付いて行くお陰で、何度かカトレアお嬢様に声をかけて頂いた。

一言二言の短い言葉のだけど、人柄というか、優しさみたいなものが感じられて、その度に尊敬と好意が積もっていくような気がする。

「カトレアお嬢様は人気があるのよ。御声をかけて頂いたってだけで自慢出来るもん」

リンがそう言うのも当然だと思う。

殆どの使用人が口だけでなく、カトレアお嬢様個人を思って快方に向かって欲しいと思ってる僕を感じた。

僕もその内の1人で、早くまた庭を散歩出来るようになって欲しいなと思っていた。

その日の領主一家の夕食時のこと。

僕はその間に決められている掃除をするために、掃除道具を手にそ



の場所に向かおうとすると、カールが寄ってきて

「ラカス、ちょっとお願いがあるんだけど」

と言う。

「何？」

聞くと、カールは両手を合わせて

「仕事代わってくれない？」

と頼まれた。

僕はまだ人手の一員であって、僕でなければならぬわけじゃない。問題が無いといえば無い、のだけど

「カールって何係だっけ？」

僕だってあまりに大変な仕事なら代わりたくない。

「カトレアお嬢様の部屋に夕食を持って行くだけだよ」

カールはことさら簡単そうであることを強調してきた。

なんか、それが逆に怪しい。

「それならカールがやれば良いじゃん」

僕が突っ込むと、カールは目をしばたかせ

「えーと、ほら、僕、カトレアお嬢様の前に立ったことないしさ、

緊張して何かしでかしたりするかもしれないしさ」

疑わしさは無くならないのだけど、あまりにも、お願いお願いと迫ってくるので

「良いよ」

結局応じた。

カトレアお嬢様なら面倒臭いことをしないだろうと思ったのと、体調はどうなのか関心があったからだ。

「ありがとう」

カールは素早く僕の持っていた道具を奪うと

「キッチンのところにマックスがいるから」

そう言い残して僕の掃除場所に行ってしまった。

僕はカールの行動に納得出来ないものを感じつつ、キッチンの方に向かった。

確かにキッチンに続く通路にマックスが立っていた。

気になるのは、マックスの横にマックスよりちよつと年上のメイドが立っていて、そのメイドがトレイに乗せた病人食を持っていること。

そして、別にカートが一つあり、その上に乗っているもの。

大きめの器に入った水、パンを細かく千切ったもの。

この辺は、カトレアお嬢様がルイズお嬢様に怪我した小鳥を拾ったと話しているのを聞いたことがあるので、何匹か飼っているんだと思う。

問題は、ドンと置かれた肉の塊。

「気にすんな」

マックスはスツと僕から目を逸した。

「いやいやいや」

「するよ。超するよ。何がこれを食べるのさ」

「…小鳥が食べるんだよ」

絶対嘘だ。

どんなに聞いても、気にすんなしか言わないマックスに見送られ、渋々カトレアお嬢様の部屋に向かう道すがら、僕とマックスのやり取りを苦笑いで見ていたメイドから、カトレアお嬢様が部屋で小鳥の他にも熊や蛇を飼っていることを聞いた。

それでも、いつもなら棒などで牽制をしながら餌をあげているそうなのだけど、今日は飼い主がいるので素手で行けと。

「騙された。絶対騙された」

「大丈夫よ。まだ怪我人はでてないから」

絶対に手伝ってくれなさそうなメイドに励ますように言われた。

「お嬢様、ご夕食をお持ちしました」

身の危険の無いメイドが、僕に、置いたらすぐ逃げるのよと言ったメイドが、部屋に入っていく。

僕も続いて入ろうとした瞬間、匂いを嗅ぎつけたらしい数種類の動物の鳴き声が聞こえた。

小動物なんて目に入らない。

熊がいる。

蛇がいる。

ちよつと、虎は聞いていないって。

「待て」

とつさに両手を突き出し、そう口にしていた。

途端、動物達が急ブレーキをかけた様に止まる。

習慣というか癖だった。

実家で馬に餌をやる際に僕が一度に運べる量が少ないので、ある程度運ぶまで待つように言うのが身についていた。

なにはともかく、今がチャンスだと思う。

「待てよ、今、置くから、待てよ」

一々様子を見て声をかけながら餌を絨毯の上に置かれた大小様々な器に入れていく。

僕が目を逸らした隙に、蛇がそろそろと前進した。

「駄目。下がる下がる」

手で突き出すようにして後退を指示すると、蛇は素直に従う。

ようやく全てをカートから移すと

「よし」

僕の声と同時に我慢していた動物達が御飯に飛び掛り、食べ始めた。ふいー。

一仕事終えたと肩を撫で下ろしていると

「まるで絵本の中の魔法使いみたいね」

後ろから聞こえた楽しげな声に振り返ると、愉快そうに笑うカトレアお嬢様と呆気にとられた顔のメイドがいた。

僕は考えてやったことではなかった。

「実家の馬にやっていたので、ついとつさに」

しどろもどろになりながらも正直に話した。

僕はこれまで馬以外に話しかけたことが無かった。

元々最初のきっかけが自分の馬だったので、他の馬はその延長線上のことだと捉えていたからだ。

デーメーテールの時の白いやつも妖精の一種だと考えていたから、動物という認識は無かった。

「お家で馬を飼っていたの？」

「え、はい、そんなにたくさんってわけじゃないですけど」

思いもよらないことにカトレアお嬢様が話に乗ってきたものだから、もう自分が何を言っているのか分からない状態になっていた。

その時、耳元で鳥の羽ばたきと鳴き声があった。

体の一番小さい鳥が僕に向かって何かアピールしている。

パンを入れた器を見ると、体の大きいものが集まっていて、小柄なものがあるとかが隙間から嘴を差し込んでいる状態。

僕に訴えかけている小鳥ではしばらく食事にありつけそうにない。

多分、何とかして欲しいと言っているのだろうけど、生憎と僕はカトレアお嬢様に話しかけられている最中。

どうしたものだろうかと、カトレアお嬢様をそつと窺つと

「私に気を使わなくて良いわよ。その子が貴方を頼ってるんでしょ  
う？」

あっさり許可をくれた。

僕は鳥たちの間を縫うようにして餌の器に近づき、両手を器にした分だけ分けてもらう。

そのまま器から離れ、食べやすいようにとパンを入れてきた皿に入れると小さい鳥達が集まってきた。

僕を最初に頼ってきた小鳥が自分の所有権を強調する為、翼をばたつかせる。

「そつというのは駄目」

注意をすると、素直に翼を収めて一心不乱に食べ始めた。

他の鳥達もそれに倣う。

これで一件落着、なんて思っている

「ありがとう、小さな魔法使いさん」

カトレアお嬢様に面白がっているような口調で言われた。

そして、傍で様子を窺っていたメイドに

「下げるのはこの子にしてみらうから、貴女は戻って良いわ」

と、言い、メイドは戸惑いながらも言葉に従い、部屋を出て行った。僕は1人残され、どうしたものかと思っていると、食事を終えたらしい大型の動物達がのそのそと僕の周りに集まり、僕の匂いを嗅ぎまわり始めた。

さすがに自分の周りを熊や虎にグルグルと回られるのは良い気持ちがない。

僕が身を竦め、じつとされるがままになっていると、カトレアお嬢様はクスクスと笑い

「貴方に興味を持ったみたいね」

と、まるで子犬や仔猫が初めての人に会った時の様子を見ているような口調だった。

僕、噛まれたらエライことになるんだけどなどと思いつつも、その後もしばらく匂いを嗅ぎ続けられるままになっていると、飽きたのか僕の周りに好き勝手に座ったり寝転んだりしはじめる。

鳥達も集まってきて、好き勝手に肩や頭に留まりだした。

カトレアお嬢様は身動きの出来ない僕を笑うだけで助けてくれようともしない。

それどころか

「魔法使いさんは笛は吹けるのかしら？」

そう聞かれたので、僕は、吹けないです、と答えると

「じゃあ、練習しないと駄目ね。魔法使いが笛を吹いて町を歩くと町中の動物が後ろについて歩くのよ。素敵じゃないかしら？」

そう言いながら、想像したのだろう光景に子供みたいに笑っていた。それどころか、僕が口笛ならと言うと、やってみてとお願いしてきて

「まあ、素敵」

僕の口笛が吹くと、大きい動物は口笛に合わせてるように体を揺らしながら鳴き声を上げ、鳥達が部屋中を飛び回った。

カトレアお嬢様は手拍子を打ちながらニコニコと笑っている。

その姿はずっと年下であるはずのルイズお嬢様よりも幼く見えた。

その後、僕を騙したカールのことだけど、カトレアお嬢様が元気そうということもあり、僕の面倒くさい仕事を一回交代するということとで許した。

**魔法使い（後書き）**

誤字なんかは後日に。

カトレアのキャラは大丈夫でしょうか？

読んで頂いたことに感謝

## 兄弟

夏のある日、僕がいつも通りの仕事を終えて部屋に戻ると、ジュリアンから一通の手紙を渡された。

差出人はラッセルだった。

早速手紙を見ると、出すのが遅くなったことを謝る文から始まり、中央では見る物全てが珍しいこと、新しい仕事場は自分の家とは比べ物にならない程キツイこと、来た当初は仕事が終わったらすぐに寝てしまっくらいだったと書いてあった。

「それでも毎日が楽しいぜ、ラカスの方はどうだ？」  
最後の一言が妙に心に残った。

手紙が来た翌日のこと。

ルイズお嬢様が、まだ容体が優れないカトレアお嬢様のお見舞いに行った。

僕らも当然付いて行く。

部屋に着くと、ルイズお嬢様だけが中に入り、僕とリンは部屋の前で終わるのを待つ。

しばらくかかるんだろうなと思っていると、リンが

「ラカス、昨日はカトレアお嬢様はどんな御様子だったの？」

と尋ねてきた。

「一昨日と変わらないよ。お元気そうだった」

僕は簡単に答える。

カトレアお嬢様が部屋でお食事をとる場合、動物達に御飯をあげるのは僕の仕事になっていた。

一番初めに一緒に来たメイドの推薦に依るもので、選ばれたというより押し付けられたって感じ。

なので、あまり嬉しくない。



メイド長の僕に向ける視線が少し怖くなったし、そのうち特別訓練とか言い出しそうなのが恐ろしい。

しかも夕食を下げるのまで僕がやるので、メイド長から

「余計なことは話してないでしょうね？」

なんて度々言われる。

「はい、カトレアお嬢様が御飼いになっている動物に餌を与えるのに必死なので」

僕はその都度そう答えている。

本当は、カトレアお嬢様が僕の家のこととか聞いてくるので、それなりに気を使いながら色々話してしまっているんだけど、言わなきゃバレないと思う。

まあそれはともかく、僕の言葉にリンが心配そうに

「早く良くなると良いわね」

「そうだね」

僕が同意をした時だった。

カトレアお嬢様の部屋の扉が開いた。

その音に自然に背筋を伸び、並んで身構える。

もう習慣というか癖になっていた。

予想より早いなどか思いつつ待っていると、ルイズお嬢様が不機嫌

そうな顔をひよっこりと出し、嫌そうな、本当に嫌そうな表情で

「ちいねえさまが呼んでるわ」

それだけ言うと、すぐさま室内に戻ってしまった。

「なんだろう？」

僕とリンは顔を見合わせて、首を傾げた。

夏の青い空に白い雲、適度に張り出した枝が作る木陰はとても気持ちが良い。

僕はいつもカトレアお嬢様が散歩していた庭で寝そべっていた。

それでも一応仕事中。

僕の周りでは熊や虎、犬達がそれぞれ好きな格好で体を投げ出している。

今さっきまで僕が投げた枝を追い掛け回して庭中を走り回っていた。少し離れたところでは、ルイズお嬢様が緊張で固まっているリンから野菜を受け取り、兎とかの草食動物に御飯をあげている。

こうしているのは

「動物達の相手をしてくれないかしら」

とカトレアお嬢様は例のふんわりとした口調で言われたからだ。

小動物なら他の使用人でも出来るけど、大型動物はそうはいかない。不平等にならないようにと白羽の矢が立ったのが僕達、というか僕だった。

正直断りたかった。

だって、好き勝手暴れられたら物理的な意味で面倒みきれないもの。

「魔法使いさんなら大丈夫よ」

柔らかい癖に有無を許さない強さを持つカトレアお嬢様の言葉に、結局頷かざるをえなかった。

その後、僕を先頭に動物達がぞろぞろと廊下を歩き、横道に逸れようとすると動物はたしなめられるという中々不思議な光景があった。

あの、僕らと一緒に歩くことを嫌がるルイズお嬢様も呆気にとられた顔で何も言わずについてきたのだから相当なものだと思う。

庭に着いてもルイズお嬢様がそのままだったので、僕が好奇心で犬にお手をさせると、ルイズお嬢様は目を見開いて驚き、上げた僕の足を飛び越えさせると拍手までして喜んでいました。

「もう一回やって」

そう言われ、二回ほど繰り返したところで、ルイズお嬢様は自分の態度に気付いたみたいで、手遅れだと思うけど、フンとそっぽを向いてしまった。

僕が仕方ないなと思しながら、足元の犬を抱き上げて、ルイズお嬢様に頭を撫でてあげて下さいと言うと、ルイズお嬢様は一生懸命目が輝きそうになるのを僕に隠しながら

「しょうがないわね」

とあくまで僕の催促に応じたといった様子で手を伸ばしてきた。

ところが、撫で始めると犬がくすぐったそうな声を出し、しかもルイズお嬢様の指を舐め始めると、もう目が輝くのを隠すどころではなく、とろけるような笑顔を浮かべて撫で回していた。

動物の可愛さは偉大だと思った。

「兎はどうでしょう?」

「きゃー可愛い」

「リスです」

「もふもふー」

「虎です」

「・・・」

流石に虎は駄目でした。

落ち込む虎を僕が一生懸命撫でて慰めてやった。

小動物をルイズお嬢様とリンに任せ、大きいものは僕が相手をして、ひとしきり動物達が満足した様子を見せると、再び隊列を組んでカトレアお嬢様の部屋に戻る。

その途中、初めてルイズお嬢様に話しかけられた。

「あなた、メイジなの?」

どうやらカトレアお嬢様が僕のことを魔法使いと呼ぶので、そう思ったようだった。

「普通の平民ですよ」

僕が犬達にじゃれつかれながら応えると、ルイズお嬢様は、むー、と唇を尖らせた。

その夜、ジュリアンが勉強部屋に行くのについていった。

勉強部屋にあるのは文法や言葉使いの本の写しの他に、私的な箴言集や使用人の心構えを書いたもの、日記のようなものまで様々ある。ジュリアンはその中でも、過去の領地内で行なわれた行政のメモを

読んでいた。

僕はテーブルの反対側で祖父から譲られた昔祖父が書いた手帳を見ていた。

そしてこの後寝る前に何度か頭の中でその手順を繰り返す。

馬に触れない状況下で、祖父に教わったことを忘れない為にそれだけはしていた。

それと、今日はもう一つ目的があった。

「なにか僕に聞きたいことがあるんでしよう？」

ジュリアンはキリがいいところで頭を上げた。

「うん」

僕は、昨日同じ町から中央へ行った友人から手紙が来たことを話した。

「それで、不安、ってわけじゃないんだけど、本当にこうしてて良いのかって思うんだ」

焦り、多分そんなものだった。

自分の夢に真っ直ぐに繋がることをしているラッセルに対して、僕の夢を考えた時、例えば今日みたいな動物の世話をするのって将来の役に立つのだろうか？

ラッセルからの手紙を見て、急に疑問に思った。

ジュリアンは僕の話聞き終わると、少し考えた素振りを見せ

「歯がゆい気持ちは解ります。でも、ラカスは今貴重な経験をしているんですよ」

そう言った。

「貴重？」

僕が聞き返すと、ジュリアンは、ええ、と応える。

「ラカスが将来、単に平民だけを相手に商売をするなら話は別ですが、いえ、たとえそうだとしてもです」

そう言うと、ジュリアンは席を立ち、本棚から一冊の束をとると、ページをめくった。

「以前話したでしょう？商人の道に行った人がいると」

頷く僕の前にジュリアンは開いた束を置いた。

「これはその人の日記なんですが、何故誘われたかという貴族との対応が出来るからなんです」

ジュリアンが指で示した部分には、たしかにそう言われて誘われたと書いてあった。

「ラカスは馬に関しては天分の才があるとレボラさんから聞きました。見習いとして入ってもすぐに頭角をあらわせるでしょうね。でも、貴族との対応、そうでなくても商売の相手との対応、振る舞い、そういったものは才能ではないんですよ。訓練によってでしか身につかない。勿論、得手不得手は人それぞれですが」

ジュリアンの言うことはもっともだと思った。

屋敷に来てから、何人か出入りする商人を見る機会があつたけど、僕の町に来る商人とはどこか違っていているように感じられた。

「特にラカスはルイズお嬢様やカトレアお嬢様に接する機会が多いのですから、この日記を書いた人よりも学べる機会が多いはずですが、無駄にになってしまうか糧にするかはラカス次第ですけどね」

ジュリアンは話し終えると、僕の目を見て柔らかく笑いながら

「あくまで僕の意見ですが、少しは参考になりましたか？」

その謙るような言い方に

「そんな、すごい参考になつた」

と僕は強調するように頷いた。

ジュリアンはそんな僕を見て、苦笑いを浮かべながらわずかに肩を竦め「僕が言ったことなんて、ラカスも考えていたでしょう？」

そう言った。

「そんなことないよ」

ジュリアンの突然の言葉に戸惑い、そう返すと

「短い間ですけどね、僕はラカスがかつてるんですよ。君は年の割りに随分と大人びていますから」

ジュリアンは淡々と言った。

実はジュリアンの言ったことは当たっていた。

僕は今さつきジュリアンの言った通りのことは既に考えていた。にも関わらず、ジュリアンに尋ねたのは、甘えというか、肯定して欲しかったという気持ちからだ。ただ、それを白状するのはあまりに恥ずかし過ぎる。

「かいかぶりすぎだよ」

とだけ言っただけで逃げた。

「そういうことにおきましようか」

ジュリアンはまるで全てを見通しているかのような含みを持たせて僕を見逃した。

不思議とジュリアンのその態度は皮肉みみたいな嫌らしさがなく、とても自然で逆に心地良いくらいだった。

それで一つ思い当たったことがあったので聞いてみた。

「ジュリアンってさ、弟か妹がいない？」

ジュリアンの仕草は年下の妹弟を構う時のそれに似ている気がした。

「ええ、5人います。ちなみに、僕は長男です」

「やっぱり」

僕はつい口にしてしまった。

「ラカスも長男でしょう？」

「妹が1人」

答えると、今度はジュリアンが、やっぱり、と

「わかる？」

「ラカスがカールに対してみせる態度が長男っぽいですから」

ジュリアンは続けて

「マックスに言われたんですけど、僕達は色々と考えすぎてしまうらしいので、お互い気をつけましょうね」

困ったものですねと、笑いながら言った。

そのやりとりをして、何故僕がジュリアンに肯定して欲しかったか分かった気がした。

僕は、ジュリアンに対し、兄のような感覚を無意識に持っていたのだと思う。

今まで、僕が兄だったのでその感覚が分からなかったのだけど、一度理解してしまうと、自分の行動が全てバレていた気がして照れ臭くて、むず痒い。

でも、意外と、不快ではなかった。

## 兄弟（後書き）

作者は花粉症持ちなんです、加えて風邪を引いてしまい、頭部の穴という穴が大変な状態に追い込まれました。

全国の花粉症の皆さん、風邪には気を付けましょう。

閑話休題。

今回はルイズとちょっと仲良くなるきっかけみたいな感じで、すぐに仲良くなったりはしないのが、『起きてしまったので』の賛否わかれるところ。（笑）

でわでわ。

読んで頂いたことに感謝



## 味方

カトレアお嬢様の動物達の相手をしてから、ルイズお嬢様の僕とリンへの態度が少し変わった。

まず、僕らはルイズお嬢様の部屋に入れるようになった。

といっても積極的なものではなく、出て行けと言われないから出て行かない程度の話なだけどさ。

邪魔者扱いの視線は相変わらずだし。

それと、カトレアお嬢様の部屋へお見舞いに行く頻度が増えた。

しかも、毎回僕とリンを部屋の中に呼び込み、動物達の相手を言いつけられる。

そんなルイズお嬢様の変化にリンは

「認めて頂いたのかしら」とちよつと嬉しげ。

僕は適当に相槌を打ちながら、違うんじゃないかなと思っていた。

ルイズお嬢様は味方が欲しいんだろう。

そう考えていた。

今のところ、カトレアお嬢様が移られるのに反対しているのはルイズお嬢様だけ。

それでは、あまりに弱い。

そこで、目を付けたのが僕らであり、僕らによって陥落させたいのはカトレアお嬢様の動物達。

それを僕とリンに懐かせ、反対の数を増やしたいのだと思う。

それと、カトレアお嬢様しか出来ない動物の相手という作業を奪って、あわよくば屋敷でも十分療養出来ると判断させたいのだろう。

正直な感想、それでも中止にするのは無理だろうなと思うけど、ルイズお嬢様が絶対そう考えているってわけでもないし。

それにしても、今更やって意味があるのかななんて思ってた。

何故、ルイズお嬢様が突然そんなことを始めたのか、四日後に思い当たった。

その日は朝から屋敷中の使用人は大忙しだった。

昼過ぎに旦那さまが帰ってくるのだそうだ。

ルイズお嬢様はそれまで旦那さまを迎えるためにメイドが付きつきりですつと御着替えをしているので、僕とリンも引つ張り出されてあちこちを掃除道具片手に走り回った。

で、旦那さまは予定通り到着なさり、選ばれた何十人かの使用人が左右にズラツとならんでいたらしい。

らしい、というのは僕なんかはまだ旦那さまの前に出るには不十分なので、奥でカールやリン達と食事してた。

マックスもまだ駄目らしくて、ジュリアンだけが一番下ながら出たそうだ。

ジュリアンはやっぱり凄いと思う反面、自分の働いている屋敷の主人に会うのすら長い道のりなんだと気の遠くなる思いがする。

なんて思った日から二日後の午前中、僕とリンはルイズお嬢様の部屋にいた。

ルイズお嬢様は旦那さまが戻って来てから機嫌が良さそうだった。やっぱり説得を試みたのかもしれない。

どれだけ効果があったか疑問だけど、ルイズお嬢様の主観だとそれなりに効き目があったと思えるだけの何かがあったのだと思う。

当のルイズお嬢様はベッドの上に寝転び、パタパタと楽しそうに足を動かしていた。

そんな時、扉がノックされた。

リンが扉を開き出迎えようとして、向こう側にいた誰かを見た瞬間、顔が引きつり、頭が地面に着くんじゃないかってくらい深く頭を下げた。

その誰かが1歩室内に足を踏み入れ全身が見えた時には、僕の頭もリンと同様に深く下げられていた。

考えるよりも早く、体が動いていて、見たことないその人を旦那さままだと理解した。

がっしりとした体躯に白っぽくなった金髪、時代を経た強さが表情を作り、この表現が正しいかは分からないけど今まで見た中で一番大きいと感じた。

「しばらく2人にしてくれ」

バリトンの効いた声に僕とリンは操られる人形のように部屋の出口に向かう。

扉が閉まると、どちらからともなく深い溜息が出た。

持つてる空気が違うというのは、ああいう人物に対して使う言葉だと思う。

カトレアお嬢様もその内の1人だとは思いますが、ふんわりと惹きつけるカトレアお嬢様とは真逆の強制的に引き摺り込まれるような空気だった。

「びつくりしたー」

正直な思いが口から出た。

「私、頭の中が真っ白になったわ」

リンも僕も興奮気味で旦那さまに会った感想を言い合っていると、ルイズお嬢様の部屋から微かに声が漏れてきた。

分厚い扉越しで聞こえるのだから、相当大きな声を出していると思う。

扉に耳を着けるようなはしたないまねも出来ないもので、そつと扉に寄り添って中の様子を窺うと、ルイズお嬢様の、嫌、絶対に嫌、という叫びに似た喚き声が聞こえた。

多分カトレアお嬢様のことだと、僕もリンも気付いた。

おそらくそれは当たっていて、旦那さまが片方の歯を強く噛み合わせた表情で出てきた後、僕らは再び部屋に入ることを嫌がられた。

その後、昼食の時間になってもルイズお嬢様は部屋を出るのを嫌がり、運ばれてきた食事も一口も口にしなかった。

懐かしい午後の廊下で

「お可哀相ね」

リンがポツリと呟いた。

「そうだね」

僕も同意した。

ルイズお嬢様がどこまで僕達2人を認めてくれていたかは分からない。

い。

だけど、少なくとも僕は2人のお嬢様に好意を持っていた。当初僕が持っていた単なる貴族の1人という考えは、カトレアお嬢様への敬意やルイズお嬢様が僕らと同じような感情を持っていることを知り、親しみ、敬愛とでもいうのか、そういった感情へと変化していた。

内心、ルイズお嬢様の反対は無視されるだろうとは思っていたのに、悲しみにくれるルイズお嬢様の姿は想像した時より強く僕の胸を締めつけている。

そして表現は違くともリンも同じ感情を抱いていることを泣きそうな表情が示していた。

と、静かなそこに人の歩く音が聞こえた。

音のする方を見ると、知らない二十歳くらいの人がこちらに向かっていった。

格好からして貴族だと思う。

お客さんなんだろうか？

その貴族の後ろを知っているメイドが付いて来ていて、僕らに鋭い目つきでちゃんとしなさいと無言で伝えていた。

僕らは良く分からないけど、メイドの言うとおりに一礼をして通り過ぎるのを待とうとすると

「おっと、ここだここだ」

その貴族は急に歩くのを止め、ルイズお嬢様の扉をノックしました。見えた口髭をはやした横顔は、洗練された野生的というか、単純にかっこいいと分類されそうな顔だった。

「なにもいらぬわよ」

中からルイズお嬢様の声がした。

「違うよ、ルイズ、僕だよ」

その貴族はそう言うと、扉を開けて中に入ってしまふ。

あつという間のやりとりにリンに誰なのかを聞くことすら出来なかった。

「ワルドさま」

ルイズお嬢様の声が聞こえ、とりあえずその貴族の名前だけは知れた。

誰なのか、とか、僕らはどうするべきなのか、とかいろんな疑問が浮んだけど、まず気になったのは、ルイズお嬢様のワルドを呼ぶ声が妙に嬉しそうだったこと。

さっきまで悲しんでいたはずなのに。

あの貴族は一体、誰なんだろう？

ルイズお嬢様の変心ぶりが妙に気になった。

味方（後書き）

いつだったかの感想で、ワルドを出して欲しいとあったので、今現在見ているかは知りませんがね。

とりあえず、これからワルドの母親の件が載っている巻を探します。

でわ

読んで頂いたことに感謝

## 月明り

「ジュリアン、明日ってワルド様に来る前と同じで良いんでしょ？」  
「ええ、ワルドさまが使われた部屋は別のところが清掃するそうなので」

僕が尋ねるとジュリアンは思い出すようにして答えた。

「僕も？」

カールも聞くと、ジュリアンは僕の時同様に頷いた。

夜寝る前、というかジュリアンが勉強しに部屋を出て行ってしまっ前に翌日の担当場所を聞いておくのが習慣になっていた。

別に担当場所が変わることなんてそうそう無いのだけど、僕が実家の手伝いをしていた時の癖で聞いてしまったのがきっかけ。

多そうだったから早めに出るつもりで起きなきゃ、くらいのもものではあったのだけど。

そうしたらジュリアンに、良い心掛けですね、と言われてしまい、なんとなく直さずに続けていたらカールもそれが普通なことだと真似しだったので、今更直す必要も無いよねと続けている。

まあ、それはいいとして

「それにしても、今日はマックス遅いね」

マックスだけがまだ戻ってこない。

全く無いことでは無いのだけど、やっぱり同室の人が遅くまで働いていると、手伝うことは出来なくても気にかかってしまう。

「そうだね」

カールが同意した。

カールはどちらかというと、マックスの方が気安いらしい。

本人から直接的な言葉を聞いたわけではないけど、ジュリアンは口数が多い方ではないし、纏め役だけあってとっつき難いそうだ。

その点、僕から見てもマックスは噂話や流行に詳しいし、話題が豊富で話がしやすそうかもしれない。

もつとも僕もそんなに積極的に話す方ではないし、田舎育ちなので流行はよく分からない。

リンがたまにお嬢様方の服を見て、羨ましそうな顔をしているんだけど、多少の形の違いでそんなに違うもんなの？

「もう、戻ってくると思うんですけどね」

ジュリアンがそう言った時だった。

ドアの外から足音が聞こえた。

そして、部屋の前で止まると

「おーい、ちよつと開けてくれ」

マックスの声と、ドアの低いところが叩かれる音がする。

とっさに言われた内容を把握出来なかった僕とカールより一足早くジュリアンがドアに歩み寄り開いた。

「お疲れ様です」

「待たせた？」

「いえ、予定通りです。僕も持ちますよ」

「悪いな」

ドアの向こうにいたマックスは片手にワインの瓶を持ち、もう一方の手に抱えていた白い包みをジュリアンに渡した。

その様子を、何だろう？と窺っていた僕とカールをマックスが不意に見てきて、そしてにかつと笑うと

「ちよつと付き合えや」

そう言い、ジュリアンも、さあ、と言うだけでそれ以上説明もしてくれなかった。

屋敷の奥の奥、僕らの部屋よりもつと奥、勉強部屋の幾つか手前にある部屋。

そこは物置のように雑多な物が置かれていて、部屋の右奥の天井の一角を押すと持ち上がり、ずらすと星空が見えた。

「うわぁ」



四角に切り取られた景色と秘密めいた状況に声が漏れた。

「ここから屋敷の裏に出られんだよ」

先に小さな階段で上に出たマックスが、手を貸して引っぱり上げてくれた。

出ると確かに屋敷の裏で、何度か近くを通ったことがあるのだけど、出入り口の周囲を背の低い植木が並んでいる所為でちよつと見ただけじゃ分らないと思う。

「緊急の際の逃げ道の一つなんですよ。と、言っても、本来の使い道で使われたことは無いでしょうけどね」

ジュリアンが退かした蓋を元に戻しながら教えてくれた。

僕は、ふーん、と思いつつ

「で、結局何処に行くの？」

そう聞くと、マックスが、ニツと企むような笑みを見せてその場に座った。

そして持っていた瓶を、とんつと置く。

「ここでお前らの歓迎会するんだよ。あんな黴臭いところで飲みたかないだろ？」

ジュリアンもマックスの横に小さな布を引いて腰を下ろした。

「これを引いてください。汚れてしまうので。マックスですよ」  
既に座っていたマックスも

「ああ、悪いな」

と軽くズボンを叩いて座りなおしたので、僕らも受け取った布を使い真似て座る。

ジュリアンはそれを確認すると

「少し遅くなりましたけどね、御屋敷の仕事も大分慣れてきたようですし、僕達からのささやかなプレゼントです」

白い包みを開くと、ワイングラスが4つ、見たこともない色合いのハムみたいなのを薄く切ったもの、それとチーズが、ネットリしたものからポロポロしてるものまで何種類か。

「わっ、すごい」

カールが声を上げた。

ハムにしても、実家が金持ちのカールと違い、僕にはいつも屋敷の食事で回ってくる欠片みたいなのは全然違ってくるくらいしか分からないのだけど、とりあえず良い品なんだろうと目を奪われた。

それらを調達してきたマックスが自慢げに

「旦那さまが帰って来たからな。旦那さま自身の歓迎もあるし、近くの領地の貴族なんかも挨拶に来るから、その残りを、ちょっとな」「良いの?」

価値が分かるカールが聞いた。

マックスとジュリアンは苦笑い。

「俺らもな、ここだけなら長いほうなんだよ。貸してもんが幾つかあるからな。この場所もこの為に、汚さないって条件で明日の庭番に話つけてあるんだぜ」

マックスの裏事情に、新参の僕達は、なるほどと頷きながら聞いていた。

そこにジュリアンが割って入る。

「まあまあ、そういう話は乾杯してからで良いでしょう?」

僕達全員にワイングラスを渡すと、ワインを注いでいく。

僕、カール、マックス、そしてマックスがジュリアンのを注ぎながら「これも結構良いやつなんだぜ。少し酸味が出ちまったから、もう出せないんだけどよ。まだ捨てるにゃ勿体無いシロモンだ」

そう言われ、僕は月の光に透かしてしげしげと見てみたり、匂いを嗅いでみるけど、正直比較対象がないのだから良く分からない。

相変わらずカールは違いが分かるらしくて、本当だ、とか言っている。

しかめっ面でワインを眺める僕をジュリアンは笑い

「じゃあ、乾杯しましょうか」

僕らはワイングラスを持ち直した。

「えーと、そうですね」

ジュリアンは考えるように俯いて一度言葉を切ると、すぐに顔をあ

げた。

「僕達、4人が出会えたことに」

軽く触れあったグラスが、まだ慣れない月光の下に羽のような音を舞わせる。

## 月明り（後書き）

地震がありました。

作者は九十九里浜に近い所に住んでいるのですが、なんとか無事でした。

でも、家が壊れた部分もありますし、ちょっと行くと津波が来た地域もあります。

昼間に救急車やら消防車やらが走っています。

水も不足していますし、食料も売り切れが続いています。

それになによりまだ、余震も続いています。

これを読んでいる方の中には、作者のそこよりもっとひどい状況がもしれません。

こーゆー言葉を簡単に言っただけで良いか分かりませんが、他に言葉が浮かびません。

頑張らしましょう。

## 恋愛事情

乾杯をした後、高いらしいワインを飲んでみて

「なんか、濃いって感じ」

舌の上に薄く残るような感覚を率直に言うと、他の3人に笑われた。

「お前にやちよつと早かったか？」

マックスがからかうように言う。

僕が表情で不機嫌を表しても、マックスは気にも止めず自分の分を口にする。

「もし此処でなくとも貴族とつきあっていこうと思うなら少しは味が分かるようにしとけ。そうじゃないっつーなら、飲めればそれで良いけどな」

そう言われ、僕は残っているワインを見た。

慣れていないというのもあるんだろうけど、今のところあんまり飲める気がしない。

マックスはそんな僕を見て、指を一つずつ折り

「酒、煙草、女の話。この三つができれば、大抵の男なら初対面の時に困らないぞ」

その話には僕は、ふーん、と感心していると、隣にいるカールが興味を示した。

「マックスは煙草吸うの？」

「たまにな」

マックスはポケットから小さな長方形の缶を出す。

僕は、ジュリアンも吸うのだろうか、とチラッと窺ってみた。

「稀にマックスに貰って吸うくらいですね」

さらりと言われた。

「吸ってみるか？」

マックスが缶を開き差し出してくると、カールがすぐ手を上げた。

「ちよつと待ってる」

そう言うと、マックスは通ってきた物置に戻り、水の入った小さなバケツを持ってきた。

そして、カール、僕、ジュリアンに一本ずつ渡し、自らも啜える。「ほれ」

向けられた火のついたマッチにカールは先を当てるのだけど、焦げるだけで火がつかない。

何度も試みているうちにマッチの火が消えてしまった。

「そのままにしないで、吸うんだよ」

カールを一旦置いて、先に僕の番となった。

僕の前に出された火に口を伸ばし、焼ける音がして熱が移ると、深く吸い込み白い煙を吐く。

「おっ？」

「何？」

僕が聞き返すと、マックスはマッチをバケツに投げ入れ

「なんか様になってんな。吸ったことあんのか？」

僕はもう一度煙を吐いた後

「父さんと母さんが吸ってるのを見たことあるから」

とりあえずそう言った。

町にいる時、父親も母親も家では吸っていなかったけど、年に何度か、町に唯一ある酒場で友人達と飲んでいた時に吸っていたようだ。何回かだけど見たことあったし、帰ってきた時にほんのり匂いがしたこともある。

ただ、今のは別に全く意識せずに来た。

自分でも理由が分からなかったの、ひとまずそう言っただけ。

なんでだろ？と思っていると、マックスが

「カールはラカスから貰え」

と言って、自分とジュリアンの分を点け出した。

カールに啜えたまま先を向けると、カールも啜えたまま当ててきて、一度失敗した後、なんとか点いた。

そして、むせていた。

それでも初めてだという煙草に嬉しそうだった。

僕も、まだ形だけなのは分かっているけど、もう子供じゃなくなったんだと実感する。

しばらく煙草を味わってから、マックスは酒煙草に続いて女の話をしてきた。

「同僚で気になる子はいたか？」

その程度ではあったけど。

多分本来なら、どんな女とやったかみたいなお話なんだろうけど、マックスもさすがにと思ったようだ。

それでも気分の良くなったらしいカールは

「えー」

と、嫌がりながらも結構ノリノリな態度を見せる。

領主の家族は女性が多いこともあり、使用人も女性が圧倒的に多い。それも結構年上から僕の少し上まで。

ちなみに一番下は男は僕で、女はリンだそうだ。

渋る様子を見せたカールだけど、マックスが、1人くらいいるだと詰め寄ると、あっさり吐いた。

僕もたまに見かける、ちょっと年上の大人しそうな人だった。

マックスはしたりと笑い

「あー、あの子な。あの子は人気あるぜ」

なあ、とジュリアンに言う

「真面目で良い子ですからね」

微笑ましい笑みで応じた。

「ラ、ラカスはどうなのさ？」

カールが、言った恥ずかしさを誤魔化すように僕に振ってきた。

「僕？僕はいないなあ」

割と正直な気持ち告げた。

すると、マックスが楽しんでいるのがみえみえで

「照れなくても、他じゃ言わねえから」

と言ってきた。

カールも、そうそう、と迫ってくる。

「本当にいないんだけど」

「そうですか？ラカスはリンと仲が良さそうに見えますけど？」

ジュリアンが思わぬ言葉をかけてきた。

「リンには、そういう気持ち湧かないから」

そう答えた僕の何が原因かは分からないけど、マックスが突然、はーん、と

「お前、女いたな」

「え、そうなの？」

マックスの指摘に、カールが興味深々の表情で顔を寄せてくる。

僕がはつきりと嫌な顔をしていたのに、全然気付いてくれなくて結局ミランダの名前を吐かせられた。

とはいっても別にミランダがいたからってだけじゃ無いんだけどな。ここに来てから思ったのだけど、僕の好みのタイプってなんだかんだで母親とか母親の周りの人の影響が強い気がする。

屋敷で働く人ってみんなそれなりの教養があるのは分かるんだけど、なんかそれでは物足りない。

それと皆色白で、胸が大きかったりスタイルが良い人もいるんだけど、なんか新鮮すぎて逆に女性って気がしない。

この辺、誰とは特定しないけどやっぱり影響を受けてる気がする。

まあそれは良いとして、僕がミランダの名前を出すと、今度は

「で、その子とはどこまでいった？」

なんて聞かれた。

恥ずかしがるなよこんな場で、という良く分からない理由で、僕がキスをしたことがあることと、まあ色々なところを触った経験があることを話させられて、ようやくジュリアンが

「その辺にしてあげましょうよ」

と助け舟を出してくれた。

もつとも、船が出たところで既に殆どを話してしまったわけなので、マックスは、ほほう、なんて笑っているし、カールはもつと聞いた



いという顔してるし、ジュリアンも止めたもののマックスと同じような顔をしてる。

そんな生ぬるい空気が嫌で

「その顔はなんなのさ」

と言ってみても

「別にー」

と言われるだけ。

何度繰り返しても同じことが続くので、さっさと話題を変えるため

「そういえばさ、ワルド様ってルイズお嬢様と親しいの？」

つい先日のことを言ってみた。

「ああ、それは僕も知りたい」

なんとかカールも乗ってきた。

「ああ、ワルド様か」

マックスがまだ半分笑いながらも僕等に説明し始めてくれた。

本当に最近のことだ。

ルイズお嬢様がとうとうカトレアお嬢様が別荘に移ることを了解した。

きっかけは間違いなくワルドに会ったことだと思う。

僕がルイズお嬢様の部屋の前で初めて会った日から、ワルドは数日泊まっていた。

そしてその数日の殆どの時間、何故かワルドはルイズお嬢様と一緒にいることが多く、しかも、僕とリンに対して、外を散歩する時にはかなり離れているように言ってきた。

貴族とはいえ、僕らはワルドに必ずしも従う義務は無いのだけど、ルイズお嬢様に、そうして、と言われては従わざるをえない。

2人は庭を歩き回ったり、少し離れたところにある池の畔に座っていたりして何か話していたようだったが、話の内容は聞こえない。

それもワルドはルイズお嬢様の肩を抱き、ルイズお嬢様もそれを拒

まずに2人が寄り添う形なのがより一層2人の関係を気にさせる。最初こそ年が離れているから兄妹のようなものかと思ったが、あまりに親し過ぎる気がした。

リンに聞いても、知らない、と言うし、年上の使用人に聞いても、あまり詮索しないこと、と注意されるし。

ただ、使用人の態度がなんか変な気がした。

それは他の使用人に聞いたリンとカールも同じことだったそうだ。

「ワルド様は隣の領地のご子息でな、昔から旦那様が目をかけていたっていう有望株だ。毎年、何度か屋敷には来てるが、まあ噂なんだけどな」

そこで一度切り、マックスは煙草を啜え火を点けた。

「ルイズお嬢様の相手について話があるらしい。他の使用人が言わないのも、その辺の事情があるからだろ」

そう言われて、他の使用人の態度に納得。

ただカールは、信じられないという感じで

「でも、年が違いすぎない？」

「いくつ違いだっけ？」

マックスが聞き

「たしか、10才差くらいだと思いますけど」

ジュリアンが答えた。

「ええー」

カールがちよつと引いた素振りを見せる。

僕は、貴族という立場を考えると別に無くも無い話だとは思った。

あんなに年が離れているのはちよつと想像し辛いけど。

たしか、僕とルイズお嬢様が同い年くらいだから、僕がワルドと同い年くらいの女性と既に結婚を前提に付き合ってるってこと？

とても考えられないや。

逆に相手の方だって、僕を子供としか思えない気がするし。

多分カールもその辺の発想からだと思う。

「言いたくないけどさ、ワルド様って」

そこでカールは言葉を濁した。  
続く言葉はなんとなく分かった。  
僕はふと聞いてみた。

「ワルド様って、位は高いの？」

「いや、そんな高くはないな」

マックスの返しに、逆玉の輿という言葉が浮かぶ。

僕は少し考え込む。

そこで急にジュリアンが

「気にしないほうが良いですよ」

と、声をかけてきた。

何？とジュリアンを見ると

「仕方ないことですよ。幾ら位が低いといっても相手は貴族ですから、僕達とは最初から違うんです」

まるで僕を慰めるように話しかけてきた。

「何が言いたいの？」

意図が分からず聞き返すと、ジュリアンは優しい声で

「ラカスはルイズお嬢様のことを気にかけていたようですが、僕達平民の声は中々聞き入れてもらえないのが現実なんですよ」

そう言われてやっと理解した。

ジュリアンは、僕がルイズお嬢様とカトレアお嬢様の関係がなるべく良い関係に収まれば良いとずっと願っていたことを知っている。それが急にワルドという貴族が出てきて、途端に上手いこと収まってしまったことに少なからずショックを受けているだろうと思ったみたいだった。

「別に気にしてないよ」

これは本心だったのだけど、マックスは気を使ったのか

「ルイズお嬢様がとられるって決まったわけじゃないからよ」

茶化すように言ってきた。

「そうだよ。それに、ワルド様ってお金目当てでロリコンみたいだから僕は好きじゃないな」

カールも、僕を励ますようにさっきの続きを口にした。

悪意も無くは無いだろうけど僕を気遣う意図からなの分かるので、ジュリアンも注意をせず、苦笑いを浮かべていた。

「それは違うと思うよ」

その代わり僕がカールに言った。

僕はワルド様をお金目当てでも、ロリコンだとも思わない。

カールが、どうということ？と聞いてきてので、僕は自分の考えを話した。

まず、もしお金目当てだとすると、当然長女のエレオノールお嬢様は当主の問題もあつて家柄的な話で無理。

次に次女のカトレアお嬢様は病弱つてのもあり、一見つけこみやすそうな気もするけど、カトレアお嬢様はそういうのに鋭い気がする。あくまで僕の感覚だけど。

三女のルイズお嬢様は、カトレアお嬢様みたいな鋭さは無い気がするけど、三女と結婚するくらいなら旦那様に目をかけられていることを使つて、もっと下の貴族の長女と結婚する方が自由になるお金が多い気がする。

「三女といつても、それなりの金は動かせるだろ」

そこまで話した時、マックスが面白そうな顔をして突っ込みを入れた。

「それなりの金額でも三女の婿じゃ、ただ好き勝手に使いたいじゃ駄目でしょ？なんか新しいことを始めたいとか、ちゃんとした理由が必要でしょ」

今度はジュリアンも楽しそうな顔で聞いてくる。

「もし、ワルド様にそういった才能があるとしたら？旦那様もそれが分かれば無闇に制限をかけたたりしないでしょう？」

「だとしたら、家柄的にエレオノールお嬢様は無理でも、カトレアお嬢様の相手について考えるとと思う。ルイズお嬢様の婿だと、後々上のお2人が結婚した時、立場が上の人が出来てしまうから。それに、昔から見えていて、その才能があると見抜いたなら、婿養子にしない

で養子でも良いわけでしょ？」

僕の中で旦那様に会った時の印象が強すぎて、あの人が凡人なわけが無いという大前提があった。

そんな人が、自分が死んだ後のことを考えないはずがない。

それに、単にお金を使いたいだけの人間を気に入るなんて節穴ではないと思う。

マックスもジュリアンも、軽く頷く仕草を見ると、僕の話の続きを促す。

次に、ロリコンの話だけど、周囲から聞いた話が話を前提にすると、まずワールドは滅多にルイズお嬢様と会わない。

しかも、一応婚約の話があってもワールドは外から来た人なので、長時間ルイズお嬢様と2人つきりになることは無い。

そんな状態で何が出来るわけでもないし、したところでルイズお嬢様の態度や口からバレれば、相当な罰は逃れられないと思う。

しかも、正式に結婚できる年齢になった頃には普通の若い子になっているのに、一度その気にさせてしまった後、破棄するには相手の家柄が上過ぎて不利になってしまう可能性もある。

たとえ嘘だとしても、ルイズお嬢様がワールドに何かされたと言ってしまうえば、反論できる証拠が無い。

上手く別れられる確証は無いのに、今も将来的にもメリットが無さ過ぎる気がする。

「そんなことを一切考えてないとしたら？」

「旦那様に目をかけられるくらい優秀なんでしょう？」

マックスの問いかけに質問で返すと、マックスは、そりゃそうだなと言って納得した様子。

旦那様に絶対性を感じた延長で、旦那様に目をかけられたワールドの優秀さも間違いないと思う。

「で、結局、ラカスはどう思っているんですか？」

ジュリアンに結論を求められた。

僕は少し考え

「旦那様に恩義を感じていて普通にルイズお嬢様を気に入っているか、お金だけじゃない野心みたいなものを持つてるかのどっちかだと思っ」

そう言くと、ジュリアンとマックスは笑い出した。

僕がそこで自分が調子に乗って長々と自説を語ってしまったことに気付いてバツの悪い気がしていると

「さすがジュリアンが気に入るだけあるわ」

マックスが言いながら

「俺は、ワルド様はなんらかの野心を持つてると思うね」

自分のグラスを僕の右側に置いた。

「マックスもそう考えてたの？」

僕が聞くと

「いや、俺のは単なる勘ってやつだった」

「僕は旦那様を慕っていることを希望してますけどね」

ジュリアンは僕の左側に。

そして

「ラカスはどっちだと思えます？」

そう聞かれた。

2人とも僕の言ったことなんて筋道は違ってもとうに考えていたみたい。

「僕はどっちでも良い」

グラスを二つの間に置く。

ほう、と2人は声を出した。

「その心は？」

「慕っている場合はそれで良いとして、野心がある場合は旦那様の力が必要だからそうしてるってことでしょ。だったら、旦那様との繋がりであるルイズお嬢様を絶対裏切らないはず。ワルド様が優秀なら優秀な程、よっぽど想定外のことが起こらない限り、ルイズお嬢様には気付かせないと思う。だからどっちに転んでも良い」

僕の答えに2人は再び笑い出した。

「違ういわ」

「本当にそうですね」

ただ1人途中から話について来れなくなったカールだけが「ねえ、結局ラカスが言いたいのはどういうことなの？」ときよるきよると僕とマックス達をいつたりきたり。

マックスが簡単に言う。

「要はな、ワルド様は金目当てでもロリでも無くても、ルイズお嬢様を任せられる優秀な人ってことだ」

「そうなの？」

カールは理解できないものの、ひとまずそうなんだと納得したみたいだった。

戸惑うカールを僕を含む3人で笑っていると

「ねえラカス」

カールが話しかけてきた。

「将来さ、僕のとこに来ない？」

「突然何？」

「だってさ、ラカス僕より頭良さそうなんだもん。それなりのお給料は出すから僕の仕事を手伝ってよ」

カールの悔しそうなの、それでいてしっかり見せた商人の子供らしい抜け目無さに僕達は声を出して笑った。

ワルドの滞在中、自らが持ってきた食材でパイを作らせた。

その時初めてルイズお嬢様の好物がクックベリーパイだということを知った。

まだ湯気の出るパイにルイズお嬢様は目をキラキラと輝かせ、わざわざ良い品を取り寄せたと話すワルドにお礼を言う。

ワルドは胸を張り

「こんなこと、君が喜んでくれるならなんでもないことさ」

という態度をとると、パイを持ってきた使用人からナイフを求める。  
「お姫様の分は僕が切るよ」

さり気無くそう言うと、パイの中心にナイフを突き立て、二回切り込みを入れた。

そして、持ち上げる為にナイフをパイの下に滑らせ持ち上げると切込みが甘かったようで、引っ掛かる。

「あれ？」

力を加え無理やり持ち上げると、切れていなかったところが千切れ  
た勢いでパイの中のクリームだけが倒れかけ、皿に乗せた時にはパ  
イの生地だけが残りクリームは汚く倒れ、あまりにも見た目が悪く  
なった。

ルイズお嬢様もなんて言っていないか分からず、随分年上のワルドに  
「大丈夫です、私は気にしませんから」  
気遣うような言葉をかけた。

ついさっきの態度の後だけに、気遣われたワルドは滑稽に見えた。  
「いや、これは僕が食べるよ」

さすがにひけないと感じたらしいワルドは新しい皿を置くと、もう  
一度今度は一回切り込みを入れる。

だけど、前回の経験からより力を入れて下ろしたナイフの勢いで切  
り込みの反対の面からクリームが押し出され零れ落ちた。

「あー」

このパイが好物であるというルイズお嬢様は、せつかくのパイがぐ  
しゃぐしゃになることが嫌なようで

「もう本当に大丈夫です。私はさっきのを食べますから」  
そう言うとサツと最初の皿を取った。

さすがにそこまで言われては、ワルドももう一度とは言えず、ベシ  
やべしやのパイを皿に乗せるとルイズお嬢様の後に続いてテーブル  
に向かう。

先に皿を置いたルイズお嬢様はくるりと振り返り

「ワルド様にも苦手なことがあるのね」



「今日はナイフが悪かったんだよ」

ワルドが肩を竦め、子供の言い訳みたいなことを言う。

ルイズお嬢様はクスッと笑うと

「良いわ。今日はそういうことにしといてあげる。でも、次はもっと綺麗に切ってくださいのよね」

「分かった。練習しとくよ」

ワルドが苦笑いで失敗したのを認める。

「嬉しい。ワルド様が綺麗に切れるようになるまで、いらっしやる度にクツクベリーパイが食べられるのね」

ルイズお嬢様はまるで子供が悪戯に成功したみたいなお顔をした。

僕が初めて見た、年相応の真っ白な笑みだった。

ルイズお嬢様がカトレアお嬢様の療養を受け入れてから、僕は幾つか考えたことがあった。

僕が出会ってから今まで、カトレアお嬢様のこと以外で楽しそうに笑うルイズお嬢様を見たことがない。

それがずっと気になっていた。

屋敷中がカトレアお嬢様を移すことに賛成していて、当人のカトレアお嬢様ですら賛成を示さざるをえなかった。

ルイズお嬢様だって、それは必要なことだと理解していた節はある。だけど、カトレアお嬢様が本心では気乗りしていないことに気付いていたんじゃないだろうか？

そんなカトレアお嬢様を突き放せない優しさや、身体を治して欲しいという理性がせめぎあっていたんじゃないだろうか？

ルイズお嬢様は全員の賛成と自分の理性を相手取って優しさだけで戦っていたような気がする。

傷ついた優しさも傷つけた理性も全部ルイズお嬢様だけのもので、全部一人で背負っていた。

それも旦那様の言葉で限界に近かった上に、もともと感情的にさえならなければ、受け入れられるだけの素地はあったんじゃないだろう

うか。

それを使いワルドは説得したのだと思う。

ワルドの思惑なんてなんだって良い。

ルイズお嬢様が心から笑っていられるなら、それで良い。

それは間違いなく、僕の本心だった。

## 恋愛事情（後書き）

これで、ルイズお嬢様との出会い編をひとまず終了。

今回、過去最長じゃないでしょうか？

最後とか駆け足っぽい感じになってしまった気がします。

感想で、格好良いワールドというリクエストとワールドを格好悪くしてくれというリクエストがあったので、どっちにも見える感じで。

読んで頂いたことに感謝

## 姉

ワルドが来てから、というか、ルイズお嬢様がカトレアお嬢様の静養を認められてから、ルイズお嬢様の僕とリンに対する振る舞いが少し変わった。

午後、家庭教師の講義が終わる。

僕が二つの意味で偉そうな先生の為に扉を開き、室外に出て丁寧に頭を下げて見送ってから室内に戻ると、ルイズお嬢様がずっと固まっってしまった身体を伸びをして解しながら

「リン、喉が渴いたわ」

そう言っていた。

「はい」

リンは嬉しそうな声で返事をする、扉を閉めかけていた僕にぶつかりそうになりながら、なるだけ早くルイズお嬢様の要望に応えようとギリギリの早足で部屋を出て行く。

「ラカス」

そして僕も呼ばれた。

「はい」

返事をする、今まで講義で使っていたテーブルの上の本や椅子を綺麗に戻して置くように言われる。

僕はすぐに言われたことを始めた。

こんな感じで僕とリンの名前を呼んでもらえるようになった。

それと意識して僕達を使うようになったみたい。

だって、講義終わりでちょっと休憩するのは僕達が来る前から習慣化していたから、別に一言言わなくてもお茶は用意していたし、後片付けも言われなくなっちゃっていた。

それでも、名前を聞かれて、覚えてもらったというのはやっぱり大きいことだと思う。

ジュリアンもラッセルも、すごいと言っていたから、多分間違っているはず。

ジュリアンが言っていた、ルイズお嬢様の自立心をどーこーとか、それをワルドがどう突いたかは知らないけど、芽生え始めたってことで良いんだろうか？

ただ、ルイズお嬢様が僕とリンに何か言いつける度に何処となく楽しそうな顔をしていて、自立心っていうか、新しいおもちゃを買ってもらった子供みたいな感じがするのがなんとも。

リンが片手に紅茶をポット、もう片方に漉すための道具を持って恐る恐るカップに注ぐを見ながらそう思った。

いつもなら時間を見計らって紅茶を持ってくる年上のメイドがいるから、そのメイドが注いでいたのだけでも、ルイズお嬢様が

「リンに頼んだんだけど」

そう言ってからリンが注がなくてはならなくなった。

お陰でリンは毎日練習しているようだ。

カトレアお嬢様とルイズお嬢様の会話を偶々耳にしたんだけど、自分専用の使用人を持っているのはルイズお嬢様だけなそう。

勿論それぞれに担当はいる。

でもそれらは特定の何人かを除いて数人単位で入れ替わることもザラだし、あくまで領主の家に雇われている使用人だから常に傍にいるわけじゃない。

そんなことを言われたものだから、余計にルイズお嬢様は僕等を特別扱いするわけで。

なにかあれば僕達を呼ぶし、リンなんかは朝のお着替えの時の1人にも選ばれたりしてる。

僕も頻繁にカトレアお嬢様の動物の散歩をするように仰せつかった。小鳥なんかはカトレアお嬢様も見てるだけで済むけど、大型になると向こうはじゃれついているつもりでもそれなりに力がある。

カトレアお嬢様は最初は断ったんだけど

「ちい姉さまは安静にしてないと駄目よ」

そうルイズお嬢様に言われると、それまでのこともあったルイズお嬢様が言うのではと、じゃあ、となった。

もともと動物達は野生で育っていたものばかりで怪我や逸れていたところをカトレアお嬢様が見つつけ拾ってきたものなので、たまにはおもいつきり走り回りたくなるみたい。

そんな動物達の状態もそうだし、カトレアお嬢様の体調もそうなんだけど、なにより一番の根本はルイズお嬢様のカトレアお嬢様になにかしたいという気持ちからだと思う。

カトレアお嬢様に会う度に僕が役立っているか聞いてるし。

ありがとう、なんて言われるととても満足気だ。

お陰様で、僕に動物達の相手をする時用の服が支給された。

っていうか、レボラのところの作業服なんだけどさ。

一応僕の部屋にもクローゼットはあるんだけど、ジュリアンに確認したら土の匂いとかが移るからという理由でかけさせてもらえず、しっかりと土を払い落としてから二段ベッドの上の縁に引っ掛けておくことになった。

そんな感じでルイズお嬢様とは上手くやれるような気がしていた。その反面、僕やリンと同期やほんの少し年上なんかからは、お嬢様から名前を覚えてもらっているということまで羨望を含まなざしで見られるようになった。

まあ、それでもまだ給料貰えないんだけどさ。

あと、2人しかいないもんだから休憩もあんまり無いし。

カールなんかは休憩時間にお嬢様方のおやつの余りがもらえたりするらしい。

なんかそれはそれで逆に羨ましかったりする。

さて、夏もそろそろ終わりが近づいてきたものの、そのせいか暑い日が続き雨もあまり降らない。

カトレアお嬢様が食欲が無いと食事を断る頻度が増えた。

ずっとなんとなくダルそうにしてるから、多分夏バテなんだと思う。だけでも口にしないと駄目ということで冷たいスープみたいなのとパンだけは部屋に運ばれる。

そんな訳でやっぱり僕の出番が来た。

「このパンもあげてくれないかしら」

カトレアお嬢様の食事を運んでくるメイドが部屋を出ると、カトレアお嬢様は毎回そう言って、小さく一口か二口分千切っただけのパンを鳥たちあげるように渡してくる。

その一口二口分も口をつけずに元々パンが乗っていた籠にそのままつてことが殆ど。

それでいて、メイド達には食べたと言い、僕にもそう証言するように言うのだから。

こんなこと駄目なんだろうなとは毎回思うんだけど、無理やり食べさせるわけにもいかないし、カトレアお嬢様が心配かけたくないのも解るから、せめて千切った部分は食べてくれないかなとも毎回思ってる。

そんな儂い思いを抱きつつ、渡されたパンを小さく千切りながら小鳥たちに与えていると、突然部屋の扉が開いた。

カトレアお嬢様が驚き、声を上げる。

「お姉さま」

そこにいたのはエレオノールお嬢様だった。

2人の妹とは違う金色の髪を長く伸ばしたエレオノールお嬢様は眼鏡越しに鋭い視線を僕の手にあつたパンに向けると

「カトレア、貴女やっぱり食べてなかったのね」

怒りと呆れを混ぜたような口調で言う。

「無理はしなくても良いから、出来る限り食べなさいといってるじゃない」

「だって、食欲がわからないんですもの」

エレオノールお嬢様は注意するように強目に言ってもカトレアお嬢

様は全く意に介した様子は無かった。

そのせいかエレオノールお嬢様は更に語気を強め

「だからパンのバターも減らしたでしょう？せめて食べられそうな物を言ってくれないかしら。何なら食べられるの？果物なら大丈夫なの？」

「果物もあまり」

カトレアお嬢様が薄ら申し訳なさそうに言つと、エレオノールお嬢様は深く溜息をついた。

「だからってそんなスープだけで身体がもつはずがないでしょう」

エレオノールお嬢様は右手で額を抑える仕草をして、そこでそれまで2人のやりとりを見ていた僕の存在に気付いたらしい。

「ちよつと出て行つて」

そう言い、左手で払う仕草をされたので、僕は残っていたパンを荒く千切ると鳥の餌の上にはら撒き部屋を出た。

僕は部屋の外でしばらくの間、中から聞こえてくる微かなエレオノールお嬢様の声を聞きながら立っていた。

エレオノールお嬢様がカトレアお嬢様に注意してるんだろっけど、さつき見てた感じだとあんまり効果はなさそうな気がする。

僕はカトレアお嬢様が食べたくないと言うならしょうがないと思うんだけど、身内からしたら無理やりにも食べさせたいんだろっなでも、あんな風に頭ごなしに言つてもなあとも思う。

僕はエレオノールお嬢様をあまり知らない。

リンから聞く話だと、あまり部屋から出てこないそうだし、使用人の立場からだとあんまり好かれるタイプでもないそうだ。

カトレアお嬢様が使用人に優しいので余計そう思えるんだろっとは思うけど、僕も好んで傍に行きたくはない。

だから最初からあまり近づかないようにメイド長に言われていたのもあって、そうしていたんだけど今日初めて間近で見ってしまった。キツそうだなだな。



僕が貴族がどうこう以前に感じた第一印象がそれだった。

なんとなくリンから聞いた話も真実っぽいし、近寄らない方がいいって判断も正解な気がする。

つらつらそんなことを考えていると、怒った顔をしたエレオノールお嬢様が荒々しく扉を開いて出てきた。

僕が慌てて頭を下げて見送ろうとすると、いきなり人差し指を僕に突きつけてきて

「あなたね、これからはカトレアに何を言われても断りなさい」

良いわね、とまるで僕に怒りをぶつけるように言っと、僕の返事も待たずに行ってしまった。

その後ろ姿を見ながら、カトレアお嬢様やルイズお嬢様と大違いだと思った。

そんな思いが顔に出ていたのか、僅かに閉まりきっていなかった扉を開くと

「ごめんなさいね」

カトレアお嬢様に謝られた。

「い、いえ、そんな全く気にしていませんから」

僕は別に謝って欲しかったわけではない。

しかもカトレアお嬢様に謝られてしまうと逆に困ってしまう。

「エレオノールお姉さまはとても優しい人だけど、それ以上にとっても優しい人なのよ」

カトレアお嬢様はエレオノールお嬢様をフォローするようなことを言うけど、初対面であんな言い方をされた僕は素直に肯定の言葉を言えず、とりあえず

「そうなのですか」

そう言うのが精一杯だった。

僕の困惑が伝わったのか、カトレアお嬢様は困ったような笑みで

「エレオノールお姉さまは私のことを色々気にしてくれているのよ。今だって私の身体を気遣ってわざわざ様子を見に来て、あんな風に言ってくれるんだもの」

カトレアお嬢様に言われると、そうかもと思えなくもない気がするから不思議。

今度は納得したような僕を見て、でしょう、とカトレアお嬢様が微笑んだ。

その後、僕が食事の終わったカトレアお嬢様のトレイを持っていくとすると、いつも残されていたパンが無くなっていた。

そして、その次の日も二口分ぐらいだけどちゃんと食べていたカトレアお嬢様の姿があった。

なんか、ちよつと意外だった。

姉（後書き）

エレオノール登場。

カリンはあんまり知らないのでスルーします。（苦笑）

読んで頂いたことに感謝

## 指名

僕が目を覚ました時、室内はまだ薄暗かった。使用人の朝は早い。

一日の内、朝の雑用が特に多いので、太陽が上り始める前には起きるようには言われている。

実家の手伝いをしていた時も早い時間に起きなきゃってことはたまにあつたけど、それはそう何日も続かない。

お陰で恥ずかしながら屋敷で働き出した当初はトイーやジュリアンに起こしてもらっていた。

今では勝手に目が覚める。慣れって凄いと思う。

僅かに残る眠気に目を擦りながら起きて、唯一自分の場所であるベッドの上でシャツ、靴下、ひざ下のズボン、サスペンダーを身に着けた。

そうしてようやく頭が動き出したところでふと、いつもと違う光景に気付く。

いつもならベッドの間のスペースではジュリアンとマックスが着替えているのに、今日はジュリアンだけが既に着替え終えて髪を整えていた。

「あれ？マックスは？」

誰とはなしに聞いたつもりだったのに

「俺は今日から休み」

返事が上から降ってきた。

見ると、向かいのベッドの上の段から当のマックスが顔を出して手をひらひらさせている。

僕とマックスの会話が聞こえたらしい下の段のカールが首を伸ばし、すぐ上の段を窺いながら

「何日休みなの？」

と尋ねた。

「三日ほどな」

マックスが答える。

基本的に使用人の休みは週に一度となっている。

ただどそれだどこにも出かけられないので、出かけるのであれば他の使用人とやりくりして数日まとめて取ることもあった。

だから、三日休むのであればどこかに出かけるんだろう。

今度は僕が

「どこ行くの？」

そう聞くと

「ちよつとトリスタニアに行くつもりだ」

そんなマックスの答えにカールが

「良いなあ」

本当に羨ましそうな声を漏らした。

僕やカールのような新人は基本休日が無い。

その代わりというか、僕達はマックスのようなベテランに比べ仕事が終わる時間も早いし、休憩の時間もきちんとなる。

それに、特にこれをしてっていう仕事が無い時間もある。

そんな空いた時間には先輩を手伝いながら仕事を教わったり、仕事を見てもらって出来ているか確認してもらったりしている。

先輩から合格をもらうとその更に上の人に話が行って、以降その仕事は任せられるとなり、その積み重ねでようやく一人前となりお給料と休みが貰えるというわけ。

僕も最近はずお嬢様に気に入られたみたいだからという理由で、空いた時間は半強制的にメイド長や他のメイドから心構えや受け答えの仕方、作法なんかを嫌ってぐらい教えこまれている。

だからマックスのように休みが貰えてその休みを自分の用事に使えるというのは僕達のとおりあえず一番近い目標であった。

カールの、良いなあに僕も無意識に同調していると、ぴっしりと髪を整えたジュリアンが二回手を打ち

「ほらほら、二人とも手が止まってますよ」

仕度の途中だった僕とカールは慌てて動き始める。

「今日も一日頑張れよ」

聞こえたマックスの軽い言葉になんとなく口を尖らせた。

その日の午後のこと。

ルイズお嬢様は暇を持て余しているようだった。

家庭教師が来る日でもないし、歩き回るには暑すぎる。

こんな時、いつもならカトレアお嬢様の部屋にでも出かけるのだけど、昨日行った際のカトレアお嬢様の体調が未だ夏バテが続いていて話の相手をするのも億劫そうなのが明らかに見て取れたので、行くのも躊躇われていた。

それでも根が真面目なのか家庭教師に教わったことを復習していたのは流石だと思う。

僕達はその後姿を眺めていると、ふいにルイズお嬢様が首を回し、くるりと顔をこちらに向けた。

「ねえ、あなた達バツクギャモンって知ってる？」

突然の問いかけに僕とリンは顔を見合わせる。

僕には何の話かも分からないし、戸惑う素振りのリンもまた同様のようだった。

そんな僕たちの振る舞いから、知らないということを探したらしいルイズお嬢様は

「簡単なゲームよ。良いわ、私が教えてあげるから」

淑女のようなちよっと気取った仕草で言った。

近頃ルイズお嬢様はことあるごとにそんな態度をとる。

これも自立の一步、と言ってもいいんだろうか？

バツクギャモン。

簡単に言っていると、サイコロを二つ振り、その出た目の数だけ駒を動か

し先に15個の駒全てをゴールに全部入れた方の勝ち。

サイコロの目がゾロ目だったら、四回動かせる。

ボードの上では12箇所ずつ平行に並んでいるけど、概念上、一直線上に24箇所駒が置けるところがあり、最初の駒の置き方は決まっている。

端と端からお互いスタートして、反対側がゴール。

一箇所駒は二個以上置けるけど、自分の駒が一個しかない場所に相手の駒が来ると、自分の駒は盤の外にある振り出しに戻る。

だけど、自分の駒が二個以上置いてあると相手は駒が置けない。

飛び越えることは出来る。

ゴールは全ての駒がゴール前6箇所内に置かれていないと出来ない。相手の駒が一個も入っていない状態で勝つとギヤモン。

なおかつ、相手の駒が振り出し、もしくは振り出しから6マス以内であればバックギヤモン。

バックギヤモンが一番美しい勝ち方。

ルイズお嬢様のたどたどしい説明をまとめるとそんな感じ。

実際に僕達に持ってこさせた実物で説明をしてくれたのだけど、他人に説明するのは不慣れなようで、話が急に飛んだり戻ったりでイマイチ分かり難い。

「分かった？簡単でしょ」

これ以上無いってぐらいやりきったという顔で聞いてくるルイズお嬢様。

僕がそつとリンを窺うと、既に僕を見ていたリンの瞳は豪快に泳いでいた。

小声で、ラカス分かった？と聞かれたので、なんとか、と答えると縋る物を見つけた目をされた。

どうやらリンも良く分かっていなかったっぽい。

その癖、一生懸命説明してくれたルイズお嬢様の手前

「はい、良く分かりました」

とか言うし。

なんか、嫌な予感がする。

ルイズお嬢様はリンの返事に満足したみたいで

「じゃあ、どっちがやるの？」

ものすごい楽しみな顔。

うん、だからさリン、それとなく自分の前に僕を押し出そうとするの止めてくれないかな。

「僕がやります」

背中を突っつかれながら手を上げると、ルイズお嬢様の顔が若干曇る。

「ラカス？ちゃんと分かってるの？」

そりゃそうだろうね。

僕はルイズお嬢様より年下で、さっきの説明もどちらかというとりんに向けてしていた。

「多分、大丈夫だと思います」

正直言うと、自信はあんまり無い。

なんせ説明が説明だから、合ってるのかなってところもちよこちよこ。

だけど後ろからのプレッシャーもすごいわけで。

あれ？僕、なんか非道いことされてる気がする。

「まあ、そう言うなら良いわ。座りなさい」

促されて座ると、そつと傍にリンが来て、小声で

「大丈夫なのよね？」

「じゃあ、リンが代われれば良いじゃん」

そう言うと、リンは少しムツとした顔をしたが、代わる気は無いみたいで黙ってしまふ。

とりあえずルイズお嬢様の番から始めてもらうことにした。

始まってしまえばそれとなくルイズお嬢様の見よう見まねとさっきの説明でなんとなくは分かっていたから大きな問題は無かった。

ルイズお嬢様は意外と前へ前へ進むタイプらしく、僕の駒が1つの



箇所をどんどん狙ってくる。

僕はなるべく1つを作らないように堅実に進むようにした。そんな感じで取ったり取られたりしながらゲームは進む。

僕とルイズお嬢様の駒の殆どの駒がゴール直前に集まりだした頃、たまたま僕の最後方の駒がルイズお嬢様の遅れていた駒を取った。

で、次はルイズお嬢様の番、とルイズお嬢様を窺うと、ジト目で睨まれた。

「パスよ。置けるところがないでしょ」

僕のゴール前、つまりルイズお嬢様の振り出しの先は6マスまで僕の駒が二つ以上置いてあるから、サイコロの最大の目が6である以上ルールの上ではルイズお嬢様はどこにも置けないはず。

ルイズお嬢様は言わなかったけど、もしかしたらそうかなと思ってやったら実際そうだったらしい。

後ろの無言の叱責もあるし、空気を読んで駒をどかさうとすると

「止めて。私そういう気の使われ方嫌いな」

そうルイズお嬢様に言われた。

「私のことを気にせずにやりなさい」

なんとなく口元を引き攣らせながらも、ルイズお嬢様は余裕を見せるように振舞われた。

確かにあまりにあからさまだったなとは思う。

でも、かといって駒は戻れないので、それとなく隙間を空けるしかないと、まあ二回三回と続けてサイコロを振って、ようやくルイズお嬢様が4をだせば再開できる状態になった。

ルイズお嬢様は相当我慢していたようで、鼻息荒くサイコロを振る。

2と5。

振る。

2と3。

振る。

1と5。

段々ルイズお嬢様の引きつった笑みが解けてきて

「だーっ、あんたね、私に気を使いなさいよね」  
とうとうルイズお嬢様が爆発した。

ルイズお嬢様はそう言うけど、僕の駒はなんとか4と6を空けるのが精一杯で、後はもう渋滞を起こしていてこれ以上どうしようもない。

単純にルイズお嬢様の運が無いだけだと思う。

「もう、なんで出ないのよ」

既に僕の番はパス扱いになり、ルイズお嬢様は一人でひたすらサイコロを振っている。

にもかかわらず、出ない。

ルイズお嬢様が将来ギャンブルに手を出さないことを願う。

次第にルイズお嬢様は、ある意味良い感じの素敵な笑顔になり始め

「こここのサイコロ、私を馬鹿にしてるのね。そうなの、サイコロの分際で私よりも、ラララカスを選ぶっていうのね」

僕は何も聞こえません。

「い、良いわ。これまでのことは許してあげる、つつつ次よ。いいこと、次でなかったら（自主規制）にしてあげるからね」

将来ルイズお嬢様がちゃんと淑女になれますように。

「でなさい」

ルイズお嬢様が怒りなのかなんなのか、手をプルプルと震わせながらサイコロを転がした。

転がったサイコロが止まり、4と4の目がでたのと

「きゃー、見なさいラカス、これが私の運の強さよ」

部屋の扉が開かれたのはほぼ同時だった。

「うるさいわよ、ちびルイズ」

「エ、エレオノール姉さま」

ノックも無しに入ってきたのはエレオノールお嬢様だった。

僕は急いで椅子から下りた。

「エ、エレオノール姉さまは来週までお出かけの予定のはずでは？」  
ルイズお嬢様はカトレアお嬢様るときとは打って変わって、妙に畏

まっつて尋ねているように見えた。

寸前の淑女らしからぬ自分の言動を見られたのを差し引いても、気を使っているというか、怖がっているような気がした。

「予定はあくまで予定でしょ。それとも、私の予定が変わることがそんなに嫌なのかしら？」

「い、いいえ、けしてそんなことは」

ルイズお嬢様は一層身体を縮こまらせる。

カトレアお嬢様の時と同様にそんな風に言わなくても良いのになと思う。

しかし、そう思ったところで1使用人の僕は口を出せない。

エレオノールお嬢様の言葉は続く。

「それに何？さっきの態度は。ヴァリエール家の人間ともあるうものが使用人の前であんな態度をとるなんて、自覚が無いにもほどがあるわ」

そんな感じの説教が延々続き、ルイズお嬢様がエレオノールお嬢様を苦手になっている理由を良く理解した頃ようやく説教が終わった。

「分かったわね」

「はい。これからは気を付けます」

ルイズお嬢様は殆ど泣きそうな顔だった。

にもかかわらず、エレオノールお嬢様はそんなルイズお嬢様を見て、なおどころかより不機嫌さを濃くする。

カトレアお嬢様はエレオノールお嬢様のことを、厳しいけどそれ以上に優しいと言うけど、今の表情からしても、とてもそうは思えない。

僕が不満を顔に出さないように堪えていると、不意にエレオノールお嬢様が僕のほうを見た。

隠していたつもりだったけど、顔に出ちゃったのかと身体が強張る。

「あなた、私と来なさい」

予想外の言葉に一瞬意味が分からない僕を置いて、発したエレオノールお嬢様は既に踵を返すと部屋を出て行くこうとしていた。

リンを見ても戸惑っているだけ。

そして、俯いて肩を震わせていたルイズお嬢様は涙が浮かんだ瞳で僕を見つめていた。

僕を、心配してくれていた。

それで十分だと思った。

まさか殺されやしないだろうし、多少厳しく怒られたとしてもそれでお終いならそれで良いじゃないか。

だから、僕をエレオノールお嬢様の後を追う。

行き際、ルイズお嬢様に出来るだけの笑顔で

「大丈夫ですよ」

そう言った。

・・・多分ね。

痛いのかだったらちょっと嫌だなあ。

## 指名（後書き）

本当ならバックギャモンじゃなくて、その時代の貴族の子供の遊びにしたかったのですが、いかんせん節電の関係もあり、図書館に行けないので仕方無く。

トランプはその時代の遊び方が分らないし、ドミノは一番ポピュラーと思われるカンテットが結構面倒臭いので。  
チエスは駒の動きを教えるの面倒臭そうだなと。  
消去法なんですけどね。

でわでわ。

読んで頂いたことに感謝

## 大丈夫

大丈夫。

ルイズお嬢様を安心させたくて言った言葉。

そして、自分を安心させたくて言った言葉でもある。

何をされるか分からない怖さから自分を奮い立たせるために、口先だけでも安心が欲しくて言ったのだけど、そんな仮初の安心なんてエレオノールお嬢様について歩く一歩ごとには容赦無く砕かれていった。

まず、ルイズお嬢様のことで僕も責任が無くも無い気がする。

悪意があったわけじゃないけど、配慮が無かったと言われれば言い返せない。

次に、今現在歩く廊下が知らない廊下であること。

僕は歩いて良い廊下が決まっている。

屋敷の裏側の使用人専用の廊下と、仕事の時のみルイズお嬢様の部屋までとカトレアお嬢様の部屋まで。

ルイズお嬢様について行く時だけは例外だけど、ルイズお嬢様の行くところなんて、庭かカトレアお嬢様の部屋ぐらいだし。

で、なにより一番不安になるのが前を歩くエレオノールお嬢様。

カトレアお嬢様の時と今さっきのルイズお嬢様の時ぐらいしか間近で見たことが無いんだけど、感情的になりやすそうな性格のようだし、格式というものに厳しい感じがする。

他にも小さな不安の種はあるけど、とりあえずその大きな3つの要素が絡まりあい、僕の心を削っていく。

最初は何処かの部屋でメイド長なりを呼ばれ説教でもされるんだろうなと考えていた想像は、悪い方悪い方へと修正され、鞭で叩かれる想像が付け加えられていた。

鞭という発想は、以前祖父が調教で鞭を使っていた際に、人の躰に使うこともあるんだよ、と言われたからだ。

もつとも人間に使うような鞭は馬用のとは大分違うそうだし、祖父も僕の教育の為の笑い話のつもりだったんだろうけど、なんでこんなタイミングで思い出すんだろうか。

エレオノールお嬢様は、たしか僕より一回り上だと聞いた覚えがあるから19才なはず。

大人の思考で、出来たら寛大な処置をして欲しいなあ。

今まで祈ったことも無い神様に祈る僕をまったく気にしていないエレオノールお嬢様が足を止めた時、僕の想像は薄暗い地下室で鞭で叩かれるところまで発展していた。

来たか、と思いつつ、ひとまず地下室じゃなさそうだと思っていると、エレオノールお嬢様は僕をちらりと見て部屋の扉を開き、中に入った。

「待たせたわね」

中途半端に開かれた扉の隙間から、誰かにかけた声が聞こえる。

そして、それに応える声もはっきりしないものの聞こえた。

あれ？と思う。

こっちとしてはもう罰を受ける覚悟をしているものだから、急な展開に戸惑う。

「入りなさい」

廊下に残され、どうしたものかと思っていると中からエレオノールお嬢様から呼ばれた。

恐る恐る、失礼します、と入ると室内の造りはルイズお嬢様のよう。な誰かの部屋のようだった。

絵や家具の種類や配置はルイズお嬢様のものより地味というか実用的なものが多く、なにより一辺をぎっしりと本が詰まった大きな本棚が占めている。

この部屋はなんとなくエレオノールお嬢様の部屋のような気がした。その部屋の中央あたりにルイズお嬢様の部屋より小さなテーブルセットが置かれていて、そこにエレオノールお嬢様と2人の女性が座っている。

この2人がさっきの返事をした人物だと思う。

1人はエレオノールお嬢様と同じ年くらいで、肩口で切り揃えられた黒髪、きりつとした目鼻立ちをした綺麗な人。

スタイルも服の上から判るぐらい、とても女性らしい。

もう1人はそれより少し年下ぐらいで、茶色のツインテール。下ろしたら肩より少し長いくらいかな。

くりつとした目をした可愛らしい感じの子。

誰なんだろうと思うが、自己紹介もされず、2人の知らない女性は僕を上から下までを興味深そうに見てきた。

「どうかしら？」

エレオノールお嬢様が綺麗な方に尋ねた。

「問題無いんじゃないかしら」

綺麗な方はそう言うと、可愛い方に顔を向け

「アルカはどう思う？」

その言葉で可愛い方はアルカという名前だと知る。

「わ、私はお姉さまが良いと思うなら」

妙に緊張しながらそのアルカという女性は答えた。

お姉さまということは2人は姉妹なんだろうか？

似てない姉妹だと思う。

その似てない姉妹の姉がエレオノールお嬢様を見た。

それを受けると、エレオノールお嬢様は安心したようにホッと肩を落とし

「グレイスもそう言うなら、大丈夫そうね」

それで綺麗な方の人はグレイスという名前だとやっと分かった。

不意にグレイスのややツリ目勝ちの瞳が僕を見た。

目が合う。

瞬間、厳しそうな人だと感じた。

エレオノールお嬢様が感情を顕わにするタイプなら、グレイスは静かに怒りそうな感じ。



「あなた、名前と年齢は？」

急に聞かれたので、若干慌てながら名前と年を言うと、少し驚いたようでエレオノールお嬢様に

「随分小さな子がいるのね」

「一番下の妹の為に父様が雇ったのよ」

「あ、あの、エレオノールさまがとても気にかけてらした方ですよ  
ね」

ツインテールを跳ねさせながらアルカが言った。

エレオノールお嬢様は僕に目をやってから

「まあね」

と応える。

そして、今度はちゃんと僕を向いて

「もう戻っていいわ」

そう言った。

僕にはさっぱりだが、エレオノールお嬢様の用件は済んだらしい。  
部屋を出た。

「大丈夫？何かされたの？」

僕が戻ってきた時駆け寄ってきたルイズお嬢様の第一声はそれだった。  
た。

背後のリンも心配そうな顔をしていた。

「何も、されませんでしたよ」

とりあえず僕の身には何も無かったので、そう応えた。

実は戻ってくる途中迷子になって偶々出会ったメイドに事情を話して道を聞いて戻ってくる方が大変だったのだけど、それは関係が無い。  
い。

「そう、なら良かったわ」

ルイズお嬢様は胸元に手を当て、安心したように何度も頷いた。

その様子から僕を心配してくれていたことが分かり

「ご心配をおかけして、申し訳ありません」

そうお礼を言うと

「ししし心配なんてしてないわ」

ルイズお嬢様は強がるように言う。

「リンが終わったら、もう一回勝負よラカス。今度は圧倒的な差をつけてあげるんだから」

なんでもないように振舞うルイズお嬢様がとても嬉しくて

「はい」

僕はつい、笑みになった。

大丈夫（後書き）

グレイスとアルカのモデルは、『マリア様がみてる』の蓉子と祐巳を拝借しました。

まあ、クロスさせるつもりも無く、自己満足ですけど。（苦笑）

どっかでGSの横ルシも入れたいんですけどね。

原作キャラが出てるのに、二次を書いている感じがあまりしなないです。はてさて。

読んで頂いたことに感謝

## 従者

「グレイス様とアルカ様ですか？」

各部屋に支給されている蝋燭の明かりが僅かに照らす室内で、ジュリアンは腕組みをしたまま視線を宙に泳がせた。

「エレオノールお嬢様が学院にいた頃の御学友だそうですが、僕も今日初めてお顔を拝見したものですからね」

そう苦笑いし、オフターディングン、オフターディングンと呟く。

グレイス・フォン・オフターディングン。

アルカ・フォン・オフターディングン。

それが2人の名前だった。

あまりにも似ていなかったものだから、お姉さまと呼ぶのは呼称かと思いましたが、ちゃんと姉妹だったみたい。

邪推すれば、種違い腹違いなんてのも考えられるけど、まさか聞けないしね。

「あんまり大きくないのかな？」

僕が言った。

ジュリアンは長いだけあって屋敷を訪れたり手紙が来るような貴族の名前はほぼ全て知っている。

すぐに思い出せないとなると、直接に関われないような小さい貴族だと推測できた。

「どこかで見えたか、聞いた覚えがあるんですね」

ジュリアンは未だ記憶を掘り返している。

「あー」

声がした。

見ると、それまで黙っていたカールが小さく手を挙げています。

「僕、グレイス様とアルカ様は知らないけど、オフターディングン家なら知ってる、かも」

「本当？」

「うん、お父さんが話してるのを聞いたことがあって。多分、トリスタニアとゲルマニアの間ぐらいにあったと思うんだけど」

カールが自信なさそうに言った。そして、それを聞いたジュリアンが、ああ、と何かを思い出したような声をあげた。

「僕の言ったの、合ってる？」

カールがジュリアンに確認すると、ジュリアンは頷いて応えた。

オフターディングン家。

何本が存在するトリスタニアとゲルマニアを繋ぐ道路の一本を領地内に持つ小貴族。

トリストインとゲルマニアは直接的な戦いは無いものの友好的関係でもないそうで、ずっと以前からゲルマニア方面には昔ながらの武骨で忠誠心の厚い貴族が多く配置されているそうだ。

オフターディングン家もその一つで、でも、何年か前までは大して気にもかけられない存在だったらしい。

ゲルマニアから攻め込まれた場合、それを食い止めることを言い渡されているために常にある程度の軍備が義務付けられていて、後に残る交際費の少なさに、遅れる根回しを周りの貴族からも同情の目で見られていたそうだ。

それがここ数年、ゲルマニアの力が増し、伴ってそれまで押さえられていた物の流通が増えた。

道が通っていた領地は幾つかあるけど、急に増えた商人達に対しての考えで領地内で足並みが揃わないことが多かつたらしい。

元々商人達には、何を運ぶのかと、それぞれの道で決まった長さごとに幾ら、という形で税をかけていたそうなのだけど、急に増える税収をより多くと、品物にかける税や距離にかける税、一単位になる距離を変えたりと、それも翌日から突然という有様だったそう。宿場町の建設にも後手後手で、主要な道が重なる場所を安易に通れるようにして良いものかと考える父親と儲けを考える息子、またそ

ここに親族が入ってきてゴタゴタと。

先の税収の場合もそうだけど、家族間親族間の考え、そして聞こえる隣の領地の状況が猫の目のような状態を生み出したのだと思う。上手かった、と言うのはカールが聞いたお父さんの言葉。

オフターディングン家の場合、兄が当主であり変革を望まない父親を引き取り、変革派の弟に当主の座を譲って隠居をした。

そして、弟が流通に詳しい家の嫁を取り、成功したと。

ジュリアンが覚えていたのは、家の行く末の為に兄が弟に当主を譲ったという話が訓示の一つとして勉強部屋にある日記に書かれていたからだそうだ。

まあ、それでも万事上手くはいかなかったそうで、兄は隠居したものの、せめてものことなのか、一応分家として家をつくり、嫁を貰ったそうなのだけど、父親の希望もあつたらしく、古風な家柄の娘を貰ったところ、兄弟の仲は普通なのに、その嫁同士がものすごい仲が悪いらしい。

「だとしたら、グレイス様はどっち？本家？分家？」

一通り話を聞き終わると、それを聞いてみた。

本家と分家で育てられ方が全く違いそうだ。

ジュリアンが答える。

「本家の方だと思いますよ。乗って来られた馬車が今の流行でしたから」

馬車の装飾にも流行はある。

勿論、お金が無くてって場合を除いて長く使う方が良い場合もあるけど、それは見た者に与えたい印象に依る。

長く使っているものだど歴史の長さ、流行だと敏感さや勢いのある様子。

「それにしても、こんなところまで食い込んでとは思わなかったな」

カールが感想のように呟いた。

「旦那さまに、つてこと？」

僕が聞くと、カールは、そうそう、と頷く。

「何を運ぶにも一年先のこともかも考えるからさ、やっぱり後ろ盾が有ると無いじゃ違うもん。それにここだったら、僕の家もあるしね」

流石、商人の血筋だなと思う。

僕はそこまでは考えていなかった。

失礼ながら、エレオノールお嬢様にも友達っているんだなというのが僕の感想。

しかも、結構いい人達だった気がする。

僕もそんなに貴族と接したわけじゃないけど、なんせ名前を聞かれたのは初めてだったから。

ルイズお嬢様の時も名前を覚えられたっただけですごいって言われたし、カトレアお嬢様を除いて、名前を聞かれたことが無い。

使用人つてこと以外、必要無いんだろうな。

それが普通だと思うけどさ、なんとなく悲しい。

それと、アルカは妙に畏まっていたのもあって、あの2人には少し好感を持った。

「でもさ」

カールが不意に言った。

「なんでラカスが一緒に行くんだろううね？」

「さあ」

僕は首を傾げて見せた。

今日の仕事が終わって部屋でカールと話していると、同様に戻ってきたジュリアンからエレオノールお嬢様達が明日から出かけるので、そのお供を申し付けられたことを聞いた。

既に話は通っているらしく、僕に反対権は無い。

しょうがないからさ、せめて失礼が無いようにジュリアンからグレイスとアルカのことを聞いてはみたものの、役に立つような立たな

いような。

そういえば、今日の面通しはそういう意味だったのかも今更ながら思い当たった。

何が決め手だったのか分からないけど、なんで僕なんだろう？

その理由はさすがにジュリアンとカールも見当がつかなかった。

翌日。

行き先も知らされないまま、僕はお供として出発した。

その際、ルイズお嬢様が玄関前まで出てきてエレオノールお嬢様と二言三言しゃべっていた。

初対面だったらしいグレイスとアルカと挨拶をした後、こっそり僕のところに来て心配そうに

「くれぐれもお姉さま方に失礼のないようにね」と言われた。

「はい。ルイズお嬢様の使用人として恥ずかしくない振る舞いをしたいと思います」

そう応えると

「と、当然よ」

ルイズお嬢様は急に胸を張り出す。

「あなたは私の使用人なんだからね。恥ずかしくないようにしなさいよ」

僕が、はい、と言うと上機嫌な顔で頷くと去っていった。

正直、まったく見通しが立たない状況なのだけど、ルイズお嬢様が昨日の今日なだけあって、未だにエレオノールお嬢様の前ではビクビクとした態度だったものだから、ついね。

なるべく余計なことをしないようにしつつ、頑張ろうと思った。



従者（後書き）

書いてから気付いたのですが、（6000年前でしたっけ？）原作の昔の設定が分らないと困る部分があるなあと。

まあ、なんとかなるかな。

なればいいなあ。

そんな感じで。

それにしても、話が進んだような進まないような。

あ、それと、グレイスらの家名は、ノヴァーリス作『青い花』の主人公、ハインリヒ・フォン・オフターディンゲンからです。

作者は、ファンとかドとかの意味を分ってないので、その辺大目に見て頂ければ。

でわでわ。

読んで頂いたことに感謝

## 村

屋敷から出発したのは二頭立ての馬車が二つ。

そのうちの一つにエレオノールお嬢様達が乗り、もう一方は荷物用。当たり前前に僕は乗れず、荷物用の馬車の御者の隣に座らされた。馬車は進む。

僕は地図上の地理しか知らないの、有名な太い道を一度曲がられてから現在地が分からなくなった。

分かるのは僕の住んでいた町とは違う方向なことぐらい。

隣の御者に行き先を聞くと、出てきたのは知らない村の名前。

何も無い田舎の村だそう。

目的を尋ねても、知らないと言われた。

そらそうか。

出発してから二日目の昼間過ぎ、ようやく目的地の村に着いた。

東から北にかけて弧を描くように川が流れ、森が沿うように伸びる。

その村は森の窪みにしがみつくようであった。

馬車が入ると村長らしい人を含む数人が既に待っていて、エレオノールお嬢様達は村長からの歓迎の挨拶を受け、仕度が出来るといふ村長の家に案内されて行った。

歩いていくエレオノールお嬢様達3人の後姿は一様にこっさり首をコキコキ動かしている。

やっぱりな、と思った。

屋敷からこの村に来るまでずっと馬車に乗りっぱなしだった上に、貴族の馬車って中の座席部分を動かすとベッドになるらしい。

途中幾つか宿ぐらいありそんな村を見たけど、そういうところに泊まるのは貴族として相応しくないという信念があるそうなので、わざわざ寝心地が良いとも思えない馬車の中で。

馬車自体はそんな小さくないが、3人が寝るにはさぞ窮屈だったことだと思つ。

僕や御者は地面に敷物を敷いて雑魚寝だったから、まだ窮屈さは無かった。

それでも起きた時は身体がギシギシ言っていたのに。

そこまで貴族としての振る舞いを貫かれると、呆れを通り越して感心してしまいそうだ。

肩こりが襲うエレオノールお嬢様達が行ってしまうと、残された御者達は荷物用の馬車から屋敷の中へと荷物を運び込みだしていた。

手伝おうかと思つたが、メイド長から無闇に触るなどはきつく申し付けられているので、どうしたものかと思つていると

「あの」

ふいに声をかけられた。

振り返ると、至つて普通の農家の奥さんといった感じの女性。

「貴族さまに連れて来られた子ですよね」

少し緊張しているような気遣つた様子で聞かれた。

口ぶりからして何らかの話が通つてはいるみたい。

どんな話かは知らないが、おそらく僕に間違いないと思つので、はい、と答えた。

「こちらです」

そう案内されて向かつたのは村の外れに近い民家。

入り口から奥さんが中に向かつて

「ソニク、ソニク」

「はい」

奥から僕より幾つか年上の女の子が出てきた。

ミランダの姉のシャロンと同じくらいかな。

そのソニクというらしい女の子は、両手に一抱えほどの畳まれた村の子供が着ているような服を持っていた。

その中から僕のサイズに合うものを奥さんとソニク2人がかりで探す、それに着替えるように言われる。

とりあえずまず理由を聞きたかったのだけど、奥さんの答えは、難しいことは分からないので、の一点張り。

エレオノールお嬢様がそうするように言っていたと言われてしまった。では従う他無い。

「ちよつと大きいかしら」

着替えた僕の後ろに回った奥さんが呟いた時、外からノックが聞こえた。

アルカだった。

入ってきて僕の格好を見るや

「うん、ラカス君、似合ってる似合ってる」

ツインテールをぴよこぴよこさせて言われた。

多分、褒めてくれてるんだらうな。

「ありがとうございます」

一応言っておいた。

うん、とアルカは頷くと話始める。

「それでね、エレオノール様からの言伝なんだけど」

空気を察したらしい奥さんとソニクは僕とアルカに椅子を使うように薦めて、自分たちは隣の部屋にそつと移動した。

椅子に座る。

サンドマン。

身長は大人でも子供程度で、大きな袋を背負っている。

洞窟を住処とし、日中は殆ど姿を見せることは無いが、夜になると近くの村のなかなか寝付かない子供のもとに現れ、袋の中から掴み出した砂を子供に振り掛けて、その子供をぐっすりと眠らせてしまう。

それ以外になにかを悪さすることも無い代わりに、大人でその姿を見た者はいない。

稀に子供だけが姿を見ることがあり、その場合家の近くにミルクを

入れた皿を置いておくと喜ぶ。

「えと、僕は何をすれば良いんでしょうか？」

アルカからそのサンドマンという生物の生態を聞かされたものの、その先に嫌な予感しかしなかったので、まさかと思いつながら聞いてみる。

「うん、それでね、そのサンドマンから砂を分けて貰ってほしいんだよね」

アルカは、少し離れたところまでお使いに行つて来てみたいな軽さで、ほんのちよつと申し訳なさそうな様子で言った。

悪い予感ほど当たるといふけど、実際その通りらしい。

「あの、具体的にはどうすればいいんですか？」

会ったことも、そもそも人間ですらない生物を相手にどう接しろと  
いふのか。

さっきの話のミルクを用意してもらつた方が良いんだろうか？

せめてそういう解決策を求めて聞いたのに

「砂を分けてもらえませんかって、お願いすれば良いんじゃないかなあ」

ある意味正解の答えが返つてきた。

「それで大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ。ラカス君なら」

何故か励ますように言われた。

僕の心配とアルカの心配は微妙に食い違っている気がしたけど、掘つても深くならなさそうなのでそれ以上聞くのを止めた。

僕が不安になつたと思つたらしいアルカは小さく握りこぶしを作ると

「ラカス君、ファイトだよ。やれば出来るって」

可愛らしいファイティングポーズを見せられた。

僕は、はあ、と応えながら、身体から力が抜けていく気がした。

村（後書き）

サンドマンの設定が何かと混じっている気がしますけど、大目に見て頂ければ幸いです。

ひとまず導入部ってことで  
でわでわ。

読んで頂いたことに感謝

## 寝不足

今日も天気が良い。

空の色も薄くなり中心に陣取っている太陽は輝きのピークを明らかに過ぎていく。

浮かぶ雲は夏のそれではない。

畑の麦も実を付け始め、頭を垂れるまで後少し。

麦の列に分け入り細かく成長を確かめる農家の人達を眺めながら、僕は木立の影で根っこを枕に寝転んでいた。

欠伸が出る。

ようやく少し寝れた。

昨日、アルカからサンドマンとかいう生き物の存在を聞いたが、会っには夜中遅くまで起きていないとならないってことで、後少し後少しと起きていたら空が明るくなり始めた。

すると今度は屋敷の仕事で身に着いてしまった習慣で目が覚めてしまい寝付けやしない。

疲れたら寝れるかと朝少し畑仕事を手伝わせてもらうことにした。道具運び、草むしりをしてようやく睡魔の足を掴めそうだったので、ベッドで寝た方が、と言われたのを断って、その場で寝させてもらって今に至る。

今、何時だろ？

再び出そうな欠伸を噛み殺した時、足音が聞こえ、ナージエと叫ぶ年くらいの男の子に覗き込まれた。

「ラカスお兄ちゃん、起きてる？お昼ご飯だつて」

「もう、そんな時間？」

ソニクの弟、ジギータが目の中の麦畑を挟んだ反対側、村からの道との境の土手みたいになっているところを示す。

そこには、ソニクとのお父さん、それともう一人、村娘っぽい人が見えた。

「あれは、誰？」

「貴族のお姉ちゃんだよ」

僕は慌てて起きると、小走りで麦畑を迂回して向かう。

「わ、待って待ってよ」

置いてきぼりを喰ったジギータの声が聞こえた。

「休んでいたところごめんね」

アルカはまずそう言った。

「いえ、大丈夫です」

眠気は残るが、それを言えるわけない。

「それで、昨日はどうだったかな？」

「朝まで起きてたんですけど、何もありませんでした」

「何かの気配を感じたとか、何か変なこととかは？」

「それも何も」

アルカは腕を組み右手を頬に添える仕草。

「うーん、やっぱり私達が来たりとかしていつもと違う雰囲気だったからね。それはエレオノール様とお姉様も言ってたし、仕方ない

かも」

咎める意思は無いという含みが感じられた。

「早く出て来てくれる良いんだけどね。私達も争いをしたいわけじゃないんだから」

ねえ、と困ったような笑みを向けられた。

「そうですね」

僕は曖昧な笑みで返す。

昨日、サンドマンの説明を受けた時のこと。

僕は

「砂を何に使うんですか？」  
と聞いた。

勿論その質問が使用人の分を超えることを理解している。



サンドマンとの交渉で聞かれるかもしれないので教えて頂けるなら、と付け足す。

アルカは少し考える様子を見せた後に

「なるべく他人に言わないでね」

と前置きをし

「エレオノール様の論文に使うの」

と教えてくれた。

「論文ですか？」

僕はつい聞き返した。

これまでそんな単語に接したことが無いので、その重大さが分からない。

僕があまりにもピンときていないのが見て取れたアルカが、もしその論文が認められると国の大きな研究所に入れるのだと補足してくれた。

正式な名前も言ってくれたが、馴染みが無さ過ぎて覚えられなかった。

「お姉さまも学院を卒業されたらそこに行くおつもりだから、一緒のところだったらエレオノール様もお姉さまも嬉しいと思うの」

エレオノールお嬢様が学院を辞めてからグレイスが残念そうだったからそうしたいらしい。

「だから、ラカス君頑張つてね。お願い」

アルカは貴族にも関わらず、僕に対して深く頭を下げた。

僕は慌てて、頑張りますから、とアルカに頭を上げるように頼む。

貴族に頭を下げさせたなんて冗談でも憚られる。

アルカのことを変な貴族という思いを強めながら、そこまでされた以上期待に応えたいという使命感が生まれる。

それと、そういえばカトレアお嬢様がエレオノールお嬢様が学院を辞めたことを気にしているとジュリアンが言っていたのを思い出した。

国の大きな研究所に入れるならカトレアお嬢様も喜ぶに違いない。

それも含めて、頑張りますと僕が言つとアルカは、自らが毎日様子を聞きに来るからと言つていた。あまり見慣れない貴族が歩き回っていると村の人も気にするし、サンドマンも警戒するだろうと。

エレオノールお嬢様とグレイスは村長の家でこの辺の環境や歴史やなんかを論文用にまとめていて、あまり外に出ないようにするそうだ。

人を害する力を持たない生き物ほど環境の変化には敏感だそうで、馬車も御者も帰してしまい、僅かな身の回りのことは全て村長の家族に頼むという徹底ぶり。

それにしても様子を見に来るアルカまでも村娘の格好で来るとは思いもしなかった。

僕の視線に気付いたアルカはスカートの裾を持ち村娘らしからぬポーズをとる。

「どう？似合ってる？」

似合ってるも似合っていないもどっちも微妙に失礼な気がした。

「サンドマンも気付かないと思います」

とだけ言った。

言つてからそれも失礼かなと思つたけど、アルカは気にしていないようだった。

「そんなに上手に変装できてる？」

樂しげに笑う。

そして、袖のところを摘みながら

「でも、久しぶりに着たら全然違うんだね」

「そうでしょうね」

僕が相槌を打つた時、ふいにアルカの視線が少し離れた場所で会話が終わるのを待っているソニク達家族に向けられた。

「あ、ごめんね。私がいたらお昼ごはん食べられないよね」

明日もまた来るから、と言ひ残すと急に踵を返す。

「村長の家まで送ります」

「良いよ、大丈夫だから」

せめてもと思い

「お気を付けて下さい」

頭を下げて見送ると、ずっと待っていてもらったソニク達の下へ向かう。

その時、ふとさっきのアルカの言葉を浮かんだ。

久しぶりに着たら？

久しぶりってことは以前どこかで着ていたということだ。

グレイスとアルカは似ていない。

口にするにはあまりに失礼な考えに思い当たり

「まさかね」

以前、今回と同じようなことがあったに違いない。  
きつとそうだろう。

待っていてもらったお礼を言ってから昼食。

ソニクが持ってきたバスケットからパンに野菜やらチーズを挟んだパンがそれぞれ渡す。

「はい、ラカス君」

僕に渡されたパンだけ少し塩漬け肉が入っていた。

それを半分に千切ると、ジギータにあげた。

お返しにジギータのを半分受け取る。

ソニクにも少し分けようと思ったら断られた。

昨日の夕飯もそうだった。

僕だけ具の多いスープと真っ白といかないまでも近いパン。

皆と同じで良いです、と言うと、逆に断られた。

なんでも、既に僕らが滞在予定中の食材と幾らかの金銭をもらっているそうだ。

「なのに、私たちと同じでは申し訳がありませんから」と奥さんに言われた。

本来このあたりを治める領主は鷹狩やらで来ても一切お金を出さな

いのに、払って頂いたのに何もしないでは私たちの立場が無いとも言われた。

そこまで言われると断れない。

ジギータが欲しそうだったので、少しあげた。

奥さんから窘められていたが、僕がジギータくらいの妹がいるのでと言うと、ありがとうございます、と。

パンを齧りながら、それにしても、と思った。

エレオノールお嬢様がそんなことをしていたと聞いても、意外とは思わなかったのが不思議だった。

瞬間、意図せず浮かんだのは、やっぱりな。

やっぱりカトレアお嬢様とルイスお嬢様の姉で、そしてやっぱり旦那様の娘なんだと、なんだか誇らしい気持ちになった。

好き嫌いと言えば嫌い。

だけど、悪い人だなんてこれっぽちも考えることすらなかった。

人間機嫌が良くなると、物事を良い方に考えるようで、エレオノールお嬢様は言い方はアレだけどカトレアお嬢様にもルイスお嬢様にも道理として間違ったことは言っていないと思いついた。

ただ、鼻屑を引き摺りまわして多少ヒステリック気味で頑固そうだけだ。

昼食を食べ終わると、もう少し寝させてもらおうことにした。

起きたらまた少し畑仕事を手伝おうと思う。

そして今夜も頑張ろうと強く思い直した。

寝不足（後書き）

エレオノールが働いてるところって研究所で良かったんだっけな？  
とか思いつつ。

あと、エレオノールの使い魔はまだ良いとして、グレイスとアルカ  
はどうしよう。

流石にアルカの使い魔が狸じゃやり過ぎでしょうね。  
はてさて。

読んで頂いたことに感謝

## 人質

「あの、ラカス君はどうやって貴族様の屋敷で働けるようになったの？」

ソニクが、寝息をたてるジギータの向こうから聞いてきた。

昨日もサンドマンの影すら見えず、三日目の夜を迎えようとしている。

「お母さんの友達の紹介で、だけど」

僕は答える。

闇の中から、やっぱりそうだよ、と呟きが聞こえた。

本来なら、ソニクは1人で、ジギータは両親と寝ているのだけど、わざわざ近くの家の大きなベッドと交換して3人が一つのベッドで寝れるようにしてくれていた。

ソニクの10才をサンドマンが子供と判断するか分からないが、囹は集まっていた方が良かったろうと考えたらしい。

三日も寝食を共にしていれば、他愛ない会話をする程度には親しくなった。

「ソニクは村を出たいの？」

「ううん。私には今の生活が合ってるから」

返事はすぐにあった。

「ジギータが、ラカス君みたくなりたいたって言ってたから、どうやったらなれるのかなって」

既に眠るジギータは僕にとっても懐いてくれている。

「ごめん。僕も細かい事情は良く知らないんだ」

「気にしないで、ラカス君が謝ることじゃないから」

ソニクは慌てた声で言い

「ラカス君、妹がいるって言ってたでしょ。どんな子なの？」

フォローのように続けた。

「どんな？」

僕は考えながら視線を見慣れてきた天井から滑らせる。

窓には風が入るように、何本もの薄い長方形の板を斜めに傾けてくつつけた、簡易の扉みたいなのが閉めてある。

月の光がぼんやりと忍び込んでいた。

「すごい可愛い、かな。シスコンって言われるかもしれないけど」

月の光で浮かんだのは、ミランダに連れられデーメータールに会いに行った時のこと。

困ったり嬉しかったりしたけど、あの時のナージエを表現するならそれだった。

「そんなに可愛いなら会ってみたいな」

「いつか、僕の町に来てよ。紹介するから」

「そうだね」

ソニクの相槌に

「ジギータと同じ年だからナージエもそうだし、ジェーンも喜ぶよ」

「ジェーン？2人、妹がいるの？」

聞かれ、ジェーンが僕の幼馴染みのラツセルの妹であることと、その幼馴染みが中央で鍛冶見習いに行っていることを言った。

それともう1人、ミランダという幼馴染みがいることも。

「ミランダちゃんっていう幼馴染みの子もラカス君とラツセル君が居なくなつて寂しがってるだろうね」

ソニクの感想は多分一般的なんだろうと思う。

僕にも、そうだろうなと思う気持ちもある。

でも

「いつか、また会おうって約束したから」

僕とラツセル、ミランダで交わした約束を信じていた。

「なんか、そういうのって素敵だね。全員が生まれた町で再会だねって」

ソニクの上気した言葉に、つい笑ってしまった。

「違うよ。集まるのは、ヴィンドボナ。ゲルマニアの首都」

ミランダが言い出したことだった。

将来会う時、私はゲルマニアでドレス作ってるはずだから、会うんだったらヴィンドボナ以外無いと。

それを言うと、ソニクは戸惑う雰囲気を出して

「そんなに裁縫が上手なんて羨ましいな」

言葉を選ぶように言う。

「僕がいた頃は、多分、ソニクが見たら苦笑いしか出ないレベルだったよ」

ソニクの家ではお父さんとジギータが畑仕事、お母さんとソニクがたまに畑仕事を手伝いながら、主に他の両親共に畑仕事に出る家の繕い物を預かったりしていた。

ちよつと見た感じ、ソニクはとても器用でミランダとは比べ物にならない気がした。

「そ、そんなこと無いよ」

ソニクは謙遜するが、誰に聞いても同じことを言うに間違いはないと思う。

更に謙遜を続けるソニクは話題をミランダから、ナージエに戻す。

僕もそれ以上言わず、下の子って可愛いよねという話に相槌を打った。

ひとしきり話すと、ソニクは欠伸をし始め

「頑張つてね」

と言い残して、少し前から寝息を立てていた。

朝まで、1人で何もせずにいるには長い。

欠伸を噛み殺しながら、うつすら見える天井の板の木目を眺める。

いくらか慣れてきた気がしても、なんせ相手は夜は寝るものという習慣。

次第に眠気が襲ってきて瞼が重くなる。

その度、頭を振って払う。

それで多少マシになっても気が付くと睡魔はなにくわぬ顔ですり寄



ってきた。

そのうち、自分が眠ってしまったと気付いた瞬間があった。ゾツとしながら目を開けるとまだ真っ暗。

短い時間で済んだみたい。

安堵しつつ布団の中で小さく伸びをしながら、右側に寝返りをうつ。瞬間、背筋がゾクツとした。

なにか、いる。

気配というか、誰かに見られているのを感じ、来た、という単語が頭の中を駆け回った。

目を閉じ、自然に自然にと自らに言い聞かせながら、怖さ殆ど好奇心僅かでゆっくり反対に寝返り、薄目を開ける。

そこには、ただ、僅かにもれる月明かりを浴びた壁があるだけ。

あれ？と内心ホットしたが、背筋の第六感みたいなものが何かいることを強くアピールしているのを感じた。

ゾクゾクする感覚を信じ、何かいるはずとジツと目をこらし壁を右から左へ。

すると、何かが動いた気がした。

そこを良く見ると、奇妙なことに一部だけ向こうの壁が見え難い。

そして、その部分が何故かゆっくり壁に沿って動いている。

なんだろうと注目すると、段々と一部分の壁が見えなくなっていく。隠しているものがはつきりと人の輪郭を取り出した。

身長は僕と変わらない。

茶色のシャツとズボンに、帽子を被っている顔は鼻が少しとがっているぐらいで普通の子供と言われればそう思えなくもない。

しかし、背中には一抱えありそうな袋が背負われていた。

間違いなくサンドマンだ。

「出た」

意識せず呟いていた。

聞こえたらしいサンドマンがビクツと身を震わせ、パツと僕を見た。

目が合う。

大人でも子供の身長と聞いていたが、正面から見た顔は思ったより子供っぽい面影を残していた。

サンドマンは僕の視線を追い、自身を通り過ぎ、壁のほうを見た。当たり前前に壁があるだけだろう。

サンドマンはギシギシと音がしそうなくらいぎこちなくゆっくりこちを振り返ると、引きつった笑みで自らを指差した。

僕は二度頷いた。

だよな、と変な間が生まれる。

サンドマンは袋を抱えなおすと窓めがけて走り出した。

僕はそれに飛び掛っていた。

のしかかるようにしてサンドマンを倒すと蛙の潰れるような声が聞こえ

「痛い痛い、何？ごめん、見逃して、見なかったことにして」

僕の方も

「ちょっと待って、話だけ、話だけ聞いて。何も、何もしないからバタバタと逃げよう逃がせまいと揉みあう。

「何？どうしたの？地震？ジギータ、起きて、逃げてなきや」

ベッドの上からソニクの声がした。

姿を見られる人間が増えたことにサンドマンは更に暴れたした。

「ちよっと待ってって。話を聞いて欲しいだけだからってば」

「嫌だ。帰る。帰るんだ。帰らせろ」

悴に手をかけるサンドマンの腰にしがみついて留める。

そうしていると、ソニクが勘違いしてジギータを起こしてしまったらしい。

「すっごーい。これがサンドマン？サンドマンなの？」

興奮のあまり飛び跳ねるようにして僕とサンドマンの周りを行ったり来たりと走り回る。

そこに至り、ようやくサンドマンはジギータを静かにさせることを条件に話を聞いてくれることになった。

良くやったジギータ。

「うわっ、綺麗」

僕が話を切り出す前に、サンドマンはこれが目的だと背負っていた袋を置き、口を開いて示した。

中には一杯に砂が入っていて、砂一粒一粒が金色に輝き、一緒に覗き込んだソニクとジギータも声を上げるほど。

「ちよつとで良いから、これを分けて欲しいんだけど？」  
おずおずと切り出すと

「それは駄目だ」

サンドマンはサツと袋の口を閉じると背後に回ってしまった。

「ちよつと、ちよつとで良いから」

「だーめ」

指の先の僅かな隙間を示しても首を横に振るだけで取り付く島もない。

「じゃあ、せめてもと思い

「僕の雇用主と会ってくれない？」

「嫌だよ。お前ら3人と話したっただけですーげー怒られるんだぞ。そんなこと出来るわけないだろ」

「じゃさ、どうしたら分けてくれるの？」

サンドマンの方も怒られるかもしれないけど、僕だってこのチャンスを逃したら何を言われるか分からない。

しかも、おそらくこのまま帰してしまったらもう会う機会は無いと思う。

「何されても駄目だね。どうしても言うなら長に聞けよ」

しつこくお願いしてやっと出してくれた条件のだけど、正直気乗りしない。

なんせこっちは何の力も無いのだから、相手の懐に入るのには本当に怖い。

「分かった。行く」

そう言ったのは、僅かにでも見えたこの光明を逃したらもう無いかもという気持ちからだっただけだ。

「でも、その袋を置いてつてくれない？」

「なんでよ？」

「僕が帰ってこなかった場合の保険。2人には誰にも言わないようにお願いしておくから」

僕は掌を空けて見せたり、服を叩いて何も持っていないことを証明して無力であることを示した。

そしてソニクを見ると、ソニクはびくりした顔で頷いてくれた。

サンドマンは顎を撫でながら考える風をした後、袋をベッドの下に滑り込ませ

「これで良いんだろ？」

と僕を見てきた。

思ったよりすんなり通ったことに戸惑いながら頷いてみせると、サンドマンはため息を一つ吐く。

「じゃあ、ついてこいよ」

窓の扉を開けて、そこから外に出た。

「ソニク、袋の件お願いね」

それだけ言うと置いて行かれないようにと、急いでサンドマンを追った。

## 人質（後書き）

サンドマンが浮かび上がってくる描写ってどう書けばいいのか四苦八苦です。  
はてさて。

どうでも良い話ですが、ソニクのモデルは『彼氏彼女の事情』の瀬名りかです。  
分らなくても問題無いんですけどね。

更にどうでも良いんですが、アンの仲間達のモデル（女性のみ）はデジモン無印だったりします。  
アンがタイチで、ジャンヌがヤマト、ゼノビアがコウシロウ。  
あと4人と男が何人かいるのだけど、全員出せるのだろうか。  
…頑張ろう。

でわでわ

読んで頂いたことに感謝

## 貴族様（外伝）

ラカス君が窓から飛び出してしまうと途端に静けさが戻った。  
心臓がドキドキしている。

短い時間に様々なことが起こり過ぎて、まるで今夢から覚めたような気分。

心臓を落ち着かせるために深呼吸。

スーハースーハー。

夢でないことを確かめる為にそつとベッドの下を覗くと、大きな布袋が間違いないく置いてある。

「夢じゃないんだよね」

独り言を呟いた途端、急に不安に襲われた。

さつきは良く分からないままにラカス君に返事をしてしまった。

何日か前から逗留している貴族様の目的がこれだということは聞いて知っている。

どれだけ貴重なものかは分からないけど、少なくとも何かあったときに簡単に弁償できるものではないんだと思う。

「どうしよう。ジギータ」

心細さを共用するために私が振り返った時、弟は窓際に寄せた椅子を使い窓枠に足を掛けていた。

「ジギータ」

すぐに行動の意図を理解し、止める為に名前を呼んだ。

「ごめん。お姉ちゃん」

謝りながら弟の姿は窓の向こうに消える。

「ジギータ」

私が窓に駆け寄ったときにはジギータはもう後姿になっていた。

追いかけるために椅子に足を掛けた瞬間、袋の存在を思い出し、私が出ることが出来ないことに気付いた。

「もつ」

そう言うぐらいしか怒りの行き場所がない。

1人残されてしまった。

視界の端に袋が映る。

簡単に見えてしまうことがあまりに無用心な気がして袋をもっと奥に押し込んだ方が良い気がした。

直接触るのはちょっと怖いのでベッドの上の布団を一枚はがし、それを使って袋を覆うようにして袋を押し込んだ。

ひとまず袋がどこからも見えないことを確認すると、なるべくいつも通りにしていた方が良いと思いベッドの上に残った布団に包まり帰ってくるのを待つことにする。

心臓の音がうるさい。

いっそ眠ってしまいたいけど、心配ごとが多すぎて眠ることなんてできっこない。

真っ先に心配なのはジギータが無事ラカス君達と合流できたかどうか。

窓から見えた外は月明かりで大分明るい。

見つからなくて諦めて帰ってきてくれれば一番良いのだけど。

それに無事合流出来たとして、ラカス君達は危険なところに行ったりはしないだろうか。

足手まといになつたりしないだろうか。

サンドマンって危険なことをしないってお婆ちゃんが言ってたよね？私は村のお婆ちゃんがしてくれ話を一生懸命思い出そうとした。

二ヶ月ぐらい前、村で何か変な生き物を見たという子供がいた。

でも、その家では何かが無くなつたりはしていない。

夢でも見たんだろうと大人達は笑っていた。

そこへその話を聞いた村のお婆ちゃん達はその生き物がサンドマンという名前だと教えてくれた。

お父さんもお母さんもそう言われて思い出したかのように頷き、昔

そんな話を聞いたなあと言っていた。

さらにお婆ちゃん達は、サンドマンは夜遅くまで起きてるような子供を眠らせるくらいでそれ以上の悪さをする事は無い、と笑いながら言い、悪い子供に注意してくれたお礼に家の外にお皿にミルクを入れて置くように見た子供のお母さんに勧めていた。

それ以降、翌日に本当に無くなっていったミルクを見て夜更かしをする子供が増えたそうだけど、見たと言う子供も現れず私達も忘れそうになっていたところだった。

大分時間が経った気がするけどジギータもラカス君も戻ってこない。ラカス君は朝までには戻ってくると言っていたけど、早く戻ってきて欲しい。

時々風で窓が音を立てる度にビクツとする。

もしかしたらサンドマンの仲間が取り返しにくるんじゃないか。

さっきの子は小さかったけど、もっと大きい人が来たらどうしよう。隠しているのがバレたらどうしよう。

何か恐ろしいことをされたらどうしよう。

一度そう思うと怖くなってきて、お母さんに貰った長い編み棒と小さな籠を布団の下に忍ばせた。

頼りないけど、台所から何か取って来るには部屋を空けないとならないからそれは出来なかった。

もし来ちゃうなら、なるべくさつきみたいな子が良いなと思う。

そしたら私でも、ほんの少しだけでも残してくれないか頼めそうな気がした。

今回来た貴族様はとても良い貴族様みたいだから、そのぐらいはしなくちゃと小さく心に決めた。

まだジギータが生まれたばかりの頃、一度だけ領主様の貴族様がこ



の村に来たことがある。

私は粗相が無いようにと外に出ないように言われて顔を見ることも無かったけど、その貴族様が帰ってから御飯の量が少し減った。

貴族様に出したから少しの間我慢して欲しいと言われたのと、お父さん達が私に隠れて怒っていたのが印象的で覚えている。

私にとって貴族様というのはそういう存在だと思っていた。

だから半月前に貴族様が来ると聞いた時、みんな良い顔をしなかったし、私の家で平民の子を預かって欲しいと村長さんに頼まれた時にお父さんもお母さんも断ろうとした。

「言いたいことは分かる」

村長さんはそう言い、テーブルの上に小さな袋を置いた。

ジャラと音がする。

中には銀貨が入っていた。

村長さんは頭を下げ

「こうしてわざわざ銀貨で用意してくださるような貴族様じゃ。どうかワシの顔を立ててくれんか」

そこまでされてはと、お父さん達は折れた。

その時点で私の貴族様の印象も少し変わり始めた。

決定的だったのは、貴族様が来る数日前に何台かの馬車が村に来たことだった。

なんだろうと思っているとその馬車から5、6人の大柄な男の人達が降りてきて、キビキビと乗せてきた荷物を降ろしだす。

一番最後にとても綺麗な女性が出てきて、村長さんに貴族様の逗留分の食事を運んできたのだと伝えた。

その女性、たしかゼノビアさんという名前だった。

ゼノビアさんは貴族様が連れてこられる子供を預かることになっていた私の家にも食料を運ぶように男の人達に指示を出し、自らも来て、今度来る子供を宜しく願います、とお父さんに深く頭を下げた。

頭を上げた時にほつれた髪をかき上げる仕草は同性の私から見ても

とても綺麗で、お父さんは鼻の下を伸ばしていたのに少し軽蔑したのを覚えてる。

これには村の人達は驚き、そんな貴族様なら協力しようという人が出てきて、村長さんの家の掃除を手伝ったり私の家のベッドと交換をしてくれたりと村の人総出で準備を始めた。

またゼノビアさんが来たら協力したことを言っというてくれよなんて言う人もいたけども。

私は村にいらした時に少ししか見ていないけど、村長さんの家に手伝いに行った人の話を聞くとみんな貴族様は良い人だと言っていた。私もラカス君は良い子だと思う。

年はジギータよりちょっと上なのに私と同世代の男の子よりちゃんとしてるし顔もかっこいいし、私もちょっと良いなと思ったのは恥かしいから内緒。

だけど、ジギータが僕も村を出たいと言い出すくらい、会って何日も経ってないラカス君に私よりも懐いている様に見えるのにはちょっと嫉妬しそう。

そりゃ私はそんなにみんなの憧れって存在ではないし、なれる気もしないし、ジギータが元々お兄ちゃんを欲しがっていたのも解るけどさ。

…私って、心が狭いかも。

でも、ゼノビアさんの下で働いていた人達はみんな格好良かったし、ジギータもああなるなら、応援したいな……

雀の鳴き声が聞こえたような気がした。

ゆっくりとその意味を理解すると、私は悲鳴とともに飛び起きた。外はもう明るい。

なんで寝てしまったのか自分を責めながら、転がり落ちるようにベッドから出ると、ベッドの下を確認する。

押し込んであった布団をかきだすと、果たして袋はちゃんとあった。良かった。

ホッと安堵の息を吐くと無意識のうちに袋を引っ張り出していた。それに気付くと、一応確認するために袋の口を開けて覗き込む。

ゾツとした。

砂は確かに袋一杯に詰まっていたけど、昨夜見たのとは違って全く光ってない。

さらさらとした単なる砂みたくなっていた。

私は何もしてないけど、眠ってしまったという負い目がある。

その時、背後で音がした。

突然のことに驚いて変な声が出てしまう。

「あ、ごめん。驚かせちゃった？」

振り返ると、窓を乗り越えようとしていたラカス君。

私はつい、とっさに袋をラカス君から隠した。

「ああ、砂でしょ？大丈夫だから気にしなくて良いよ」

私の不審な行動に首を伸ばして私の背後を見ると、笑顔でそう言った。

良く分からないけど、そうなら良かったと胸を撫で下ろす。

「安心すると、強引に付いていってしまったジギータのことを思い出した。」

迷惑をかけてしまったことを謝ろうとラカス君を見ると、ラカス君はキヨロキヨロと部屋を見回している

「あれ？ジギータは？顔を洗いにでも行ったの？」

「えっ？」

私の視線の先でラカス君はきよんとした顔をしていた。

貴族様（外伝）（後書き）

すみません。

ちよつと空きました。

最近幾つかゲームを買い込んでひたすらやっていたのですが、ときメモ4がヤバかったです。

今更なんですが、3があんまりにもアレだったので買わずにいたんですが、某レビューで高く評価していたので買ってみたら完全にハマってしまいました。

もう、つぐみ可愛いよつぐみですよ。

ほむら茜の2トップに及びませんが、メイは抜きましたよ。

えー、閑話休題。

話自体はぼちぼちやっていくので、これからめよろしくお願い致します。

太閤立志伝？は恐ろし過ぎるのではらく積んでおこつと思えます。

でわでわ

読んで頂いたことに感謝

追う（外伝）（前書き）

少し時間が戻ります。

## 追う（外伝）

私が部屋に入った時、カトレアはベッドの中で、ベッドの周囲を用人と医者に囲まれていた。

全員が私に気付き、視線を向ける。

真つ先に口を開いたのはカトレアだった。

言葉は荒い息でとぎれとぎれになる。

「ごめんなさいお姉さま。心配なさらなくてください、すぐに治りますから、お姉さまは学院にお戻りになって」

最後まで聞き終わると、私は淡々と答えた。

「いいのよ、もう。学院もガキばかりで嫌になってきた頃だったから」

「そんな、お姉さま」

驚き、急に体を起こしたカトレアはひどい咳きをし、2、3人の用人に体を寝かせるように促された。

「貴女は自分のことに専念なさい」

後で何か届けさせるわ、と言い残すと、部屋を出て自室に向かう。

扉を開けると、部屋中に本が散乱し、ばらまかれた薬品が絨毯を変色させていた。

机の上にはさつき書いたばかりの退学届けがある。

「なんで、いつも私ばかり」

私は蹲り、泣いた。

「エレオノール、起きなさい」

その声は微かであったが、はつきりと届いた。

意識が浅瀬から水面に顔を出す小魚のように浮かび上がるのを感じる。

長い実験を中心とする日々で短い時間に浅く眠る術が身に付いてい

た。

ただ、毎回の寝起きの悪さだけは慣れない。

なにか夢を見ているような気がするが、内容はいつも思い出せない。それよりも起きなければという意思が疑問を塗りつぶし、意識を掬い上げる。

「エレオノール」

眼鏡を着け、もう一度聞こえた声の方を見ると薄暗い狭い部屋の隅でグレイスが立っていた。

瞬時に自分達が今、囷を置いてサンドマンを待っていることを思い出した。

「交代？」

言葉に刺が混じっているのが自分でも分かる。

「出たわよ」

グレイスは短く言い、壁を指さした。

何を言われたか一瞬分からず、慌ててグレイスのところまで駆け寄る。

二階建ての二階の角のこの部屋に開けた穴からは、短い通りの先にあの平民の子供を置いた家の、その潜んでいる部屋が見下ろせるようになっていた。

逸る気持ちを抑え、穴から外を覗く。

しかし

「何が出たのよ」

月明かりだけが生き生きと煌めき、村全体がひっそりと眠りについているようだ。

それは数時間前に自分の見張り番の時に見ていたものと全く変わっていない。

「少しそのままにしてて」

そうグレイスに言われ、外を見てみると、見える風景の端から村全体を覆うように影がスーツと動いてきた。

月に雲がかかったのだらう。



その影が部屋にかかった時だった。

私は驚き、声を出していた。

突然、部屋の窓が一人入れそうな程度開いている。

そして影が通り過ぎると、影にそっと押されたように窓は閉まっていた。

「どういうこと?」

私が振り返ると

「私も偶然気付いたの。カインを先行させているわ」

そう言われ注意深く見ればグレイスの使い魔の黒猫であるカインが、短い通りに並ぶ二つの家のうち手前の家の影に蹲り備えていた。

「誰か出てきたら追跡を始めるように言い含めてあるから、あなたは準備をして」

私は頷く。

準備といつても杖を持ち、眠気覚ましにとつの昔に入れた冷めた不味いコーヒーを飲むだけだ。

それでも飲み込んだ時にはグレイスからカインが動き出したことを知らされる。

私達もフライを使い、窓から追いかけた。

一つの影が走っている。

「サンドマン、ではなさそうね」と私。

あまりに近いと気付かれる恐れがあると上空を飛ぶ私達は、影の大きさと形、速度から大人でもサンドマンでもない判断した。

「ラカス君でもないみたいね」

カインには囹の平民のことを教えてある。

もし人影がそうであるならなんらかのサインを送ってくるはずだった。

私達は後を追い続けことにした。

サンドマンではないとしても、その人影は奇妙だった。

今走っているのは村と森に挟まれた土まじりの草原である。

姿を隠せる高さのものは何も無く月も出ている、にもかかわらず人影の輪郭はくつきりとせず、どこかぼやける。

まるで煙を体に貼り付けているようだ。

しかも、その人影は度々立ち止まり、辺りをキョロキョロと窺うのだが、後方には注意を向けず前方ばかり気にしている。

視線の先は森を見ているようだから、森に向かってしていると推測出来るが、目指す地点がはつきりと定まっていないうようにも見取れる。

「何なの、あれは？」

「分からないことだらけね、さっきの窓の件といい」

私の呟きにグレイスはそう応えた。

追跡は森に入っただけの場所であつた。

「どうということなの？」

爪を噛み、もう何度目かわからない言葉を呟きながら私とグレイスはその場に立っていた。

近くでカインが茂みに首を突っ込んでいる。

ここで急にカインが人影を見失った。

怪しいと、接近しないことを選び、カインに任せたのは私の判断だった。

けれど、有り得ない。

茂みはあるが、高さは腰程しかなく、隠れたところで気配や臭いまで消せやしない。

「ダメね。隠し通路みたいなものも無さそうよ」

グレイスが戻ってきたカインを労うように撫でていた。

「どうということなのよ、一体」

結局、そこだけじゃなく周囲まで調べたせいで村に戻ったのは空が明るくなってからになってしまった。

疲労が臉と肩にぶら下がっているのを感じるが、寝る前に昨夜見た窓を間近で見えておきたくて平民の家に向かうことにした。

多分もう起きているだろうと考えてはいたが、村に着いた時、何故か村人達はその平民の家に集まっていた。

「貴族様」

降りる私達を見た集団から一人の女が走り寄り、私達の前に跪いた。

「どうかしたのかしら？」

グレイスが尋ねる。

すると女はポロポロと涙を溢れさせながら

「ジギータが、うちの子供がサンドマンに連れ去られたのです。お願い致します。どうか、どうか救いの手を」

最後は地面に突っ伏した。

「なんですって？」

私は眉を顰めた。

## 姉と妹（外伝）

私達は染みの付いた粗末なベッドを二つ繋げたもの、ひび割れが見える家具が幾つか置かれただけの狭い寝室に案内された。

「あの、何が起きたんですか？」

まだ起きる時間ではなかったところを村の人に起こされたアルカチヤンがカインを抱きかかえたまま、おずおずと聞いてくる。

後で話すわ、と短くそっけなく返すと小さな声で、は、はい、と怯えたように言った。

グレイスが大人げないと目で指摘してくるが、こっちは眠気に疲労、気にもならない。

「それで、あの子は？」

顔も向けずに聞くと、平民の少女は戸惑う声で

「だ、誰のことでしょう？」

「ラカス君のことよ」

グレイスが優しい口調で補う。

「ラ、ラカス君は探してくるって、私にお父さんとお母さんを起こしてって言って、一時間くらい前に出ていっちゃって」  
役立たず。

声にならない声を吐くと、爪を噛む。

ついさつき見せられた袋の中身は魔力の欠片もない単なる砂だった。  
一瞬喜んだ自分に腹が立つ。

せめて、何かの手掛かりにでもならないかと、昨夜から今朝までのことを一通り聞く。

「全ての出入りはここからということ間違いないのね？」

私は窓を見ながら尋ねた。

「わ、私が起きたときにはもうラカス君と揉み合っていて、でも、出て行ったのはその窓からだったの」

平民の歯切れの悪い頼りない返事を聞きつつ、私とグレイスは窓の

外を窺う。

真正面、軽く見上げた向こうに私達が待機していた部屋に朝の光が当たっているのが見える。

「どう思う？」

問いかけにグレイスは思案顔で返すと振り向き、平民の方を見た。

「あなたの弟が出ていってから窓を閉め、目を覚ましたときには閉まったままだったのね？」

「は、はい。ラカス君が入ってきたときに開けたので、閉まっていたと思います」

再びグレイスが私を見、目が合う。

「少なくとも、窓が開いていたのは私達の見間違いじゃない、ってことかしらね」

その呟きに、私も考え込んだ。

「とりあえずは、それだけね」

グレイスは、空想で考えてもしょうがない、と。

「あの、」

背後から聞こえたのはアルカちゃんの声だった。

アルカちゃんには私達が話を聞いている最中、カインとともに部屋の中を調べてもらっていた。

「アルカ、カイン、終わったの？それで？」

1人と一匹は顔を見合わせた。

「仰られたようなマジックアイテムや魔法を使った痕跡は何もありませんでした」

カインも同意するように鳴き声をあげる。

「そう」

あれだけのことが起きたのだからと、それなりに期待していただけに幾分イライラが増した自分がいる。

「ただちよつと気になったんですけど」

続いた言葉に顔が上がる。

「けど、何？」

アルカちゃんは身を擦じらせ躊躇う仕草をする。

「大したことじゃないんですけど、」

「それで構わないから言ってみなさい」

私が急かした。

「こ、この部屋だけ、何故か砂っぽいんです」

「砂っぽい？」

「はい、それも床だけじゃなくて窓の枠や羽目板にまで付いてるんです」

言われ、試しに靴を滑らせると靴底をザリザリとした感触が走る。

窓も触つてみると、指先に砂が分かるくらいに乗った。

そして比較の為に部屋の入り口のところで中を窺っていた平民をどけ、隣室でも同様にしてみる。

アルカちゃんの言うとおり、たしかに滑りは悪いし窓も指が黒くなる程度。

「この部屋とさっきの部屋の掃除の頻度は違うの？」

母親が、いえ、同じくらいですと答える。

窓の方角、風向きに違いはあってもあまりに違いすぎる。

「サンドマンのせいかしら？」

「かもしれないわね」

私とグレイスは頷き合う。

「で、あの、結局何があったんですか？」

アルカちゃんだけが蚊帳の外にいた。

「で、どうするの？」

昼前になって平民の家から一度自分達の部屋に戻り、見聞きしたことをメモするとベッドに仰向けに倒れ込んだ私にグレイスが聞いた。グレイスは椅子を引き寄せ、座る。

「何を、かしら？」

「探しに行くの？行かないの？」

グレイスから昨夜から今朝にかけて起きた事件を聞き終えたアルカ

ちゃんが、えっ？と声を出した。

「行かないんですか？」

「アルカ、さつきも言ったでしょ。ここは私達のお父様の領地じゃないの」

グレイスが諭しても、アルカちゃんは不満顔。

村の平民達も一様に縋ってきたが、出来ることはすると断つに止めた。

本当なら、すぐにこの村を離れるのが正解だというのが私とグレイスの見解だった。

あくまで今回は私の都合によるお忍びのようなものであって、他領での問題に首を突っ込むのはよろしくない。

ましてや、私のお父様とグレイスの家の立場は政治的にかなり面倒くさい。

軽々に迷惑はかけられない。

それにサンドマンの方もそうだ。

村中が大騒ぎになればサンドマンもまず出てこないだろうし、わざわざ私達が動き姿を見せて回ることも結局は警戒させるだけに過ぎない。

サンドマンはいざとなれば一族で移動するとの報告がある。

出来るのは、さっさと帰り、帰り際に領主の家に立ち寄り「通ってきた村でなにかあったら幸いですね」と挨拶程度に言うぐらいか。

不意にあくびが出た。

そういえば、ほぼ一日寝ていないことを思い出した。

しかも森を歩き回り、行方不明の手掛かりを探していた。

「少し寝ましようか。これからのことはラカス君が戻ってきてからでも良いでしょう」

グレイスもあくびを噛み殺しながら、隣のベッドに移動した。

アルカちゃんはやりきれないような表情で

「あの、私、村の人達の手伝いに行っても良いですか？」

「構わないけど、魔法を使わないようにね」

はい、と返事をしてアルカちゃんは部屋を出ていった。  
私はあつという間に寝てしまった。

夢を見た。

私はワインとワイングラスの置かれたテーブルを挟み、グレイスとともに椅子に座っていた。

グレイスの背後には見覚えのある景色がある。

私が一年だけ過ごした魔法学院の自室であった。

それでこれが夢だと分かる。

グレイスと初めて出会ったのは魔法学院の入学式の時。

私は様々な事情が重なり、他の新生に比べて年が一つか二つ上で入学した。

背負っている家名もあるだろうが、この世代において一年の意味は大きい。

少なからず好奇の視線に晒された。

別に気にはしなかった。

カトレアの気持ちを考えれば、そんな物は気にする重さも無い。

そんな中で、私以外にももう1人周囲から浮いた存在がいた。

それがグレイス。

彼女もまた他の新生より年上だった。

偶然なのか意図的か、彼女と私は同じクラスとなる。

2人一組の時は彼女と組むことが多かった。

同い年ということもありお互い意識していたのか、そうでなくとも

年下の同級生と組むより心安い。

また、彼女の態度が楽だった。

違和感を無理矢理隠して擦り寄るわけではなく、単なる同級生のように接してきた。

彼女に対してだけ、次第に身分の違いを意識しなくなっていた。

エレオノールと呼ぶことを許したのは、今のところ両親を除いてグ



レイスだけ。多分、友人という存在はレイスが初めてではないか。そしてたまに、どちらかの部屋に誘いワインを飲むことがあった。夢はその時のことだと思われた。

「何故、入学を遅らせたの？」  
軽い酩酊がそれを尋ねさせた。

「年が離れた妹がいるのよ。来年か再来年入学してくるわ。それに合わせたの」

その答えは少し意外だった。

レイスは人付き合いをソツなくこなしながらも、どこか1人でいることを気にしない雰囲気を持っていたから、たとえば妹であれど誰かを気にするというのに驚きを覚えた。

「私が勝手にしたことよ。アルカというんだけど、入学したら紹介するわ」

その時にレイスは滅多に見せることのない彼女本来の柔らかい笑みを見せたことで勘違いではないと確信させた。

「確か、エレオノールにも妹がいると言っていたわよね」  
「ええ、」

私は僅かに口ごもる。

レイスのことを羨ましいと思った。

すぐ下の妹のカトレアが学院に入るのは難しいだろう。

そして、さらに下のレイズは私のことを恐がっている。

余裕が無かったとはいえ自業自得ではあった。

ヴァリエールとは私にとつて単なる家名ではなく、生まれた時に決められた生き方だと理解したのは何才くらいのことだったか。

カトレアが病弱と知れてから、それは一層強まった。

馬鹿にされてはならない。

それはレイズに厳しくあたることになってしまった。

「貴女のことだから、妹に恐がられてるんでしょう？」

レイズが心を読んだかのように口にした。

「ち、違うわよ」

なんとか言い返したが、あまりにも弱々しい。

「姉として妹にちゃんとした貴族になつてもらいたい。その思いで、会つたびに小言。いつのまにか憎まれ役？」

凶星だった。

「違つわよ。お父様もカトレアもあんまりにもちびルイズに甘いからよ」

「素直に可愛がれる家族が羨ましい？」

「ま、まさか、そんなわけないでしょう」

「知つてた？貴女嘘を吐くと眉間にしわが出来るのよ」

「えっ？」

つい眉間に手を伸ばした。

「嘘よ」

あつさり 그레이スは言い、私は顔が紅くなるのが分かる。

「 그레이ス」

「きゃー 怖い怖い」

言葉とは裏腹に 그레이スは優雅にワイングラスを傾けた。

色々な事情（外伝）

起きた時には部屋が赤く染まっていた。

日が暮れかかっている。

「おはよう」

既に起きていたグレイスにコーヒーを渡された。

「何かあった？」

「一つ」

グレイスは肩を竦め

「村の人が夜になっても見つからなければ領主への届けを出したいから、私達の一筆を貰えないかとアルカを通じて聞いてきてるそうよ」

「馬鹿ね」

その一筆がどう使われるか分からない世界というものもあるにもかかわらず。

どこでも自分達のルールで通じると思えるのだろうか。

私の言葉にグレイスは同意をすることもなく、聞こえなかった風を装う。

「で、どうするの？まだラカス君は帰ってこないけど、帰り支度でもする？」

しばし考える。

多分、明日明後日には領主へ届けが出されるだろう。

おそらく気に留められることはないだろうが、変に名前を出されたら、何が起きるか。

「今夜、もう一度あそこへ行ってみようかしら」

「別に私は構わないけど」

そうグレイスは言い、良いの？と聞いてきた。

「どうせ、しばらくは来れなくなるわ」

村の平民を助けても、助けなくても、今後この村で今回のような調

査が行えないのは目に見えてる。  
だったら、と考えた。

それに昨夜起きたことも気になる。

あれは確実に単なるメイジの仕業ではない。

またイチから探し直す？

逆に考えれば今回は好機なのかもしれない。

犯人はサンドマンだと思ってるようだし、私達が行けば納得するだろう。

利害が一致した。

「そう、なら手伝うわよ。昨夜の人影、あれが連れ去られたという子供ということが良い？」

「ええ、私もそう考えているわ」

グレイスの切り替えの早さが小気味良い。

件の人影が前ばかり注意を払っていたのは、前方に行くサンドマン達を探していたのだとすれば納得がいく。

私は爪を噛みながら考えていたことを独り言のように続ける。

「あの窓も人影がはつきり見えなかったのもサンドマンの魔法、いえ、精霊？」

そこで、グレイス、と呼ぶ。

「カインは精霊魔法を感知することは出来るの？」

「実際精霊魔法で試したことはないけど、いくつかの系統魔法で試した結果からすると多分出来ないわね。あくまで猫として気配や変化、臭いに敏感なだけで無効化してるわけじゃないから。それすら消されたらどうしようもないわ」

毛づくろいをしていたカインは呼ばれたと頭を上げたが、グレイスが手で示すとまた毛づくろいに戻った。

「じゃあ、あの場所で見失ったのは精霊魔法で出入口を隠されていたから気付かなかったって可能性もあるわよね」

「可能性を否定はしないけど、たった一度の好機なのに随分強引ね」  
昨夜の現象はいくつかの魔法、マジックアイテムを組み合わせれば

不可能ではないと思うが、それらを集める手間、そしてそれほどまでのことをしなければならぬ程のことがあつたとしたら、あまりにお粗末。

精霊魔法を使えるのはエルフや妖精、妖怪、どれも高位なものに限られるというのが学会では主流だが、それは貴族としてのプライドの問題が絡んでいることを指摘するものもいる。

私は後者の論文を読んだが、『我々が意図して精霊魔法と呼んでいるものばかりを論ずることはあまりに狭小ではないだろうか』、という一文には興味を持った。

例え、恐れをなすに足らない生物であろうが今だ全ての生態が明かされた訳ではないという意見は詭弁ともとれそうだが、我々貴族が血統と契約に依って魔法を使えるならば、彼等にも同様の血統や契約の手段を持つているという論理は一考の余地有りとは私は考える。

「だって、今夜一度しかないのだもの。自分の考えを信じるわ」  
最後は直感だと私は言った。

そこへ、扉がノックされた。

アルカちゃんだった。

アルカちゃんは私がかき起きていることを見ると、こんなことを村の人達から頼まれたんですけどと、さっきグレイスからされた話をする。グレイスが私の判断に委ねると言ったらしかなかった。

私は答えた。

「今夜私達が探しに行く、と言っておきなさい」

「は、はい。あ、あと」

「何？」

「ラ、ラカス君がまだ戻ってこないそうです」

「あの、役立たず」

一層強く噛んだ爪から、ガリツと音がした。

村人らの話はすんなり終わった。

いつ動いてもらえるか分からない領主より、私達は今夜動く。

サンドマンが姿を見せるのは夜だから。

使い魔の猫は普通の猫よりはるかに臭いを嗅ぎ分けられるから臭いを追っっていく。

これらの理由を挙げ、村でいつものように大人しくしてると言うと、異議もなく従うと言ってきた。

カインのことに關しては嘘だが、わざわざ私達が行く場所の理由を説明する手間を省くためだ。

村を出る頃になっても戻ってこない罔には苛立ちを感じるが、役立たずの為に無駄にする時間など無い。

今度はアルカちゃんを連れ3人で、見かけ上カインが先行する形で村を出た。

しばらく昨夜と同じ道を辿った後

「この辺で良いでしょう」

グレイスが村から見えなくなったことを確認して、私達はカインを拾うため一度降りた。

良くやったわね、とグレイスはカインを褒め、抱えあげる間、私は奇妙な心地を覚え、ジツとその光景に見とれた。

「どうしたの？」

不意にグレイスの顔がこっちを見ていた。

「なんでもないわ」

私はそう答え、さっさと行きましようと思ふかび上がる。

さらに先に向いながら、私はこんな時にもかかわらず持て余す喜びを感じていた。

もう少しで。

貴族の諺で、相手のことを知りたいのなら相手の使い魔を見よという言葉がある。

春の使い魔召喚の儀式の前に学院を去った私には使い魔がない。

別に個人で召喚しても構いやしないのだけど、それはあまりに惨めな気がして、私のプライドが許さなかった。

もし、研究所に入れたならば、それほどの人物が、と私は堂々と召

喚の儀式が出来る。

これまで感じないようにしていた劣等感が、仄かな希望に包まれ胸を刺激する。

そして、私は、いや私達は、昨夜の場所に着いた。

「さて、着いたけど、どうするの？」

グレイスが聞いてきた。

「この辺一带を焼き払うわ」

アルカちゃんが、えっ、と驚きの声をあげた。

グレイスは変わらない様子で

「無茶を言うわね」

とだけ。

姿などを隠す魔法を見破るには、それを暴く魔法をかけるか、質量のある魔法をぶつけ構成しているものを崩す方法がある。

私が考えたのは質量のある魔法をぶつける方法。

グレイスが無茶と言ったのは一带を焼き払うほどの理由をでっち上げることであって、焼き払うことはアルカちゃんがいれば可能だった。

「ほ、本当に良いんですか？」

「構わないから」

私が言っていると、おそろおそろアルカちゃんは火のラインスペルを唱え始めた。

すると、アルカちゃんの目の前に一抱えもある火の玉が生まれる。

それはさらに大きくなり、球状を保てなくなった部分が割れ炎が漏れ出した。

一般的なラインメイジが出来ることではない。

グレイスが入学を遅らせるだけの価値がアルカちゃんにはある。

生まれつきだと聞く、アルカちゃんの火系統の才能は類い稀なものを持っていた。

ドッドにおいてすら火系統の上級のラインメイジに劣らない火力は、自分ですら持て余し制御出来るのは辛うじてラインスペルまでらし

い。

「ふぬ〜」

一生懸命制御するアルカちゃんの前に、最初より3倍の大きさになった火の玉がある。

しかも、中でうねる火渦は最初の比ではない。

周囲が真っ赤に照らされる。

こんなものを放てば、精霊魔法でも多少のほころびは生まれるだろうと読んだ。

「待て、待つんじゃない」

放て、と私が言う前にザラザラと唄れた老人の声が割り込んだ。

「ひゃ」

突然の声に驚いたアルカちゃんが気を緩めた瞬間、火の玉が形状を失った。

「アルカ、空に」

「は、はい」

とっさのグレイスの言葉にアルカちゃんが杖を天に向けると、形を失った炎は轟音をあげ柱となり天に伸びた。

後には、焼き焦げた大地と丸く切り取られた空、炎に灼かれた木々。何箇所か火が燃え移っている。

「誰？」

私が声のした方に杖を向けるとガサガサと茂みをかき分け出てきたのは、幼い子供ぐらいの身長。

顔は煤けた灰色の髪と髭に覆われ、剥げた緑の上下を着ている。

腰は曲がり、動きはまるで老人のようである。

見た瞬間、すぐに思い当たった。

「お前さん達が探しておるサンドマンじゃよ」  
それは自ら名乗った。



色々な事情（外伝）（後書き）

夏目漱石の彼岸過ぎまでに書く予定だからつけたタイトル『彼岸過ぎまで』のノリで、転生者が目を覚ましたところから書き始めたからということであつた『起きてしまったので』。こんな長くなると思ひもありませんでした。

原作者が大変な状況ということで原作自体が完結するか分からない現状です。

なんかやるせないです。

読んで頂いたことに感謝。

## 死と利（外伝）

そのために来たとはいえ、先手をとられた感が否めない。

「あら、私達になんの用？」

出来るなら向こうから話出させ主導権を握りたいところ。

「いやいや、大した用でもない。ちいとばかり、お前さん達と話で  
もしようかと思っとな」

サンドマンは私達を全く意に介さぬ様子で、よっこいせとその場に  
座った。

「イタタ。年は取りたくないもんじゃのう。座るだけでも節々が痛  
いわい」

それが向こうの作戦だと分かっているが、そのもったいぶるような  
振る舞いに苛立つ。

「それで、話って何？」

私が急かすように尋ねても、サンドマンは周囲をぐるりと見回し

「その前に樹木達の火を消してくれんか。長いこと借りている場所  
じゃ、失うを見るは心苦しい。わしらにはそんな力無いでな」

私とグレイスは顔を見合わせる。

良いように使われるのは癪だが、放っておくのも確かに気が引けた。  
私が頼むと、分かったわ、と水系統のグレイスがこちらは不得手な  
アルカちゃんを手伝わせ火を消し始めてくれた。

私は座り込んだサンドマンに杖を向け逃がすまいと身構える。

「そんなことせんでも、逃げやせんて。そもそも立つことすらしん  
どいこんなじじいじゃ」

「さあ、どこまで本気だか」

皮肉ったつもりが、サンドマンは冗談を聞いたようにふおふおと笑  
った。

「どうしてわしらをそこまで恐れる？普段は自らを一番優秀だと誇  
っておるくせに」

「追い詰められた鼠は何をするか分からないでしょ。出来たら、話ついでにあなた方が持っている砂を出してくれれば嬉しいんだけどね」

見たところサンドマンは手ぶら。

どこかに隠してきたのだろうと推測する。

「ふおお、砂が欲しけりやそこらから持っていけばいいじゃろ。

この辺の土は栄養豊富じゃぞ」

「とぼけないで欲しいわね。あなた達が持っている砂が単なる砂じゃないことぐらい分かってるのよ」

ほう、とわざとらしく驚いた声を出した。

サンドマンの砂が知られ始めたのは今から150年程前のこと。

生物学者だった貴族がサンドマンの生態調査で何人もの眠らされた子供の状態を調べたところ、偶然遭遇した眠ったばかりの平民の子供から魔力が感知された事例があった。

そして、その魔力は時間が経つにつれ徐々に弱くなりやがて消えた。眠らせるための魔法は存在するが、それはそのようにして魔力が残り続けることはない。

サンドマンの砂は魔石の一種である、土石を砕いたものではないかという貴族の論文が発表される。

その後は、マジックアイテム説、極めて簡易的な杖説と大きく3つに分かれたが、どれにしてもその技術を明らかにすれば注目を浴びることは間違いない。

それを研究所に送る論文の中でも目玉にするつもりだった。

「どうなのかしら？」

「どうもむしろを高く評価しておるようじゃがな、あれは単なる砂じゃ。住む土地々々の土をよーく乾燥させた、な」

「じゃあ、何故そんなものを持っているの？」

「むしろサンドマンは世界中の土を動かす、ただそれだけを生業とする無害な生き物じゃよ」

それは150年より前に考えられていたことだ。

「そうする理由は？」

「知らん。わしの爺さんの代からそうしてきた。だからわしもそうする。それだけじゃよ」

ふおふおと笑うサンドマンは知らぬ存ぜぬを通す。

「終わったわよ」

声が聞こえ振り返ると、全て火が消され、そこから鎮火時特有の白い煙が立ち上っていた。

「これで満足かしら？」

グレイスが視線でその光景をサンドマンに示す。

背後で、白煙を被ったアルカちゃんが咳き込んでいる。

「すまんの。感謝する」

「お礼が欲しくしてたわけではないの」

私がイライラしながら言った言葉をサンドマンはふおふおと笑い、人間はせつかちじゃな、と呟く。

その態度にさっさと言えと、口を開こうとするや否や、サンドマンは急に真面目な口調で

「要件のみとなるが、わしら一族はこの場所を離れる。それと、お前さん達の坊主にはすまんことをした。村の人間たちにもそう伝えてくれんか」

突然のことに面食らったが、すぐに立て直す。

「グレイス、アルカちゃん」

すぐに追いかけるわ、と言う前にまた笑い声が重なる。

「昨日のように上手く行くかのお」

グッと言葉に詰まる。

確かに昨夜は偶然だった。

しかも、その前に窓から出たはずの囷とサンドマンには気づくことも出来なかった。

そのことを何故、と思つやさつきサンドマンが口にした言葉が思い返される。

すまんことをした？

「口封じに殺したのかしら？」

一瞬早くグレイスが落ち着いた口調で尋ねる。

「まあ、間違つてはおらんの」

アルカちゃんが目を見開き、口を抑えた。

役立たずと私は心内で罵った。

今朝聞いた限りでは、囿は昨夜サンドマンと出掛け今朝に戻ってきた。

そして、平民が行方不明になったと聞いてすぐに出かけていった。

明らかにアテのある行為であり、まかれた私たちと違い、サンドマンとの接触方法を知つたに違いない。

あと、一時間、あの家に留まつていれば、私達が訪れていた。

さもなければ、それをアルカちゃんしかいなかったとしても告げに行つていれば、アルカちゃんは止めただろう。

今朝に話を聞いてからすぐにその可能性を考え、夕方になつても戻つてこないと聞いて、まさかとグレイスと話をしていたが、実際そうなるとは。

無意識に下唇を噛んでいた。

だから、役立たずなのだ。

役に立つというのは、例外を除き、こちらが想定した範囲のことをした場合を言うのだ。

いくら功績をあげても、それによつてもたらされる結果において計画の変更を余儀なくされれば、役にたつたとはいえない。

ましてや、命を賭けるとは誰が言つた？

視線がサンドマンを向く。

「それで、のこのこ出てきて、無事に帰れると考えたの？」  
「明らかに敵意にもサンドマンは動じない。」

「無理じゃろな」

でも、と続ける。

「わし一人で済むなら安いもんじゃろ」

そんなもので釣り合うか。

「あなたの持つている砂を渡しなさい」

杖をサンドマンの鼻先に突き出す。

小声で詠唱を始めると杖の先が赤く光り出した。

この距離なら高位の魔法でなくとも致命傷になる。

「最近物忘れがひどくてな。どこかに忘れたみたいじゃな」

ジリジリと顔を至近距離で照らされてもなお、長く伸びた髪と眉毛の隙間から見える目は真っ直ぐに私を見ていた。

「無駄みたいね」

グレイスが両肘を抱える仕草でポツリと。

そして

「ちよつと聞きたいことがあるのだけど、良いかしら？」

グレイスが小さく手を挙げたのと同時に、離れた場所から茂みをかき分ける音がした。

音はこつちに近づいてくる。

「あなたの仲間？」

「いや、そんなはずはない」

初めて少し慌てる素振りを見せた。

音はすぐ近くで止まり、木の影からにゅつと顔を見せたのは

「あなたは」

行方不明になつた少年の姉。

「き、貴族様」

「大人しくしていなさいと言つたはずだけど」

姉はおずおずと出てくると

「い、居ても経つても居られなくて、貴族様達の後を追ってきたら突然大きな炎が見えて、それで、ジギータが見つかったんじゃないかと思つて、それで、私」

最後は尻窄みになり、糸が切れたようにしゃがみこみ泣き始めた。

「ジギータは、弟は、無事なんでしょうか？」

誰に問いかけたわけでもない叫びだった。

「死んだわ」

姉は目を見開き私を見た。

「うそ、ですよね」

「今、私達も彼から聞いたところよ」

そこでようやくサンドマンの存在に気付いたらしい。

もつれる足をばたつかせ、倒れ込むようにしてサンドマンの顔を覗き込む。

「嘘、嘘だと言ってください。本当はまだ生きてるんでしょう？ ねえ」

「ソニクちゃん、落ち着いて」

もらい泣きしたアルカちゃんが駆け寄り、暴れる姉を抱きしめるようにして慰めた。

「ジギータは、昨日私に言ったんです、将来は村の外に出るんだって、なんで、なんで、まだなんにもしてないのに」

「ソニクちゃん」

「…すまん」

サンドマンは俯き、掠れるような声を出した。

沈黙が場を包み、2人のすすり泣きだけが飾られる。

終わらせたのはグレイスだった。

「ちよつと貴方に聞きたいことがあるんだけど、良いかしら？」

「なんじゃ？」

サンドマンが顔を上げると、グレイスは淡々と口にした。

「貴方は、2人が死んだところを見たの？」

「お姉さま」

アルカちゃんが短く叫び、姉は鳴き声が大きくなる。

グレイスはそれを無視した。

「で、どうなの？」

何故か、サンドマンは無言のまま。

グレイスは返事を待たず喋り出した。

「私は貴方が姿を見せた時からずっと違和感を感じていたの。貴方の口振りだとまるで、仲間の逃走時間を稼いだり、謝罪の言葉を伝

えに来たみたいだったけど、よく考えるとおかしいことばかり。まず逃走時間はさつきエレオノールに言ったように見つかる可能性は低いのだから必要無い。謝罪も本来する必要が無いのだから」  
滔々と話すグレイス以外が姉でさえも、呆気にとられたように黙った。

「殺したから謝る。たしかに一見筋が通っているように聞こえるけど、この場合、種族と種族の話だからそれは当て嵌らない。ましてや、サンドマンの側には知られては不味いことがある。そちらの方みたいにそれこそ命を賭けてもね。だとしたら知られた相手が子供とはいえ、謝りに来る必要は無い。いえ、正確に言うと、命を交換に差し出す程重くない」

「じゃあ、何故」

サンドマンの方を見ると、アルカちゃんも姉も泣き止み視線を向けていた。

「アルカ、今、彼等が一番注意することはなんだと思う？」

「え、無事に逃げられるかどうかじゃないんですか？」

「少し違うわ。今彼等が恐れているのは誰か一人でも私達に捕まっ  
て洗い浚い喋らされること。だからこそ、一番注意するべきなのは  
誰がいるのかいないのかを常に把握していることね。そう考えると、  
この方は単独行動じゃない。ということはサンドマン達の総意を得  
られるだけの理由があったということ」

そこで一度黙り

「これは逆説的な言い方になるけど、私達の前に姿を見せられる人物。それは、絶対に口を割らないと信じられ、イザという時、死を選べる人物。少なくとも、誰でも良いわけじゃない。それなりに責任のある人物」

指を一本立てた。

「まず、意図的に殺してしまった場合。これは秘密を知られたというわけではなく、単に殺してしまった場合。その場合、まずこうして謝りに来ない」



「なんでですか？」

「アルカ、サンドマンの立場になって心情を考えてみなさい。自分達は絶対に知られてはならないという前提で、わざわざ責任ある人物に死を宣告するような行動をとると思う？謝罪の気持ちはあっても、そこまでしようとは思わないんじゃないかしら」

二本目を立てた。

「次に、意図せず殺してしまった場合」

「えっと、どういうことですか？」

「分かりやすい例を出すと、サンドマンの中で内紛が起きていて流れ弾で死んでしまった、とかね。要は、巻き込まれたってこと。しかも、サンドマンが責任を感じなければならぬような。たとえば、サンドマン側の過失とかね。私はこの可能性がもっとも高い気がするの」

グレイスは再び腕を組み直した。

「そうするとね、ちょっと気付いたことがあるのよね」

「つかつかとグレイスはサンドマンの正面に立った。

「私が、口封じに殺したか聞いた時、貴方は、間違いではない、と答えたわ。その時は、殺した理由に口封じの意図も含まれているから間違いはない、という意味だと思った。でも、意図せずに起きたことだと考えると、意味が変わってくる。死んでしまった。結果、それが口封じにとられても間違いじゃないという意味だったんじゃないかしら」

「どつちも同じじゃない？」

私にはささいな違いに思えた。

「違うわ。前者は能動的な行動で死んだことが確定してしまうけど、後者では受動的な行動だから死んだことはまだほんの僅かだけ確定していない。エレオノール、気付いた？このお爺さん、2人の死についての質問には肯定的に答えるけど、自ら直接的に口にしていない」

だから聞きたいの、とグレイスは詩を紡ぐような口調で言った。

「お爺さん、貴方は2人が死んだところを見たの？」  
サンドマンは無言だった。

「もしかしたら、まだ生きているんじゃないの？」

泣き止んでいた姉に、希望がともったのが見てとれた。

「そうなの？ジギータはまだ生きてるの？」

「そんなことは有り得ん」

サンドマンの体がブルブル震え出した。

「全員、死んでしまったに違いない」

声が震え、まるで泣いているような声だ。

「全員？なにやら事情がありそうね？」

グレイスの冷静な声が妙にはつきり聞こえた。

「長、若様が」

突然声が聞こえた。

その声が出た方を向くと、何かが茂みから飛び出してきたのはほぼ同時だった。

死と利（外伝）（後書き）

ぐちゃぐちゃ考えるのは好きなんです、つじつまがあってるか自信無いです。

読んで頂いたことに感謝

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8900k/>

---

起きてしまったので

2012年1月6日16時30分発行